

2014 年度博士論文

渤海王国の社会と国家  
— 在地社会有力者層の検討を中心に —

桜美林大学大学院 国際学研究科 環太平洋地域文化専攻

姜 成山

# 渤海王国の社会と国家

—在地社会有力者層の検討を中心に—

## 目次

序章	1
第1節	先行研究と問題の所在 ..... 1
第2節	研究の視点、方法、本論文の構成 ..... 10
<b>第1部</b>	<b>文献史料からみた渤海王国の社会と国家</b>
<b>第1章</b>	<b>在地諸種族からみた渤海王国の時期区分 ..... 18</b>
第1節	文献史料にみる渤海王国の在地諸種族 ..... 18
第2節	時期区分 ..... 27
<b>第2章</b>	<b>渤海王国の前期における在地社会の有力者層 ..... 30</b>
第1節	『類聚国史』の「渤海沿革記事」 ..... 30
第2節	渤海王国の「首領」に関する先行研究 ..... 32
第3節	『類聚国史』渤海沿革記事主要語句の分析 ..... 36
第4節	渤海王国の前期における首領の解釈 ..... 39
<b>第3章</b>	<b>渤海王国の後期における在地社会の有力者層 ..... 49</b>
第1節	咸和十一年渤海王国中台省牒に関する先行研究 ..... 49
第2節	咸和十一年渤海王国中台省牒の积文 ..... 50
第3節	渤海王国の後期における在地社会の有力者の動向 ..... 52
<b>第2部</b>	<b>考古学資料からみた渤海王国の社会と国家</b>
<b>第4章</b>	<b>渤海王国の考古学資料 ..... 60</b>
第1節	渤海王国に関連する遺跡 ..... 60
第2節	渤海墳墓の分析指標 ..... 62
<b>第5章</b>	<b>六頂山墳墓群の検討 ..... 77</b>
第1節	六頂山墳墓群の立地と発掘調査の経緯 ..... 77
第2節	六頂山墳墓群の先行研究 ..... 80
第3節	六頂山墳墓群の年代 ..... 85
第4節	墳墓構造とその分布 ..... 86
第5節	葬送習俗 ..... 91
第6節	出土遺物の検討 ..... 93
第7節	六頂山墳墓群よりみた在地社会 ..... 104
<b>第6章</b>	<b>虹鱒魚場墳墓群の検討 ..... 108</b>

第1節	墳墓の概要—立地、構造、埋葬形態—	108
第2節	出土遺物による墳墓の編年	113
第3節	他の出土遺物の検討	116
第4節	虹鱒魚場墳墓群よりみた在地社会	124
<b>第7章</b>	<b>チェルニャチノ5渤海墳墓群の検討</b>	<b>127</b>
第1節	史料による「率賓府」の様相	127
第2節	チェルニャチノ5渤海墳墓群の概要	128
第3節	チェルニャチノ5渤海墳墓群の年代および墳墓分布	130
第4節	遺物の埋葬様相	134
第5節	渤海率賓府の一在地社会	139
<b>第8章</b>	<b>王室墓と非王室墓の特徴</b>	<b>145</b>
第1節	王室墓の特徴	145
第2節	非王室墳墓の特徴	149
<b>終章</b>		<b>153</b>
第1節	結論	153
第2節	課題	156
<b>付表・付図</b>		<b>158</b>
<b>参考文献</b>		<b>-1-</b>

## 序章

本論文は、渤海王国の社会と国家の特質を明らかにすることを目的とする。とりわけ、在地社会にいた有力者層に焦点を当て、文献史料および考古学資料の検討を行ったうえで、渤海王国の国家的成長にともなう領土拡大の過程で、在地社会の有力者層の動向が極めて重要な役割をはたしたことを明らかにしたい。(以下では基本的に「渤海王国」という用語を使うが、文脈によって「渤海」も使う。)

渤海王国の在地社会にいた有力者層を研究対象とする本論文は、まず本論に入る前に、先行研究を「渤海王国は高句麗人または靺鞨人の国家である」という点に留意しながら時代順に整理してみたい(以下、研究者名の敬称は略す)。そのうえで、先行研究の問題点を確認し、本論文の視点、方法と本論文の構成を述べたい。

### 第1節 先行研究と問題の所在

#### 第1項 先行研究

渤海王国の遺物と文献に対する言及は、考証学が盛行であった清朝からはじまる。17世紀、清朝の「文字獄」によって東北に左遷された知識人たちが、現在の渤海鎮(黒龍江省寧安市)の渤海の遺跡・遺物に関する記述を残した。その代表的な著作に、吳兆騫の『天東小記』、張縉彦の『寧古塔山水記』、張賁の『東京記』がある。彼らは、この遺跡・遺物の時代は金代であると考え、渤海であるとは意識しなかった。渤海の遺跡・遺物であることが意識されはじめたのは、清朝が中国の古典文献を集積し、四庫全書を編纂するかたわら、官撰史料『滿洲源流考』、『盛京通志』、『大清一統志』、『吉林通志』の書物を編纂してからである。清朝末期の光緒年間、東北に派遣された吉林督弁辺務の曹廷傑が『東三省輿地図説』を編纂し、初めて現在の渤海鎮にある遺跡を渤海の都城遺跡と推論しはじめた。さらに、進士出身の景方昶が『東北輿地積略』を著し、上京龍泉府の正確な位置を明らかにしたという<sup>1</sup>。

ここで、清朝考証学を取り上げたのは、『吉林通志』などの文献が、以下に整理する先行研究に対して、多くの示唆を与えたからである。

18世紀、朝鮮で実学派によって渤海史が取り上げられるようになった。1784年、柳得恭による『渤海考』の編纂が代表的な著作である。この『渤海考』は、君、臣、地理、職官、儀章、物産、国語、国書、属国の九つの章からなる。そこには、『旧唐書』、『新唐書』など22種の史料が引用され、清朝で編纂された『盛京通志』、『大清一統志』などの文献も引用されている。さらに、高麗が渤海の歴史を重視しなかったことを残念だとのべ、それを補うために『渤海考』を編纂したと序論に書いてある。また、渤海は高句麗を継承した国家で、三国を統一した新羅と南北対立した国であるとの見解が述べられている。それは、現代の朝鮮史研究におけるいわゆる「南北国」論のはじまりであると位置付けられる<sup>2</sup>。

19世紀に入り、ロシアのシベリア進出に伴って、探検家たちは、黒龍江（アムール川）流域にて調査活動を行った。その結果、アムール川での探検をもとに編纂したミッデンドルフの『北東シベリアの旅』（1842年）、アムール川に居住する諸民族の住居や生活を取り上げたR・マークの『アムールの旅』（1857年）などが出版された。このうち『アムールの旅』の中には渤海の上京龍泉府の記述がみられるという<sup>3</sup>。

一方、日本で渤海王国を取りあげた著書や議論が出始めたのは、1894年～95年に勃発した日清戦争の前後である。吉田東伍の『日韓古史断』や、津田左右吉の渤海国滅亡や渤海年紀にふれた議論がその例である<sup>4</sup>。この時期、旅順にあった「鴻臚井の碑」が日本軍によって発見され、東洋史学者である内藤湖南が調査に携わり、日本軍の戦利品として旅順から日本へ持ち込まれた。現在、碑石は東京の皇居に所蔵されている<sup>5</sup>。しかし、日本において19世紀末まで本格的な渤海史研究は行われなかった<sup>6</sup>。渤海王国についての近代的歴史学のアプローチは、20世紀に入ってからである。

日露戦争後、日本の大陸進出を契機に、1906年11月、南満洲鉄道会社が設立された。満洲とロシアの経済事情の調査が推進され、1908年に満洲の歴史調査が開始された。池内宏、津田左右吉、松井等、箭内互、稲葉岩吉などにより満洲地域のさまざまな史料調査が行われ、その成果は『満洲歴史地理』（2巻、1913年）、『満鮮地理歴史研究報告』（16巻、1926～1941年）にまとめられた<sup>7</sup>。

1932年3月1日、満洲国の建国に伴い、日本で渤海王国の研究が注目されるようになった。1933年から1934年までの2年間をかけ、東京帝国大学の原田淑人を代表とする東亜考古学会の会員によって、渤海王国の都城であった上京龍泉府に対する本格的な考古学調査が行われた。その成果は報告書『東京城』（1939年）に収録されている。『東京城』は渤海研究史上、最初の正式な考古学報告書である。しかし、この報告書には、日満の「友好関係」を再確認しようとする発掘者たちの強い意図が見られる<sup>8</sup>。

1933年8月に沼田頼輔が『日満の古代国交』を出版した。沼田は、この本のなかで、日満古来の国交という文脈のなかで、渤海と日本との国交関係について述べている。この本は「日満両国の間における親仁なる古代国交を知らしめて、これを両国民の教化に応用せんとするのである」という沼田の使命感によって書かれたものであった<sup>9</sup>。

その後も、渤海の歴史や遺跡に関する日本人研究者による研究は続いていた。注目すべき研究調査には、次の二つがある。

一つは、1937年に鳥山喜一と藤田亮策が行った間島省古蹟調査である。そのうち、渤海の中京顕徳府とみなされる西古城の調査も含まれる<sup>10</sup>。

もう一つは、1941年に関東軍衛生軍曹の斎藤優によって、東京龍源府と比定されている半拉城（別名は八連城）の調査である<sup>11</sup>。

第二次世界大戦の前と大戦期間中（以下、「戦前・戦中」と略す）の日本における渤海史研究は、李成市の指摘するように「渤海をこの地域に起った最初の国家としながらも、その国家や文化の独自性やこの地域の固有性には全くと言ってよいほど関心がなかった」<sup>12</sup>。

したがって、そこに描かれた渤海史像の根底には西川宏がいうように、「靺鞨族の興した（渤海）国は『文化国』の対極にある未開野蛮なものであり、いわゆる唐・高句麗両文化に従属する文化的植民地にすぎないという観念」があつて、渤海に対する「他律的で非主体的」な見方が戦前・戦中における日本の渤海史研究の主流を占めていたと言われている<sup>13</sup>。その一方で、満洲国と日本国の友好化・一体化を、渤海時代までさかのぼって歴史的に確認しようとする動きもあつた<sup>14</sup>という。

中国では、1919年に唐晏が『渤海国志』を、1929年に黄維翰が『渤海国記』を、さらに金毓黻が『渤海国志長編』（1934年）を出版した<sup>15</sup>。この三つの著書は、それぞれ、中国が外国の侵略を受けていた時勢に触発されて書かれたものである。とりわけ、金毓黻は『渤海国志長編』を著し、戦前・戦中における日本の渤海王国に関する論点に対し、渤海史を体系的に中国東北史の一部に組み込む研究を進めた先駆者の一人であつた。渤海王国に関する史料を網羅的に収集し考証して編纂した『渤海国志長編』は、現在なお渤海史を研究する基本的な文献史料として参考的価値が高い。

1949年10月に渤海王国の第三代王大欽茂の次女である貞恵公主の墓碑が発見された。そこに刻まれた墓誌は、渤海史の研究上はじめて公開された石碑史料である。また、考古学研究史上、はじめて渤海王国の遺跡・遺物の実年代の基準が得られた。これをきっかけに、1950年代から1970年代にかけて中国の吉林・黒龍江両省の研究者を中心に、文献史料と考古学資料の積極的な研究が行われた。その中心的な役割を担った研究者が、吉林省博物館館長として長年勤務した王承礼<sup>16</sup>である。王の「渤海は、粟末靺鞨が建てた唐代の中国東北にある地方封建政権である」という指摘は、現代中国の渤海史研究における基本的な論点となっている。

1980年代から渤海史の研究は、新たな局面を迎えた。中国における渤海王国の研究は、考古学発掘量の増加だけでなく、王国の主要民族と国家の帰属（現在のどの国家の歴史であるか）に関する議論が加速化した。1980年8月に、貞恵公主墓と同じく第三代王大欽茂の娘（四女）である貞孝公主の墓碑が発見された。墓誌が刻まれた墓碑が発見されただけでなく、人物が描かれている壁画も見つかり、史資料が少ない渤海史研究において、貞恵公主墓碑に続いて文献と考古の両面で貴重な発見となった。この時代に入ると新たな研究者があらわれ、渤海史の体系的な研究書が相次いで発表されるようになった<sup>17</sup>。21世紀に入って、渤海の社会構成、民族分布、国家の形成・変容などの面で活発な議論がかわされた<sup>18</sup>が、上記の「粟末靺鞨族を中心として建立した唐代の中国東北の地方封建政権である」という論点は変わらなかった。

北朝鮮は、1960年代から渤海王国に関心を持ち、考古発掘や文献の読みなおしを積極的に行つた。1963~1964年、2度にわたって、中朝共同考古発掘隊は中国の渤海遺跡を発掘した。北朝鮮は中国に先んじて、その成果を一方向的に発表し、それに基づいて考古学著書では朱榮憲の『渤海文化』が<sup>19</sup>、さらに、渤海国の歴史を追加記述した『朝鮮全史』<sup>20</sup>が出版された。そのうち、『朝鮮全史』には朴時亨の「渤海史研究のために」という論文<sup>21</sup>があ

り、渤海は高句麗を継承する国家であり、王族・支配層は高句麗人であるとして朝鮮史に位置づけられると主張した。北朝鮮ではこのような主張は現在も続いている。

一方、韓国は渤海王国の興亡した地域から比較的遠いため、長い間、考古学調査や発掘にかかわることはなかった。しかしながら、文献史料からの研究によって、北朝鮮と同じく渤海史を朝鮮史の枠組みにいれようとした。異なるのは、北朝鮮では渤海王国を高句麗の継承国であると強調するのに対し、韓国では同時代の新羅とあわせて南北朝と位置付けているということである<sup>22</sup>。ここには、分断されている朝鮮半島の政治的状況が看取される。1990年代に入り、韓国が中国、ロシアとの国交回復を契機に、両国との往来が自由になると、韓国の研究者にも中国の渤海王国の遺跡を訪れる機会が与えられただけでなく、ロシアとともに考古学発掘調査を行うことができるようになった。さらに、中国、ロシア、日本の国々と渤海王国に関する共同シンポジウムも行われた。とりわけ注目されるのは、21世紀に入って、韓国の各大学の大学院で渤海王国を問題意識とする学位論文が量産されていることである<sup>23</sup>。

韓国における渤海王国の社会と国家に関する主要な論点は、次の二名の研究者が提起したものである。

宋基豪の「支配者の上層部になればなるほど高句麗的要素が多く、下層部になるほど靺鞨的要素が多くなる」という論点<sup>24</sup>と、韓圭哲の『靺鞨』は、種族的概念ではなく、辺境人を指す概念であり、唐もしくは高句麗が辺境人を呼称する『卑称』または『汎称』で、渤海王国は高句麗の辺境地域の人々によって建立された国家である」という論点である<sup>25</sup>。

ロシア（ソ連）の渤海に関する正式見解が出されたのは、1950年代に出版したオクラードニコフの『シベリアの古代文化』においてである<sup>26</sup>。そこでは、「渤海を極東地方諸種族の歴史における彼ら自身の最初の階級社会、つまり、最初の国家」と見なし、その民族と国家は靺鞨族の国家であるとした。しかも、靺鞨族は、元来起源を異にし言語も異にするさまざまな種族の集合体であったが、数千年を経て渤海人として単一民族を形成したとする。オクラードニコフ自身の言説には、レーニンの民族主義に立脚し、極東地方の諸民族の政治的・経済的・文化的な独自性を明らかにしようとするねらいがあった。

オクラードニコフ以後、1960年代から、シャフクノフがロシア（ソ連）の渤海史研究を主導した。シャフクノフは、1960年代にウスリースク市西方のクロノフカ川流域にあるコピト寺院、アプリコソバヤ寺院などの発掘調査を行い、それらの遺跡が前後二つの時期に区分できることを指摘した<sup>27</sup>。この編年は、渤海の支配が次第に沿海地方へ拡大していく過程を考慮したものである。1989年ソ連の崩壊後、ロシアの渤海史研究者は、文化人類学などの学問成果を取り入れ、渤海を首長制社会から初期国家への過渡段階と考えるなど多様な分析視角を提起している<sup>28</sup>。

以上、戦前・戦中の日本と中国、第二次世界大戦後（以下、「戦後」と略す。）の中国、北朝鮮、韓国、ロシアの先行研究を簡単に整理してみた。これらの論点は、表面的には異なった様相を呈しているように見える。しかしながら、それぞれの近代「国民国家」の「歴

史物語」にのっとった研究という観点は、本質的に共通している。戦前・戦中の日本の渤海史研究は大陸侵略への教化、中国の研究は反侵略への対応という時代的課題が反映されている。戦後において、中国は、55の少数民族をいかに現在の領土内に統合するか、朝鮮半島の南北両国は、古来より単一民族であった朝鮮民族の分断状況をどのように克服するか、ロシアでは極東のマイノリティをいかに安定させるかという諸国の現実的課題が渤海王国の研究に投影されている<sup>29</sup>。

一方、戦後の日本の研究では、1970年代を境として渤海王国の社会と国家に対する見方に変化が生じた。

戦後から1970年代前半まで、日本における渤海史研究は、戦前・戦中の「渤海は靺鞨国家」という見方をそのまま継承していた<sup>30</sup>。1970年代にはいつて戦前・戦中の渤海王国に関する研究への反省から、満洲（中国東北部）地域の歴史のみに限定された渤海史を、朝鮮史の範疇で取り扱うべきか北アジアまたは内陸アジアの範疇で扱うべきかが、日本の歴史学界において模索されるようになった<sup>31</sup>。1973・74年頃に日本の渤海史研究は以前の時代とは大きな相異を見せるようになる。その主要な原因は、以下の二点にあると言われている<sup>32</sup>。

第一点は、中国、北朝鮮・韓国、ロシア諸国の渤海王国に関する研究が日本にリアルタイムで紹介されるようになったことである<sup>33</sup>。特に、日本の研究者は、各国の研究者と人的ネットワークを形成し、現地の研究成果をいち早く把握した。各国の渤海史の研究成果と問題関心を迅速に把握するだけでなく、それを批判的に受け入れ、どう対応すべきかが常に問い続けられてきた<sup>34</sup>。

第二点は、西嶋定生の「冊封体制論」<sup>35</sup>や「東アジア世界論」<sup>36</sup>と石母田正の「国家形成史における国際的契機論」<sup>37</sup>の提起を受け、日本史を世界史の文脈で理解しようとする試みである。これらの問題意識は、日本史研究者だけに止まらず、日本と朝鮮の関係史、朝鮮史、東洋史の各分野に波及し深化してきた。

1970年代後半、渤海の歴史を取り上げたのは、日本史分野の研究者であるが、日本史以外の各分野の研究者によっても積極的に研究されてきた。

石井正敏は、日本に現存する対渤海交渉史料を丁寧かつ実証的に論証し、戦前以来の渤海対日朝貢史観とは全く異なる日本渤海関係史像を描き出した<sup>38</sup>。酒寄雅志は、それまでの研究を踏まえたうえで、西嶋と石母田の問題意識に少なからず影響されながら、東アジアでの渤海史像と、渤海と日本の交流について研究した<sup>39</sup>。鈴木靖民は、日本律令国家の内政と渤海王国を含む周辺諸国の国制やその動向を概観し、西嶋・石母田の問題意識に正面から答えようとしただけでなく、渤海王国の歴史が東アジア地域交流においていかに重要かを示した<sup>40</sup>。鈴木が中国の金毓黻と北朝鮮の朴時亨らの研究を整理したうえで提唱した渤海王国の「首領制」論は、渤海社会を理解する上で、今なお看過できない議論である<sup>41</sup>。この時期に、研究生活をスタートした濱田耕策は、東アジアの視点から新羅と渤海の国力について、唐への朝貢の場での争いという観点から研究した<sup>42</sup>。



1980年代に入って、日本の渤海史研究において新たな視野を持った研究の担い手があらわれた。今までの日本古代史・日朝関係史出身の研究者に加えて、中国史・朝鮮史または考古学の分野で訓練を受け、はじめから問題意識を東アジア諸地域に広げた研究者が登場するようになる。李成市、古畑徹、河上洋は、渤海の社会と国家のあり方を文献史料からアプローチし、小嶋芳孝、西川宏は、考古学の見地から研究を進めている。その中で、1988年に発表された李成市の「渤海史研究における国家と民族」は、戦前日本の渤海国後進論、中国の地方政権論、ソ連極東民族国家論、特に、南北朝鮮の「南北時代」論を批判し、渤海は国家内に多くの異種族・異民族を隷属させている多民族国家であると指摘した<sup>43</sup>。朝鮮史出身の研究者である李成市の研究は、渤海史を朝鮮史の枠組から解放したと評価されている<sup>44</sup>。

本論文の対象である在地社会の分析に示唆を与えてくれるのが上記の河上洋の「渤海地方統治体制」論<sup>45</sup>であるので、ここで河上の見解を少し詳しく述べておきたい。

河上は、渤海の成立前の靺鞨と高句麗の状況から分析する。つまり、河上は「靺鞨は隋代以来の七部の名がよく知られていたが、各部はさらに十数部の小部落から成っていた。各部落にはそれぞれ部落長がおり自治が行なわれていたが、有力部落を中心とするルーズなまとまりは存在した。一方高句麗の領域内では城を単位とする支配体制がとられていた。これは城が周辺の小城を、さらにいくつかの城を大城が累層的に統括する組織で、行政組織であるとともに軍団組織でもあった。そしてこの軍団の基礎になったのは在地のもつ軍事力であった。」とし、渤海成立前の靺鞨人社会と高句麗の領域支配は、在地の勢力を基盤として行政、軍事組織が成り立っていたという。

そのうえで、渤海時代に入ってから状況を、河上は、次のように述べている。

「高句麗人と粟末、白山靺鞨人を中核として上京、中京、東京を含む地域を根拠地に成立した渤海は、これらの旧高句麗領域の北半及び旧靺鞨住域を『新唐書』渤海伝の記載順に示されるように順次支配下に入れていき、第三代王の時にほぼその領域を確定する。渤海はその領域を支配するに当って府、州を置いたが、これは高句麗の城支配を受け継いで、やはり行政機構であると同時に軍団組織でもあった。その基礎となったのは靺鞨の部落或いは高句麗の城邑であり、渤海の府、州は中国のそれとは異なってこれらの部落、城邑そのものであった。そして在地の首長層は首領なる官を与えられることによって在地における支配権をそのまま認められる形で支配体制に組み込まれた。府の管轄範囲もこれらの在地勢力のまとまりを基準にして決められたと考えられる。このように在地勢力の解体を成し得なかったところに渤海政権の基盤の脆弱性が見られ、これが契丹に易々と滅ぼされた原因の一つであったと言える。そして渤海滅亡後は各地に小勢力が割拠し、この地域の再統一は金朝の成立を待たなければならない。このように遠心的傾向を持つ各地の在地勢力に中央の統制力を及ぼそうとした意図の表われが渤海の五京制度ではなかったかと推測される。」

以上のように、河上の論は戦前から行われた靺鞨人社会の研究や朝鮮史で研究されてき

た高句麗の領域支配と古代朝鮮の軍事の組織に関する研究をふまえて、渤海における地方統治体制を明らかにする試みであった。そこに浮上してきたのは、渤海の統治体制としては、在地社会の勢力を解体せず、領域内に点在している各部落長に「首領」という官名を与えて行政・軍事の実務に当たらせたという点である。これは在地社会の有力者層を浮き彫りにした重要な指摘である。

1980年代に渤海の社会と国家は多民族集団によって構成されたとするパラダイムの転換を果たした日本の渤海史研究は、1990年代に入ると空前のブームを迎える。この時代に入ると、1970・80年代に活躍した研究者による一国史脱却の問題意識をもった研究が続けられた。さらに考古学調査の成果を伴って、渤海王国、靺鞨・女真に加えて日本の蝦夷（北海道）まで含めたこれまでに議論が及ばなかった広範囲な地域の土着民との関係が示唆されることとなった<sup>46</sup>。そして、渤海王国の建国1300周年を記念し、1998年前後に各国で国際シンポジウムが行われた<sup>47</sup>。

2000年以後、70年代から日本で渤海史研究を続けてきた研究者は、それまでの研究成果を集大成する形で著書を出版している<sup>48</sup>。さらに、渤海王国に関して、若手研究者の文献と考古両方面での新しい研究成果が現れつつある。

文献史料の研究で、注目される研究者は、以下の三つのタイプに分類される。

第一に、朝鮮史出身の研究者である。赤羽目匡由がその一人である。赤羽目の研究は、文献史料の考証を重視しながら、7～10世紀の渤海における高句麗遺民と靺鞨人の存在様態や、それらに対する国家の統合過程・支配体制を解明する研究を進めてきた。これまでの研究では、渤海対外交渉史に関するものが主で、相手国を視点の中心に扱いがちなことに対し、渤海王国を視点の中心に据えながら、地域や種族のそれぞれの特性（辺境と中央の違い、種族の地域的移動など）によって、その支配の様相は、多様であったと指摘した。赤羽目の支配様態の多様性の指摘は、在地社会から渤海王国を議論しようとする本論文に多大な示唆を与えている。筆者が特に、赤羽目の研究に注目しているのは、赤羽目が朝鮮史のアプローチから、古代東アジアにおける渤海王国の王権側からの問題意識をもって文献史料を深く考察したところにある<sup>49</sup>。

第二に、日本史出身の二名の研究者が注目される。日本の儀礼の視点から渤海王国の来日使節を研究した浜田久美子<sup>50</sup>と東アジアの国際秩序のなかで、特に書儀を具体的な材料として使いながら渤海と日本の名分関係を研究した廣瀬憲雄<sup>51</sup>である。この二名の研究は日本外交史のなかに渤海王国を位置付けている。

第三に、日本に留学したことのある中国人研究者である。東アジアの視野で渤海王国の対外関係と相手国の渤海王国認識を解明した馬一虹の研究<sup>52</sup>、そして渤海王国の政治、経済、外交の基礎的文献史料の検討を行った李美子の研究<sup>53</sup>が挙げられる。これら二つの研究は傍証資料を多く援用した研究であり、その視点はあくまで渤海王国側に据えられている。

以上は、2000年以降の注目すべき先行研究である。いずれも渤海王国側からの考察に視点を置いた文献史料に依拠する研究である。

次に、考古学研究の成果を概観してみたい。すでに述べたように、渤海王国に関する考古学調査・研究が本格的に取り組まれるようになったのは 1930 年代以降である。21 世紀の渤海王国関連の考古学研究は、東北アジアまたは北東アジア地域の範囲のなかで渤海王国の前後の時代を視野に入れながら研究されている。以下の三点の研究が代表的である。

一点目は、臼杵勲の鉄器時代の東北アジア（極東）に関する考古学研究<sup>54</sup>である。渤海王国と関連していえば、臼杵の研究は、はじめて靺鞨社会と渤海王国を考古学の時間的（土器などの編年）・空間的（遺物の相似性）枠組み内で構築した点で重要である。

二点目は、木山克彦が行った北東アジアの土器研究<sup>55</sup>である。それは、先史から中世の時期の地域間交渉を対象にした考古学研究であるが、特に、靺鞨罐や陶質土器の地域的変遷に関する研究は、渤海王国の考古学的アプローチにとって基礎的研究である。

三点目は、中澤寛将の地域社会に関する考古学的研究<sup>56</sup>である。中澤は、北東アジアの地域社会の構造とその特質を明らかにするために、7～13 世紀代の北東アジアの手工業生産・流通・消費構造、日本列島対岸に出現した渤海から金・東夏代にかけての地域社会の実態について考古学的観点から論じた。渤海王国については、窯遺跡、墳墓群、城址などの詳細な検討を行い各地域社会のアウトラインを描写している。

以上、各国の渤海王国に関する研究を、17 世紀の清朝から 21 世紀まで分けて整理した。その中で、特に、日本の研究に重点をおいて整理した。その理由は、日本の渤海王国研究が各国の研究を牽引して来たと思われるからである。

ここで日本における渤海史研究の流れを改めてまとめておきたい。

20 世紀初期に、日本には、いわゆる「満鮮史」研究があった。19 世紀末までの清朝の『満洲源流考』、『吉林通志』を代表とする著書において地名などの考証が中心だったものを継承しながら、近代的歴史学のアプローチを始めたのが、日本の「満鮮史」研究である。前述した津田左右吉、松井等、池内宏、鳥山喜一を代表とする研究者たちによって文献史料の精緻な考察が行われ、原田淑人、駒井和愛、鳥山喜一、斎藤優らによって渤海に関する本格的な考古学調査が始められた。「満鮮史」の研究は現在の渤海史研究にとっても大きな業績として認めざるをえない。ただ、それは日本の大陸進出に伴った学術研究という側面もあり、「渤海王国は未開な靺鞨族が立てた国で、唐の先進文化を取り入れた」という認識のもとで行われた研究であった、ということにも注意すべきである。日本の敗戦後、文献史料での検討を通じての研究は、日野開三郎、和田清、外山軍治によって継続された。中国東北部での考古学調査活動は行われなくなったが、それまでに蓄積された考古学資料により、三上次男による考古学の研究は続けられた。戦後の 1970 年代まで、日本の渤海史研究は依然として戦前・戦中の認識からは脱却していなかった。そのような状況を打破しようと試みたのが、1970 年以降の日本の渤海王国に関する研究である。渤海王国を多民族国家として認識し、膨大な研究情報をリアルタイムで入手し、緻密な文献史料と考古学資料の考証を通じて、古代東アジアにおける渤海王国の具体的な歴史像が少しずつ解明されている。このような日本研究者の研究成果は、筆者のみならず諸国の研究者に示唆を与えて

いる<sup>57</sup>。そのため、1970年代以降の渤海王国に関する先行研究にやや立ち入って整理した。

これからの研究は、1980年代以降の中国、韓国、ロシア諸国の渤海王国に関する研究成果を批判的に継承しながら、進める必要性を感じる。

## 第2項 問題の所在

以上みてきたことから、渤海王国の研究で、研究者が主として指摘している多民族国家論、つまり渤海王権が東北アジアの諸種族を包摂して多民族国家を形成したという点ではすでに研究蓄積がある。しかし、これまでの研究は、以下の二点において問題がある。

第一点は、従来の研究における中央一周縁という構造の研究視点の問題である。これまでの研究では、無意識のうちに国民国家という枠にとらわれていたのではないだろうか。国民国家の枠のなかで渤海王国に関する史料を読み、そして渤海王権に研究の重心が置かれるようになったのではないか。そもそも、古代史研究は、国民国家という極めて近代的な概念を相対化するところから始めるべきであり、まず中央一周縁という構図の再検討が肝心であろう。これまでの渤海王国に関する研究は、渤海の王権または中央のみに焦点をあて、その支配下に入った諸種族の地域社会、つまり本論文で取り上げる在地社会を渤海王国の従属的位置でしか取り扱っていないのではないかと思われる。渤海王国の社会と国家の全体構造からみても、とりわけ在地有力者層の動向は決して無視できない。在地社会の有力者層の動向が渤海王国の社会構造と国家形成、対外関係などのさまざまな場面において深く関わっていたことは、これまでの首領制に関する研究や、渤海王国の対外交渉に関する研究でもしばしば触れられてきた。しかし、文献史料が乏しいという面もあり、あまり積極的に論じられていなかったのは、在地社会の渤海王国に対する重要な意義を積極的に認めてこなかったところにあるのではないだろうか。たとえば、本論文第1項「先行研究」で触れた河上の渤海地方統治に関する研究<sup>58</sup>では、在地社会を渤海の統治対象としてのみ扱っており、渤海王国の歴史的展開の具体的な諸場面での重要な役割には立ち入っていない。河上の提示した課題には「渤海の国家成立とその維持のメカニズムに関する研究はまだ充分とは言えず」とある。渤海王国の維持のメカニズムを明らかにする過程において、在地社会の重要性に関心を注ぎ、在地社会側から渤海王国を眺望する試みが必要ではないかと思われる。すなわち、在地社会から渤海王国の歴史を再構成した研究は、いまだ充分とはいえない。

第二点は、文献史料の少ない渤海王国の研究において、考古学資料の検討が不可欠だということである。これまで渤海王国に関する考古学発掘調査は多く行われてきた。しかし、渤海王国の研究においては、文献史学の研究に考古学研究成果を取り込むことを試み、あるいは考古学資料の研究で文献史学の成果を取り込む試みがなされた研究が全くなかったとは言えないが<sup>59</sup>、文献史料と考古学資料の両者に対して積極的に目配りした研究は充分とはいえない。文献史料と考古学資料の示す事象が異なるため、それぞれの領域の研究者が研究を進める上で躊躇することもあろうが、文献史料が少ないからこそ、文献と考古の

両方の成果を積極的に重ね合わせ、研究を試みる必要があるのではないだろうか。

このような先行研究の二つの問題点、すなわち王権中心の史観による研究傾向と、文献史学と考古学の両方からの研究成果を駆使しての研究の不充分さを批判して、本論文では、渤海王国に存在していた在地社会有力者層の動向に焦点を当てる。また、文献史料と考古学資料の両方を考察し、渤海王国の社会と国家の議論を進めたい。

## 第2節 研究の視点、方法、本論文の構成

### 第1項 研究の視点

前述したように、本論文の課題は、在地有力者層の動向から渤海王国の実態を解明することにある。そのためには、在地社会を渤海王国の従属的な存在としかとらえてこなかった従来の地方統治体制に関する一連の研究から視点を変え、まず、在地社会の諸勢力を渤海王国と対等的な存在であったとの仮説から論を進める。

まず、本論文で取り上げる渤海王国の「在地社会」という歴史的概念を、『旧唐書』、『五代史要』、『新唐書』に基づいて、簡単に説明する。

上記の文献によれば、高句麗は、668年に唐によって滅ぼされる。その後、高句麗の領域には安東都護府が設置され、唐王朝に協力した高句麗領域内の部落長は、唐より都督、刺史、県令などの官職を授けられる。一方、高句麗領域内で唐に離反していた人々は、唐王朝によって営州をはじめとする唐の領域内に強制移住させられた。

696年、営州の契丹人が反乱を起こした。この反乱を契機に、営州に強制移住させられた大祚榮という人物が高句麗人と靺鞨人を連合して、営州の東方にある旧高句麗の領域に逃れる。やがて、大祚榮は東牟山という地にたどりついて建国をはたす。

渤海王国の建国過程については第1章でも触れる。その前に、ここで注目したいのは、『旧唐書』渤海靺鞨伝などの史籍が伝えるように、建国の直後、渤海王国の前身である振国は「方二千里」という領域であったという点である。このような広い領域の支配は、営州から逃亡してきた大祚榮一行にとって、旧高句麗領の諸地域に残留していた部落の都督、刺史と呼ばれる部落長またはその地域の有力者層の支持を得なければ、成り立たなかったと推測される。

渤海王国は建国をはたした後も、領土の拡大を推進し、100年以上たった9世紀ごろには、唐王朝より「海東の盛国」と呼ばれるようになる。そのときの領域は、『新唐書』渤海伝には「地方五千里」と記されている。建国当初の「方二千里」から100年後の「方五千里」と領域が広がった主な原因は、王国の北方に居住していた靺鞨諸部族を支配下に置いたことによる。この「方五千里」への領域拡大の過程も、やはり靺鞨諸部族の部落長または有力者層を懐柔しなければ、成し遂げられなかったと考えられる。

このような渤海王国の建国と領土の拡大過程においては、それぞれの地域に根付いていた部落長を含むその地の有力者層との関係が注目される。渤海王国が征服の対象とした地

域は、やがて王国の行政区画に編入されるようになる。しかし、渤海王国による征服とは無関係に、各地域社会が自主的に、それぞれ、古代東アジア諸国と交渉をもったことは文献史料で確認できる。したがって、これらの地域を総称して渤海王国の行政区画下の地方社会と呼称するのは妥当ではない。そこで、本論文では、渤海王国の領土的な発展過程のなかで、王国の影響を受けながらも、東アジア地域でそれぞれ、自主的に活動していた諸地域社会を「在地社会」と定義したい。そして、在地社会のなかで、渤海王国や古代東アジア世界で諸般の交渉にあたったのは、在地の有力者層であったと考えられる。

在地社会の種族構成は、高句麗人、靺鞨人の外に、漢人、契丹人などが想定される。しかし、本論文では、渤海王国の社会と国家に重要な役割を果たした高句麗人と靺鞨人の在地社会を中心に扱いたい。高句麗人と靺鞨人の在地社会の有力者層に焦点をあてることにより、渤海王国の領土拡大過程や前近代の国家的位相を浮き彫りにしたい。

## 第2項 研究の方法

渤海王国に関して現在確認できる記録としては、10世紀中葉に成立した『旧唐書』渤海靺鞨伝、11世紀中葉に成立した『新唐書』渤海伝があり、ほかの記録より比較的詳細である。ほかにも『冊府元龜』、『唐会要』、『五代会要』、新旧『五代史』、『資治通鑑』などに記録されている。しかし、これらの史料はおおむね『旧唐書』と『新唐書』の記事を継承したものが多く、また、日本の『続日本紀』以下の六国史と『類聚国史』には渤海使節団の来日記事があり、高麗時代に編纂された『三国史記』の「新羅本紀」には同時代の新羅北辺にあった渤海王国に関して記したものが若干あり、『三国遺事』にも「渤海」について説明している部分がある。

つまり、渤海王国の研究に際して、王国自ら残した歴史記録はいまのところ存在しないため、中国や日本、朝鮮半島に残存している数少ない文献史料から紐解くしかない。

したがって、文献史料に対する史料批判を徹底的に行う必要がある。この点について、1970年代以降から現在にいたる日本の渤海史研究には多くの研究蓄積があり、本論文ではその研究成果を積極的に取り入れ、批判的に継承するところから出発したい。

一方、文献史料の情報量が少ないという限界のなかでは、考古学の発掘調査と関連の研究が必要であることは容易に想像される。しかし、考古学資料と文献史料を安易に結びつけて論じることには危険がともなう。文献史料が伝える情報と考古学資料があらわす様相とは必ずしも時代的に一致しない場合が多いからである。

文献史学では、たとえば渤海王国の建国時の状況を、一年、二年の刻みで考察することが可能である。一方、考古学資料では、紀年がある碑石などの文字資料が出土しないかぎり、年代の考察はほとんど器物や遺構の考古学的知見に基づく編年作業に頼らざるをえない。したがって、考古学で取り扱う時間の幅は半世紀以上の長期間になりがちであり、建国のような比較的短い時間幅で考察する問題は扱いにくくなる。時に、両学問分野で相容れない見解が導き出されることもありうるので、注意する必要がある。

そうした懸念もあり、これまでの多くの先行研究は、文献史料もしくは考古学資料の一方を活用した研究が多いと思われる。しかしながら、在地社会の様相や社会的構造を、より立ち入って明らかにするためには、文献史料と考古学資料の両面から考察する必要があると筆者は考える。

本論文では、文献史学と考古学という異なった史資料から在地社会を明らかにするために、在地社会に注目して渤海王国の歴史を時期区分して検討を進める。その時期区分は、まず文献史料に基づいて行う。そして、考古学資料の時間的性質も考慮し、渤海王国がもっとも強力であった黒水靺鞨の在地社会を統合した時点を境として大きく前期と後期に分けた。

文献史学で得られる知見は、文献史学の議論の手順にそって研究すべきである。また、考古学資料の研究で得られた見解は、考古学の手法で研究すべきである。先行研究で、それぞれに成果が見られる。そこで、両学問分野の成果をとり入れようとする本論文では、まず文献史学の面から前期と後期における在地社会の有力者層の実態と動向を検討する。ついで、考古学資料からそれぞれの時期における在地社会の有力者層の状況を推論してみたい。考古学資料としては、六頂山墳墓群、虹鱒魚場墳墓群、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群に限定して、在地社会の様相を検討する。この三墳墓群は、それぞれ悉皆調査がほぼ終わり、考古学報告書が刊行されているので、資料的确实さも確保されている。さらに、これらの三墳墓群に限定したのは、これらの三墳墓群が、本論文の第1章で試みた渤海王国と在地諸種族との関係による時期区分と対応しているからである。すなわち、六頂山墳墓群は前期の在地社会と渤海王権の関係をうかがう墳墓群であり、虹鱒魚場墳墓群は後期の在地社会と渤海王国の関係をうかがう墳墓群であり、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群は渤海建国の前から渤海全盛期までの在地社会の様相をうかがえる墳墓群であるといえる。

いうまでもなく、考古学資料の場合、遺跡や出土遺物の時代を文献史料に即して比定することは難しい。しかしながら、本論文で論じている在地社会の変容は、在地諸種族が渤海王国への統合とそこからの離脱といった事象のなかに認められ、在地社会の有力者層をより具体的に把握するためには、渤海王国と在地諸種族との関係から時期区分をして検討する必要がある。本論文では、文献史料と考古学資料の両方を、在地社会の有力者層に焦点をあてて、前期と後期に時期区分して論を進める。

### **第3項 本論文の構成**

本論文を二部構成である。第1部では文献史料を用いて検討し、第2部では考古学資料を用いて検討する。

まず、序章においては、渤海王国と在地社会に関する研究史を整理し、これまでの研究における問題の所在、本論文の研究視点と研究方法、論文の構成を明確にする。

第1部「文献史料からみた渤海王国の社会と国家」では、文献史料を活用して渤海王国と在地社会及び在地社会有力者層との関係を検討する。

第1章「在地諸種族からみた渤海王国の時期区分」では、渤海王国にかかわる文献史料を検討し、在地社会の動向を中心にした時期区分を行う。具体的には黒水靺鞨の統合を指標にして、在地社会の渤海王国への統合と渤海王国からの離脱の歴史的過程を前期と後期とに二分した。第2章「渤海前期における在地社会の有力者層」では、渤海王国前期の在地社会を考えるうえで重要な文献史料である『類聚国史』渤海沿革記事を取り上げる。渤海王国の「首領」の存在を中心にして取り上げ考察することにより、渤海王国と在地社会有力者層との関係を検討する。第3章「渤海王国の後期における在地社会の有力者層」では、渤海王国後期の重要な文献史料である「咸和十一年渤海王国中台省牒」の写しを取り上げ、当該省牒が出される渤海王国後期の在地社会の状況について、主に、中央政権と在地社会の有力者層との関係から考察する。

第2部「考古学資料からみた渤海王国の社会と国家」では、渤海王国の在地社会と在地社会の有力者層の様相を考古学資料から考察する。

第4章「渤海王国の考古学資料」では、まず渤海王国に関する考古学資料の調査と研究の状況を述べる。次に、その時代像を最もよく反映する資料のひとつとして墳墓資料であると考え、墳墓群を検討する分析指標を明確化する。

第5章から第7章までは、それぞれ具体的に一つの墳墓群を選定して、まず墳墓群の概要をしめし、年代、墳墓様相、遺物を検討することによって渤海王国の在地社会有力者層の存在を推論する。そこでまず、六頂山墳墓群は、在地社会の支持を受けて建国する渤海王国前期の都城付近に位置しており、前期の渤海王国と在地社会の関係を考えるうえで有効な墳墓群資料であると考えられるので、第5章「六頂山墳墓群の検討」で考察する。また、第6章「虹鱒魚場墳墓群の検討」で取りあげる虹鱒魚場墳墓群は、渤海王国の都として最も長く機能していた上京龍泉府の付近に位置しており、その造営は9世紀であると考えられる。したがって、後期の渤海王国と在地社会の関係を考察するのに有効な墳墓群資料であると考えられる。ついで、第7章「チェルニャチノ5渤海墳墓群の検討」で扱うチェルニャチノ5渤海墳墓群は、渤海王国の辺境地域である率賓府に位置し、渤海時代の前から渤海王国後期まで造営されたものである。したがって、考古学資料の次元で前渤海時代から渤海王国後期にかけての在地社会の様相を通史的に検討するのに適している。

第8章「王室墓と非王室墓の特徴」では、これまで比較的頻繁に発掘調査が行われてきた三霊屯墳墓群、龍海墳墓群などの王室墓を含む墳墓群を取り上げた。これらは、第5章から第7章まで検討した上記墳墓群との比較材料であり、墳墓形式や副葬品から非王室墓と王室墓の埋葬状況の差異から、渤海王国の王族と在地社会有力者層との経済的格差を議論する。

終章においては、以上の各章における検討をふまえて、在地社会の有力者層から渤海王国の位相を明確化し、渤海王国に存在した在地社会の歴史的意味を探る。最後に本論文の課題とこれからの研究への展望を述べる。



## 注

- 1 これらの具体的記述は、朱国忱・朱威『渤海遺跡』（文物出版社、2002年、pp.15～21）と魏存成『渤海考古』（文物出版社、2008年 pp.42～44）を参照。
- 2 柳得恭『渤海考』（弘益出版社 2000年）には宋基豪の解説が書かれており、『渤海考』を「南北国論」のはじまりであると位置づけた（韓国語の著書と論文を日本語に訳して表記、原文は巻末の参考文献に表記し訳文を附けた。以下同）。
- 3 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚・加藤晋平訳『シベリアの古代文化』（講談社、1974年、pp.23～24）。
- 4 酒寄雅志「渤海史研究と近代日本」（『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、pp.356～357）。
- 5 酒寄雅志「『唐碑亭』、すなわち『鴻臚井の碑』をめぐる」（『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、pp.390～421）。
- 6 注4のp.357。
- 7 白鳥庫吉監修、箭内互、稲葉岩吉、松井等撰『満洲歴史地理』（〔歴史調査報告第1～2巻〕南満洲鉄道株式会社、1913年）。東京帝国大学文学部編『満鮮地理歴史研究報告』（第1号～第16号）（東京帝国大学文学部、1915年～1941年）。『満鮮地理歴史研究報告』に関しては、筆者は国立国会図書館近代デジタルライブラリで第1号～第11号、第16号まで確認。
- 8 『やまと新聞』昭和8年10月16日に、代表者原田は「200年余年に亘る此彼両国往来の内に渤海人で我国に帰化する者も多く、我国人が渤海に帰化したものも少なくなかった。従って日満両国人の血は千二百年の昔から繋がっていた」と書いている。
- 9 沼田頼輔『日満の古代国交』（明治書院、1933年）。
- 10 鳥山喜一『満州国古蹟古物調査報告書（三）間島省の古蹟』（満州国国務院文教部編、1942年）。
- 11 斎藤優『半拉城と他の史蹟』（半拉城址刊行会、1978年）。
- 12 李成市「渤海史研究における国家と民族—「南北国時代」論の検討を中心に」（『朝鮮学報』25、1988年3月、p.35）。
- 13 西川宏「渤海考古学の成果と民族問題」（『山陰考古学の諸問題』1986年、p.579）。
- 14 酒寄雅志「渤海史研究の成果と課題」（『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、p.13）。
- 15 王承礼ほか『渤海国志三種』（天津古籍出版社、1992年）。
- 16 その研究の集大成の著作として『中国東北的渤海国与東北亜』（吉林文史出版社、2000年）がある。
- 17 王承礼『渤海簡史』（黒龍江人民出版社、1984年）、同『中国東北的渤海国与東北亜』（吉林文史出版社、2000年）、朱国忱・魏国忠『渤海史稿』（黒龍江省文物出版編集室、1984年）、李殿福・孫玉良『渤海国』（文物出版社、1987年）、朱国忱・魏国忠・郝慶云『渤海国史』（中国社会科学出版社、2006年）。
- 18 2002年から始まった「東北プロジェクト」では、渤海史も重要な研究分野の一つに選定され、『渤海国史』、『渤海史論』、『渤海移民の統治と帰属研究(渤海移民的治理与帰属研究)』、『靺鞨、渤海と東北アジア諸国、諸民族関係史研究(靺鞨、渤海与東北亜各国、各族関係史研究)』、『渤海遺跡現況調査研究(渤海遺跡現状調研)』、『渤海族の族源と流向研究(渤海族族源与流向研究)』、『渤海国帰属問題研究』、『国外渤海史研究論著翻訳』などの研究テーマが採択された。濱田耕策監訳『渤海の歴史と文化』（明石書店、2009年、p.411）も参照。
- 19 朱栄憲著・在日本朝鮮人科学者協会歴史部会訳『渤海文化』（雄山閣、1979年）参照。
- 20 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所『朝鮮全史（古代篇、渤海及び後期新羅史）』（科学百科事典総合出版社、1979年）。朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所『朝鮮全史（古代篇、渤海及び後期新羅史）』（科学百科事典総合出版社、1979年、pp.170～211）。
- 21 朝鮮民主主義人民共和国社会科学院歴史研究所『朝鮮全史（古代篇、渤海及び後期新羅史）』（科学百科事典総合出版社、1979年、pp.170～211）。
- 22 注12論文のp.37。
- 23 韓圭哲『渤海の対外関係史』（高麗大学校大学院史学科、1991年）(新書苑、1994年出版)。  
宋基豪『渤海の歴史的展開過程と国家位相』（ソウル大学校大学院国史学科、1995年）。  
林相先『渤海の支配勢力研究』（韓国精神文化研究院、1997年）。  
金攻志『渤海服飾研究』（ソウル大学校大学院衣類学科、2000年）。  
朴真淑『渤海の対日本外交研究』（忠南大学校大学院国史学科、2001年）。  
李乗建『渤海24塊石遺跡に関する建築的研究』（建国大学校大学院建築工学科、2001年）。  
尹載云『南北国時代貿易研究』（高麗大学校大学院史学科、2002年）。  
金鍾福『渤海政治勢力の推移研究』（成均館大学校大学院史学科、2003年）。  
全舷室『対外関係を中心にみた渤海男子服飾研究』（カトリック大学校大学院衣類学科、2004年）。

- 李孝寿『渤海遺民史研究—高麗との関係を中心に—』（釜山大学校大学院史学科、2004年）。
- 金恩国『渤海対外関係の展開と性格』（中央大学校大学院史学科、2005年）。
- 金東宇『渤海地方統治制度研究』（高麗大学校大学院史学科、2006年）。
- 金鎮光『渤海文王代の支配体制研究』（韓国学中央研究院、2008年）。
- 權恩姝『渤海前期北方民族関係史』（慶北大学校大学院、2012年）。
- 24 宋基豪『渤海政治史研究』（一潮閣、1995年）。
- 25 韓圭哲『渤海の対外関係史』（新書苑、1994年）。
- 26 アレクセイ・オクラードニコフ著、加藤九祚、加藤晋平訳『シベリアの古代文化—アジア文化の一流源—』（講談社、1974年、原著初出1950年）。
- 27 V・I・ボルディン「沿海地方における渤海遺跡の編年問題に関して」（『北方ユーラシア学会会報』2、1993年12月）。
- 28 クラディン「北アジアの民族における国家の起源について」（『北方ユーラシア学会会報』2、1993年12月）。
- 29 李成市「渤海史研究における国家と民族—「南北朝時代」論の検討を中心に」（『朝鮮学報』25、1988年3月、p.33～58）、古畑徹「戦後日本における渤海史の歴史枠組みに関する史学史的考察」（『東北大学東洋史論集』9、2003年1月、pp.215～245）。
- 30 戦後しばらく日本の渤海史研究を主導したのは、戦前から渤海史研究に携わった鳥山喜一と東北アジア地域に広い学術関心を示した日野開三郎であった。その後、新妻利久も渤海と日本の関係史に関して博士論文を出す、その主要な論点は戦前日本の渤海史研究を越えることはできなかった。鳥山喜一『渤海史考』（目黒書店、1915年）、同『失われた王国—渤海国小史』（翰林出版、1949年）、同『渤海史上の諸問題』（風間書房、1968年）、日野開三郎『東北アジア民族史』（日野開三郎東洋史学論集14～16巻）（三一書房、第14巻が1988年、第15巻が1991年、第16巻が1990年に出版）、新妻利久『渤海国史及び日本との国交史の研究』（東京電気大学出版局、1969年）などが戦後の渤海史研究の主流である。
- 31 古畑徹「戦後日本における渤海史の歴史枠組みに関する史学史的考察」（『東北大学東洋史論集』9、2003年1月、p.228）。
- 32 注31のpp.223～224。
- 33 筆者は中国の大学時代（2003～2006年）から渤海史の資料を集めはじめた。しかし、中国の大学で関連する研究資料を収集するには、やや不便なところがあった。特に、外国の研究は、翻訳版が刊行されない、ほとんど触れることができなかった。日本の大学院で留学している間、日本の研究はもちろん諸外国の研究も、所属大学図書館の相互貸借サービスや他大学・研究機関の訪問を通じ、リアルタイムで入手できた。
- 34 馬淵貞利「朝鮮史における民族と国家」（『朝鮮史研究会論文集』25、1988年）。
- 35 西嶋定生「6—8世紀の東アジア」（『岩波講座日本歴史』2、岩波書店、1962年）。
- 36 西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』（東京大学出版会、1983年）。
- 37 石母田正『日本の古代国家』（岩波書店、1971年）。
- 38 石井正敏『日本渤海関係史の研究』（吉川弘文館、2001年）。
- 39 酒寄雅志『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001年）。
- 40 鈴木靖民「日本律令制の成立・展開と対外関係」（『歴史学研究』1974年度大会別冊特集「世界史における民族と民主主義」）。
- 41 鈴木靖民「渤海の首領に関する予備的考察」（『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年、初出1979年）、同「渤海の首領制—渤海の社会と地方支配」（『歴史学研究』547、1985年）。
- 42 濱田耕策「唐朝における渤海と新羅の争長事件」（『古代東アジア史論集』（下巻）末松保和博士古稀記念会編、吉川弘文館1978年）。
- 43 李成市「渤海史研究における国家と民族—『南北朝時代』論の検討を中心に—」（『朝鮮学報』25、1988年3月、p.49）。
- 44 注31のp.238。
- 45 河上洋「渤海の地方統治体制—一つの試論として—」（『東洋史研究』42（2）、1983年、pp.1～25）。
- 46 田村晃一「北東アジア考古学における渤海の位置づけ」（『環日本海論叢』8、1995年、p.1～18）、同「古代国家渤海と日本の交流に関する考古学的調査」（1996年度～1998年度科学研究費補助金（海外学術調査）研究成果報告書、1999年3月、pp.1～25）、小嶋芳孝「蝦夷とユーラシア大陸の交流」（『古代蝦夷の世界と交流 古代王権と交流1』、名著出版、1996年、pp.399～437）。
- 47 國學院大学でのシンポジウム「渤海と古代東アジア」（『アジア遊学』6、1998年）、（『月刊しにか』9(9)、1998年9月）。

- 
- 48 濱田耕策『渤海国興亡史』（吉川弘文館、2000年）、石井正敏『日本渤海関係史の研究』（吉川弘文館、2001年）酒寄雅志『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001年）、上田雄『渤海使の研究—日本海を渡った使節たちの軌跡—』（明石書店、2002年）。
- 49 赤羽目匡由「封敖作「與渤海王大彝震書」について—その起草・発給年時と渤海後期の権力構成—」（『東洋学報』85(3)、東洋文庫、2003年、pp.303~329）、同「新羅末高麗初における東北境外の黒水・鉄勒・達姑の諸族—渤海・新羅との関係において—」（『朝鮮学報』197、2005年、pp.1~44）、さらに、赤羽目は、「八~九世紀における渤海の中央権力と地方社会—種族支配と自国認識—」（2009年度東京都立大学博士論文）を基に、加筆修正して『渤海王国の政治と社会』（吉川弘文館、2012年）を刊行した。
- 50 浜田久美子『日本古代の外交儀礼と渤海』（同成社、2011年）。
- 51 廣瀬憲雄『東アジアの国際秩序と古代日本』（吉川弘文館、2011年）。
- 52 馬一虹「渤海と古代東アジア」（1999年度國學院大學博士論文）を基に、加筆修正して『靺鞨、渤海と周辺国家、部族関係史研究』（中国社会科学出版社、2011年）を刊行。
- 53 李美子「渤海国史の基礎的研究」（2004年度九州大学博士論文）。
- 54 白杵勲『鉄器時代の東北アジア』（同成社、2004年）。
- 55 木山克彦「渤海土器の編年と地域差について」（『北方圏の考古学』I、2007年4月、pp.47~61）、同「渤海土器の展開と周辺地域」（『月刊考古学ジャーナル』605、2010年、pp.18~21）、同「ロシア沿海地方の渤海土器」（『海の考古学』第8号、2012年、pp.57~77）。
- 56 中澤寛将『北東アジア中世考古学の研究：靺鞨・渤海・女真』（六一書房、2012年）。
- 57 韓東育「東亜研究的問題点と新思考」（『社会科学戦線』2011年第3期）。
- 58 前掲注45。
- 59 酒寄雅志の『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001年）は文献史料の分析に中心をおき、考古学資料も援用している。白杵勲の『鉄器時代の東北アジア』（同成社、2004年）は渤海も含めて、前後の時代の考古学資料を主に扱っていて、文献史料による社会状況などの確認も行っている。このように、これまで多くの研究者は文献と考古両方を念頭におきながら渤海の社会と国家に関する諸問題を議論しているが、一方に偏りがちである。

## 第 1 部 文献史料からみた渤海王国の社会と国家

## 第1部 文献史料からみた渤海王国の社会と国家

第1部においては、渤海王国における国家と社会を在地社会から再検討するため、文献史料を整理する。以下、第1章において、在地社会の諸種族と渤海王国の関係史料を分析して、渤海王国の229年間の歴史を区分する。そのうえで、第2章では、渤海王国前期の在地社会の様相を伺える史料を分析し、渤海王国前期の在地社会とその有力者層の様相を探る。さらに、第3章では、渤海王国後期の史料を分析し、当該時期の在地社会と有力者層の動向を検討する。

### 第1章 在地諸種族からみた渤海王国の時期区分

序章で述べたように、本論文では、在地社会にいた高句麗人と靺鞨人を中心に扱う。靺鞨人は、いくつかの種族によって構成された<sup>1</sup>という。本章では、在地の諸種族を主体に据えて渤海王国に関係する文献史料を検討する。そのうえで渤海王国の歴史を在地の諸種族と渤海王権との関係から時期区分を試みたい。

渤海王国と在地諸種族の文献史料は、大きく建国前後、北部靺鞨征服、対日本外交、対唐外交の関係記事に分けられる。以下において、まず在地諸種族と渤海王国の関係にかかわる文献史料を整理し、ついで時期区分を行いたい。

#### 第1節 文献史料にみる渤海王国の在地諸種族

渤海王国の記事を伝える基本的な史料は中国の歴史書にある列伝史料である。渤海王国の基本的な列伝史料として、『旧唐書』巻199 渤海靺鞨伝と『新唐書』巻219 渤海伝、『唐会要』巻96 靺鞨伝<sup>2</sup>と『五代会要』巻30 渤海伝などがある。

ここでは、渤海王国の在地社会を高句麗人、靺鞨人の社会として分けて考察する。渤海王国と同様、上記中国の各史書には、高句麗（高麗）、靺鞨の列伝が設けられており、また『通典』边防篇などにも関連記事が認められる。さらに、唐が高句麗を滅亡させた後、その故地に安東都護府を設置する。そして、安東都護府に関する情報から高句麗または靺鞨の状況を伺うことができる。

渤海王国とその在地社会における諸種族は、周辺諸国と交渉を行っていた。その交渉の記事が周辺諸国の史書に記載されている。とりわけ、中国と日本の歴史書に散見される。たとえば、渤海王国または在地社会の諸種族から唐への朝貢記事は、両『唐書』の本紀や、『冊府元龜』外臣部などに記載されている。日本の場合、『続日本紀』以下の六国史の中に渤海使節の来航記事がある。

渤海王国とその在地社会に関する文献史料の現状は、以下3点に要約できる。

第一に、渤海王国とその在地社会の自らの手に成る記録は皆無である<sup>3</sup>。

第二に、渤海王国以外の地域で、渤海王国とその在地社会に関して記録した文献史料は残されている。

第三に、渤海王国以外の地域で、渤海王国とその在地社会との交渉を記録した文献史料は残されている。

このように、そのほとんどが第三者によって記録されたものであるという史料的制約がある。渤海王国とその在地社会の関係を研究するにあたっては、まず残された文献史料について整理し、それらに対して史料批判を行う必要がある。

本節では、渤海王国と在地社会の関係を示唆する史料について、上記の第二の記事と第三の交渉記事に即して検討してみたい。

最初に渤海王国建国前史として、高句麗及び靺鞨に関する文献史料について簡単に触れておきたい。

まず高句麗について、『後漢書』巻 85 高句麗伝、『隋書』巻 81 高麗伝、両『唐書』の高麗伝、地理志「安東」、『唐会要』巻 95 高句麗伝などによれば、高句麗の中心部が桂婁部であること、『後漢書』の「地方二千里」から『新唐書』では「五千里」となっていることがわかる。さらに、『旧唐書』巻 199 高麗伝、『唐会要』巻 95 高句麗、『新唐書』巻 220 高麗伝<sup>4</sup>によれば、唐将李勣は 668（総章元）年 9 月から高句麗の都城である平壤城を攻略し、11 月に高句麗王を捕虜とし、高句麗を滅亡させているが、この滅ぼした高句麗の領土に、9 都督府、42 州、100 県からなる安東都護府が設置された。また、新旧両『唐書』に記された高句麗の「四至記載」<sup>5</sup>として、『旧唐書』巻 199 高麗伝に「東渡海至於羅、西北渡遼水至于營州、南渡海至于百濟、北至靺鞨。」、『新唐書』巻 220 高麗伝に「地東跨海距新羅、南亦跨海距百濟、西北度遼水与營州接、北靺鞨。」と見えている。なお、『旧唐書』高麗伝では、高句麗の滅亡時に、176 の城、69 万 7 千の戸数が存在していたと伝えている。また『唐会要』高句麗伝には、高句麗の 2 万 8 千戸を唐の領域内に移したとあるので、単純計算すれば、残された 66 万 9 千戸は唐の安東都護府の支配下に入ったものと思われ、上記 9 都督府、42 州、100 県に居住していたことになる。注目されるのは、唐による安東都護府下での支配のあり方である。各高句麗伝に記されているが、たとえば『旧唐書』高麗伝には、

擢其曾渠有功者授都督、刺史及県令、与華人参理百姓。

の記述があり、各在地社会の自治的支配が端的に示されている。すなわち、唐は、対高句麗戦に際して功績があるものを抜擢して、都督、刺史、県令の官職をさずけ、華人（唐の役人）とともに百姓を管理させたという。その後、唐は新羅の抵抗、さらに靺鞨人を連合した高句麗遺民の反抗などに合い、安東都護府は朝鮮半島から遼東半島にその治所の移転を余儀なくされる。それだけでなく、9 府 42 州であった安東都護府は、両『唐書』地理志で確認すると、9 府 14 州に縮小されている。

また、靺鞨社会の状況については第 2 章でさらに詳しく説明することにして、ここでは

『隋書』卷 81「靺鞨伝」、『旧唐書』卷 199 靺鞨伝、『新唐書』卷 219 黒水靺鞨伝にもとづき、以下の二点に注目しておきたい。

①『隋書』靺鞨伝には「邑落俱有酋長、不相総一。」、『新唐書』黒水靺鞨伝には「離為数十部、酋各自治。」と記されているように、各邑落には酋長がおり、邑落は、それぞれ独自性を持っていること。

②『隋書』に「七部」、『旧唐書』靺鞨伝に「凡為数十部」、『新唐書』黒水靺鞨伝に「離為数十部」と記されていることから、靺鞨は唐代には数十の部からなっていたこと。

以上のように、渤海王国の建国以前に、高句麗と靺鞨の社会は、それぞれ在地の「酋長」あるいは「酋」によって束ねられていた。つまり、在地の有力者層によって在地社会が統括されていたのではないかと推測される。

ところで、両『唐書』渤海（靺鞨）伝によれば、唐の営州（朝陽）にいた「高麗別種」または「粟末靺鞨附高麗」であった大祚榮が東へのがれ、「桂婁故地」または「挹婁故地」にある東牟山で建国したという。この建国地について、両『唐書』には、「桂婁故地」（『旧唐書』）または「挹婁故地」（『新唐書』）と記され、異なっている。これは、高句麗の地であった桂婁故地を保有し、挹婁故地の東牟山に都城を建設したことによるものと思われる。桂婁故地を保有したことは、『冊府元龜』の渤海王子の冊封の記事に「桂婁郡王」と記されているとことからわかる。すなわち、『冊府元龜』卷 964 に次のような二つの記事がある。

（開元）七年三月、忽汗州都督渤海郡王大祚榮卒、遣使撫立其嫡子桂婁郡王大武芸襲為左驍衛大將軍渤海郡王忽汗州都督。

（開元七年）是（八）月、冊渤海郡王左驍衛大將軍大武芸嫡男大都利行為桂婁郡王。

この『冊府元龜』の両記事から、父の大祚榮が渤海郡王であったとき、その嫡子であった大武芸が高句麗の中心的故地であった「桂婁」の名を冠する郡王（桂婁郡王）であったこと、及び唐王朝から開元 7 (719) 年に大武芸が渤海郡王に冊封された際に、その嫡男（子）大都利行が父と同じく桂婁郡王に冊封されたことが分かる。もちろんこの両記事は唐王朝の意志を示したものではある。しかし、渤海王国にはまだ高句麗遺民の勢力が大勢をしめており、渤海王国においてその高句麗勢力を束ねるために郡王号に「桂婁」の名を冠したものである。その意味で、「靺鞨族や高句麗遺民とその付属の種族で構成された渤海国初期の複合した政治社会を考慮して、大祚榮と大武芸、大武芸と大都利行の二人からなる渤海郡王と桂婁郡王は、複合した渤海の政治社会に対応する唐の冊封であった」と説く西嶋定生の論説<sup>6)</sup>は示唆的である。

ところで、唐王朝から崔忻が渤海王国に派遣され、大祚榮を「渤海郡王」に冊封しているが、その帰途の開元 2 (714) 年に現在の遼寧省旅順の黄金山麓で井戸を掘った際に刻まれた碑文があり、そこには次のように記されている<sup>7)</sup>。

勅持節宣勞靺鞨（靺鞨）使  
鴻臚卿崔忻井两口  
永為記驗開元二年五月十八日

ここには「靺鞨」と記されているが、「靺鞨」のことであろう。ここで注目されるのが「宣勞靺鞨使」という称号である。この崔忻は『旧唐書』渤海靺鞨伝に「睿宗先天二年、遣朗将崔忻往册拜祚荣、為左驍衛員外大將軍渤海郡王」とある崔忻と同一人物であろう。大祚荣が先天2（713）年に唐王朝から渤海郡王として册封されたのは確かである。その使者として派遣された崔忻が、帰途に井戸を掘った際に建てた碑石には「宣勞靺鞨使」と記されている。ここに「渤海」と書かれていない点が注目される。それは「渤海郡王」に册封することにより、靺鞨を「宣勞」することが期待されたからではないだろうか。そのために崔忻に「宣勞靺鞨使」の職が付されたであろう。このことから、振国（後の渤海王国）の段階では、まだ靺鞨全地域を代表する勢力ではなかったと思われる。建国初期における渤海王国は、高句麗人と一部の靺鞨人との連合政権であり、その意味で靺鞨諸種族の一部を代表する有力な勢力に過ぎなかったと思われる。大祚荣の在位期間、または大武芸の在位期間の初期も含めて高句麗人と靺鞨人とが連合して政権を樹立したという点が渤海王国建国直後の特徴であろう。しかしながら、大祚荣が唐から渤海郡王に認められとはいえず、いまだすべての靺鞨種族に対して支配的な地位にあったとは言えない。つまり、高句麗遺民を統合し、一部の靺鞨種族の有力者と連携して、唐からみて靺鞨地域の一勢力として浮上したのではないかと思われる。おそらく大武芸が積極的に靺鞨諸種族を統合しはじめた時期までは、ただ靺鞨勢力の一部に過ぎない地位にあったのであろう。靺鞨の諸種族を統合しはじめたのは大武芸の時代の後半になるだろう。そのことを端的に表しているのが渤海王国と黒水靺鞨、新羅との緊張関係であり、日本との国交開始である。以下、この二つの事項に関わる史料を手かりに渤海王国と在地社会の有力者層との関係を見てみたい。

『旧唐書』渤海靺鞨伝に、「黒水靺鞨」と関連して次のような史料がある。

（開元）十四年、黒水靺鞨遣使來朝、詔以其地為黒水州、仍置長史、遣使鎮押。

黒水靺鞨は、渤海の影響力を避けるため、唐王朝に朝貢して唐との関係を保とうとしていたことがわかる。一方、唐王朝も黒水靺鞨の地に黒水州や長史をおいて、背後から渤海を牽制しようとしたのである。『隋書』卷81 靺鞨伝に「其一號粟末部、與高麗相接、勝兵數千、多驍武、每寇高麗中。其二曰伯咄部、在粟末之北、勝兵七千。其三曰安車骨部、在伯咄東北。其四曰拂涅部、在伯咄東。其五曰號室部、在拂涅東。其六曰黒水部、在安車骨西北。」と記されているように、「粟末靺鞨」と「黒水靺鞨」の間には、少なくとも伯咄靺鞨、安車骨靺鞨が存在していたことが分かり、渤海王国と黒水靺鞨が拮抗する過程にあって、渤海王国は伯咄、安車骨の靺鞨諸種族に大きな影響を与え、もしくはその統合をめざ



していたのではないかと想像される。

また、大武芸時代の渤海は、新羅と隣接し、国境線は、朝鮮半島の東西海岸にまたがっていた。それに対し、新羅は警戒を強め、軍事施設の築造に力を注いだのである。『三国史記』卷第八・新羅本紀・聖徳王二十年秋七月条に、「徴何瑟羅道丁夫二千、築長城於北境。」とある。この何瑟羅道は、朝鮮半島の日本海北岸で、『三国史記』卷 35・地理志・溟州条には「何瑟羅連靺鞨」とあり、『新唐書』渤海伝に「南比新羅、以泥河為境」とあることから、渤海と新羅の国境に靺鞨の勢力が蟠踞しており、大武芸の時代にはすでに日本海側の新羅に近い地域へと領域拡大をめざしていた<sup>8</sup>という。そうであるとする、この地の靺鞨社会、すなわち在地社会もこの時期に渤海による統合の対象になっていたのであろう。

従来、渤海王国の日本への使節派遣の原因を黒水靺鞨問題であると理解する傾向があった<sup>9</sup>。そして、渤海と唐の矛盾の激化、その延長線で唐の命をうけた新羅の参加<sup>10</sup>により孤立無援の状況にあって第一次の遣日本使を派遣したという認識がほぼ定説化された。これに対し、新羅と渤海の主体的存在を認め、新羅の対唐関係強化、対日不信、北進策などから、新羅こそ渤海による遣日本使の主要な要因だという見解<sup>11</sup>もある。

後者の見解に基づいて、この点を具体的に歴史背景の中で検討してみよう。

まず、渤海の第一回遣日本使が派遣される以前の時代背景の一部を、渤海の北面、南面について整理すると次のようになる。

北面：

722年、唐と黒水の接近。

725年、唐の黒水軍の設置。

726年、唐による黒水府設置および長史派遣、さらに幽州都督支配下に組む。

南面：

721年、何瑟羅（江陵）に長城を築く。

722～723年を境に、新羅の対唐外交が積極化する。

このように 721～726年まで渤海は、南北から包囲される危険性が高い時期に、第一回遣日本使を派遣したのである。大武芸の王書に「寧遠將軍郎將高仁義、游將軍果毅都尉德周、別將舍航ら廿四人」と記されているように、使節の中で主要な官僚はすべて武官である。さらに王書の中には「仁に親しみ援を結び、庶（ねが）はくは前経に叶ひ、使を通じ隣に聘すること、今日に始めむ。」とある。この句は武力による援助または提携の要請を意味すると解釈され、日本に対してきわめて現実的な働きかけを目的としていたと解されてきた<sup>12</sup>。李成市はこの第一回の遣日本渤海使を次のように評している<sup>13</sup>。すなわち、「渤海の対日本外交は、渤海が孤立した国際環境の中で、それを打開すべく安全保障上の明確なねらいをもって始められたのである。渤海は、日本との関係を緊密化することによって、不時の後援、とりわけ直接に朝鮮半島の南・北で対峙していた新羅を、背後から牽制する役割を期

待していたとみてよい。」と。

つまり、渤海の第一回遣日本使の理由を新羅の軍事的牽制に求め、その性格を軍事的なものだと断じている。それは、第一回の遣日本使が帰国した後、渤海を取り巻く国際環境は益々緊張の度合いを加えていったこととも符合するからである。その国際情勢を簡単に整理しておく次のようになる。

730年、渤海王弟大門芸の唐への亡命によって、唐との緊張化を生む。

732年3月、契丹が唐軍に大敗。

732年9月、渤海の登州入寇。

733年閏3月、渤海は契丹に支援軍を出して唐と対抗する。

733年冬、唐が新羅に渤海征討の要請を出す。新羅が北辺に軍を送る。渤海と新羅の戦闘が始まる。

渤海王国と日本の関係は、そのほかの勢力（黒水、唐、新羅、突厥、契丹、奚）との関係とは異なり、大武芸の時代から始まっている。すなわち、727年、大武芸ははじめて使者を日本へ送った。その状況を伝える記事は、『続日本紀』巻10、神亀4（727）年9月庚寅（21日）条に次のように記されている（下線は筆者追加。以下同じ）。

渤海郡王使首領高齊徳等八人。來着出羽國。遣使存問。兼賜時服。

この首領高齊徳ら八人が出羽国に到着したときから、延喜19（919）年に渤海の最後の遣使である裴璆が来日するまで、192年間に及ぶ外交交渉が開始された。高齊徳ら渤海使一行は、神亀4（727）年12月丁亥（20日）に入京し、翌5年正月甲寅（17日）に「渤海郡王」大武芸の王書と方物を貢じた。その王書の全文は『続日本紀』巻10神亀5（728）年正月甲寅（17日）条に記されている。それをまず次にあげておく。

其詞曰：武芸啓、山河異域、國土不同。延聽風猷、但増傾仰。伏惟大王、天朝受命、日本開基、奕葉重光、本枝百世。武藝忝當列國、濫惣諸蕃、復高麗之舊居、有扶餘之遺俗。但以天崖路阻。海漠悠悠、音耗未通、吉凶絶問。親仁結援、庶叶前經、通使聘隣、始乎今日。謹遣寧遠將軍郎將高仁義、游將軍果毅都尉徳周、別將舍航等廿四人、齎狀、并附貂皮三百張、奉送。土宜雖賤、用表獻芹之誠。皮幣非珍、還慚掩口之誚。主（生）理有限、披瞻未期。時嗣音徽、永敦隣好。

この王書からは数多くの情報が読み取れるので、ここではその全文の書き下し文を示しておこう。

その詞に曰わく、「武芸啓すらく、山河域を異にして国土同じからず。延かに風猷を聴きて、但だ傾仰を増すのみ。伏して惟みれば、大王天朝命を受けて、日本、基を開き、

奕葉光を重ねて、本枝百世なり。武芸忝くも列国に当たりて、濫りに諸蕃を惣ぶ。高麗の旧居に復りて扶餘の遺俗を有てり。但し天崖の路阻たり、海漠悠々かなるを以って音耗通わず、吉凶問うことを絶てり。親仁結援せむ。庶わくは前経に叶え、使を通わして隣を聘うこと、今日より始めんことを。謹みて寧遠將軍郎將高仁義、游將軍果毅都尉徳周、別將舍航ら廿四人を遣して、状を齎し、并せて貂皮三百張を附けて送り奉る。土宜賤しと雖も、用て献芹の誠を表さんとす。皮幣珍らかに非ず。還りて掩口の誚を慚づ。主（生）理限り有り、披瞻期せず。時、音徽を嗣ぎて永く隣の好を敦くせむ、と。

王書（国書）であるがゆえに美文として修飾されているところが多く、当時の渤海の対外認識が如実に表れている。たとえば「諸蕃を惣ぶ」とあるが、渤海王国がその辺境の諸種族に影響力を拡大しつつある状況をさしている。さらに『三国志』や『後漢書』で「高麗の先、扶余より出ず」、「高麗というものは、扶余の別種より出ずる」と称されるように高句麗は扶余の一種族であることから、この「高麗の旧居に復りて扶餘の遺俗を有てり。」の部分は同一内容の修辭的言い替えに過ぎないものと解釈されている<sup>14</sup>。両国の関係は、後に日本が渤海王国を高句麗継承国と見なすことによって渤海王国もそのように振舞うことが多くなる。しかし、この時点では互いに、とくに日本は渤海王国をどのような国であるか理解していない。それゆえ渤海王国が対等な外交関係を取り結ぼうとして「聘隣」と称しても、日本側も後代のように外交文書の文言を取り上げて政治的問題にしようとはしていない。渤海が国書の中で高句麗と扶余を持ち出したのは、石井正敏が指摘するとおり大国であった扶余と高句麗の継承国であることをアピールすることで外交を有利に展開しようとしたものであろう。一方で、渤海王国は同時に唐から受けた爵号である渤海郡王を名乗っており、唐から受けた爵号を日本との外交に利用している。

日本との関係で名分のことはともかく、「諸蕃を惣ぶ」や「高麗の旧居に復りて扶餘の遺俗を有てり」と記されていることからみても、727年を前後して渤海王国は「高麗（高句麗）」を継承したと標榜し、その周りにある諸種族を統合していた状況が読み取れる。

ところで『唐六典』尚書礼部卷第四主客郎中条に、

凡四蕃之国經朝貢之後、自相誅絶、及有罪滅者、蓋三百余国。今所存者、七十余蕃。謂三姓葛邏祿、〔中略〕突厥、奚、契丹、遠蕃靺鞨、渤海靺鞨、室韋、〔中略〕等七十国、各有土境、分為四蕃焉。（小文字は原文注）

とある。この出典である『唐六典』とは、開元 10（722）年から開元 27（739）年の間に成立した当時の各官職の職掌、沿革を記録・編纂した文献である。したがって、『唐六典』は、大武芸時代の渤海と靺鞨との関係を示していると考えられる。注に見える「渤海靺鞨」とは、渤海王国そのもの、またはそれと関連する靺鞨、「遠蕃靺鞨」は、黒水靺鞨説<sup>15</sup>、弘湜靺鞨説<sup>16</sup>がある。開元 10（722）年から開元 27（739）年までの渤海王国と黒水靺鞨との緊張関係などを勘案すると、「遠蕃靺鞨」とは黒水靺鞨と関連をもっている靺鞨諸種族であ

ると考える。

大武芸時代の後半において、黒水靺鞨及び新羅との緊張関係の中で、渤海王国は黒水靺鞨以外の靺鞨をその勢力下に包摂していったのである。すなわち、渤海王国は高句麗遺民との関係を維持しながら靺鞨諸種族を統合して行き、その一方で黒水靺鞨をはじめとする「遠蕃靺鞨」とは対立していたと思われる。すなわち、この間に渤海王国は「遠蕃靺鞨」以外の靺鞨を統合していたのであろう。そのことは以下の三点から裏付けられる。

第一に、大都利行以降、「桂婁郡王」に冊封されなくなる。

第二に、高句麗の旧土の州名を冠する刺史の「木底州刺史」、「玄菟州刺史」、「若忽州刺史」が渤海王国から日本に派遣されている。

第三に、『冊府元龜』の朝貢、褒異の項に、渤海靺鞨または靺鞨人と思われる人が唐に派遣されている。

以上からみて、大武芸の時代までの渤海王国は高句麗人と南部の靺鞨人の勢力を統合していたのではないかと推定される。

8世紀の40年代以降に大欽茂の時代に入る。『新唐書』渤海伝に「寶應元（762）年、詔以渤海為國、欽茂王之、進檢校太尉。」とあるように、唐王朝は渤海王国を「渤海郡」から「渤海国」に昇格させている。また、この時期に王国の首都は、東牟山がある旧国から、東にある中京、また北の上京、さらに東の東京へと3回も遷都している。その間、王国の領域拡大にともなって含まれるようになったそれぞれの在地社会を、王国は積極的に統合していったと思われる。そうした経緯が認められて唐王朝から「国」として扱われるようになったのであろう。

このほか、渤海と靺鞨の関係は以下の『冊府元龜』巻972朝貢5から垣間みることができる。

- ・大曆二（767）年七月、吐蕃及渤海並遣使来朝。八月、契丹、渤海朝貢。九月靺鞨、渤海、室韋；十月、廻紇；十一月、渤海、廻紇、吐蕃；十二月、廻紇、渤海、契丹、室韋等国各遣使朝貢。
- ・大曆四（769）年正月、牂牁、訶陵、黒衣大食；二月牂牁；三月渤海、靺鞨；十二月、廻紇、吐蕃、契丹、奚、室韋、渤海、訶陵並遣使朝貢。
- ・大曆七（772）年五月、新羅；十二月、廻紇、吐蕃、大食、渤海、靺鞨、室韋、契丹、奚、牂牁、康国、米国九姓等各遣使朝貢。
- ・大曆八（773）年四月、渤海遣使来朝、並獻方物。廻紇遣使阿德俱裴羅来朝、引見于石銀台門。新羅遣使賀正見于延英殿並獻金、銀、牛黄、魚牙紬、朝霞紬等方物。六月、廻紇遣使羅仙闕等来朝、引見於石銀台門。渤海遣使賀正。新羅遣使謝恩並引見于延英殿。十一月、渤海遣使朝貢。閏十一月渤海、室韋並遣使来朝。廻紇使散文赤心裴羅達干等還蕃引辞于銀台門。十二月、渤海、室韋、牂牁並遣使来朝。奚、契丹、渤海、靺鞨並遣使朝貢。
- ・大曆九（774）年正月、室韋、渤海並来朝。十二月、奚、契丹、渤海、室韋、靺鞨遣使来朝。
- ・大曆十（775）年正月、渤海、契丹、奚、室韋、靺鞨、新羅；五月、渤海；六月、新羅、渤海；十二月、渤海、奚、契丹、室韋、靺鞨各遣使朝貢。

- ・大暦十二（777）年正月、牂牁遣使来賀正。渤海遣使来朝、並献日本国舞女十一人及方物。二月、渤海遣使献鷹。四月、牂牁、渤海、奚、契丹、室韋、靺鞨；八月、新羅、渤海、靺鞨、室韋、奚、契丹並遣使来朝、各献方物。
- ・貞元八年（792）十二月、牂牁、靺鞨皆遣使朝貢。

以上は、渤海王国が大欽茂時代に「国」へ昇格した以後の、『冊府元龜』朝貢記事に見える渤海と靺鞨の記事を列挙したものである。その特徴として、「渤海」と「靺鞨」のみが見えることである。前の時代には「弘涅」、「越喜」、「黒水」などの用語が見てとれるのに比べ、ここでは「渤海」と「靺鞨」とに明確に分けられている。つまり、この時期には渤海は靺鞨社会をさらに統合していたと思われる。それを証明するのが『唐会要』巻96の「渤海」の条に見える「貞元八（792）年閏十二月、渤海押靺鞨使楊吉福等三十五人來朝貢。」の記事である。これによって渤海王国に「押靺鞨使」の官号が存在したことが分かり、この時点までに種々の靺鞨種族を統合することでできていたと推測される。

『新唐書』渤海伝によると、大欽茂の死後、20数年の間に6名の国王（大元義、大華璵、大嵩鄰、大元瑜、大言義、大明忠）が代替わりする。大元義は大欽茂の弟で、大華璵の王位を篡奪するが、「国人」の勢力によって一年もたたない間に廃位される。その後は、大嵩鄰を除くと、そのほかの国王はほとんど1年～3年の間で王位を失ってしまう。この時期にもっとも長く王位にいたのは大嵩鄰である。その嵩鄰の時代に以下のような日本への王啓がある。すなわち、『日本後紀』巻5延暦15（796）年10月己未2日条に記された王啓に、「嵩隣猥以寡徳、幸属時來。官承先爵、土統舊封。」とある。この「土統舊封」とは、元の領域を統合したことを言う。つまり、大嵩隣の即位以前に渤海王国の領域のなかから離脱した地域が存在していることが予測できる。すなわち、大嵩隣の時期に渤海王国から離脱していた在地社会が再び王国の中に取り込まれたのだと考えられる。しかしながら、渤海王国の北方に雄居していた黒水靺鞨は統合できていなかったようである。それは、元和10（815）年2月の『冊府元龜』朝貢記事に「黒水酋長十一人來朝貢。」と記されているからである。

その後、818年に大仁秀が、甥の大言義、大明忠の補政をしたのちに、渤海国王になる。『新唐書』渤海伝によると「仁秀頗能討伐海北諸部、開大境宇有功。詔檢校司空、襲王。」とあるから、この時期になって黒水靺鞨も含めた靺鞨諸種族がようやく統合されたものと思われる。こうして黒水靺鞨を含む靺鞨諸種族の在地社会は完全に渤海王国の統制の中に組み込まれたものとみられる。この時期に入ると、『新唐書』渤海伝には「肅慎、濊貊、沃沮、高麗、扶餘、挹婁、率賓、拂涅、鐵利、越喜」の諸種族の「故地」の記事が出てくる。このことからこれら諸種族が渤海王国の国家的支配体制の中に組み込まれたことが理解できよう。

また『三国史記』巻11新羅の憲康王12（886）年春条に、「北鎮奏、狄国人入鎮、以片木掛樹而帰。遂取以献。其木書十五字云、『宝露国與黒水国人、共向新羅国和通。』」とある。これは大仁秀よりのちの時代の記事ではあるが、もともとアムール河流域にあるはずの黒

水靺鞨（黒水国）が渤海と新羅との国境の地域にあることとなる。これは渤海王国が黒水靺鞨を集団移動させ、そのほかに越喜靺鞨も集団移動させていた<sup>17</sup>ようである。

このように『三国史記』憲康王 12（886）年春条からわかるように、大瑋瑳の時代に入り、新羅と黒水靺鞨とが再び活動を始めている。ちなみに、『冊府元龜』の乾化三（913）年五月の朝貢記事に「黒水胡、独鹿、女貞等使朝貢」とあるように、黒水靺鞨が五代の後梁に対して朝貢を再開しており、その自立した姿を確認できる。また、『遼史』卷二・本紀第二・天顯元年条に、

天顯元年春正月己巳、靺鞨請降。庚午、駐軍于忽汗城南。辛未、靺鞨素服、橐索牽羊、率僚屬三百餘人出降。上優禮而釋之。甲戌、詔諭渤海郡縣。丙子、遣近侍康末怛等十三人入城索兵器、為邏卒所害。丁丑、靺鞨復叛、攻其城、破之。駕幸城中。靺鞨請罪馬前。詔以兵衛靺鞨及族屬以出。

二月庚寅、安邊・鄭頡・南海・定理等府及諸道節度、刺史來朝、慰勞遣之。〔中略〕丁未、高麗、濊貊、鉄驪、靺鞨來貢。

とある。これは、天顯元（926）年正月に渤海国王の大靺鞨が契丹族の遼に降伏して王国が滅亡したことを示す記事である。その 2 月に渤海王国の安邊、鄭頡、南海、定理の各府と諸道の節度史及び刺史が遼に來朝し慰勞され、ついで高句麗人、濊貊人、鉄驪人、靺鞨人が朝貢してきたことを記している。すなわち、遼による渤海王国の滅亡にともない、渤海の地方官僚のみならず、渤海王国支配下に存続していた靺鞨人などの在地社会の有力者層が、ただちに遼の支配を受け入れていたことがうかがえる。渤海王国の時代を通してその支配下の在地社会を具体的に明らかにする文献史料はほとんど存在しない。しかし、上記の記事から渤海王国時代にその支配を受け入れていた在地社会は、おそらくはその有力者層を中心に自立的に存続していたと見なしてよいように思われる。いいかえれば、渤海王国は、そうした自立する在地社会のうえに維持されていたといつてよいであろう。

## 第 2 節 時期区分

第 1 節では、渤海王国の在地諸種族の動向を文献史料に基づいて整理してみた。本論文の基本的な観点は、渤海王国に対する在地社会の独自性である。しかし、文献史料のみで考察すると、在地社会の独自性は非常に検討しにくい。そこで、以下の手順で検討したい。まず、渤海王国と諸種族との動向に焦点をあてて渤海王国の時期区分に関するいくつかの指標を設けて整理してみると、表 1-1 のようになる。このうち、北部靺鞨のなかの有力な種族である黒水靺鞨が渤海王国によって統合されたこと（渤海王国に取りこまれたこと）が、渤海王国の歴史を前期と後期とに分ける大きな指標になると思われる。すなわち、渤海建国前の高句麗人と靺鞨人の在地社会を考察すると、各在地社会は、「曾渠」、「曾」のような有力者層によって支配されていることがわかる。渤海王国は、このような社会状況のなか

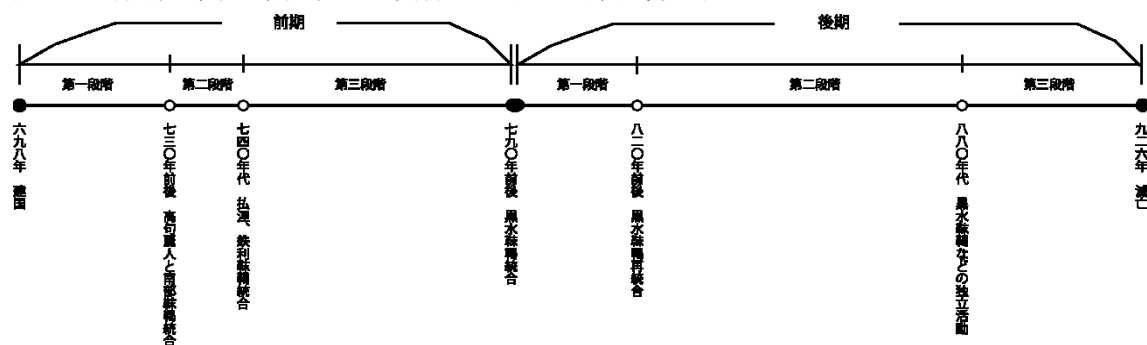
で、まず、高句麗人と一部の靺鞨人を連合していき、ほこさきを白山靺鞨などの南部靺鞨に向けていた。740年代に入ると、それまで唐と頻繁に外交活動をしていた弘涅靺鞨、越喜靺鞨、虞婁靺鞨、鉄利靺鞨の記録は見えなくなり、これら三靺鞨の在地社会の有力者層は渤海王国に統合されたと推測される。さらに、前で列挙した750年代の渤海王国と靺鞨の在地社会の対唐外交史料でわかるように、この時期は主に黒水靺鞨と対峙していた時期と思われる。

それも、『唐会要』巻96の「貞元八（792）年閏十二月、渤海押靺鞨使楊吉福等三十五人來朝貢。」の記事をふまえると、790年前後に黒水靺鞨の統合が完了したのではないかと推測される。この渤海王国の黒水靺鞨に対する第一次統合は、はじめて高句麗人と全靺鞨地域を統合し、その229年間の歴史を前期と後期に区分できると思われる。さらに、前期については、①高句麗人と南部靺鞨の統合（730年前後）、②弘涅、越喜などの靺鞨の統合（740年代）を指標にして三つの時期に区分する。

後期については、その歴史過程を簡単に述べると、794年大欽茂死後、渤海王国の王位争奪戦で、内紛がおこり、それまで統合されたとされる靺鞨人の一部が王国のつなぎとめから離れたようで、再び在地社会の独自性を確保できたと思われる。大仁秀時代に入り、積極的な北方進出政策を行い、820年前後、離脱していた靺鞨の在地社会を再統合してしていた。それで、渤海王国も830年代には、「海東の盛国」と呼ばれるようになる。律令制を導入した渤海王国は、一見、靺鞨諸部の在地社会を完全に統合したようである。しかし、880年代に入ると、黒水靺鞨などの在地社会の靺鞨人の独自の活動が認められ、渤海王国の統合力はますます弱まり、滅亡時に、多くの在地の独自勢力の活動が認められた。そこで、後期はさらに、①離反した黒水靺鞨の再統合（820年前後）、②黒水靺鞨の独立した活動の再会（880年代）を指標に、同じく三つの時期に区分してみたものである。

このことによって渤海王国の国家的成長が推測できるばかりでなく、在地社会がはたした渤海王国に対する重要な意義について考えることができる。そのなかでも790年前後の黒水靺鞨の在地社会の統合が渤海王国の時期区分の要点となっている。

表 1-1 渤海王国と諸種族との関係からみた時期区分（筆者作成）



## 注

- <sup>1</sup> 日野開三郎「靺鞨七部の前身とその属種」（『日野開三郎東洋史学論集』15、三一書房、1991年、pp.1～68、初出1948年）。
- <sup>2</sup> 古畑徹「『唐会要』の靺鞨・渤海の項目について」（『朝鮮文化研究』8、2001年、pp.1～25）は、『唐会要』の各版本を比較検討し、同書の「靺鞨」と「渤海」は一つの項目に当たり、「靺鞨」とすべきであるという。ここでは古畑の研究にしたがう。
- <sup>3</sup> 渤海王国の公主または後の墓碑に書かれている墓誌銘や、渤海王国の官吏組織である中台省から発給した外交文書にあたる「牒」などは残されている。
- <sup>4</sup> 『旧唐書』卷199高麗伝「総章元年九月、勳又移營於平壤城南、男建瓌遣兵出戰、皆大敗。男建瓌下捉兵總管僧信誠密遣人詣軍中、許開城門為内応。〔中略〕十一月、拔平壤城、虜高藏、男建等。十二月、至京師、獻俘於含元宮。〔中略〕高麗国旧分為五部、有城百七十六、戸六十九万七千。乃分其地置都督府九、州四十二、県一百、又置安東都護府以統之。擢其酋渠有功者授都督、刺史及県令、与華人参理百姓。」、『唐会要』卷95高句麗「総章元年〔中略〕九月李勳拔平壤城、虜高藏男建等分〔中略〕分其地置都督府九、州四十二、県一百、又書誌東都護府以統之、移其戸二万八千於内地。」、『新唐書』卷220高麗伝「〔総章元年〕九月、藏遣男産率首領百人樹素幡降、且請入朝、勳以礼見。而男建瓌固守、出戰数北、大将浮屠信誠遣謀約内応。五日、闔啓兵謀而入、火其門、鬱焰四興、男建瓌窘急、自刺不殊。執藏、男建等、収凡五部百七十六城、戸六十九万。詔勳便道獻俘昭陵、凱而還。十二月、帝坐含元殿、引見勳等、数俘于廷。剖其地為都督府者九、州四十二、県百。復置安東都護府、擢酋豪有功者授都督、刺史、令、与華官参治、仁貴為都護、總兵鎮之。」の記事による。
- <sup>5</sup> 『旧唐書』卷199高麗伝「渡海至於羅、西北度遼水至于營州、南渡海至于百濟、北至靺鞨。」、『新唐書』卷220高麗伝「地東跨海距新羅、南亦跨海距百濟、西北度遼水与營州接、北靺鞨。」を参照。
- <sup>6</sup> 西嶋定生「東アジア世界と冊封体制一六～八世紀の東アジア一」（『中国古代国家と東アジア世界』東京大学出版会、1983年、p.454。初出、岩波講座『日本歴史』第二卷、古代2、1962年）、濱田耕策「桂婁郡王」（『渤海国興亡国』吉川弘文館、2000年、p.22）。
- <sup>7</sup> 酒寄雅志「『唐碑亭』、すなわち『鴻廬井の碑』をめぐる」（『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、p.388）。
- <sup>8</sup> 酒寄雅志「東北アジアのなかの渤海と日本」（『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、p.105）。
- <sup>9</sup> 鳥山喜一『渤海史考』（奉公会、1915年）。
- <sup>10</sup> 末松保和「日韓関係」（『岩波講座日本歴史』第四回配本、1933年、のち『日本上代史管見』私家版、1963年所収）、沼田頼輔『日滿古代国交』（明治書院、1933年）、酒寄雅志『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001年）。
- <sup>11</sup> 古畑徹「日渤交渉開始期の東アジアの情勢—渤海対日通交開始要因の再検討—」（『朝鮮史研究会論文集』23、1986年）。
- <sup>12</sup> 石井正敏「初期日本・渤海交渉における一問題—新羅征討計画と渤海」（『日本渤海関係史研究』吉川弘文館、2001年、初出1974年）。
- <sup>13</sup> 李成市「渤海の対日本外交への理路」（『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年）。
- <sup>14</sup> 石井正敏「神龜四年、渤海の日本通交開始とその事情」（『日本渤海関係史研究』吉川弘文館、2001年）。
- <sup>15</sup> 権恩妹「渤海前期北方民族関係史」（2012年、慶北大学大学院博士論文、p.71）。
- <sup>16</sup> 金鐘福「8世紀渤海と靺鞨諸部の対唐交渉に対する基礎的検討—冊府元龜 朝貢・褒異条を中心に」（『歴史文化研究』39、2011年、p.50）。
- <sup>17</sup> 赤羽目由匡「渤海・新羅接壤地域における黒水・鉄勒・達姑の諸族の存在様態—渤海の辺境支配の一側面—」（『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011年、pp.145～188）、同「唐代越喜靺鞨の住地とその移動」（『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011年、p.81～119）。



## 第2章 渤海王国の前期中における在地社会の有力者層

第1章では、文献史料を手がかりに渤海王国と在地社会にいた諸種族との統合・離脱の関係から前期、後期と区分してみた。この第2章では、渤海王国の前期中における在地社会の状況を伝える文献史料の用例を掘り下げて、当該期中における渤海王国の首領（在地社会有力者層）の存在を検討してみたい。

### 第1節 『類聚国史』の「渤海沿革記事」

渤海王国の前期中における在地社会の様子を示唆する史料は、これまでの渤海史研究でしばしば取り上げられてきた『類聚国史』巻193延暦15（796）年4月戊子27日条に見える「渤海沿革記事」である。（以下、「渤海沿革記事」は、すべて『類聚国史』巻193を指す。）まずその内容を掲げると、以下の通りである。

（前略）又伝奉在唐学問僧永忠等所附書。渤海国者、高麗之故地也。天命開闢天皇七年、高麗王高氏為唐所滅也。後以天之真宗豊祖父天皇二年、大祚榮始建渤海国。和銅六年、受唐冊立。其国、延袤二千里、無州郡館驛、処処有村里、皆靺鞨部落。其百姓者靺鞨多、土人少。皆以土人為村長。大村曰都督、次日刺史。其下百姓皆曰首領。土地極寒、不宜水田。俗頗知書、自高氏以來朝貢不絶。

この記事は、もともと840年代に成立した『日本後紀』の逸文であり、菅原道真の編纂により892年に成立した『類聚国史』では殊俗部に分類・編纂されたものである。この中で「渤海国者」以下の部分が渤海王国の沿革を記している。この部分の情報がどのような経緯から得られたかによって、渤海王国のどの時期の状況を伝えているかが決まることになる。

従来、当該記事の中で、「渤海国者」の前に書かれている「又伝奉在唐学問僧永忠等所附書」から、この記事のすべてが在唐学問僧・永忠の書状によるものであり、彼が渤海を経由した際に得られた情報であると理解されてきた<sup>1</sup>。しかし、そのような理解では永忠が入唐の際、渤海をいつ経由したかが明示されていないため、この「渤海沿革記事」によるかぎり、延暦15（796）年までの渤海王国の状況とみなすしかないであろう。

石井正敏によれば、「渤海沿革記事」は『日本後紀』（『類聚国史』に残された逸文）の編纂者による机上の作文であるという<sup>2</sup>。さらに、当該記事は「イ、これまでの渤海との交渉を通じて得た情報、ロ、唐との交渉で得た情報、ハ、中国の正史や古典の知識」に基づいて作成<sup>3</sup>したとしている。すると、「渤海沿革記事」を初出する『日本後紀』は840年の成立なので、それ以前の渤海王国の状況を示していることになる。

さらに、鈴木靖民は「日本の840年撰上の『日本後紀』編者が、遣唐使に従って在唐の延暦寺僧永忠の書簡をもとに渤海の沿革のうち初期の粟末の様子を述べた」と指摘<sup>4</sup>してい

る。鈴木の指摘が妥当であるとする赤羽目匡由は、下記の 3 点より史料考証<sup>5</sup>を行っている。

第 1 点としては、8 世紀の日本と渤海との交渉情報にもとづいて「渤海沿革記事」が作成されたとするならば、なぜ 797 年に成立した『続日本紀』に記載されなかったのかという点である。それだけでなく、『続日本紀』の渤海沿革に関する記事で、なぜ建国年次、つまり「和同 6 (698) 年」のようなもっとも基本的な情報を欠いているのかという点があげられる。渤海王国の沿革に関する初出記事は、『続日本紀』巻 10・神亀 4 (727) 年 12 月丙申 (29 日) 条に次のように記されている。

渤海郡者、旧高麗国也。淡海朝廷七 (668) 年冬十月、唐将李勣伐滅高麗。其後朝貢久絶矣。

この記事は、727 年渤海王国が日本にはじめて使者を派遣する時に書かれた渤海沿革に関する部分である。赤羽目は『続日本紀』の成立過程を取り上げながら、「渤海沿革記事」の内容は、その前の日本と渤海との交渉記録にはなく、797 年の時点で日本の朝廷は入手できていなかったと考えている。

第 2 点目として、「天之真宗豊祖父天皇」と記されている点である。つまり、文武天皇の国風諡号が延暦 (782~806 年間) 初年には「倭根子豊祖父」と改定されたが、延暦 15 (796) 年の「渤海沿革記事」では、依然として「天之真宗豊祖父天皇」を使用している点である。赤羽目は、石井も注意している後藤四郎の説、つまり文武天皇の国風諡号は、天平宝字年間 (757~765 年) 初期に「天之真宗豊祖父天皇」が撰上され、延暦の初年に「倭根子豊祖父」と改定されたということを取り上げている。だから、天平宝字年間初期から延暦初年までの日本と渤海との交渉記録を用いたことにするのなら、延暦 15 年の時点で、なぜわざわざ前代の国風諡号を使うかという矛盾が生ずるのである。

三点目として、赤羽目は入唐留学僧・永忠の事績に注目している。永忠の事績に関しては、つとに石井が『元亨釈書』巻 16 力遊にある「釈永忠、京兆人、姓秋篠氏。宝亀之初、入唐留学、延暦之季、随使帰」に注目<sup>6</sup>し、さらに永忠は宝亀 4 (773) 年に渤海經由で入唐し、延暦 24 (805) 年に日本へ帰国していることを明らかにしている。ただ、石井は「渤海沿革記事」のすべてを『日本後紀』の編纂者の机上の作文としてみるため、この永忠の事績と「渤海沿革記事」の渤海王国の社会状況を示す内容を関連づけていない。一方、赤羽目は日本と渤海の交渉記録によるものであるとするならば、上記の 2 点に問題があるので、当該「渤海沿革記事」を永忠の事績と関連づけている。796 年の永忠の書状だからこそ、797 年の『続日本紀』に「渤海沿革記事」を挿入するのに時間的な余裕がなかったという点と、「天之真宗豊祖父天皇」を使用したのは、773 年に出国した永忠が「倭根子豊祖父」の改定情報を知らなかったためであるとしている。そこで、この沿革記事は永忠の書状をもとにしたという鈴木説の妥当性を再確認させる。

赤羽目は、この沿革記事の内容すべてが永忠の書状によるものではなく、「渤海国者、高麗之故地也。天命開別天皇七年、高麗王高氏為唐所滅也。」の部分は『続日本紀』巻 10 の

神亀4(727)年10月条の渤海新出記事と同じ内容であり、「其国、延袤二千里」や「自高氏以来朝貢不絶」などの文言は唐よりの情報や中国正史(たとえば『隋書』などのような)四夷伝を参照したとみられ、石井が提起した『日本後紀』の編纂者の机上作文<sup>6</sup>説を批判的に継承している。

渤海沿革記事の性格について、とりわけ赤羽目の史料考証をやや詳細に取り上げた。それは、この記事がどの時期の渤海王国の状況を示しているかを確認するためである。赤羽目の考証に依拠すると、「無州県館駅、处处有村里、皆靺鞨部落。其百姓者靺鞨多、土人少。皆以土人為村長。大村曰都督、次曰刺史。其下百姓皆曰首領。土地極寒、不宜水田。」の部分は、永忠の書状によるものであり、永忠が渤海を経由した時期は773年ごろになるので、「渤海沿革記事」は773年前後の渤海王国の社会状況を示していることになる。そこで、前章で示した渤海王国の時期区分と照らせ合わせると、「渤海沿革記事」は王国前期の社会状況を示すことになる。

この記事でまず注目されるのは、「首領」の存在である。この「首領」に関する理解は、多民族が生息していた在地社会に建国し、229年間支配を行った渤海王国の在地支配そのものを明らかにすることにつながる。それだけではない。渤海の「首領」のあり方は、後の時代に東北アジアで興隆した各王朝の在地社会との関係にも多大な示唆を与えると考える。その意味で「首領」の解明は、遼の南北両面官制度、金の猛安謀克制度、清の八旗制度などを理解する前提になると言えよう<sup>7</sup>。

しかし、永忠の書状による「渤海沿革記事」に示されている渤海王国の村里の状況については、いまだ解決を見ていない。つまり、渤海王国前期の在地社会の状況や在地社会有力者層の一員である「首領」の存在は、これまで多くの研究が重ねられてきたにもかかわらず、まだ議論の余地が残されている。

この第2章では、まずこれまで「渤海沿革記事」の検討で最も多く議論されてきた課題のひとつである「首領」に関する先行研究を整理する。研究の整理を通じて、これまでの「渤海沿革記事」についての検討は、主要語句に対する分析の不足や、「首領」の議論において王権側に視点を据えている傾向を指摘できる。本章では、当該時代背景のなかで主要語句の意味を追求する作業を行ってみたい。そのうえで、渤海王国前期の在地社会または在地有力者層という視点から当該記事に対する解釈を試みたい。

## 第2節 渤海王国の「首領」に関する先行研究

渤海王国の「首領」に関する先行研究は、すでに何人かの研究者によって整理されている<sup>8</sup>。ここでは、それらに依拠しながら主要な学説を取り上げるとともに、あわせて最近の研究も紹介しておきたい。

渤海王国の「首領」について、はじめて言及したのは、中国の金毓黻である。金は、『渤海国志長編』巻15「職官考」のなかで渤海王国の職官を分類し、首領を雑職の類に入れ、

百姓がすなわち首領で、庶民とは別だとした。そのうえで「首領は庶民の長であり、また庶官の通称である」と指摘し、渤海王国の首領制は金王朝の猛安謀克制の源流である<sup>9</sup>と主張した。ただし、具体的な論証はみあたらない。

金毓猷の議論を引き継いで「首領」を取り上げたのは、日本の瀧川政次郎である。瀧川は、渤海の「首領」を唐制における里正・保長の地位に比定<sup>10</sup>した。この唐制の地方体制との関連性から「首領」を説いた瀧川の説をうけ、新妻利久は、渤海の地方体制を考察する際に、都督、刺史、それに百姓の総称を「首領」であると述べた<sup>11</sup>。

また、北朝鮮の朴時亨も「首領」について言及している。朴によると、土人は高句麗人、百姓は庶民、首領は都督、刺史の下にある階層である<sup>12</sup>と論じた。朴の研究は、後の北朝鮮・韓国と日本の研究に多大な影響を与えたが、土人を高句麗人とみなす点においては多くの中国研究者の反論を受けた<sup>13</sup>。

渤海王国の「首領」に関する理解に大きな役割を果たしたのは、鈴木靖民の渤海「首領制」に関する議論<sup>14</sup>であった。鈴木は先行研究を綿密に検討したうえで、首領を靺鞨諸族の「部落」とよばれる大小地域に割拠する在地首長であるとしたうえで、彼らは旧来の在地支配権をほぼそのまま承認されて、その部落成員たる「百姓」を統属し、かつ彼らを官僚や外交使節にも加担させたと説明した。こうした渤海の国家・社会を特徴づける「首領」の特有のあり方を媒介にした、いわゆる間接支配の体制を「首領制」と呼ぶことを提唱した。

序章の先行研究でも述べた河上洋の「渤海の地方統治体制」論<sup>15</sup>のなかで、河上は、渤海の「首領」についても言及している。河上は「靺鞨人或いは高句麗人の在地の部落長に与えられた官名」であり、さらに、「それらの部落の中心となるような大規模な部落には都督、刺史を中央から派遣してこれらを統括させた」と主張した。

鈴木と河上の影響を受け、「首領」の意味を古代東アジアの視野で考察したのが、大隅晃弘<sup>16</sup>である。大隅は、まず首領の活動を古代東アジア地域というフィールド、特に対唐関係の中で取り上げた。さらに「百姓」を百官とみなし、靺鞨部落を統率していた部落長であると主張した。

石井正敏は、土人を高句麗系靺鞨人（靺鞨系高句麗人）とし、百姓を百官つまり「其下百姓皆曰首領」を「其の下の百姓を、みな首領という」と解釈し、首領を都督・刺史の下で雑務をしている役人であると理解した<sup>17</sup>。

また、古畑徹は『延喜式』の回賜規定にある首領、『内裏式』七日会式にある首領の検討を行い、その結論<sup>18</sup>において「日本の朝廷は公式の立場では、渤海使の首領を六位に叙されるべき品官と同じクラスの範囲に入れて位置づけ、多くの回賜を与えていたのである。」とし、一方、「渤海使の実態論からは使節中の幅広い階層の下級役人が首領の名で一括されていることを推定」した。また「なぜこのような一括した呼称が使われたかを考えると」、それは「首領に対する日本側の公式の立場を認識した上での渤海側の回賜獲得のための戦略という解答が導けるように思える」と指摘した。

森田悌の「首領」に関する二つの論文<sup>19</sup>では、首領を普通の庶民であり、外交の場では雑務を勤めた人だと論証した。

韓国においても、「首領」は地方社会の実態を理解するキーワードとして研究者に注目されてきた。韓国で、はじめて学術的に「首領」を論じたのは金鐘圓<sup>20</sup>である。彼は『類聚国史』の記録を在唐学問僧永忠の見聞録の一部とみなし、高句麗遺民が比較的多い地域では州県制が施行されていたであろうが、靺鞨族が集団で居住する地域では部族制（部族自治制）が施行されていたと論じた。

渤海王国の「首領」の性格を論述した宋基豪<sup>21</sup>は、渤海の地方社会を都督・刺史・県令の地方官―首領―百姓であると仮定した上で、渤海の「首領」は、中央政府から官爵や官品を受けない勢力で、独自性を強く維持していた在地支配者であって、官職体制外にあったと指摘した。

宋基豪の「首領自体は官職体制外」にあるという論点を発展させたのが金東宇<sup>22</sup>である。在地有力者である首領は、本国の官品を持ち中国の官職体系に編入することはできたが、首領自体は官職ではなかったという。その官品を持った「首領」も地方官、官僚、そして遣日の下級随行員の三者に区分でき、宣王大仁秀以後、下級随行員のように地位が下落した理由は、中央の首領は政治制度が次第に整備されるにつれ、「首領」の称号に代わり別の官職名や官爵名で呼ばれ、称号を替えなかった一部の首領は、その独立的活動が以前より制約が加わり、社会的地位も下降したからであるとしている。

この「首領官制外論」と真っ向から異なる論点を持ち出した朴真淑<sup>23</sup>は、首領は靺鞨部族を服属させる過程で現地人である都督と刺史の下に置かれた存在であって、地方民を統治する一定の権利を付与された地方の末端官吏として、都督・刺史及び県丞と同じく、首領もまた中央より任命されたであろうと論じている。

最近、韓国の姜成奉<sup>24</sup>は、渤海首領と高麗辺境地域にあった都領の相関性に注目し、渤海の「首領」は官職を受けたものや受けていないものなど様々に存在していたという理解を示している。

現在の学界における渤海王国の「首領」または「首領制」について、古畑徹が整理<sup>25</sup>した内容を次に紹介する。

首領とは渤海国の支配下に入った靺鞨諸族の在地首長で、渤海王権はその在地首長を解体せず、彼らを包摂してこれを国家的に再編成することによって間接的に人民支配を貫徹し、彼らもその利益のために渤海王権に呼応した。その最たるものが、首領層が従来行ってきた独自の交易利益の保証で、渤海王権は彼らを対外使節団に恒常的に参加させ、対外交易の便宜と安全を供与して懐柔したのであり、靺鞨諸族に対する対外通交の管理こそが国家支配の要諦であった。

上記のように、現在の「首領」に対する見解は、渤海王国またはその王権を主体に据え

た側面を持ち、在地社会の首長層はただ従来の利益確保のために渤海王権に呼応して、その支配体制に組み込まれたというのである。つまり、これまでの研究は、渤海王国の在地社会に対する支配を論じるにあたって、王国側の動向だけに注目し、在地社会の動向はいささか軽視する傾向にあった。渤海王国の建国(698年)後、当該地域に関する文献史料は、そのほとんどが渤海王国の動向を中心に記録されたことに起因するのであろう。

以上、渤海首領に関する主な研究を述べてみた。その争点の中心は「大村日都督、次日刺史、其下百姓皆曰首領」を如何に解説するかにある。石井正敏の整理<sup>26</sup>によると、今日までその読み方は以下の三種類で、意味は五種類ある。

訓読①「其ノ下ヲ、百姓ミナ首領ト曰フ」。

意味 i、都督・刺史より下級の官吏を、百姓たちが首領と呼ぶ

訓読②「其ノ下百姓、ミナ首領ト曰フ」。

意味 ii、都督・刺史のことを、その支配下にある百姓が首領と呼ぶ。

訓読③「其ノ下ノ百姓ヲ、ミナ首領ト曰フ」。

意味 iii、都督・刺史より下級の百姓すなわち役人のことを、みな首領とよぶ。

意味 iv、都督・刺史配下の庶民〔の長〕である百姓を、みな首領とよぶ。

意味 v、都督・刺史配下の庶民である百姓のことを、みな首領とよぶ。

近年、渤海首領の研究方法に対して検討した古畑<sup>27</sup>は、以下の三つの研究視点を提起している。

1. 『類聚国史』渤海沿革関係記事が『日本後記』編纂者が自ら書いた文章であって、そこには編纂者の渤海観あるいは渤海に対する政治的立場が現れる可能性がある。この点を念頭に『類聚国史』渤海沿革関係記事の史料的性格を考えながら内容を読み直すこと。
2. 『類聚国史』渤海沿革関係記事以外の首領関係史料を読み解く場合でも必要であること。
3. 首領関係の諸史料に登場する主要な用語を再検討してみるべきであること。

古畑の研究視点の中で1、2点目に関しては、これまで多くの先学も念頭におきながら研究してきた。とりわけ、石井正敏は、『類聚国史』渤海沿革記事に関して綿密に検討している。しかし、石井が提示<sup>28</sup>した「ハ、中国の正史や古典の知識」という史料解説方法であるが、中国の正史での用例などを整理して、もう詳しく検討する余地があると思われる。

3点目の「主要な用語を再検討する」ことについて、古畑はみずから中国の正史の用例を集めて、「首領」の語義を探究し、その言葉の発展過程の概要を提示した<sup>29</sup>が、ほかの「高麗」、「鞞鞞」など主要な用語に関しては、まだ検討されていない。

### 第3節 『類聚国史』渤海沿革記事主要語句の分析

ここでは、『類聚国史』の「渤海沿革記事」の主要な用語を取り出し、中国正史での用例数を集計することによって、当該記事は果たしてどの正史からもっとも多く影響を受けたかを推論し、またその正史の用例から『類聚国史』渤海沿革記事の解釈を試みたい。さらに、当該作業を行ったうえで、渤海王国の前期における首領の実態に迫ってみたい。

まず、『類聚国史』巻193の「渤海沿革記事」から首領の解釈に関連する用語として「高麗、故地、延表、州県館駅、村里、鞞鞞、百姓、土人、村長、都督、刺史、首領、朝貢不絶」を抽出し、一覧化してみる。

表2-1は、選出した用語を台湾の中央研究院の25史データベースにアクセスし、『史記』から『新唐書』までの各正史における用例数を表にまとめたものである。表の中の数字は、0は用例なし、整数は用例のカウント数を意味している。

表2-1 中国正史での主要用語の用例数

史書と成立	高麗	故地	延表	州県	村里	鞞鞞	百姓	土人	村長	都督	刺史	首領	朝貢不絶
史記 (BC.91年頃)	0	21	1	0	0	0	180	1	0	0	3	1	0
漢書 (82年頃)	0	21	2	0	0	0	297	3	0	1	115	6	0
後漢書 (432年)	0	10	0	3	0	0	330	5	0	1	376	3	0
三国志 (297年以前)	1	2	0	2	0	0	153	1	0	108	258	1	0
晋書 (648年)	0	5	0	2	0	0	588	7	0	717	1407	11	0
魏書 (559年)	169	10	1	2	0	0	238	12	0	841	2968	4	2
宋書 (482-493年)	23	3	0	2	1	0	144	15	1	280	2187	6	0
北齊書 (636年)	9	0	0	4	0	10	31	4	0	278	789	2	1
南齊書 (537年以前)	11	1	0	1	1	0	65	4	1	164	815	0	0
周書 (636年)	3	1	0	4	0	1	61	9	0	522	1018	7	0
梁書 (636年)	14	0	0	0	1	0	84	7	0	198	914	1	0
陳書 (648年)	4	0	0	3	0	0	29	2	0	231	642	0	0
北史 (659年)	198	16	3	39	0	0	306	23	0	809	3382	18	8
南史 (659年)	52	3	0	6	4	0	218	22	0	436	1733	5	0
隋書 (656年)	110	14	2	55	0	23	188	3	0	151	731	12	3
旧唐書 (945年)	216	36	6	237	0	56	566	7	0	1513	3803	173	16
新唐書 (1060年)	218	63	4	331	0	62	228	4	0	1298	4191	125	3

(「漢籍全文資料庫」(中央研究院漢籍電子文獻 <http://hanchi.ihp.sinica.edu.tw/ihp/hanji.htm>、2012年8月10日現在)より筆者集計。)

先に述べたように、『類聚国史』渤海沿革記事は、840年代成立の『日本後紀』の逸文であり、当該記事は773年前後の情報によるものであると考えられる。891年ころ成立の藤原佐世の『日本国見在書目録』の「正史家」<sup>30</sup>によれば、『旧唐書』、『新唐書』の記載がないため、当該記事成立の時点で両唐書そのものを参考にされなかったことは明らかである。しかし、李宗侗の研究<sup>31</sup>によると、『旧唐書』、『新唐書』の「本紀」は、唐代の官撰史料である『起居注』、『実録』などを援用して編纂されたという。『日本国見在書目録』の「雑史家」には、『唐実録』、『高宗実録』、「起居注家」には『大唐起居注』が見える<sup>32</sup>。そのため、『旧唐書』や『新唐書』の「本紀」を編纂する際に参考した原史料を、『日本後紀』の編纂者も参考した可能性が高く、両『唐書』の用例も非常に重要な参考価値があろう。表2-1の「高麗」、「靺鞨」の固有名詞の用例数を見ても、他の正史より多い。そのため、両『唐書』も表2-1に取りあげた。

この表の中で、まず、「高麗」と「靺鞨」の用語に注目してみる。『類聚国史』渤海沿革記事で「高麗」と表記されている点は、注目に値する。「高麗」は、高句麗のことで「高句驪」や「高驪」とも表記されるが、『史記』、『漢書』、『後漢書』、『晋書』以外は、すべて「高麗」と表記されている。「靺鞨」については、先述の鴻臚井碑に「靺鞨」と表記される場合もあるが、「渤海沿革記事」では「靺鞨」と表記されている。『北齊書』、『周書』、『隋書』などでその用例を見ることができる。各史書の扱っている時代や地域の範囲が異なっており、一概には言えないが、「高麗」と「靺鞨」の両用語については、『隋書』との関連性をうかがうことができる。石井正敏は「延表」、「朝貢不絶」などの語に注目し、中国正史の四夷列伝との類似性、特に『隋書』巻82林邑伝との類似性を指摘している<sup>33</sup>が、表2-1での用語の用例数を集計してみると『隋書』そのものが「渤海沿革記事」の作成においてもっとも参考にされた可能性が高いのではないかと推測される。そうであるならば、『隋書』のなかの「土人」や「百姓」はどのような意味で用いられているかを確認する必要がある。

それでは、まず「土人」の用例を確認してみる。「土人」は『隋書』のなかで次の三つの用例しかない。

#### 巻31 地理志下・荊州熙平郡条

屈原以五月望日赴汨羅、土人追至洞庭不見、湖大船小、莫得濟者、乃歌曰：「何由得渡湖。」因爾鼓櫂争帰、競会亭上、習以相伝、為競渡之戲。

#### 巻81 靺鞨伝

皇初、相率遣使貢獻。高祖詔其使曰：「朕聞彼土人庶多能勇捷、今來相見、實副朕懷。朕視爾等如子、爾等宜敬朕如父。」

#### 巻81 流求國伝

歛斯氏、名渴刺兜、不知其由来有国代数也。彼土人呼之為可老羊、妻曰多拔茶。所居曰波羅檀洞。

このうち、『隋書』巻31 地理志の例は春秋時代の屈原に由来する熙平郡の習俗のことを述べていて、この「土人」は汨羅の人の意味で使用されている。ほかの2例の「土人」の



用例は、巻 81 の鞆鞆伝と琉球伝のなかで使われ、「彼土人」と表記しているが、その土地の人という意味では巻 31 と同じである。それでは、日本の史書における「土人」はどのような意味を持っているのだろうか。ここでは、ひとまず、『類聚国史』の「渤海沿革記事」の「土人」も、その土地の人という意味に理解しておきたい。ただ、日本の『田令』には、「凡給田。非其土人、皆不得狭郷受。」とあり、古代日本の給田制度には、その土地の人でなければ、面積が狭い地域では土地を受けられないという規定がある。であるならば、その土人であると、狭郷であろうとあるまいと、国家がもともと在地社会にいた人々に権利を与えられたことになる。つまり、国家より元来の権利を認められた在地にいた人々が「土人」と理解できる。そこで、「土人」を国家より在地での権利を保障されるその地の人であると理解しておきたい。

次に、「百姓」についてであるが、『隋書』における「百姓」の用例数は 188 例にのぼる。ここでは、そのすべてを取り上げるのではなく、「首領」との関連で「百姓」が「官職」と関係があるかどうかを確かめるため、同書巻 26「百官志上」を取り上げたい。同「百官志」には以下の三つの用例がある。

- ①易曰、「天尊地卑、乾坤定矣、卑高既陳、貴賤位矣。」是以聖人法乾坤以作則、因卑高以垂教、設官分職、錫珪胙土。由近以制遠、自中以統外、内則公卿大夫士、外則公侯伯子男。咸所以協和万邦、平章百姓、允釐庶績、式叙彝倫。
- ②諸公已下、台為選置相、掌知百姓事。
- ③郡県官之任代下、有迎新送故之法、餉饋皆百姓出、並以定令。

この百官志の「百姓」の用例①～③をみるかぎり、『隋書』の「百姓」は、「官職」または「台相」、「郡県官」などと対置して用いられている。したがって、「百姓」を「百官」という意味では取れない。そのために、石井正敏の主張する「百姓＝役人」説<sup>34</sup>には疑問が残る。『隋書』が多く参照されたという仮定に立つならば、「百姓」は、やはり百官や役人の意味としてとるわけにはいかない。もちろん、石井は「百姓の語を役人の意味で用いる同時代の例は皆無と言ってよい。」と指摘<sup>35</sup>している。同時に「敢えて可能性を探れば、これまでも百姓＝百官説で、その論拠とされている、中国の古典に見える用語法とする理解である。」としている。さらに、『日本後紀』にも、『尚書』、『莊子』、『老子』、『楚辞』、『易経』、『毛詩』などが引用されていることから、『日本後紀』編者が北狄渤海伝を記す際に、多数の下級役人を表す言葉として、古典で得ている知識としての「百姓」の語を用いた可能性を想定することはできないであろうか」とする。

しかし、石井がいう中国古典のなかでも「百姓」を「百官」として捉えることができない事例もある。例えば、『孝経』天子章には、「子曰：愛親者、不敢惡於人。敬親者、不敢慢於人。愛敬尽於事親、而德教加於百姓、刑於四海。蓋天子之孝也。（子曰く、親を愛する者は敢えて人を悪まず。親を敬う者は敢えて人を慢らず。愛・敬、親に事うるに尽きて而して徳教、百姓に加わり、四海に刑る。蓋し天子の孝なり。）」とある。『孝経』については、

加地伸行によれば、唐の玄宗が『御注孝経』を著し、さらにこの御注に注解を加えたものが「疏」で、唐の元行沖のものに宋の邢昺が手を加えて『孝経正義』を著している<sup>36</sup>。その『孝経正義』で上記の「百姓」についての注釈に「百姓謂天下之人皆有族姓。言百举其多也。」という箇所がある。さらに『尚書』云「平章百姓」。則謂百姓為百官、為下有「黎民」之文、所以百姓非兆庶也。」とある<sup>37</sup>。「百姓」を「百官」の意味で使用する場合には、「黎民」などの語と対になっており、ここであげた「平章百姓」のような場合には百官の意味として使えると書かれている。

また、古代日本の「百姓観」を論じた梅村喬は、「『百姓』は、中国聖王観に基づく王民の意義に起源しつつも、七世紀後半以降、律令的支配体制が成立するに従って、有姓の人民を表示する一般的身分呼称となり、身分概念としての定立を見るのであるが、人民の上に支配力が及ぶのに応じて、課役負担民或いは生産従事者としての意義が強く意識されるようになる。」と<sup>38</sup>している。

以上の百姓の検討をふまえると、「渤海沿革記事」の「百姓」という語は、有姓者と理解するのが妥当であるように思われる。したがって、大隅の「百姓を百官」という説<sup>39</sup>や、または石井や森田がいう下級「役人」である説<sup>40</sup>には従いがたい。朴時亨や鈴木などがいう「百姓」即「庶民」という理解<sup>41</sup>も、渤海の靺鞨社会と関連する当該記事に限っては妥当ではないと思われる。むしろ金毓黻がいう「百姓は庶民と別」であるという指摘<sup>42</sup>が注目される。とはいえ、金は何の具体的な論証もしていないのが問題である。したがって、ここでは靺鞨あるいは渤海での百姓について後にもう少し検討することにしたい。

以上、『類聚国史』渤海沿革記事は『隋書』を多く参考したという所説をふまえて検討してきた。ここで明らかにしたのは、土人は「その土地の人」、百姓は有姓の被支配者であるという2点である。それでは、次に「其百姓者靺鞨多、土人少。皆以土人為村長、大村曰都督、次曰刺史、其下百姓皆曰首領。」の記事を別の文献史料を手かがりしながら検討してみよう。

#### 第4節 渤海王国の前期中における首領の解釈

中国古典の文章構造からいうと、「渤海沿革記事」の「其下百姓皆曰首領」は、古畑が明確に指摘したように「その下の百姓＝首領」である<sup>43</sup>。また当該記事の前段の部分を「その百姓たるもの靺鞨多く、土人少なし。みな土人を以て村長となし、大村（の村長）は都督といい、次の（村の村長）を刺史という」と読むことは問題ないだろう。

以下においては、「其下百姓皆曰首領」をもう少し明らかにするために、「渤海沿革記事」以外の文献史料を手かがり次に3点について議論したい。

第一に、渤海王国の「百姓」とはいかなるものであるか、第二に、靺鞨の在地社会はいかなる構造をしていたのか、第三に、渤海王国の前期中に靺鞨社会をどのように取りこんでいたのかという三点である。

## 第1項 渤海王国の「百姓」

「百姓」については、上記したように「有姓者」であると考えたい。ここでは、渤海の姓に言及している『松漠紀聞』をとりあげてみたい。その巻上には、

其（渤海）王旧以大為姓。右姓曰、高、張、楊、竇<sup>44</sup>、烏、李、不過數種。部曲・奴婢・無姓者皆從其主。

（その（渤海）王はもと大を以て姓となす。右姓に高、張、楊、竇、烏、李と曰い、數種に過ぎず。部曲・奴婢・無姓者はみなその主に従う。）

という記事が見られる。『松漠紀聞』は南宋の洪皓が金（1115年～1234年）の風俗・習慣を記述した見聞録を紹興年間（1131年～1162年）に刊行したものである<sup>45</sup>。渤海より時代が離れ、中国南方の漢人の視点からの記述であることから、その信憑性が問われるが、関連史料が乏しい中、直接渤海の故地に赴いて記録した史料である以上、渤海人の姓氏に関する記録に限ると一定の信頼度があるといえよう<sup>46</sup>。それによると、渤海時代にはあらゆる人が姓を持っていたわけではなく、部曲・奴婢・無姓者は、姓を持っている主人に従属していたことが分かる。上の右姓の高、張、楊、竇、烏、李の6姓のほかに、今日文献史料に残っている渤海の姓には次のような50の姓がある<sup>47</sup>。

〔賀、晋〕、王、任、馬、馮、呂、裴、崔、已、慕、郭、木、史、辛、解、趙、劉、朱、衛、呉、洪、林、申、夏、梁、羅、文、安、朴、胥、茹、卯、門、隱、周、列、公、多、聿、受、智、壹、葱、古、阿、達、冒、謁、〔渤海〕<sup>48</sup>。

したがって、現在する文献史料で確認できる渤海の姓は、王家の大氏を含めて57姓に及んでいる。その他の姓があるかも知れないが、今のところ確認できる史料はない。

渤海の姓氏について、王成国によれば、「渤海人の姓氏の構造は、まず渤海王族の大氏、その次は中原から流れた漢族の豪族右姓、さらに元の靺鞨と一部の高句麗貴族の右姓、最後に漢化した靺鞨平民と高麗平民と中原からながれた漢族平民の庶姓からなっている」と<sup>49</sup>いう。中原漢族平民が渤海に流入したかどうかの史料がないため、確定はできないが、渤海の姓氏は靺鞨、高句麗、漢族の姓氏からなることは確認できる。さらに、碁中明は、渤海の人の名を一つは「姓+名」と、もう一つは「音訳の名字」と捉え、そのうち、公伯計、多蒙固、葱勿雅などの名を靺鞨人の音訳名としている<sup>50</sup>。後期になると、靺鞨人特有の姓名は消え、中国風の姓名へと統一されるという。また、渤海人の名前には、形容美、叡智への祈願、徳性美への追求、福祿寿への憧憬、儒学・仏教への尊崇があるとし、渤海の中国地方民族政権としての位置づけを行っている。

王、碁両者の研究には、渤海の姓氏を高句麗、靺鞨、中国風の姓氏に分けている点で首肯できる。筆者は渤海王国の「百姓」とは、これらの有姓者をさすものと考えている。ここで、靺鞨の音訳の姓が問題になる。それはさておき、ひとまずここでは、金毓黻氏の『渤

海国志長編』巻 16「族俗考」で「公伯計、多蒙固」の姓を「公」、「多」としたように名前の「首一字」を持って姓としたと考えておきたい<sup>51</sup>。

## 第2項 渤海王国の靺鞨部落

次に、渤海沿革記事に「みな靺鞨部落なり、その百姓たるもの靺鞨多く」と記された「靺鞨」と「部落」について見てみる。中国正史のなかで、はじめて靺鞨伝を設けているのは『隋書』である。その巻 81 には靺鞨の社会状況を以下のように述べている。

靺鞨、在高麗之北。邑落俱有酋長、不相總一。凡有七種。其一號粟末部、與高麗相接。勝兵數千、多驍武、每寇高麗中。其二曰伯咄部、在粟末之北。勝兵七千。其三曰安車骨部、在伯咄東北。其四曰挹婁部、在伯咄東。其五曰號室部、在拂涅東。其六曰黑水部、在安車骨西北。其七曰白山部、在粟末東南。勝兵並不過三千、而黑水部尤為勁健。自拂涅以東、矢皆石鏃、即古之肅慎氏也。所居多依山水。渠帥曰大莫弗瞞咄。東夷中為強國。

(靺鞨は、高麗の北にあり。邑落に俱に酋長ありて相い總一せず。凡そ七種あり。其の一は粟末部と号し、高麗と相い接す。勝兵数千、多く驍武にして毎に高麗中を寇す。其の二は伯咄部と曰い、粟末の北にあり。勝兵七千。其の三は安車骨部と曰い、伯咄の東北にあり。其の四は挹婁部と曰い、伯咄の東にあり。其の五は号室部と曰い、拂涅の東にあり。其の六は黒水部と曰い、安車骨の西北にあり。其の七は白山部と曰い、粟末の東南にある。勝兵並びに三千に過ぎず、而して黒水部尤も勁健なり。拂涅より以東、矢は皆石鏃、即ち古の肅慎氏なり。居るところは多く山水に依る。渠帥は大莫弗瞞咄と曰う。東夷の中で強國となる。)

また『新唐書』巻 219 黒水靺鞨伝の七部の記事も、上の『隋書』の七部の記事を踏襲している<sup>52</sup>が、若干異なる箇所がある。

黒水靺鞨居肅慎地。亦曰挹婁、元魏時曰勿吉。直京師東北六千里、東瀕海、西属突厥、南高麗、北室韋。離為數十部、酋各自治。〔中略〕部間遠者三四百里、近二百里。〔中略〕唯黒水完強、分十六落。

(黒水靺鞨は肅慎地に居る。また挹婁と曰い、元魏の時は勿吉と曰う。京師の東北六千里に直し、東は海に瀕み、西は突厥に属し、南は高麗、北は室韋である。離れて数十部たり、酋おのおの自ら治む。〔中略〕部の間遠き者は三四百里、近きは二百里。〔中略〕ただ黒水のみ完強にて、十六落に分かる。)

上記の『隋書』靺鞨伝と『新唐書』黒水靺鞨伝を総合して靺鞨の社会構成を考えてみると、まず、「粟末部、伯咄部、安車骨部、挹婁部、号室部、黒水部、白山部」という七つの大きい部に分かれており、通常これらを「粟末靺鞨」や「黒水靺鞨」のように何々靺鞨と呼んでいる。それぞれの靺鞨は、さらに数十部に分かれており、その下に人々が集まって

暮らす村落または邑落があつて、その酋長（『隋書』には「酋長」、『新唐書』には「酋」）がそれぞれ独立して治めていたのである。そのうち黒水部の場合は 16 落に分かれていたとされる。

このうち粟末靺鞨については、『太平寰宇記』巻 71「河北道燕州」条に引用されている「(隋)北蕃風俗記」に次のようにある。

初、開皇中、粟末靺鞨與高麗戰不勝、有厥稽部渠長突地稽者。率忽使來部、窟突使部、悅稽蒙部、越羽部、歩護頼部、破奚部、歩歩括利部、凡八部、勝兵数千人、自扶余城西北挙部落向関内附、処之柳城。乃燕郡之北。

(初め、開皇中、粟末靺鞨と高麗戦い勝たず、厥稽部渠長の突地稽なる者あり。忽使來部・窟突使部・悅稽蒙部・越羽部・歩護頼部・破奚部・歩歩括利部、凡そ八部、勝兵数千人を率いて、扶余城の西北より部落を挙げ関に向い内附し、これを柳城に処らしむ。乃ち燕郡之北なり。)

ここには、7 世紀初めごろ、粟末靺鞨の一部が高句麗に敗れて、そのうちの厥稽部の首長である突地稽が、そのほかの 7 部（忽使來部・窟突使部・悅稽蒙部・越羽部・歩護頼部・破奚部・歩歩括利部）の部民数千人を率いて唐に内附してきたと記されている。

さらに、隋・唐に内附した粟末靺鞨以外に、『新唐書』巻 219 渤海伝に「渤海は、もと粟末靺鞨が高麗に附した者で、姓は大氏である。」とあり、『旧唐書』巻 199 渤海靺鞨伝にも「高麗すでに滅び、その家属を率いて営州に徙居す」とあるように、高句麗が滅びるまで現地に残った部族集団も存在していた。粟末靺鞨が厳密にいくつかの部から構成されていたかは詳らかではないが、以上から少なくとも 9 部が存在していたことになるだろう。なお、これらの史料で使用されている「部」字には、黒水靺鞨や粟末靺鞨などの種族をさす場合と、各種族を構成する下部の組織（氏族）をさす場合の二つの用法があることを確認しておきたい。ここでは、このことを念頭において論を進めたい。

以上の『隋書』、『新唐書』、『太平寰宇記』の引用史料から、靺鞨の社会構成は、およそ黒水靺鞨や粟末靺鞨などのように 7 種族（7 部）の靺鞨に分かれており、各種の靺鞨の下に部があり、この部の下に落があつたようである。さらに、部と落における首領の地位を示す史料も存在する。『旧唐書』巻 199 下靺鞨伝に、以下のように記されている。

開元十三年、安東都護薛泰請於黒水靺鞨内置黒水軍。統更以最大部落為黒水府、仍以其首領為都督、諸部刺史隸屬焉。中国置長史、就其部落監領之。

(開元十三年、安東都護薛泰、黒水靺鞨内に黒水軍置くを請う。続いて更に、最大部落を以て黒水府と為す。仍りて其の首領を以て都督と為す。諸部刺史これに隸属す。中国、長史を置き其の部落に就きて之を監領す。)

これは、黒水靺鞨の最大部落の首領を都督に任命し、諸部（そのほかの部落）の首領を

刺史に任命して都督に隷属させ、中国の長史がこれらの部落（実際はその首領）を監領したというものである。すなわち、これを上記『隋書』以下の史料と照らし合わせると、黒水靺鞨は、諸部にわかれ、最大の部落の首領または酋長が都督に、そのほか部落の首領または酋長が刺史に任命されたことがうかがえる。各種の靺鞨は、「部」という単位で構成されており、部はさらに「落」という社会単位から構成されていた。この「落」が人の集まり居するところの村里にあたるのではないかと思われる。この「落」あるいは「邑落」ごとに酋（酋長）が存在していた。つまり、いくつかの「落」が「部」を構成し、いくつかの「部」が一種の靺鞨を構成していたと考えられる。

たとえば、粟末靺鞨という種族の場合、厥稽部をはじめとする諸部から構成されたと記されており、黒水靺鞨の部の下に「落」があったように、粟末靺鞨の各部の場合も、その部の下には上記「渤海沿革記事」に「村里」と見える「落」が存在したと考えられる。また、この「落」の中では同じく「百姓」と記される有姓者が部曲や奴婢・無姓者を率いていたと推測される。

### 第3項 渤海王国と在地社会—靺鞨の統合を中心に—

698年に建国された渤海は、その支配を進めるにあたってまさに上記のような各種の靺鞨在地社会の部、落から構成される社会に直面したのである。領土の拡張に伴って、これらの部・落の長、つまり、「酋」をいかに統合するかが政権運営の課題になったと考えられる。『類聚国史』「渤海沿革記事」の「その国、延袤二千里、州県・館駅無し。処々に村里有り、皆靺鞨部落なり。その百姓たるもの靺鞨多く、土人少なし。みな土人を以て村長となす。大村の村長を都督といい、次なるものを刺史という。その下の百姓（有姓者）をみな首領という」とは、まさに渤海前期の府州制のような地方制度が整っていない社会構造を如実に反映しているといえよう。

『旧唐書』巻199 渤海靺鞨伝には、「祚榮と靺鞨乞四比羽おのおの亡命を領して東奔す。〔中略〕祚榮、驍勇にして善く兵を用う。靺鞨の衆および高麗余燼、やや之に帰す。聖曆中、自ら立ちて振国王となす。」と記録されている。振国、つまり、初期の渤海王国は唐の内乱の隙間にできた一亡命政権であった。靺鞨の部落民と高麗の遺民が帰属していくなかで、地方社会の統治体制を構築していったのである。したがって州県・館駅は初めの頃は整えられておらず、まさに処々に村里＝落があるという状態であった。その村里はみな靺鞨の落であった。それぞれの落に居住する有姓者は、靺鞨人が多く、土人が少なかった。

次に、ここでいう渤海の「土人」とはいかなるものであったかを考えてみる。その実態に関して議論は多岐に分かれている。どのような解釈があるかは、石井正敏による詳細な紹介と論点整理があり、参考<sup>53</sup>になる。ちなみに、石井は「高句麗人（靺鞨系高句麗人または高句麗系靺鞨人）」だと主張している。また、濱田耕策はあえて「渤海人」だ<sup>54</sup>とする。石井説はみずから提唱している「渤海の高句麗継承意識」説と関係がある。つまり、渤海が日本に来た時、自らをかつての強国「高句麗」の後継国であると標榜したという説であ

る<sup>55</sup>。渤海王やその使節は自国の優位性を保つため、「高句麗」を標榜したことに異論はない。しかし、『日本後紀』成立の時点まで、付表4 (pp.188~189) でわかるように、20 数回にも及ぶ渤海との交渉のうち、日本も渤海と高句麗の相違は認識していたはずである。むしろそれを認識していたからこそ、「高句麗人」もしくは「高麗人」と書かずに、「土人」と書いたのだと思われる。一方、濱田の「渤海人」説には従いがたい。靺鞨人も渤海の支配下にあるので、なぜ靺鞨と渤海を区別したかの説明がつかないからである。上記の『隋書』の用例でも確認したように、「土人」を「その土地の人」と理解するのが妥当である。ここでは、ひとまず渤海王国と直接的な支配関係を持っていた渤海領域内の人々を「土人」とあると考えたい<sup>56</sup>。つまり、前節でも述べたように、国家より在地での地位を保障され、その地に居住した「土人」だと理解できるならば、「土人」は国家と緊密な関係を持っている在地の人々であろう。渤海王国は、諸種族の在地社会を統合する過程において、各地にある百姓である有姓者（土人を含む）に、在来の権利を認めた。一方、各地の有姓者は在来の権利を認められたことにより在地有力者の地位を確保できたのではないかと想像される。この「土人」と対になる表現が「靺鞨」であろう。第1章の引用文献史料 (pp.25~26) では「渤海」と「靺鞨」が対に出現しているが、この「渤海沿革記事」は渤海に関する説明なので、「渤海」を使わず「土人」を使用したのであろう。つまり、「渤海沿革記事」では、「靺鞨」を種族的な意味として捉えるのではなく、渤海王国の王権と直接的な支配関係を持たない人々を指すのではないかと考える。部や落の形で集合されていた「靺鞨」と呼ばれる百姓＝有姓者は、土人の有姓者が村長を務める下位組織の位置におかれ、渤海王国の間接的な支配体制（いわゆる羈縻体制）に組み込まれたのではないかとと思われる。

『新唐書』巻219渤海伝には、「子武芸立、斥大土宇、東北諸夷畏臣之（子武芸立つ。土宇を斥き大とし、東北の諸夷畏れてこれに臣す。）」とある。渤海王国は、第二代王の大武芸の時代に東北の諸族を服属させていた。渤海王権に服属していた東北の靺鞨の部や落の有姓者のなかで大きな村里の長（「土人」）を都督に、次なる村里の長（「土人」）を刺史に任命し、その下の落レベルの有姓者（「土人」と「靺鞨人」）をみな「首領」と呼んだものと思われる。おそらく、唐による異民族支配の方法である羈縻支配に倣って、渤海は高句麗と靺鞨の部落のなかで王権に服属した有力者（首長層、「土人」）のうちから都督や刺史を任命したのであろう。

『類聚国史』の「渤海沿革記事」は、渤海と交流があった日本の史料である以上、その内容が伝聞であったとしても、そこに見える都督、刺史、首領は、渤海王権が与えた職名であった可能性が高い。渤海王権は、おそらくは一定の基準にもとづき、大きな靺鞨部落（村里）を統率する「土人」の酋に「都督」を、次なる規模の靺鞨部落（村里）を統率する「土人」の酋に「刺史」の官職を与え、その下に存在した部落の「土人」と「靺鞨人」の「百姓」、つまり有姓者に「首領」の職を与えたのではないかとと思われる。すなわち、渤海王権が樹立された当初に統合された在地社会は、数多くの「落」の酋が「百姓」（有姓者）として存在しており、彼らを「首領」と呼んだのである。彼らは在地社会の有力者であり、

渤海王国の前期における領域拡張で、内附と臣属、もしくは征服によって渤海の支配層として編入されていったように思われる。こうしたなかで、これらの在地社会における有力者が唐や日本への外交使節としても活動した。

これまで、「首領」、「百姓」などの用語について、錯綜した議論が多くなされてきた。「首領」が「百姓」であるという前提の下で、「百姓」とは姓を持っている各落の酋長と理解すると、『類聚国史』『渤海沿革記事』は渤海政権樹立当初の靺鞨社会の状況と合致するように思われる。その後、渤海の地方行政制度が完備されるのにしたがって、大村は府に、次村は州に編成されたものと考えられる。『新唐書』巻 219 渤海伝に示された行政区画がつけられるようになり、地方制度をはじめとする渤海の諸制度が整備されることによって、各部や落の有力者に与えられた「首領」の職も、やがては渤海の地方社会体制のなかに組み込まれていった。

先行研究からうかがえるように、渤海の「首領」に対する解釈は多岐にわたって錯綜している。近年、『類聚国史』巻 193「渤海沿革記事」を中心とする基礎史料の再検討がなされ、優れた研究が蓄積されつつある<sup>57</sup>。そのなかですでに古畑が提起<sup>58</sup>しているように、「首領」の問題を解決するためには、「首領」ばかりを対象に検討するのではなく、この記事の中のほかの重要語句もあわせて検討すべきであると考えられる。本章では、「首領」の解釈に関係する「百姓」や「土人」を検討するため、中国正史から用例を集めた。その検討の結果、石井のいう『隋書』の用語が「渤海沿革記事」に多く参照されていたことを再確認した。そのうえで、「百姓」、「土人」の用語を解釈し、当該記事に登場する渤海の「首領」は、靺鞨各部の下にある落に存在した有姓者の「靺鞨人」と「土人」であると考えた。一方、都督の職に任じられたのは、靺鞨部落のうちで大村の村長（「土人」の酋長）で、刺史はそれに次ぐ規模の村里の村長（「土人」の酋長）であると考えられる。これら官職は、渤海王国によって与えられたものであり、前期の渤海王国は、こうした都督・刺史・首領に任命された在地社会の有力者層によるそれぞれの部落民への支配秩序を温存したまま地方支配を進めていったように思われる。それは、まさしく唐による羈縻支配の模倣にほかならないであろう。

本章では、『類聚国史』『渤海沿革記事』にもとづく渤海王国前期の「首領」を中心に検討をおこなった。「首領」の語についていえば、これ以降の時代の唐や日本の史料にも渤海王国の「首領」の語が認められるので、全渤海時代を通して「首領」の果たした歴史的意義を検討する必要がある。したがって、首領もしくは首領制は、渤海の多民族支配の有り方を検討する上で重要な用語であるばかりでなく、渤海以降の諸政権による多民族支配を検討するうえでも重要な語であると考えられる。



## 注

- 1 瀧川政次郎「日・渤海官制の比較」（『建国大学研究院期報』1、1941年、p.29）、和田清「渤海国地理考」（『東亜史研究（満洲篇）』東洋文庫、1955年、p.112）、金鐘圓「渤海の首領について—地方統治制度と関連して—」（『渤海史研究論選集』白山文化、1989年、p.279、初出『全海宗博士華甲記念 史学論叢』1979年）。
- 2 石井正敏「神亀四年、渤海の日本通交開始とその事情—第一回渤海国書の検討—」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、初出1975年）。
- 3 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、pp.106～161、初出1996年）。
- 4 鈴木靖民「渤海の国家と対外交流」（『東アジアの渤海と日本』景仁文化社、2008年、pp.79～80）。
- 5 赤羽目匡由「八世紀における渤海の高句麗継承意識を巡って」（『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011年、pp.236～240）。
- 6 石井正敏「日唐交通と渤海」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、pp.518～519、初出1976年）。
- 7 森安孝夫「渤海から契丹へ—征服王朝の成立—」（『東アジア世界における日本古代史講座』7、学生社、1982年、pp.71～96）。
- 鈴木靖民「渤海の首領に関する基礎的研究」（『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年、pp.433～481、初出1979年）。
- 8 注7の鈴木論文、同「渤海国家の構造と特質—首領・生産・交易—」（『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、pp.292～326、初出1999年）。
- 鈴木靖民「渤海の首領制—渤海の社会と地方支配—」（『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、pp.327～335、初出1985年）。
- 9 金毓黻「職官考」（『渤海国志長編』巻15、1934年）。
- 10 瀧川政次郎「日・渤海官制の比較」（『建国大学研究院期報』1、1941年）。
- 11 新妻利久『渤海国史及び日本との国交史の研究』（東京電気大学出版局、1969年）。
- 12 朴時亨「渤海史研究のために」（『渤海文化』雄山閣、1979年）。
- 13 中国研究者の中でも一部の研究者の間で「土人＝高句麗人」説がみられる（嚴聖欽「渤海国是我国少数民族建国的一个地方政權」『高句麗渤海研究論文集成』4 哈爾濱出版社、1997年、p.473、初出『社会科学輯刊』1981年2期）が、多くの研究者は反対している。朴時亨の議論に対し、もっとも典型的な反論は孫進己であり、土人を渤海族とみている（孫進己「渤海民族的形成發展過程」『東北民族史研究1』中州古籍出版社、1994年、pp.296～297）。これらの詳細な整理は石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、pp.118～126、初出1996年）参照。最近、中国での研究として、土人を粟末靺鞨人とみているものがある（楊軍「渤海“土人”新解」『渤海国民族構成与分布研究』吉林人民出版社、2007年、p.40）。
- 14 鈴木靖民「渤海の首領に関する基礎的研究」（『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年1月、pp.433～481、初出1979年）。
- 鈴木靖民「渤海国家の構造と特質—首領・生産・交易—」（『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、pp.292～326、初出1999年）。
- 鈴木靖民「渤海の首領制—渤海の社会と地方支配—」（『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、pp.327～335、初出1985年）。
- 15 河上洋「渤海の地方統治体制—一つの試論として—」（『東洋史研究』42（2）、1983年、pp.1～25）。
- 16 大隅晃弘「渤海の首領制—渤海国家と東アジア世界」（『新潟史学』17、1984年10月、pp.110～129）。
- 17 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、初出1996年）。
- 18 古畑徹「渤海の首領研究の方法をめぐって—解明のための予備的考察」（『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年）。
- 19 森田悌「渤海の首領について」（『弘前大学国史研究』94、1993年）。
- 森田悌「渤海首領考」（『延喜式研究』15、1998年）。
- 20 金鐘圓「渤海の首領について—地方統治制度と関連して—」（『渤海史研究論選集』白山文化、1989年、pp.273～284、初出『全海宗博士華甲記念 史学論叢』1979年）。
- 21 宋基豪「渤海首領の性格」（『渤海社会文化史研究』2011年、初出1997年）。
- 22 金東宇「渤海首領の概念と実像」（『東垣学術論文集』7、2005年）。
- 23 朴真淑「渤海の地方編成と領域」（『渤海5京と領域変遷』東北亜歴史財団2007年）。
- 24 姜成奉「渤海首領と高麗都領の相関性の検討」（『高句麗渤海研究』42、2012年）。

- 25 古畑徹「唐代「首領」語義考—中国正史の用例を中心に—」（『東洋史論集』11、2007年、p.23）。
- 26 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、初出1996年、pp.137~138）。
- 27 古畑徹「渤海の首領研究の方法をめぐって—解明のための予備的考察」（『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年、pp.215~216）。
- 28 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、pp.106~161、初出1996年）。
- 29 古畑徹は、首領語義の発展過程のアウトラインについて以下のようにまとめている。
- ①、「首領」の本義は「アタマとクビ」であり、五世紀頃までにここから「ある集団の指導者・統率者」の意味が派生した。この場合、編者（話者）が「他者」と認識した側の集団の指導者・統率者というニュアンスを持っている。
- ②、異民族集団の長を「首領」と表現する用法は、六世紀後半の北周あたりから登場し、当初は比較的小さな集団の長に使用された。
- ③、唐代になると「首領」は異民族集団の長の意味で一般化するが、唐初は「渠帥」「酋豪」などの類似用語が存在した。その後「首領」がこれらの語に卓越するようになり、八世紀には、異民族集団の長を表す用語は「首領」にほぼ一本化された。
- ④、唐代の蕃望四等に対応し、「小首領」が蕃望五等に対応することが規定されたことにより、「大首領」は蕃望四等を意味する制度的な用語として機能するようになり、「首領」という表現の中にも「小首領」の「小」が省かれた用語が含まれるようになったと見られる。「首領」が他の用語より優越になったのも、蕃望規定にこの語が使用されたからと見られる。
- ⑤、唐代において、異民族集団の長を意味する「首領」に含まれる範囲は、大きな異民族集団の長である王・君長の下ランクからかなり小さな集団の長まで、大きな幅があった。
- また、古畑氏の重要な指摘は、唐代の半ばには、「首領」が官職的に授けられるようになる一步手前だということである。古畑徹「唐代「首領」語義考—中国正史の用例を中心に—」（『東洋史論集』11、2007年3月、p.23~24）。
- 30 矢島玄亮『日本国見在書目録:集証と研究』（汲古書院、1984年、pp.84~89）。
- 31 李宗侗『中国史学史』（中国友誼出版公司、1984年、p.91）
- 32 注30のpp.94~95。
- 33 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、pp.106~161、初出1996年）。
- 34 同上、pp.140~144。
- 35 同上、p.143。
- 36 加地伸行「『孝経正義』三卷」（『孝経』（全訳注）講談社、2007年、p.188）
- 37 この部分は『尚書』堯典の「克明俊德、以親九族。九族既睦、平章百姓。百姓昭明、協和萬邦。黎民於變時雍。」である。
- 38 梅村喬「古代百姓観の展開」（『愛知県立大学文学部論集.一般教育編』通号33、1983年、p.8）。
- 39 大隅晃弘「渤海の首領制—渤海国家と東アジア世界」（『新潟史学』17、1984年10月、p.110~129）。
- 40 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」（『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、初出1996年、pp.106~161）。
- 森田悌「渤海の首領について」（『弘前大学国史研究』94、1993年）。
- 41 朴時亨「渤海史研究のために」（『渤海文化』雄山閣、1979年）。
- 鈴木靖民「渤海の首領に関する基礎的研究」（『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年1月、初出1979年）。
- 42 金毓黻「職官考」（『渤海国志長編』巻19、1934年）。
- 43 古畑徹「渤海の首領研究の方法をめぐって—解明のための予備的考察」（『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年、p.215）。
- 44 「竇」について、金毓黻は渤海の人物と遺民の中で「竇」その存在を疑っており、「賀」の誤りではないかとしている。金毓黻「族俗考」（『渤海国志長編』巻16、1934年）。
- 45 外山軍治「洪皓と松漠紀聞」（『愛泉女子短期大学紀要』12・13号、1978年3月、pp.57~76）。
- 46 桜井俊郎「渤海の有力姓氏と中央官制」『歴史研究』33、1995年3月、pp.5~6）。
- 47 朱国忱・魏国忠・郝慶雲『渤海国史』（中国社会科学出版社、2006年、p.415）。
- 48 [ ]を付した部分は筆者が補った部分。朱国忱・魏国忠・郝慶雲『渤海国史』（中国社会科学出版社、2006年、p.415）では渤海の右姓のほかに49姓があると書かれているが、47姓をあげている。金毓黻「族俗考」（『渤海国志長編』巻16、1934年）の「庶姓条」を参考にすると、「賀」氏と「渤海」氏が漏れていた。なお、「渤海」氏についてであるが、『遼史』巻15 聖宗本紀と巻115 高麗伝に「（聖宗統

和) 二十八 (1010) 年十一月、高麗禮部郎中渤海陀失來降。」とある。

- 49 王成国「唐代渤海国姓氏研究」(『北方論叢』192、2005年第4期、p.100)。
- 50 碁中明「唐代渤海人名及其文化内涵」(『北方文物』2012年第2期、pp.47~50)。
- 51 百姓を有姓者とみなすには、まださまざまな問題が問われる。たとへば、靺鞨社会の中の一般の人々には果たして姓があったかどうか、靺鞨の人々はどのようにして姓を持つようになったかの問題がある。前者に関しては、史料の制限があり、議論しにくい、古代北東アジア世界には『松漠紀聞』で記された「無姓者」の存在が多数ではなかったかと思う。後者に関しては、渤海の建国者の大祚榮は大氏であるが、父である乞乞仲象は姓があったとは言えない。開元十六年、黒水靺鞨の最大部落の首領は唐より李姓を賜り、獻誠と名付けられた。この粟末靺鞨と黒水靺鞨の例を見る限りもともと在地社会の人々は姓を持っておらず、唐などの影響を受けて姓を持つようになったのではないかと思われる。いまのところ、靺鞨の姓は、靺鞨の「落」の名前または「落の首領」の名前ではないかとも理解している。中原の影響を受け、姓を一字にする傾向があったかもしれない。
- 52 『新唐書』卷 219 黒水靺鞨伝：  
黒水靺鞨居肅慎地，亦曰挹婁，元魏時曰勿吉。直京師東北六千里，東瀕海，西屬突厥，南高麗，北室韋。離為數十部，曾各自治。其著者曰粟末部，居最南，抵太白山，亦曰徒太山，與高麗接，依粟末水以居，水源於山西，北注它漏河；稍東北曰汨咄部；又次曰安居骨部；益東曰拂涅部；居骨之西北曰黒水部；粟末之東曰白山部。部間遠者三四百里，近二百里。…唯黒水完強，分十六落，以南北稱，蓋其居最北方者也。人勁健，善步戰，常能患它部。
- 53 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討」(『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、pp.106~161、初出1996年)。
- 54 濱田耕策「日本の渤海史認識」(『渤海の歴史と文化』校倉書房、2009年、p.417)。
- 55 石井正敏「神亀四年、渤海の日本通交開始とその事情—第一回渤海国書の検討—」(『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、p.274、初出1975年)。
- 56 楊軍は、粟末靺鞨人だといわれる李謹行の墓誌をとりあげ、粟末靺鞨人は自称「涑沫」だという。「土」と「涑沫」の音が近いことから、「土人」を粟末靺鞨人とみなしている。楊軍「渤海“土人”新解」(『渤海国民族構成与分布研究』吉林人民出版社、2007年、p.40)。
- 57 鈴木靖民をはじめ、濱田耕策、石井正敏、古畑徹、金東宇などの研究は、渤海の首領の検討において、諸関連史料を丹念に検討しながらそれぞれの首領論を展開した優れた研究である。
- 58 古畑徹「渤海の首領研究の方法をめぐって—解明のための予備的考察」(『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年、pp.210~225)。

### 第3章 渤海王国の後期における在地社会の有力者層

第2章でとりあげた渤海王国の「首領」と有姓者に関連する史料に、宮内庁書陵部所蔵の古文書「渤海王国中台省牒謄本（写本）」（図3-1）がある。正式には宮内庁書陵部所蔵壬生家文書『古往來消息雑々』所収「渤海国中台省牒」という。この文書は、渤海王国の中台省から平安時代の日本の太政官に宛てたもので、渤海王国の「咸和十一年」（841、承和8年）の紀年を有するが、一筆で書かれ押印がないこと及び書体からみて、平安末期から鎌倉初期の謄本（写本）と見なされている。

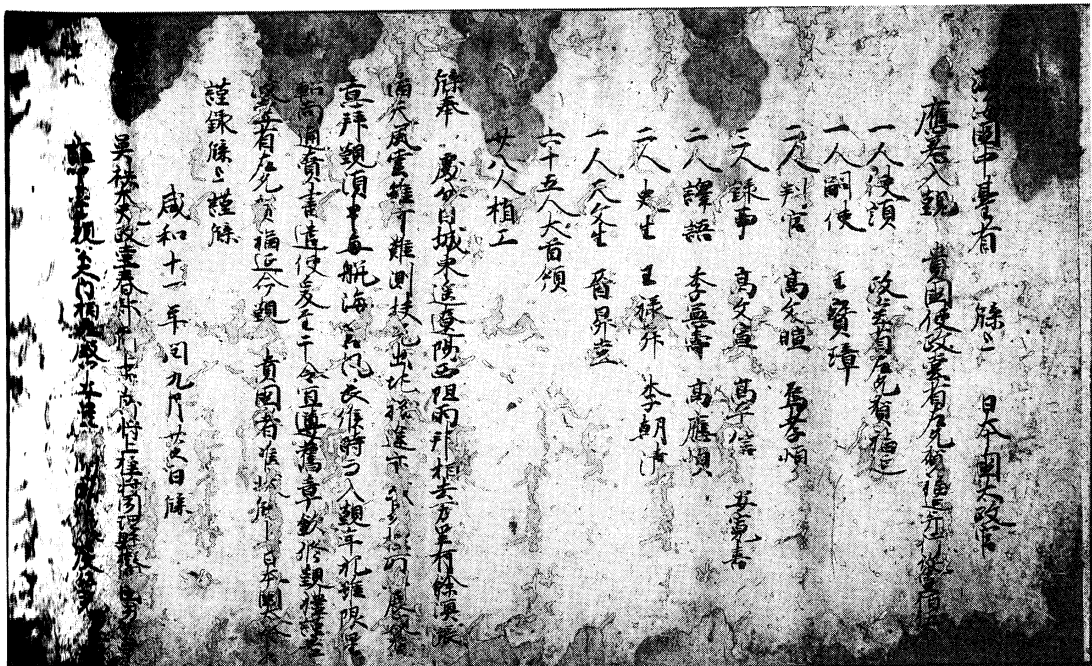


図3-1 咸和十一年渤海王国中台省牒謄本（写本）

#### 第1節 咸和十一年渤海王国中台省牒に関する先行研究

この牒の主文は、すでに『続日本後紀』や『類聚国史』に収められており、特に目新しい史料ではない。この史料については、これまで以下のような研究がなされてきた。

1958年に、三上次男は朝鮮と日本文化史の概説書のなかで「咸和十一年渤海王国中台省牒謄本（写本）」（以下、「中台省牒」と略す）を写真とともに紹介<sup>2</sup>した。ついで渤海王国と日本との国交史のなかで中台省牒を位置付けたのは新妻利久<sup>3</sup>である。新妻は中台省牒を「義は君臣、情は父子、あるいは兄弟の関係に立つ儀礼を強要する理由が薄弱となり、自然に渤海国の態度を承認せざるを得なくなり、太政官の牒状を送って上下の関係に立つ単なる善隣国交を自認するに至ったのである。」と結論付けている。

そのほか、唐代の東アジアの文書形式から研究し、中台省牒は日渤海両国の交流の初期より、遣使に際して持参すべき必須の国家間の文書であったと解してよいだらうと述べたのが中村裕一<sup>4</sup>である。また、中台省牒の釈文、性格、完備までの経緯およびその謄本（写し）の伝世などについて基礎的検討を行った酒寄雅志の本格的な研究<sup>5</sup>もある。

中国で中台省牒を紹介したのは王承礼である。この研究のなかで、在地社会との関係で注目される指摘は、「65 人大首領は渤海 62 州に三つの独奏州を加えた計 65 州の地方勢力の代表である。したがって渤海王国は京府州県制度を施行する一方で、地方では首領制を施行したということである。」という点<sup>6</sup>である。

最近、日本では堀井佳代子が中台省牒に関する研究を行い、以下のような結論<sup>7</sup>を出している。

- ①渤海の発給する中台省牒は、使節の身分確認、中央への報告、食料の支給を行うために、到着地の国司が参照する実務的文書で、延暦十八（799）年には存在し、宝亀二（771）年の渤海使の単独来朝および人数増加を契機に必要なが生じた。また、遣外使節のもたらず実務的文書は、渤海一唐間でも使用されている。
- ②省牒の返信として発給される太政官牒は、承和九（842）年から使用され、違例の指摘や年期遵守の要請を載せ、国書を補完した。この前提として弘仁七（816）年以降、「国書で違例の指摘をしない」という原則が成立している。
- ③年期制が定められても、渤海はかつての通交と国家間の礼儀とを強調し、年期違反を行う。国書では渤海の主張を容認し、太政官の主張の引用と官牒とで渤海を責め、役割分担がある。また、礼を強調する渤海に対し、国書で強い態度は取れない。

これまでの研究では、中台省牒を渤海王国と日本国の外交関係のなかで位置づけて来た。特に、日本側の立場から中台省牒の出現時期、省牒完備の時期、さらに日本国での外交上の必要から、中台省牒の提出は嵯峨・淳和朝の「律令制の再建」と関連する事などが明らかにされてきた。また、渤海王国側から大首領 65 人が派遣されたことは、渤海王国は在地社会を懐柔する目的から、首領たちを対日外交の場へ行かせたと指摘<sup>8</sup>されてきた。しかし、渤海王国のどのような時代状況のもとに中台省牒が出されるようになったか、さらに、どのような在地社会の有力者層との状況と関連して中台省牒が発給されるようになったかについては、これまであまり議論されてこなかったように思える。

そこで、この第3章では、まず中台省牒をとりあげ、さらに渤海王国後期の在地社会とその有力者層について検討したい。

## 第2節 咸和十一年渤海王国中台省牒の釈文

酒寄雅志と中村裕一の研究によると、釈文は次のページのようになる。

渤海国中台省 牒上 日本国太政官

応差入覲 貴国使政堂省左允賀福延（并）行従人壹佰伍人

一人使頭 政堂省左允賀福延

一人嗣使 王宝璋

二人判官 高文暄 鳥孝順（慎）

三人録事 高文宣 高平信 安寛喜

二人訳語 季（李）憲寿 高応順（慎）

二人史生 王禄昇 李朝清

一人天文生 晋昇堂

六十五人大首領

廿八人梢工

牒奉 処分、日城（城）東遥、遼陽西阻、兩邦相去、万里有余、溟漲

滔天、風雲雖可難測、扶光出地、程途亦域易標、所以展親旧

意、拜覲須申、每航海以占風、長候時而入覲、年祀雖限、星

輶尚通、寶書遣使、爰至于令宜遵旧章欽修覲礼、謹差

政堂省左允賀福延、命覲 貴国者、准状牒上日本国太政官者、

謹祿牒上、謹牒。

咸和十一年閏九月廿五日牒

吳秩大夫政堂春部卿上中郎桂将聞理県擬開国男賀守

謙中台親公大内相兼殿中安豊県開国公大度日光（晃）

この釈文についていくつかの点にふれておきたい。まず、ここに記された使節団の構成員として、使頭（大使）である賀福延、嗣使（副使）である王宝璋に加えて、判官の高文暄、鳥孝順（慎）<sup>9</sup>、録事の高文宣、高平信、安寛喜、訳語の季<sup>10</sup>憲寿、高応順（慎）、史生の王禄昇、李朝清、天文生の晋昇堂の姓名が見えている。ほかに姓名は記されていないが、大首領 65 人、梢工 28 人とある。つまり、この使節団には、「賀、王、高、鳥、安、季、李、晋」の姓をもつ人物が認められ、これを第 2 章で示した渤海の姓に比べると、新たに「季、晋」の二姓が加わっている。

なお、首領については「六十五人大首領」（65 人の大首領）と記されているが、これについては、次の節で渤海の対外記事を加えて詳細に見ていきたい。

次に、「日城東遥、遼陽西阻」について、謄本では「城」となっているが、酒寄雅志は、貞観元（859）年に来日した鳥孝慎のもたらした中台省牒に「日域遐邦」とあり、また貞観 13（871）年に来日した楊成規が携帯した中台省牒にも「日域程遥」とあることから、「日域云々」というのが常套句であった<sup>11</sup>と述べている。対句である「遼陽西阻」とあわせて考えると、遼陽が唐の境域だとするならば、「日域」は日本のことではないかと思われる。渤海王国が唐と日本の間にあると主張していることが伺えるだけでなく、唐の遼陽地域と渤海王国の領域が接していたことが分かる。

また、「吳秩大夫政堂春部卿上中郎桂将聞理県擬開国男賀守／謙中台親公大内相兼殿中安豊県開国公大度日光（晃）」とあり、賀守でその行は終わっているが、これは次の行の冒頭の「謙」字とつながるはずである。というのは、1965 年に中国北京市の徳勝門から発見された『渤海国記』（827～835 年成立）の著者、張建章の「張建章墓誌」があり、<sup>12</sup>そこに「渤

海国王大彝震遣司賓卿賀守謙来聘」と書かれていることから、この中台省牒の賀守謙と同一人物であると考えられる。この賀守謙は、対日、対唐外交に重役を担っていたと思われる。

### 第3節 渤海王国の後期における在地社会の有力者の動向

この咸和 11 年の中台省牒以外に、表 3-1 で示したように渤海王国から日本に送られた中台省牒はすべて 10 回確認できる。この咸和 11 年の中台省牒は、日本の承和 8 (841) 年に渤海で作成され、承和 9 (842) 年渤海から伝達を受けたので、表 3-1 の No.24 にあたる。また、はじめての牒は天平宝字三 (759) 年のものである。そして、約 70 年後の天長 5 (828) 年から延暦 20 (919) 年まで 90 余年間の 9 回の遣日本使節はすべて中台省牒を携帯している。また使節団の構成人数が百人前後に確定されたのも天長 5 年の使節派遣からである。くわえて大首領も 65 人前後に確定したのもこの時期である。

表 3-1 日本に伝達された渤海王国の中台省牒一覧表 (注 7 pp.2~3 の表 1 に筆者加筆)

No.	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	※	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35
神亀五	天平十二	天平宝字五	天平宝字三①	天平宝字三②	天平宝字三③	宝龟三	宝龟四	宝龟八	宝龟十年①	宝龟十年②	延暦五	延暦十五	延暦十七	延暦十七	大同四	弘仁元	弘仁六	弘仁九年カ	弘仁十	弘仁十二	弘仁十四	天長三	天長五	承和九	嘉祥二	貞観元	貞観三	貞観十四	元慶元	元慶六	寛平四	寛平六	延喜八	延喜二十	延長八	
七二八	七四〇	七五三	七五九	七五九	七六二	七七二	七七三	七七七	七七七	七七九	七九六	七九八	七九八	七九八	八〇九	八一〇	八一五	八一八	八一九	八二一	八二三	八二六	八二八	八四二	八四二	八四九	八六一	八七二	八七二	八八二	八八二	八九二	九〇八	九一九	九二九	
王啓	王啓	表文	表	表	表	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓	王啓
△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒	中台省牒
渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海	渤海

こうした使節団の構成員のうち 65 人前後とされた大首領とは、渤海王国の在地社会とどのような関連があるだろうか。まず、渤海王国からの遣日本使節が中台省牒を定期的に携帯するようになる時期は、表 1-1 の渤海王国と諸種族との関係からみた時期区分からいえば、後期の第二段階にあたるであろう。その時期は、渤海王国が在地社会を統合し、国家的支配体制を整えた時期である。この時期に 65 人の大首領が定期的に遣日本使節団に加わったことは渤海王国による在地社会の有力者層に対する統制と関係があると思われる。

表 3-2 は、渤海王国と靺鞨諸種族の対唐朝貢記事を整理したものである。この表をみると開元元 (713) 年に「靺鞨王子」が朝貢したと記している。しかし、「王子」とあることから見て渤海王国のことであろうと思われる。ここでは「靺鞨」と記していることが注目される。No.2 以下 No.11 までの記事には靺鞨諸種族の名前が出てくるが、No.38 までの開元年間の記事の傾向をみると、そのほかの「靺鞨」と同じように「渤海靺鞨」と見えている。

ところが、No.39 から No.96 までは「渤海靺鞨」とは読み取れず、「渤海」と「靺鞨」とは別々に記されており、さらに No.97 から No.118 まででは「靺鞨」は見えず、渤海王国だけの朝貢記事がみえる。その後、No.119 から No.126 までの間では靺鞨の一つである「黒水」の朝貢記事が再び見えてくる。

渤海王国の中台省牒が日本に定期的に携帯されてきたのは、「靺鞨」による唐王朝遣使の記事が見えない時期に当たる。それは、渤海王国の在地社会つまり靺鞨社会が独自の対外活動ができなくなったと時期と重なっている。つまり、渤海王国は在地社会に以前より強力な支配力を行使し、対唐、対日外交の場に首領を同行させたと見なすことができる。対日本外交に現れる 65 人の首領が定期的に来航したことは、渤海王国が在地社会を統合した関係を表している。一方、対唐外交において、渤海の「首領」に関する記事を見いだすことができない。その要因は、表 3-2 でうかがうことができる。それは No.38 の開元年間の『冊府元龜』の朝貢・褒異の記事まで、首領や王子など使節の身分や姓名が比較的詳細に記載されている。ところが、No.39 以降の朝貢・褒異の記事は簡略化されており、複数国の来朝を一つの記事にまとめる傾向が認められる。そのため、渤海王国が唐との外交活動に帯同した在地社会の有力者層が存在していたとしても記載されていない可能性が高いであろう。したがって対唐外交における首領の存在は定かではない。しかしながら、靺鞨などの呼称も認められなくなり、そのことは対日本外交の記事の場合も同じである。

第 1 章で行った時期区分と合わせて考えると、後期の第二段階において、渤海王国は北部の黒水靺鞨を征服することにより、靺鞨のほとんど在地社会を統合していたことで、唐などの外部からは、靺鞨を含めた地域を「渤海」と認識されたものと思われる。このように靺鞨の在地社会を領域内に統合した時期は、渤海王国が「海東の盛国」といわれた時期と重なる。

表 3-2 渤海王国と靺鞨諸種族の唐への朝貢記事一覧表

No.	年 月	記 事	出典
1	開元元(713)年十二月	靺鞨王子来朝。奏曰、臣請就市交易、入寺禮拜。許之。	冊朝 4
2	開元二(714)年二月	是月、拂涅靺鞨首領失異蒙、越喜大首領烏施可蒙、鉄利部落大首領闡許離等来朝。	冊朝 4
3	開元二(714)年閏十二月	東蕃遠蕃靺鞨部落、拂涅部落皆遣大首領来朝。	冊朝 4
4	開元五(717)年三月	拂涅靺鞨遣使獻方物。	冊朝 4
5	開元五(717)年五月	靺鞨獻方物。	冊朝 4
6	開元六(717)年二月	靺鞨鉄利〔靺か〕鞨、〔拂か〕涅蕃守並遣使来朝。	冊朝 4
7	開元七(719)年正月	拂涅靺鞨、鉄利靺鞨、越喜靺鞨並遣使来朝。	冊朝 4
8	開元七(719)年二月	拂涅靺鞨遣使獻方物	冊朝 4
9	開元七(719)年八月	大拂涅靺鞨遣使獻鯨鯢魚睛、貂鼠皮、白兔猫皮。	冊朝 4
10	開元九(721)年十一月	渤海郡靺鞨大首領、鉄利大首領、拂涅大首領、放還蕃。	冊朝 4
11	開元十(722)年十月	越喜遣首領茂利蒙来朝、獻方物。	冊朝 4
12	開元十(722)年十一月	渤海遣其大臣味勃計来朝、並獻鷹。	冊朝 4
13	開元十二(724)年二月	渤海靺鞨遣其臣賀作慶来賀正、賜帛五十匹、放還蕃。	冊朝 4
14	開元十二(724)年十二月	越喜靺鞨遣使破支蒙来賀正、并獻方物。	冊朝 4



No.	年 月	記 事	出典
15	開元十三(725)年正月	渤海遣大首領烏借芝蒙、黑水靺鞨遣其將五郎子並來賀正、且獻方物。	冊朝 4
16	開元十四(726)年十一月	渤海靺鞨王遣其子義信來朝、并獻方物。	冊朝 4
17	開元十四(726)年十一月	渤海靺鞨遣其子義信來朝、并獻方物。	旧本紀
18	開元十五(727)年八月	渤海王遣其弟大寶方來朝。	冊朝 4
19	開元十七(729)年二月	渤海靺鞨遣使獻鷹。是月、渤海靺鞨遣使獻鯔魚。	冊朝 4
20	開元十八(730)年正月	靺鞨遣其弟大郎雅來朝賀正、獻方物。	冊朝 4
21	開元十八(730)年二月	渤海靺鞨大首領遣使知蒙來朝、並獻方物、馬三十匹。	冊朝 4
22	開元十八(730)年五月	渤海靺鞨遣使烏那達初來朝、獻海豹皮五張、貂鼠皮三張、瑪瑙盃一、馬三十匹。黑水靺鞨遣使阿布科思來朝獻方物。	冊朝 4
23	開元十八(730)年九月	靺鞨遣使朝貢。	冊朝 4
24	開元十九(731)年二月	渤海靺鞨遣使來賀正。	冊朝 4
25	開元十九(731)年十月	渤海靺鞨王遣其姓大取珍 等百二十〔人〕來朝。	冊朝 4
26	開元二三(735)年三月	渤海靺鞨王遣其弟蕃來朝。	冊朝 4
27	開元二三(735)年八月	鉄利部落、拂涅部落、越喜部落俱遣使來朝獻方物。	冊朝 4
28	開元二四(736)年九月	越喜靺鞨遣使獻方物	冊朝 4
29	開元二五(737)年正月	渤海靺鞨大首領木智蒙來朝。	冊朝 4
30	開元二五(737)年四月	渤海遣其臣公伯計來獻鷹鶻。	冊朝 4
31	開元二六(738)年閏八月	渤海靺鞨遣使獻貂鼠皮一千張、乾文魚一百口。	冊朝 4
32	開元二十七(739)年二月	渤海王遣使獻鷹。又拂涅靺鞨遣使獻方物。	冊朝 4
33	開元二十七(739)十月	渤海遣使其臣受福子來謝恩。	冊朝 4
34	開元二十八(740)年二月	越喜靺鞨遣其臣野古利來獻方物。鉄利靺鞨遣其臣綿度戸來獻方物。	冊朝 4
35	開元二十八(740)十月	渤海靺鞨遣使獻貂鼠皮、昆布。	冊朝 4
36	開元二十九(741)二月	渤海靺鞨遣其臣失阿利、越喜靺鞨遣其部落與含利、黑水靺鞨遣其臣阿布利稽。	冊朝 4
37	開元二十九(741)三月	拂涅靺鞨遣首領那弃勃、來朝賀正且獻方物。	冊朝 4
38	開元二十九(741)四月	渤海靺鞨遣使進鷹及鶻。	冊朝 4
39	天寶五載(746)年三月	渤海遣使來賀正。	冊朝 4
40	天寶六載(747)年正月	渤海、黑水靺鞨並遣使來賀正、各獻方物。	冊朝 4
41	天寶七載(748)年三月	黑水靺鞨、黃頭室韋、和解室韋、如者室韋、賂丹室韋並遣使獻金銀及六十、綜布、魚牙紬、朝霞紬、牛黃、頭髮、人參。	冊朝 4
42	天寶八載(749)年三月	渤海遣使獻鷹。	冊朝 4
43	天寶九載(750)年正月	黑水靺鞨、黃頭室韋並遣使賀正。	冊朝 4
44	天寶九載(750)年三月	渤海遣使獻鷹。	冊朝 4
45	天寶十二載(753)年三月	渤海遣使賀正。	冊朝 4
46	天寶十三載(754)年正月	渤海遣使賀正。	冊朝 4
47	大曆二(767)年七月	渤海遣使來朝。	冊朝 5
48	大曆二(767)年八月九日	渤海朝貢。	旧本紀
49	大曆二(767)年八月	渤海、契丹各遣使朝貢。	冊朝 5
50	大曆二(767)年九月	靺鞨、渤海、室韋各遣使朝貢。	冊朝 5
51	大曆二(767)年十一月	渤海、迴紇、吐蕃各遣使朝貢。	冊朝 5
52	大曆二(767)年十二月	迴紇、渤海、契丹、室韋等國各遣使朝貢。	冊朝 5
53	大曆四(769)年三月	渤海、靺鞨並遣使朝貢。	冊朝 5
54	大曆四(769)年十二月	迴紇、吐蕃、契丹、奚、室韋、渤海、訶陵並遣使朝貢。	冊朝 5

No.	年 月	記 事	出典
55	大曆七(772)年十二月	迴紇、吐蕃、大食、渤海、室韋、靺鞨、契丹、奚、牂牁、康國、米國、九姓等各遣使朝貢。	冊朝 5
56	大曆七(772)年	迴紇、吐蕃、大食、渤海、室韋、靺鞨、契丹、奚、牂牁、康國、石國並遣使朝貢。	日本紀
57	大曆八(773)年四月	渤海遣使來朝、並獻方物。	冊朝 5
58	大曆八(773)年六月	渤海遣使賀正、新羅遣使謝恩、並引見於延英殿。	冊朝 5
59	大曆八(773)年十一月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
60	大曆八(773)年閏十一月	渤海、室韋並遣使來朝。	冊朝 5
61	大曆八(773)年十二月	渤海、室韋、牂牁並遣使來朝、奚、契丹、渤海靺鞨、並遣使朝貢。	冊朝 5
62	大曆九(774)年正月	室韋、渤海並來朝。	冊朝 5
63	大曆九(774)年十二月	奚、契丹、渤海、室韋、靺鞨遣使來朝。	冊朝 5
64	大曆十(775)年正月	渤海、契丹、奚、室韋、靺鞨、新羅各遣使朝貢。	冊朝 5
65	大曆十(775)年五月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
66	大曆十(775)年六月	新羅、渤海各遣使朝貢。	冊朝 5
67	大曆十(775)年十二月	渤海、奚、契丹、室韋、靺鞨各遣使朝貢。	冊朝 5
68	大曆十二(776)年正月	渤海遣使來朝、并獻日本國舞女一十一人及方物。	冊朝 5
69	大曆十二(776)年二月	渤海遣使獻鷹。	冊朝 5
70	大曆十二(776)年四月	牂牁、渤海、奚、契丹、室韋、靺鞨並遣使來朝、各獻方物。	冊朝 5
71	大曆十二(776)年十二月	新羅、渤海、靺鞨、室韋、奚、契丹並遣使來朝、各獻方物。	冊朝 5
72	大曆十三(776)年正月八日	渤海使獻日本國舞女十一人。	日本紀
73	建中元(780)年十月	渤海並遣使朝貢。	冊朝 5
74	建中三(782)年五月	渤海國並遣使朝貢。	冊朝 5
75	貞元七(791)年正月	迴鶻大首領史勃羨、渤海、黑衣大食並遣使來朝。	冊朝 5
76	貞元八(792)年閏十二月	靺鞨遣使朝貢。	冊朝 5
77	貞元十八(802)年正月	是月、南詔使來朝、虞婁、越喜等首欽〔領の本もある〕見。	冊朝 5
78	貞元二十(804)年十一月	渤海遣使來朝。	冊朝 5
79	元和元(806)年十二月	迴鶻、契丹、渤海、牂牁、南詔、驃國、各遣使朝貢。	冊朝 5
80	元和二(807)年十二月二十七日	新羅、渤海、牂牁、迴紇各遣使朝貢。	日本紀
81	元和二(807)年十二月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
82	元和二(807)年	是歲、吐蕃、迴紇、奚、契丹、渤海、牂牁、南詔並朝貢。	日本紀
83	元和五(810)年正月	渤海遣使高才南等來朝。	冊朝 5
84	元和五(810)年十一月	渤海王遣子大延真等來獻方物。	冊朝 5
85	元和七(812)年	是年、渤海亦遣使來、南詔遣使朝貢。	冊朝 5
86	元和八(813)年十二月	渤海王子辛文德等九十七人來朝。	冊朝 5
87	元和九(814)年正月	渤海使高禮進等三十七人朝貢、獻金銀佛像各一。	冊朝 5
88	元和九(814)年十一月	渤海遣使獻鷹鶻。	冊朝 5
89	元和九(814)年十二月	渤海遣使大孝眞等五十九人來朝。	冊朝 5
90	元和十(815)年二月	黑水酋長十一人來朝貢。	冊朝 5
91	元和十(815)年七月	渤海王子大庭俊等一百一人來朝貢。	冊朝 5
92	元和十(815)年	是歲、渤海、新羅、奚、契丹、黑水、南詔、牂牁並遣使朝貢。	日本紀
93	元和十一(816)年三月	渤海、靺鞨並遣使朝貢。	冊朝 5
94	元和十一(816)年十一月	契丹、渤海、並遣使朝貢。	冊朝 5
95	元和十一(816)年	是歲、迴鶻、靺鞨、奚、契丹、牂牁、渤海等朝貢。	日本紀
96	元和十二(817)年二月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
97	元和十三(818)年	是歲、渤海、高麗、吐蕃、奚、契丹並朝貢。	日本紀

No.	年 月	記 事	出典
98	元和十五(820)年閏正月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
99	元和十五(820)年十二月	渤海復遣使朝貢。	冊朝 5
100	長慶二(822)年正月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
101	長慶四(824)年二月二日	渤海送備宿衛大聰叡等五十人入朝。	旧本紀
102	宝曆二(826)年正月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
103	太和元(827)年四月	渤海遣使来朝。	冊朝 5
104	太和三(829)年十二月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
105	太和四(830)年十二月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
106	太和五(831)年十一月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
107	太和六(832)年三月	渤海王子大明俊来朝。	冊朝 5
108	太和七(833)年正月	渤海王遣使朝同中書右平章事高嘗英来謝策命。	冊朝 5
109	太和七(833)年二月二十一日	麟德殿對吐蕃、渤海、牂柯、昆明等使。	旧本紀
110	開成元(836)年十二月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
111	開成四(839)年十二月戊辰	渤海王子大延広朝貢。	冊朝 5
112	会昌六(846)年正月	渤海使朝于宣政殿。	冊朝 5
113	会昌六(846)年正月十七日	南詔、契丹、室韋、渤海、牂柯、昆明等國遣使入朝、對于麟德殿。	旧本紀
114	会昌六(846)年正月二十三日	渤海王子大之萼入朝。	旧本紀
115	梁開平三(909)年三月	渤海王大諲譔遣其相大誠諤朝貢、進兒女口及物、貂鼠皮、熊皮等。	冊朝 5
116	乾化元(911)年八月	渤海国遣使朝賀且獻方物。	冊朝 5
117	乾化二(912)年五月	渤海国王大諲譔遣使姪讓貢方物。	冊朝 5
118	乾化三(913)年二月	渤海国王大諲譔遣使裴璆貢人参、松子、昆布、黄明細布、貂鼠皮被一、褥六、髮、靴、革、奴子二。	冊朝 5
119	乾化三(913)年五月	黑水胡、独鹿、女貞等使朝貢、契丹阿保機遣使拽鹿孟貢方物。	冊朝 5
120	天成元(926)年四月	渤海国王大諲譔遣使大陳林等一百一十六人朝貢、進兒口、女口各三人、人参、昆布、白附子及虎皮等。	冊朝 5
121	天成四(929)年五月	渤海遣使高正詞入朝貢方物。	冊朝 5
122	天成四(929)年八月	黑水遣使骨至来朝、兼貢方物。	冊朝 5
123	長興元(930)年二月	黑水兀兒遣使貢方物。	冊朝 5
124	長興二(931)年十二月	渤海使文成角来朝貢。	冊朝 5
125	長興三(932)年正月	渤海遣使朝貢。	冊朝 5
126	応順二(934)年十一月	渤海遣使列周義入朝貢方物。	冊朝 5

(冊朝 4 は、『冊府元龜』卷 971・外臣部・朝貢 4 の略称。冊朝 5 は、『冊府元龜』卷 972・外臣部・朝貢 5 の略称。旧本紀は、『旧唐書』本紀の略称。なお、冊朝と旧本紀の記事が重複すると思われる記事は、55 と 56、80 と 81 と 82、90 と 91 と 92 である。この表は主に朝貢記事を整理し、確実な年月があるのを優先したため、冊朝と旧本紀の記事の記事を主に整理した。)

ところで、渤海王国の中台省牒が後期第二段階における在地社会に対する完全な支配を示すとするならば、表 3-1 の No.119 から No.126 までの朝貢記事は後期第三段階における在地社会の独自活動を示すものであると先に述べた。渤海王国後期を通して在地社会の動向を示す具体的な文献史料はほとんどないといってよい。ここでは、『遼史』や『高麗史』に散見される文献史料からこの時期の渤海王国支配下の在地社会の動向にふれておきたい。

この時期にふれた『遼史』巻二の天頭元年(926)2月条については、第1章第1節の渤海

王国の衰退期の行論においてすでに取りあげた。ここでは、渤海王国の滅亡後、安邊などの府の節度使や刺史が契丹に朝貢した。第2章で分析したように、渤海王国の在地社会は、都督、刺史、首領などの有力者層による支配体制を温存していた。渤海王国の在地社会への統合力が弱まるにつれて、在地社会は、都督などの有力者を中心に独自に活動を行ったと思われる。くわえて、在地社会の黒水靺鞨なども朝貢を開始していた。靺鞨などの在地社会が渤海王国の支配下でも部族としてのまとまりを失わず存続していたことを示しており、それゆえ直ちに契丹への朝貢活動が可能になったと思われる。そのような渤海王国の後期第三段階、すなわち衰退期における在地社会の動向を示す史料として、『遼史』以外に、『三国史記』と『高麗史』に次のような記事がある。

- ①『三国史記』卷一二・新羅本紀一二・景明王五（921）年  
二月、靺鞨別部達姑衆、来寇北辺。
- ②『高麗史』卷九二・列伝五・王順式附尹瑄  
尹瑄、塩州人、為人沈勇、〔中略〕召黒水蕃衆、久為辺郡害。
- ③『高麗史』卷一・世家一・太祖一  
四（921）年春二月甲子、黒水酋長高子羅、率百七十人来投。
- ④『高麗史』卷一・世家一・太祖一  
（四〈921〉年）夏四月乙酉、黒水阿於間、率二百人来投。

上の四つの記事で、①、③、④は、921年に靺鞨の別部達姑及び黒水靺鞨の記事であるが、①は、新羅の北辺に来寇したこと、③、④は、黒水靺鞨の酋長である高子羅、阿於間がそれぞれ170人と200人を連れて高麗に投降したことを示している。②の記事は、尹瑄の事績に関連する記事であるが、「黒水蕃衆」を召して高麗の辺境の郡を害していたことを表している。

渤海王国が衰退期に入った後期第三段階において、その上層部でも内紛がおこっていたようで、高麗への投稿の記事がいくつか確認できる。たとえば、『高麗史』卷一・世家一・太祖一には、「八（925）年春秋九月丙申、渤海將軍申徳等五百人来投」とあり、滅亡に向かう渤海王国は混乱していただけでなく、在地社会に目を向けることができなくなっていたと思われる。

ここまで、文献史料を手がかりにして渤海王国の在地社会を検討してきた。

まず、渤海王国と諸種族との関係から、とりわけ黒水靺鞨の征服を指標として渤海王国の歴史を前期と後期に分けた。さらに、前期は高句麗と南部の靺鞨の統合及び北部の靺鞨の統合を指標として3段階に、後期は黒水靺鞨の征服と自立した活動を指標として3段階に分けた。

渤海王国の前期においては、『類聚国史』「渤海沿革記事」を中心に検討し、在地社会の部、落の「百姓」（有姓者）について検討し、渤海王国支配下の在地社会の有力者層の存在を論述した。その結果として、渤海王国の在地社会における首領もまた各地における有姓者のことであると結論づけた。渤海王国は、こうした「土人」もしくは「靺鞨人」の有姓

者、つまり、在地社会の有力者を都督、刺史もしくは首領に任じ、靺鞨部落を間接的に統治したものと考えられる。いいかえれば、部落社会は、こうした有力者を中心にそのまま温存されたと推測される。

渤海王国の後期については、中台省牒を検討して渤海王国の在地社会の有力者層に対する統合の状況を探ろうとした。ここには渤海王国の対日派遣使節の構成員として参加する大首領 65 人が認められた。このように定期的に派遣される日本への使節団に加えられていた複数の大首領は、その詳細は不明であるが、渤海王国による在地社会の有力者層を取りこむための方策のひとつであったと考えてよいだろう。後期については在地社会の動向について検討すべき個別の史料は見つかっていない。しかしながら、きわめて断片的ではあるが、『高麗史』などの記事から在地社会の状況をうかがい知ることができ、おそらくは前期と同様、自立した在地社会有力者層が温存されていたと推測される。とはいえ、文献史料からは個別の在地社会の様相を詳細に検討することができない。すなわち、在地社会における有力者層の検討においては史料的制約があり、「首領」に関するささやかな検討を試みる以上の成果をあげることはできなかった。

そこで、次の第 2 部の各章で、文献史料が少ない渤海王国の在地社会について、さらに検討を試みるために、考古学資料を取りあげて検討してみたい。

## 注

- 1 中村裕一「渤海国咸和十一年中台省牒に就いて—古代東アジア国際文書の一形式—」（唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、1979年8月、pp.423～454）。
- 2 三上次男「朝鮮との関係」（『図説日本文化史大系』4、平安時代 上、小学館、1958年、p.106）。
- 3 新妻利久「国書と使節」（『渤海国史及び日本との国交史の研究』東京電機大学出版局、1969年、p.263）。
- 4 中村注 1。
- 5 酒寄雅志「渤海中台省牒の基礎的研究」、「渤海中台省牒の位置について」（『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、pp.253～288）。
- 6 王承礼「記唐代渤海国咸和十一年中台省致日本太政官牒」（『北方文物』1988年第3期、pp.26～29）、同『中国東北的渤海与東北亜』（吉林文史出版社、2000年、pp.311～315）。
- 7 堀井佳代子「対渤海外交における太政官牒の成立—中台省牒との相違から—」（『日本歴史』(744)、吉川弘文館、2010年5月、pp.1～18）。渤海王国中台省牒の研究には、ほかに田島公「海外との交渉」（『古文書の語る日本史』二、筑摩書房、1991年）がある。
- 8 鈴木靖民「渤海の首領に関する基礎的研究」（『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年、pp.460～462。初出 1979年）、李成市『東アジアの王権と交易』（青木書店、2001年、pp.147～148）。などでも言及されている。
- 9 中村裕一は『続日本後紀』嘉祥 2（848）年 5 月の条に、来日の王文矩一行に加わっている少判官の高応順と同一人物ではないかと指摘している。中村注 1 の p.425。
- 10 写真を見るかぎり、「季憲寿」の「季」は「李」ともみられるが、「李」とする場合、史生である「李朝清」の「李」と明らかに異なる。そのため、「季」とするのが無難であると思われる。
- 11 酒寄注 4 の p.260。
- 12 佟柱臣「『渤海記』著者張建章『墓志』考」（『黒龍江文物叢刊』1981年第6期、pp.16～22、p.88）。

## 第 2 部 考古学資料からみた渤海王国の社会と国家

## 第2部 考古学資料からみた渤海王国の社会と国家

第2部においては、渤海王国における国家と社会、とりわけ在地社会の動向に迫るため、第4章～第8章にわたって考古学資料を分析対象として考察を行いたい。ここでは考古学資料のうち墳墓群資料を中心に検討を進めることにしたい。なぜなら、墳墓群資料には当該在地社会の地域的あるいは文化的状況が反映されていると考えられるからであり、とりわけ渤海王国前期と後期の典型的な墳墓群を中心に、中央から離れた辺境の地に営まれた墳墓群をくわえ、比較しながら分析を進めることにしたい。さらに、王室墓と非王室墓を比較し、在地社会の墳墓様式、埋葬様相を浮き彫りにすることを通じて、在地社会の一端に触れてみたい。

### 第4章 渤海王国の考古学資料

これまで検討してきたことから、渤海王国における在地社会、とりわけ、有力者層に関する研究は、考古学資料の検討が必要である。本章においては、渤海王国に関する考古学資料の状況を確認しておきたい。さらに、考古学資料のうち、渤海王国の在地社会をもっともよく伺えるのは、墳墓群資料と考え、本章では先に墳墓群資料を分析するための指標を説明しておく。

#### 第1節 渤海王国に関連する遺跡

渤海王国と関連する遺跡は、中国、ロシア、北朝鮮の三か国に散在している。中国においては、主に黒龍江省南部、吉林省東部、遼寧省北部、ロシアにおいては、主に沿海州南部、北朝鮮においては、咸鏡南北道に渤海遺跡が存在している。渤海時代の地名でいうと、旧国、中京顕徳府、上京龍泉府、東京龍源府、南京南海府などの都の周辺より当時の遺跡が発見されている。現在の水系からいうと、牡丹江、図們江、第2松花江、綏芬河などの水系に集中している<sup>1</sup>。

小嶋芳孝によると、現在までの渤海遺跡の数は、中国で534カ所、ロシアで約200カ所であり、北朝鮮の遺跡数は定かではないが、咸鏡南北道には遺跡が相当数存在し、したがって、中国、ロシア、北朝鮮を合わせると、現時点で約800カ所の渤海遺跡が確認されていると推定されている<sup>2</sup>。

渤海王国の遺跡に対する考古学発掘調査は、戦前の日本の考古学者によって始められた。東京帝国大学の原田淑人が代表を務めた東亜考古学会は1933年、1934年の二回に渡って上京龍泉府に対する考古学調査を行った。その調査成果は報告書『東京城』にまとめられ、1939年に刊行された。前の「先行研究」でもふれたように、この報告書の刊行には様々な思惑があったにもかかわらず、初めて渤海の都城遺跡に対し体系的な考古学発掘調査を行

い、その調査成果を本格的な報告書として上梓した。これは渤海の考古学研究においては先駆的な意味を持つ。1937年、鳥山喜一と藤田亮策は、間島省（現在の吉林省延辺朝鮮族自治州の一部）の遺跡に対する調査を行った。とりわけ注目されるのは中京顕徳府と見なされる西古城とその周辺に立地する北大古墳群に対する調査である。その成果は、1942年に刊行された『満洲国古蹟古物調査報告書（三）間島省の古蹟』（満洲国国務院文教部編）に見られる。また、1941年、斎藤優は東京龍源府と比定される半拉城と周辺の密江墳墓群および寺院遺跡を調査し、その成果は1978年に刊行された『半拉城と他の史蹟』（半拉城址刊行会）に見られる。

以上の戦前の日本の研究者による考古学調査を確認すると、かつて渤海が都をおいた上京龍泉府、中京顕徳府、東京龍源府を中心に、その考古学調査が行われていたことがわかる。これは後の考古学調査にも大きく影響するものであった。

戦後、渤海の考古学調査は、中国、ロシア、北朝鮮の研究者によって引き継がれた。渤海の遺跡の大部分が中国黒龍江省と吉林省にあるため、中国では1949年以降、多くの遺跡が調査され、その都度、短編的な遺跡調査報告「簡報」が公開されてきた。また1984年から刊行された吉林省各市県の『文物志』にも渤海に関連する遺跡が数多く紹介されている。

2000年前後から、中国では体系的な報告書が刊行されはじめた。それらを出版の時間順に並べると以下の通りである。

- ① 中国社会科学院考古研究所『六頂山与渤海鎮:唐代渤海国の貴族墓地与都城遺址』（中国大百科全書出版社、1997年）
- ② 吉林省文物考古研究所（ほか）『西古城:2000～2005年度渤海国中京顕徳府故址田野考古報告』（文物出版社、2007年）
- ③ 黒龍江省文物考古研究所『寧安虹鱒魚場:1992～1995年度渤海墓地考古発掘報告』（文物出版社、2009年。以下『虹鱒魚場報告書』と略記。）
- ④ 黒龍江省文物考古研究所『渤海上京城:1998～2007年度考古発掘調査報告』（文物出版社、2009年）
- ⑤ 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所『六頂山渤海墓葬—2004～2009年清理発掘報告』（文物出版社、2012年10月。以下『六頂山報告書』と略記。）

これらのうち、①は、1963～1964年に、中朝共同考古調査隊が六頂山墳墓群と上京龍泉府の都城遺跡、大朱屯墳墓群を発掘調査した報告書である。そのうち、六頂山墳墓群に関しては2004年から2009年まで考古学発掘調査が行われ、⑤の報告書が刊行された。②から④は、その表題に発掘年度が示されている。②と④は、新たに発掘調査をした内容を掲載しただけでなく、それまでの西古城と上京城の関連資料も掲載されている。③は、1992年から1995年にかけて、黒龍江省寧安市渤海鎮の西にある虹鱒魚場墳墓群の323基の墳墓と関連遺跡を発掘調査したものであり、1998年に短編的な「簡報」が公開されていた<sup>3</sup>が、14年を経てようやく報告書の形で墳墓全体の資料が公開された。最近、中国の考古遺跡保



護のたかまりをきっかけに、遺跡発掘調査内容が学術雑誌に掲載されるようになっている。例えば、中国考古学の学術誌『考古』2009年第6期には、4篇の渤海遺跡の発掘調査内容が掲載された<sup>4</sup>。

北朝鮮では、渤海遺跡の考古学調査が行われ、1963～1964年の中朝考古調査隊が発掘調査した内容をいち早く朝鮮語で刊行した<sup>5</sup>。また、北朝鮮咸鏡北道や咸鏡南道にある遺跡が調査されており、渤海の南京南海府とされる青海土城<sup>6</sup>なども注目されている。2008年には、北朝鮮の社会科学院考古学研究所にて1949年から2005年までの北朝鮮考古学調査成果を全て網羅した『朝鮮考古学全書』（全61冊、ジニンジン、2008年）が刊行され、そのうち、渤海遺跡に関するものは、第41巻（中世編18 渤海の城郭と建築）、第42巻（中世編19 渤海の古墳）、第43巻（中世編20 渤海の遺物）である。この資料の刊行により、北朝鮮の2005年までの考古学資料の状況を把握することができる。

1990年代に入って、ロシアで渤海関連遺跡が多く発見されるようになった<sup>7</sup>。なかでも注目されたのは、ロシアと日本、ロシアと韓国が共同で行っている沿海州クラスキノ土城やチェルニャチノ遺跡に関する考古学調査である。ロシアと日本が共同で行ったクラスキノ土城に関する調査は、2001年から2009年度まで毎年のようにその調査内容が公開されている<sup>8</sup>。また、ロシアと韓国の共同調査は90年代から始まり<sup>9</sup>、2003年からは、クラスキノ土城とチェルニャチノ遺跡に関する考古学調査の内容が続々と刊行されている<sup>10</sup>。

戦後において中国、北朝鮮、ロシアが発掘調査した渤海遺跡は、上京龍泉府、中京顕徳府、東京龍源府と関係する都城遺跡と山城や平地城遺跡、24塊石など交通路関係遺跡、寺院遺跡、墳墓遺跡に大別できる。戦前の日本を含めた各国における各種遺跡の発掘調査簡報、文物志、報告書などの考古学資料は膨大なものになり、短い期間内にすべての資料を分析・検討し終えることは困難である。そこで、この研究では渤海遺跡のうち、墳墓群遺跡を中心に扱いたい。理由は、墳墓が営造されて閉じられると、盗掘されない限り、そこには営造された時点より以前の当該社会におけるさまざまな状況が反映されて残されているからである。

第5章から第7章においては、体系的に記された報告書に公開されている墳墓群資料を中心に検討していきたい。そこで、次節においては墳墓を分析する際の指標をいくつか提示しておきたい。

## 第2節 渤海墳墓の分析指標

最初に、渤海王国墳墓群の全体像を見ておきたい。巻末の付表1（pp.158～161）は、これまで発掘調査が行われた渤海王国の墳墓群を筆者のこれまでの収集資料からまとめたものである。また、図4-1は、そのうちの代表的な渤海墳墓群の位置を示したものである。その特徴は、龍海墳墓群を代表とする地域と、虹鱒魚場墳墓群を代表とする地域に集中する点にある。他の墳墓群は、比較的独立して分布している。河川流域からみると、黒龍江（ア

ムール川)の支流である牡丹江の西側に集中する虹鱒魚場墳墓群と図們江(豆満江)の支流である海蘭江に集中する龍海墳墓群に分けることができる。これらの河川流域には、渤海の都がおかれた上京龍泉府(黒龍江省寧安市渤海鎮)、中京顕徳府(吉林省和龍市西古城)、東京龍源府(吉林省琿春市八連城)がある。

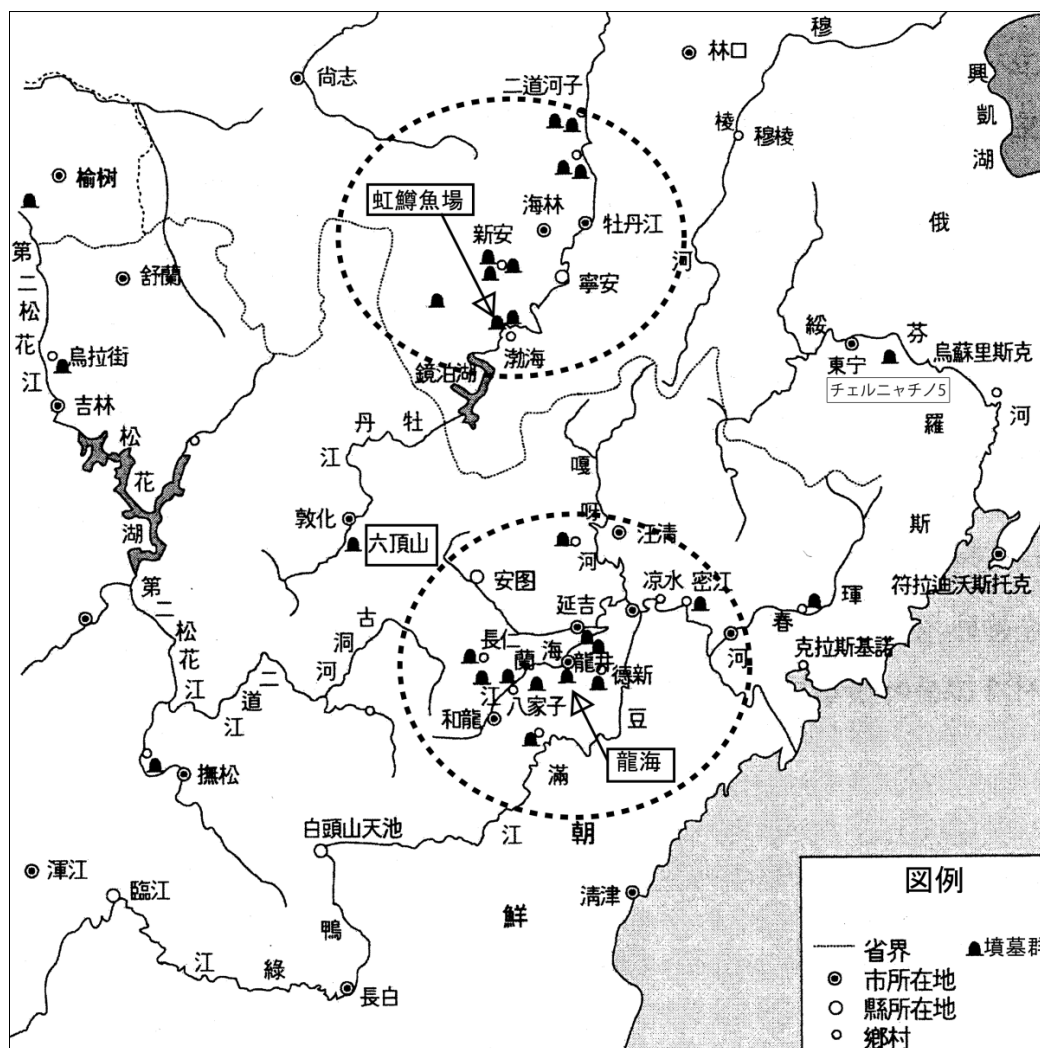


図 4-1 代表的な渤海墳墓の分布図

(鄭永振ほか『古墳から見た渤海の文化性格』(東北歴史財団、2006年、p.66)に加筆)

ここでは、代表的な墳墓群、つまり渤海王国の歴史展開と関連して在地社会の様相を検討可能な六頂山墳墓群、虹鱒魚場墳墓群、チェルニャチノ5渤海墳墓群を検討してみたい。それらの属性を示す指標として、墳墓の規模と構造・形式、埋葬習俗、副葬品の様相を以下に取り上げる。

### 第1項 墳墓構造

これまで多くの研究者が渤海の墳墓の規模と構造・形式について分類案を提示している。その主な内容を次の表 4-1 にまとめた。

表 4-1 中国、北朝鮮、韓国研究者の墳墓分類案

①	孫秀仁 <sup>11</sup>	大型積石塚		
		中型積石塚		
		小型積石塚		
②	李殿福 <sup>12</sup>	土坑封土墓		
		石封土墓	石壙封土墓	
			石棺封土墓	
			石室封土墓	
磚室封土墓				
③	劉曉東 <sup>13</sup>	土坑墓		
		有槨墓	木槨墓	
			石槨墓	
		墓室墓	石室墓	
磚室墓				
④	金太順 <sup>14</sup>	土坑墓		
		石墓	石室墓	鏟形 (T 形)
				刀形 (L 形)
				長方形
				双室
		石壙墓		
石棺墓				
⑤	孫秉根 <sup>15</sup>	I 型 豎穴土坑墓	I 式 土坑豎穴墓	
			II 式 土石混築墓	
		II 型 無墓道石墓	I 式 石壙墓	
			II 式 石棺墓	
		III 型 有墓道石室墓	I 式 三壁土南石壁墓	
			II 式 有墓道石室墓	
			III 式 有墓道平天井墓	
		IV 型 大型石室墓	I 式 大型石室封土墓	
			II 式 陵園施設附大型石室墓	
		V 型 石頂磚室墓	I 式 墓塔結合式	
II 式 陵園建築式磚壁石頂封土墳				
⑥	魏存成 <sup>16</sup>	土坑墓		
		石壙墓		
		石室墓	鏟形 (T 形)	長方形
				方形
			刀形 (L 形)	
			長方形	
			長条形	
		不明		
石棺 (槨) 墓				
磚室、磚石合建墓				
⑦	李蜀蕾 <sup>17</sup>	A 型 豎穴土坑墓	Aa 型 無葬具土坑豎穴墓	
			Ab 型 有葬具土坑豎穴墓	
			Ac 型 有葬具土坑石蓋墓	

		B 型 石墳墓	Ba 型 土石合筑石墳墓	
			Bb 型 石壁石墳墓	
		C 型 石椁（棺）墓		
		D 型 封土石室墓	Da 型 有墓道石室墓	Da1 型 铲形石室墓
				Da2 型 刀形石室墓
			Db 型 無墓道石室墓	
		E 型墓	形状が特殊 命名できない	
F 型 磚室墓	Fa 型 大型磚室墓			
	Fb 型 小型磚室墓			
⑧	鄭永振 <sup>18</sup>	磚室墓	I 式 墓葬結合式磚壁石頂单室墓	
			II 式 陵園建築式磚壁石頂封土壤	
		石室墓	I 式 隅三角持送天井石室封土壤	
			II 式 平天井石室封土壤	
			III 式 石棺封土壤	
			IV 式 石墳封土壤	
		土坑墓	I 式 土石壁封土壤	
			II 式 土坑蓋石頂封土壤	
			III 式 土坑豎穴墓	
		⑨	朴潤武 <sup>19</sup>	隅三角持送平行持送天井墓
三角持送天井墓				
平行持送天井墓				
平天井墓				
⑩	王志剛 <sup>20</sup>	1 土坑豎穴墓	A 型土坑豎穴墓	
			B 型土坑豎穴墓	Ba 型土坑豎穴墓
				Bb 型土坑豎穴墓
		2 土石混築墓	A 型土石混築墓	
			B 型土石混築墓	
			C 型土石混築墓	
		3 石墳墓		
		4 石棺（椁）墓		
		5 墳室墓	A 型 T 形墳室墓	
			B 型 T 形墳室墓	
		6 石室墓	A 型大型石室墓	Aa 型無封土石室墓
				Ab 型封土石室墓
			B 型小型石室封土壤	Ba 型無墓道石室封土壤
		Bb 型 T 形石室封土壤		
7 磚墓	A 型磚室墓	Aa 大型磚室墓		
	B 型磚室墓	Ab 型小型磚室墓		
⑪	朱栄憲 <sup>21</sup>	大型石室封土壤		
		中型石室封土壤		
		小型石室封土壤		
⑫	張哲万 <sup>22</sup>	積石塚		
		石室土墓		
		石槨土墓		

		石棺墓		
		石墳墓		
⑬	李南奭 <sup>23</sup>	土坑墓		
		石築墓	石室型	横穴式 横口式
			積石型	
			石棺墓	
		磚築墳		
⑭	朴紉鎭 <sup>24</sup>	A型 横穴式石室墳		
		B型 横口式石室墳		
		C型 石室埋土墳		
		竖穴式石棺墓		

(本表は各研究者の分類案まとめて筆者作成)

上記の表の中で、①～⑩は、中国研究者の分類案、⑪、⑫は、北朝鮮研究者の分類案、⑬、⑭は、韓国研究者の分類案である。この表の中で、2010年に発表された⑩と2011年に発表された⑭を除いて、ほかの分類案は、2005年以降の新しく発掘調査した渤海墳墓の内容を反映した分類案ではない。なお、2011年発表された⑭は、渤海の石墓のみを分析対象としている。したがって、墳墓に関する最新の考古学資料を踏まえ、土墓、石墓を含めて、墳墓の分類を試みているのは⑩の王志剛の墳墓分類案になる。上記の研究者の各分類案を参考にして筆者が作成した墳墓分類図は以下のようになる。

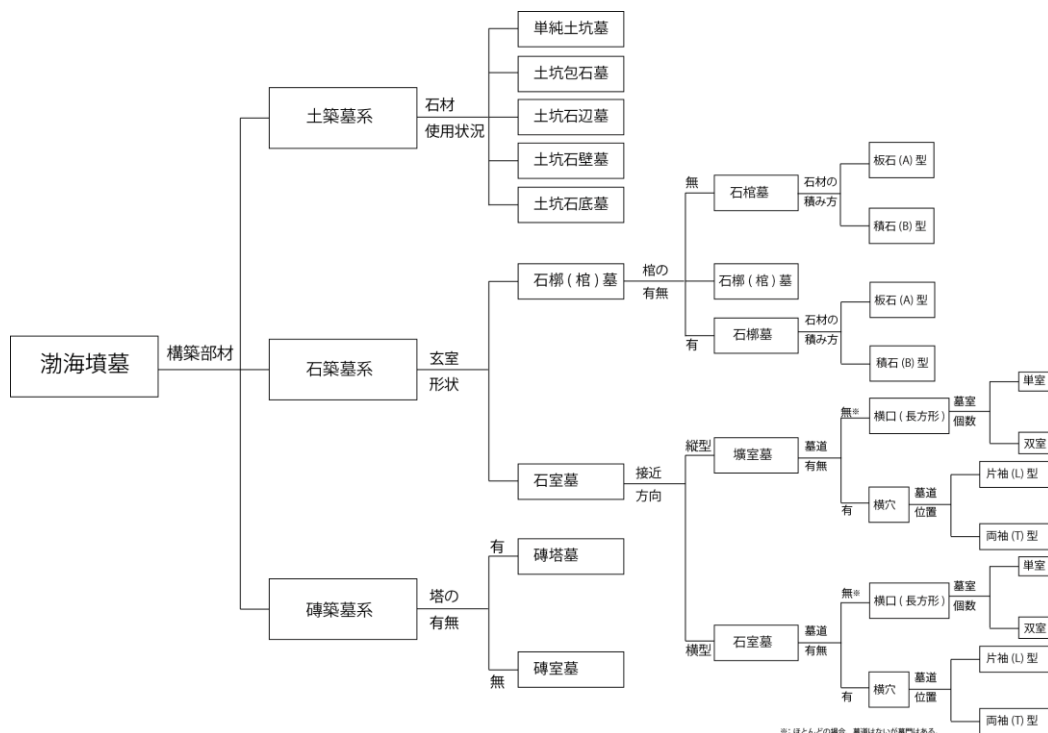


図 4-2 渤海墳墓の分類図 (筆者作成)

王志剛は、その分類案に基づいて、各種墳墓の変遷過程をも推定したものを図4-3のように示している。時期の下にある墳墓の種類は、当該時期にそれらの墳墓が表れたことを示している。本章では、この王志剛の墳墓分類案と変遷に依拠して、個々の墳墓の構造形式上の位置づけを考えてみたい。

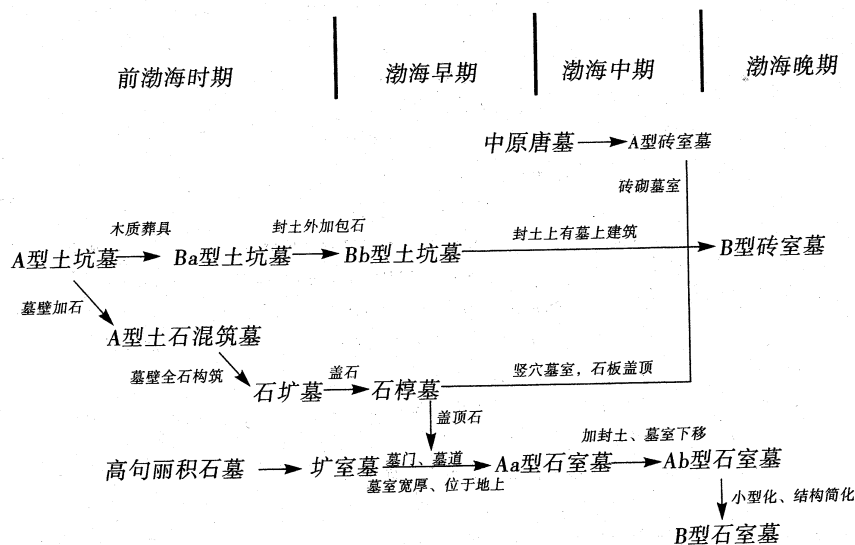


図 4-3 渤海墳墓類型の変遷

(王志剛「渤海墓葬類型研究」『中国考古学会第十二次年会論文集』文物出版社、2009年、p.163)

墳墓構造のなかで、特に注意しなければならないのは、墳墓墓室の高さであるとする。巻末の附表2 (pp.162~174) は、これまで発見された渤海墳墓の墓室の規模、すなわち、墓室の長さ(長い辺)、幅(短い辺)、高さを表したものである。このうち、貞恵公主墓、貞孝公主墓、順穆皇后墓などの王室墳墓の高さは、すべて160cmを越えている。このような王室墳墓である大型磚室墓や石室墓のように墓門、墓道、墓室を備えた墳墓は、数次にわたって埋葬するため、人の出入りが可能でなければならない。つまり、渤海の墳墓の構造と墓室の高さには関係があるように思われる。160cmは、ちょうど成人一人が普通に入力できる高さである。朴軫鎮の指摘によると、石墓の天井蓋石の臨界値は100cmであるという<sup>25</sup>。つまり、高さが100cmを越える墳墓なら墓室が空洞化している大型石室墳墓で、100cmを越えない墳墓は、土を埋めておいてその上に天井石を置く壙室墓になると思われる。墳墓の高さは、構造と連動していて、墓主の社会的地位と関係する指標であると考えられる。

本章では、社会的地位によって営まれた墳墓の構造と形式が異なることを前提にする。造営時期や被葬者の明らかな貞恵公主墓、貞孝公主墓、順穆皇后墓などの王室墳墓を基準として、大型石室墓、大型磚室墓をひとまず王室の墳墓と区分する。つぎに、それ以外の土坑墓、土石混築墓、石壙墓、壙室墓を王室以外の墳墓に区分する。さらなる階層比定は、埋葬習俗と副葬品をもくわえて考察を進めることにしたい。

## 第2項 埋葬習俗

渤海の埋葬習俗に関連してしばしば指摘されるのは、火葬、多人葬、二次葬である。火葬とは、墳墓において人骨または葬具が焼かれた痕跡があるものをいうが、仏教の焼いた人骨を骨壺に納める火葬と区別して火焼ということもある。多人葬とは、複数の遺体を1基の墳墓に埋葬するものをいう。そして、二次葬とは、本来ならば二回にわたって墳墓に遺体を納めることである。しかし、渤海墳墓の考古学調査における二次葬とは、人骨が散乱しており、遺体の骨が頭蓋骨、肢骨など部分的な骨部位のみ出土している状態を指す。上記の火葬、多人葬などの埋葬習俗があることを念頭にいれると、埋葬当時にすべて本来の意味での二次葬を行ったかどうかは不明であるため、二次葬といわれる墳墓は慎重に扱う必要がある。このような三種類の埋葬習俗は、墳墓の構造とも関連し、大型石室墓や大型磚室墓などではほとんどみられず、それ以外の墳墓、たとえば土石混築墓や壙室墓などでよく見られる。

火葬の習俗は、鴨緑江流域にある高句麗の墳墓で見られるという<sup>26</sup>。また、粟末靺鞨の活動地域であった第2松花江流域、黒水靺鞨の活動地域であった黒龍江流域の墳墓にも多くみられる<sup>27</sup>。いずれにせよ、どのような死生観に基づいて火葬が行われたかは、今の段階でよくわかっていない。そのほか、東北アジアの周辺民族のうち、突厥、蝦夷などにも火葬の習俗があることは興味深いことである。靺鞨や渤海の火葬は、墳墓のなかに焼かれた骨をそのまま放置している点に特徴がある。かつて炭化した木片の出土について、湿気を防ぐためであるといわれた<sup>28</sup>が、筆者は骨と葬具を焼き放置しておくことは湿気防止とすぐ解釈できないと考える。厳密な検証がまたれる。とりあえず、ここでは、靺鞨、渤海の火葬を仏教的葬送儀礼と異なる独自の埋葬習俗と見なしておきたい。なお、後述する墳墓の分析でも骨と葬具が焼かれた墳墓は大型石室墓では見られないことから、王室など渤海の上層部では見られない葬送習俗であるように思われる。

多人葬は、被葬者のなかの中核的な人物の骨の周辺にそれ以外の人骨を散乱させて、ともに埋葬する形であられる。この多人葬について、従来、原始時代の家族葬遺風説<sup>29</sup>、家族葬であると同時に二次葬者が奴婢である説<sup>30</sup>、殉葬説<sup>31</sup>、陪葬説<sup>32</sup>が主張されてきた。近年では、鄭永振は、多人葬について家族葬と解し、家族という概念を拡大解釈して、奴婢や無姓の部曲も家族成員の一員であり、その主人とともに埋葬したのが多人葬であるという見解を示している。これまでの多人葬に関する議論は、殉葬と家族葬の解釈、さらに家族葬の中でも家族そのものをどのように解釈するかに分かれている。

このうち、まず殉葬説の議論についてみると、論拠としてよく使われる史料として、渤海の後の時代である女真の埋葬習俗を記録した『大金国志』（宇文懋昭著、南宋端平元（1234）年、成立）巻39、初興風土条に「女真…死者埋之而無棺槨。貴者、生焚所寵奴婢所乘鞍馬以殉之」という記録があり、いわゆる「貴者」が死ぬと、生きている奴婢や馬を燃焼して殉葬したという。渤海の墳墓を整理したみたとき、多人葬の墳墓は、必ずしも火葬していないが、同じ地域で活躍した後代の女真の埋葬習俗の記録から見ると、渤海の「貴

者」も殉葬しなかったとはいえないであろう。

次に、家族葬の議論についてみてみたい。同じ墓室空間に数回にわたって多人合葬された遺体は、数体から十数体になるものまで様々である。これらの遺体は、順番に埋葬されたもの、または遷葬されたものもある。順番に埋葬されたものは同一の平面にあるものもあるし、上下の地層にあるものもある。遷葬したものとは、たとえば、六頂山墳墓群のIM17（I墓区17号墓。以下の表記凡例：Iは墓区の番号、Mは墓を意味し、最後の番号は墳墓発掘調査番号。）の場合、4体の遺体のうち、2体は木棺に、ほかの2体は墓室の西北隅に肢骨のみ集めて埋葬していることから、「遷葬」と推定しているのである。このような状況から多人葬を家族葬と見なしているのである。しかしながら、渤海の墳墓の中には、多人葬を単なる家族葬と見なせない場合もある。例えば、8体の遺体が見つまっている寧安大朱屯墳墓群M1（1号墓）のばあい、墓室の同一の平面において4体は伸展して埋葬され、残りの4体は墓室の北壁に遷葬されている。伸展した4体のなかで2体は35歳前後の男性で、お互いの頭の方向が逆になり、仰伸直肢の状態の木棺の中に納められている。木棺に納められた2体の人骨の左右には、側伸直肢の状態、木棺に納められていないままに木棺と壁の狭い空間に埋葬されている。東側は21歳前後の男性と、西側は21歳の女性と推定されている。したがって、左右に被葬されている木棺は使用されておらず、側伸直肢している被葬者は、中間にある木棺使用の被葬者と関係があることはいうまでもない。しかし、木棺を使用せず、狭い空間に側伸の姿勢で納められていることから、中核になっている被葬者と身分上の差があることが推定できる。このように、順次に多人合葬したともいい難く、多人合葬墓の被葬者をすべて家族関係とみることもできない。

また、上記のように、渤海墳墓の中では、殉葬の可能性も否定できないため、渤海の墳墓をすべて家族葬だと解釈することはできない。以下の墳墓分析において、渤海の多人葬を概ね家族葬とするが、中核になる被葬者が明確な墳墓には、殉葬や家族以外の奴婢や部曲もともに埋葬されていたとひとまず見ておきたい。そのように見なす理由としては、殉葬した墳墓や奴婢をともに埋葬できる墳墓は、被葬者の一定の経済力と社会的地位が必要であるため、渤海の社会的様相をうかがえるからである。

### 第3項 副葬品

渤海の墳墓では、王室墳墓やそれ以外の墳墓との間に、副葬品の種類と格差が認められる。これまで発見された墳墓の副葬品のなかで一番多く見られるのは、以下に取り上げる靺鞨罐である。ほかにも鉄製、銅製、銀製、金銅製、金製の各種装身具、瑪瑙の装身具、そして王室級の墳墓で発見されている陶俑などがある。また三彩などの工芸品も見られるが、本章では、墳墓の社会的属性を表しやすい指標として以下の①～④を取り上げる。

#### ① 靺鞨罐

靺鞨罐というのは、4世紀から11世紀にかけて<sup>33</sup>、黒龍江流域と松花江流域の遺跡で広汎に見られ、酸化炎焼成と手握ね、突帯<sup>34</sup>がある口縁部を基本的な特徴とした深鉢形の土器



である。『隋書』、『旧唐書』などの史書で「靺鞨」といわれる人びとが居住していたとされる地域から出土した土器であるため、しばしば「靺鞨罐」あるいは「靺鞨（式）土器」<sup>35</sup>と呼ばれている。靺鞨罐は、これまでこの罐を使用していた人びとの民族性をあらかず資料と考えられ分析の対象とされてきた。ロシアのチャーコーバや日本の臼杵勲<sup>36</sup>は、黒龍江流域と松花江流域で発見された4世紀から11世紀の深鉢形土器を靺鞨罐と呼んでいる。その編年については現在までに多くの議論が重ねられてきており、ロシアのチャーコーバ、日本の臼杵勲のほか、大貫静夫<sup>37</sup>、菊池俊彦<sup>38</sup>、中国では、喬梁をはじめ<sup>39</sup>、譚英傑ほか<sup>40</sup>、金太順<sup>41</sup>、劉曉東・胡秀然<sup>42</sup>、張玉霞<sup>43</sup>、劉曉東<sup>44</sup>、林棟<sup>45</sup>、王樂<sup>46</sup>の研究がある。とりわけ、足立拓朗<sup>47</sup>や木山克彦<sup>48</sup>は、

- 靺鞨罐の口縁部に突帯に刻みがあるかどうか
- 胴部に文様や突帯があるかどうか

という二つの特徴を提唱し、これによって靺鞨罐の編年が可能となり、時間の経過につれて、渤海の中心地域である牡丹江流域や図們江流域では靺鞨罐の突帯無紋化傾向がみられるようになるという。ここでは、足立拓朗と木山克彦の研究を整理し、それぞれの編年案を紹介する。

まず、足立と木山の主張する編年基準を以下に示しておきたい。ここでは行論の都合から足立の分類基準を便宜上1~5に分ける。

〔足立拓朗の分類基準〕

- 1：刻み目が施文された突帯を口縁部に有する靺鞨罐を「刻み目突帯靺鞨罐」とする。
- 1-①類：楕目文や波形の平行沈線が施文されるもの。
- 1-②類：1-①類以外のもの。つまり、胴部の装飾が失われることにより、1-②類へ変化。
- 2：口縁部の突帯に小突起がつけられるものを「小突起付靺鞨罐」という。
- 3：刻みがない無文突帯を口縁部に有する靺鞨罐を「無文突帯靺鞨罐」と分類する。
- 4：1-②と3の靺鞨間の中で胴部に突帯を有するもの。
- 5：3の中で胴部上半に刻線が施文されたもの。

足立は、この分類基準に基づいて、1-①⇒1-②⇒4⇒3、1-①⇒2⇒5⇒3と2系統の変遷をたどり、最後は刻みがない無文突帯を口縁部に有する形状に変化していくと述べる。足立の編年試案図<sup>49</sup>〔付図1〕(p.190)を見る限りでは、黒龍江流域と松花江流域で始まった靺鞨罐は、牡丹江流域の六頂山墳墓群の時期を境に、3類のなかでも胴部に刻線を施文されていない最終形態に変化していく。

〔木山克彦の分類基準〕

- 足立の研究を基に、木山も靺鞨罐を研究しており、分類基準は以下のように明快である。
- 口縁部隆帯：A類：キザミがあるもの。  
B類：キザミがないもの。
- 胴部文様：1類：集合沈線や波状沈線、刻紋や圧痕文列を持つもの。  
2類：粘土紐の貼り付け隆帯を持つもの。

### 3類：無文

こうした分類基準に基づいて試みられた木山の編年案は、牡丹江流域、綏芬河流域、豆満江流域・吉林南部、第二松花江流域などの地域ごとに行われている。ここでは、分析する墳墓群（牡丹江流域の六頂山と虹鱒魚場）の関係上、牡丹江流域に注目したい。木山による牡丹江流域の靺鞨罐の編年は、A1、A3、B3類→B1、B2、B3類→B3類のようになる。

これらの足立、木山による分類基準は、口縁部と胴部の文様によるものである。その編年において、足立は、口縁部に刻み突帯が有るものから無いものへ、胴部に文様が有るものから無いものへと順序づけている。木山の研究で明らかになったことは、口縁部の刻み突帯と胴部の文様が両方とも無い土器が各段階に見られることである。これらの先行研究を総合すると、渤海王国後期になるにつれ、靺鞨罐には、口縁部突帯と胴部文様がなくなっていくといった傾向が認められる。なお、足立・木山による編年案では、虹鱒魚場墳墓群に関する『虹鱒魚場報告書』が未公開の時点でなされた研究であったため、虹鱒魚場墳墓群も含めたすべての出土品を視野に入れて検討されていないという制約がある。

第2部では、足立・木山の分類と編年案を基礎にして、関連研究者の意見も取り入れ、各墳墓群で出土した靺鞨罐の分類と編年を考察しながら、靺鞨罐を出土した墳墓の相対的造営年代を探りたい。付表3 (pp.175~187) では、靺鞨罐の属性を集成して作成した。この表は、中国で発表した靺鞨罐資料を整理したものであり、出土状況の説明が異なるロシアの資料は整理されていない。その整理は後日に委ね、この研究では付表3を参考にしながら、各墳墓内の靺鞨罐の位置づけを行うことにする。

#### ② アムール型帯飾板

アムール型帯飾板は、靺鞨罐との出土や範囲がほぼ同じで、東北アジアでは6世紀から11世紀にかけて、靺鞨や女真が活動した地域の墳墓から出土する副葬品である。p.117掲載の図6-5の点線上部に示した副葬品をアムール型帯飾板と呼ぶ<sup>50</sup>。このアムール型帯飾板についても、これまでさまざまな分類や編年が試みられてきたが、近年、王培新がアムール型帯飾板の分類と編年を体系的に行い、さらに白杵勲が王培新の分類を細分化し、実年代を推定した。以下、白杵勲の分類と編年を紹介しておきたい。

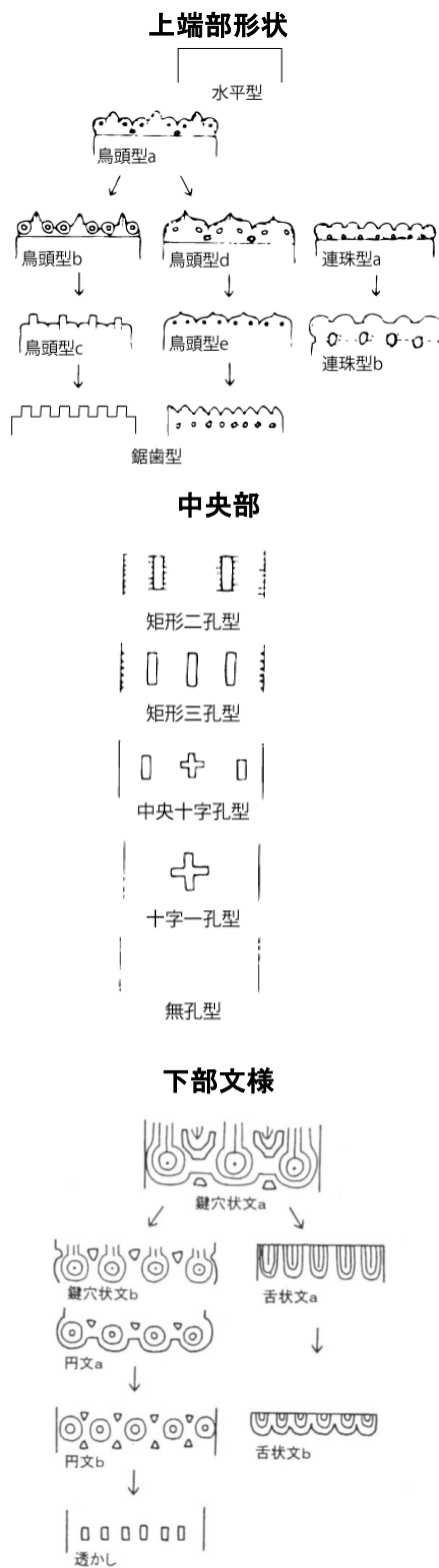
白杵勲は、表4-2の分類案にしたがって各類型の変遷を示している。

表4-2 白杵勲のアムール型帯飾板分類案

上端部形状		中央部	下部文様	
水平型		矩形二孔型	鍵穴状文型	鍵穴状文型 a
鳥頭型	鳥頭型 a	矩形三孔型		鍵穴状文型 b
	鳥頭型 b	中央十字孔型	円文型 a	
	鳥頭型 c	十字一孔型	円文型 b	
	鳥頭型 d	無孔型	舌状文型	舌状文型 a
	鳥頭型 e			舌状文型 b
連珠型	連珠型 a		透かし型	
	連珠型 b			
鋸歯型				

各部の類型の変遷は次のページにある図 4-4 のように示している。

図 4-4 白杵のアムール型帯飾板の分類図



さらに、白杵は、図 4-3 の変遷過程と、おおよその実年代を以下のように叙述している。

第Ⅰ期 最古段階のアムール型帯飾板は水平型上端部、水平短刻線付矩形 2 孔型透かし、鍵穴状文 a という組み合わせに統一されている。(7 世紀代)

第Ⅱ期 鳥頭型 a が出現する。中央部は矩形 2 孔型に加え、矩形 3 孔型も現われる。下部は鍵穴状文 b・円文 a・舌状文 a が現われる。矩形 3 孔型の出現は、下部と中央部の透かし位置を合わせるという前段階の伝統を引きついだため、円文 a の三角形透かしに合せて矩形透かしを設けたためである。(8 世紀代前半)

第Ⅲ期 上端部は、鳥頭型 b・d、連珠型 a が出現する。このうちもっとも盛行するのは連珠型 a である。中央部は矩形 2 孔型も存続するが、矩形 3 孔型が増加する。列点状短刻線が現れる。下部は円文 b が主流となり、舌状文 b も出現する。なお、連珠型と鳥頭型は下端部にも上端と同様の装飾をつける場合が多い。(8 世紀代後半)

第Ⅳ期 上端部は鳥頭型 b が継続する。連珠型 b も現れる。中央部に中央十字型が現われる。短刻線は列点状が主流となる。下部は透かし型が主流となる。透かしの間に刻線文を持つ場合がある。(9 世紀代)

第Ⅴ期 上端部は鳥頭型 c・e が主流となる。中央部は矩形 3 孔型と中央十字孔型が主流。下部は透かし型が主流で、前代よりも数が増える傾向がある。(9 世紀代後半)

第Ⅵ期 上端部は鋸歯型が主流となり、形状も多様化する。中央部は、十字一孔型が現れる。(10 世紀代以後)

白杵によるこの変遷過程は、C14 年代測定値や他の副葬品との比較検討を通じて得られたものであり、妥当性があるものと思われる。このおおよかな変遷過程に依拠するとき、第Ⅱ期から第Ⅴ期が渤海の歴史年代と重なる。以下に試みようとする墳墓の検討においても念頭におき、この年代に依拠することとする。

なお、靺鞨、渤海、女真などの墳墓からアムール型帯飾板と対になって出土する事例がある円形帯飾板 (p.117 の図 6-5 の下線部下部) については、その出土数が極めて少ないため、ここでは参考程度に留めておきたい。

### ③ チュルク型帯飾板 (鈔帯)

アムール型帯飾板・円型帯飾板と対照的に考えられるのがチュルク型帯飾板である。なぜなら、大貫静夫の指摘<sup>51)</sup>のように、アムール型と円型の二種類の帯飾板は、靺鞨と関連する遺跡にしか見られない在地系遺物だと言えるのに対して、チュルク型帯飾板は、唐や遼や高句麗の墳墓からも出土していて、それらの影響を受けたものとも言えるからである。中国では帯鈔と呼び、日本では帯鈔をさらに巡方 (長方形)、丸鈔 (半円形または圭字形) とに分類している。ベルトのバックル機能をしている鉸具、ベルトの端部にある鉞尾と組み合わせ、ベルトに装着する帯金具になる。孫秀仁の研究<sup>52)</sup>によると、吊り下げ用の長方形の穴が開き、多数を帯上に並べる巡方、丸鈔の帯鈔は唐代初期 (7 世紀) から遼代前期 (10 世紀) に流行したという。

渤海時代の遺跡だといわれる吉林省和龍北大墳墓群遺跡 (龍海墳墓群の西 4km に位置)

の28号墓(M28)からは、鉸具1、巡方4、丸軋8、鉞尾1計14点からなる完全な形での帯金具が出土している<sup>53</sup>。また、同墳墓群の2号墓(M2)と9号墓(M9)には、装着状態の出土も見られる。東アジアにおけるチュルク型帯飾板を研究した伊藤玄三は、青銅製または鉄製の帯銙(チュルク型帯飾板)は、同時代の日本、新羅、渤海にみられ、官人の位階を表すものである<sup>54</sup>という。渤海のチュルク型帯飾板(帯銙)は、唐の制度を模倣し、材質と数によって官僚の位階を規定したかどうかはわからない。ここでは、ひとまず当該社会における身分を示す象徴として機能していた可能性を指摘しておく。渤海全体の墳墓をみると、アムール型帯飾板は少なく、チュルク型帯飾板が多い。

#### ④ 装飾具と武器

装飾品のなかで、金製、金銅製、銀製、瑪瑙、料珠などの装身具は、被葬者の経済的地位を示すものである。また、鏃、小刀、矛などの武器は被葬者の戦闘、狩猟への参加を示すもの、つまり社会的地位をある程度示すものとして考えられることから、これらも分析の指標としたい。

それでは、これまで取りあげた墳墓の属性を念頭におきながら、第5章から第7章において渤海王国の具体的な墳墓群を検討の俎上におきながら、それぞれの時期や地域の在地社会の様相を考察することにした。

#### 注

- <sup>1</sup> 魏存成『渤海考古』(文物出版社、2008年)、朱国忱・朱威『渤海遺跡』(文物出版社、2002年)、朝鮮民主主義人民共和国社会科学院考古学研究所『渤海の古墳(朝鮮考古学全書42中世編19)』(ジンジン、2009年)、小嶋芳孝「渤海の遺跡」(『アジア遊学』107、2008年、pp.14~23)、同「渤海の仏教遺跡」(『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年、pp.185~209)、同「渤海考古学の現状と課題—渤海都城の変遷と水系を考える—」(『東アジアの古代文化』96、1998年、pp.118~138)。
- <sup>2</sup> 小嶋芳孝「渤海の遺跡」(『アジア遊学』107、2008年、p.15)。
- <sup>3</sup> 黒龍江省文物考古研究所「黒龍江寧安虹鱒魚場墓地的発掘」(『考古』1997年第2期、pp.1~16)。
- <sup>4</sup> 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所「吉林敦化市六頂山墓群2004年発掘簡報」(『考古』2009年第6期、pp.3~14)、吉林省文物考古研究所、吉林大学边疆考古研究中心「吉林琿春市八連城内城建築基址的発掘」(『考古』2009年第6期、pp.15~22)、吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文物管理委員会辦公室「吉林和龍市竜海渤海王室墓葬発掘簡報」(『考古』2009年第6期、pp.23~39)、宋玉彬「渤海都城故址研究」(『考古』2009年第6期、pp.40~49)、黒龍江省文物考古研究所「渤海上京城第四階段考古発掘主要收穫」(『文物』2009年第6期、pp.51~61)。
- <sup>5</sup> 朝中共同考古学発掘隊『中国東北地方の遺跡発掘報告(1963~1965)』(社会科学院出版社、1966年)。
- <sup>6</sup> 金宗赫著、裴元柱訳「青海土城とその周辺の渤海遺跡」(『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣1993年、p.183~191)。
- <sup>7</sup> アレキサンダー・イヴリェフ「ロシアにおける渤海史研究」(『Journal of Northeast Asian History』(4-2)、2007年、pp.32~144)1990年代の前にも、ロシアにおいて渤海関係遺跡は発見されたが、多くは鞞鞞遺跡とみられるものであった。
- <sup>8</sup> クラスキノ土城発掘調査団「2009年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」(『青山史学』28、2010年、pp.1~30)、クラスキノ土城発掘調査団「2007年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」(『青山史学』26、2008年、pp.87~103)、クラスキノ土城発掘調査団「2005年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告(遺構編)」(『青山史学』24、2006年、pp.1~32)、クラスキノ土城発掘調査団「2004年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告(遺構編)」(『青山史学』23、2005年、pp.1

- ～34)、クラスキノ土城発掘調査団「2003年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」(『青山史学』22、2004年、pp.1～54)、ボルディン V.I.,ゲルマン E.I.,イヴリエフ A.L.,ニキーチン Yu.G.、清水信行訳「クラスキノ土城4年間の調査集成」『青山史学』21、2003年、pp.47～66)、クラスキノ土城発掘調査団「2002年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」、(『青山史学』21、2003年、pp.1～46)、田村晃一、山口正憲、四角隆二、張替清司、松葉崇「2001年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」『青山史学』20、2002年、pp.1～23)。
- 9 『沿海州渤海遺蹟:第1次韓・ロ共同発掘調査報告書』(大陸研究所出版部、1994年)。
- 10 クラスキノに関しては、文明大・李南奭『ロシア沿海州クラスキノ渤海寺院址発掘報告書』(高句麗研究財団、2004年)。東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所『2007ロシア沿海州クラスキノ渤海城発掘報告書』(東北アジア歴史財団、2008年)、東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所『2008年度沿海州クラスキノ渤海城韓・ロ共同発掘報告書』(東北アジア歴史財団、2010年)がある。
- チェルニャチノ遺跡に関しては、『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群(I):第1・2次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2005年)、『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群(II):第3次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2006年)、『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群(III):第4次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2007年)、『沿海州チェルニャチノ2沃沮・渤海住居遺跡(I):第5次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2008年)、『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群(IV):第6次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009年)、『沿海州チェルニャチノ5沃沮・渤海住居遺跡(II):第6次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009年)がある。
- 11 孫秀仁「略論海林山嘴子渤海墓葬の形制、伝統和文物特徴」(『中国考古学会第一屆年會論文集(1979)』1980年。後に『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、pp.425～429に所収)。
- 12 李殿福「從考古学上看唐代渤海文化」(『学习与探索』1984年4期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、pp.18～24)。
- 13 劉曉東「渤海墓葬の類型与演變」(『北方文物』1996年第2期、pp.32～38。後に、同『渤海文化研究』〔黒龍江人民出版社、2006年、pp.133～170〕に所収)。
- 14 金太順「渤海墓葬研究中的幾箇問題」(『考古』1997年第2期、pp.17～46)。
- 15 孫秉根「渤海墓葬の類型与分期」(『漢唐与边疆考古研究』1994年、『高句麗渤海研究集成』6〔哈爾濱出版社1997年、pp.217～235〕に所収)。
- 16 魏存成『渤海考古』(文物出版社、2008年)。
- 17 李蜀蕾「渤海墓葬類型演變再探討」(『北方文物』2005年第1期、pp.35～45)。
- 18 鄭永振「渤海墓葬研究」(『黒龍江文物叢刊』、1984年第2期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、pp.236～244に所収)。
- 19 朴潤武「渤海石室封土墓に関する考察」(『渤海史研究』2、延辺大学出版社、ソウル大学出版部、1994年)。
- 20 王志剛「渤海墓葬類型研究」(『中国考古学会第十二次年會論文集』文物出版社、2010年 pp.151～166)。
- 21 朱栄憲『渤海文化』(雄山閣、1979年、pp.68～87)。
- 22 朴紉鎮「渤海石室墳の形式と構造に関する研究」(『高句麗渤海研究』39輯、2011年3月 p.158)。
- 23 李南奭「渤海墓制」(『渤海の歴史と文化』明石書店、2009年、pp.283～293)。
- 24 朴紉鎮「渤海石室墳の形式と構造に関する研究」(『高句麗渤海研究』39輯、2011年3月 p.153～196)。
- 25 朴紉鎮「渤海石室墳の形式と構造に関する研究」(『高句麗渤海研究』39輯、2011年3月 p.171)。
- 26 孫仁傑「高句麗積石墓葬具研究」(『高句麗研究文集』延辺大学出版社、1993年、p.120)によると、洞溝墳墓群で1000余基の積石墓を調査した結果、640余基から火にあった痕跡を発見しており、残りの300余基では発見できなかったという。
- 27 鄭永振『高句麗渤海靺鞨墓葬比較研究』(延辺大学出版社、2003年)。
- 28 王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」(『社会科学戦線』、1979年第3期、p.204)。
- 29 魏存成「渤海王室貴族墓葬」(『中国考古学第三次年會論文集』1981年。後に『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、pp.340～344に所収)。
- 30 孫秀仁「略論海林山嘴子渤海墓葬の形制、伝統和文物特徴」『中国考古学会第一屆年會論文集(1979)』

- 
- 1980年。『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年。pp.425～429に所収）。
- 31 宋基豪「渤海の「多人葬」についての研究」（『渤海史研究論文集』白山文化、1989年。pp.381～472。初出『韓国史論』11、1984年）。
- 32 敵長緑・朴龍淵「北大渤海墓葬研究」（『渤海史研究』2、延辺大学、1991年）。
- 33 靺鞨罐の時代的上限と下限については、菊池俊彦「靺鞨の同仁文化」『北東アジア古代文化の研究』（北海道大学図書刊行会、1995年、pp.211～212）。
- 34 突帯に関しても、隆起線、隆起帯、凸帯、隆帯などの名称が人それぞれである。
- 35 ここでいう「靺鞨罐」にはさまざまな呼び方がある。日本では「靺鞨土器」のほかに、また「靺鞨系土器」、「同仁系土器」、「靺鞨罐」という呼び方があり、中国では、地域と時期が異なる遺跡によって「長腹罐」、「直腹罐」、「深腹罐」、「盤口罐」などに分けられている。
- 36 白杵勲「靺鞨文化の年代と地域性」（『日本と世界の考古学・現代考古学の展開』雄山閣、1994年）参照、中にはロシアのチャーコーバの見解を紹介している。
- 37 大貫静夫「同仁文化系統の土器の編年」（『東北アジアの考古学』同成社、1998年、p.204）。
- 38 菊池俊彦「靺鞨の同仁文化」（『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会、1997年、pp.179～224）。
- 39 喬梁「靺鞨陶器分期初探」（『北方文物』1994年第2期 pp.30～41）同「靺鞨陶器の地域区分・時期区分および相関する問題の研究」（『北東アジア交流史研究：古代と中世』塙書房、2007年、pp.211～233）。
- 40 譚英傑ほか「渤海墓葬中出土几种主要陶器類型的演变」（『黒龍江区域考古学』1991年、p.82）。
- 41 金太順「渤海墓葬研究中的幾箇問題」（『考古』1997年第2期。pp.17～46）。
- 42 胡秀然・劉曉東「渤海陶器類型学傳承淵源的初步探索」（『北方文物』2001年第4期、pp.37～43）。
- 43 張玉霞「牡丹江流域渤海遺跡出土陶器的類型学研究」（『边疆考古研究』第4輯、2005年、pp.194～209）。
- 44 劉曉東「靺鞨文化研究」（吉林大学碩士學位論文、2007年）。
- 45 林棟「靺鞨文化陶器的区系探索」（吉林大学碩士學位論文、2008年）。
- 46 王樂「中国境内渤海陶器研究」（吉林大学博士学位論文、2009年）。
- 47 足立拓朗「渤海前期の「靺鞨系土器」について」（『青山考古』17、2000年）。
- 48 木山克彦「渤海土器の編年と地域差について」（『北方圏の考古学』I、2007年4月）。
- 49 足立拓朗「渤海前期の「靺鞨系土器」について」（『青山考古』17、2000年 p.36）。
- 50 日本では帯金具、中国では方牌飾などとも呼ばれる。
- 51 大貫静夫「同仁文化系統の土器の編年」（『東北アジアの考古学』同成社、1998年、pp.213～218）。
- 52 孫秀仁「略論渤海国考古学会第一屆年會論文集(1979)』1980年。後に『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、pp.425～429に所収）。
- 53 延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「和龍北大渤海墓墓清理簡報」（『東北歴史与考古』1982年第1期）。
- 54 伊藤玄三「新羅・渤海の鍔帯金具について」（『法政史学』(40)、1988年3月、p.39）。

## 第5章 六頂山墳墓群の検討

第5章で取りあげる六頂山墳墓群は、時期区分からいえば渤海王国の前期に造営されたものであり、のちの時代の墓制に深い影響を及ぼした。本章では、このように歴史的に重要な位置にあるこの墳墓群を分析することを通して、渤海王国前期における在地社会の動向を検討したい。

### 第1節 六頂山墳墓群の立地と発掘調査の経緯

六頂山墳墓群は、中国吉林省敦化市の市街地から南に5km離れている山の中に位置する(図5-1)。北緯43°19'4"、東経128°13'19"に位置している。日本では、同緯度の地点は、日本の札幌と旭川の間地点に当たる。敦化市の地形は、長白山脈の北麓の山々に囲まれた盆地となっており、西方2kmには長白山の支脈である牡丹嶺に水源を持つ牡丹江が南から北へ向かって流れている。図5-1で示しているように、この周辺には渤海の建国地である東牟山に比定される城山子山城遺跡や建国まもない時期の都城に比定される永勝遺跡がある。後述する文献史料の「旧国」地に立地している墳墓群であるがために、発見された当初から渤海前期の王族または貴族の墓地として注目を浴びてきた墳墓群である。

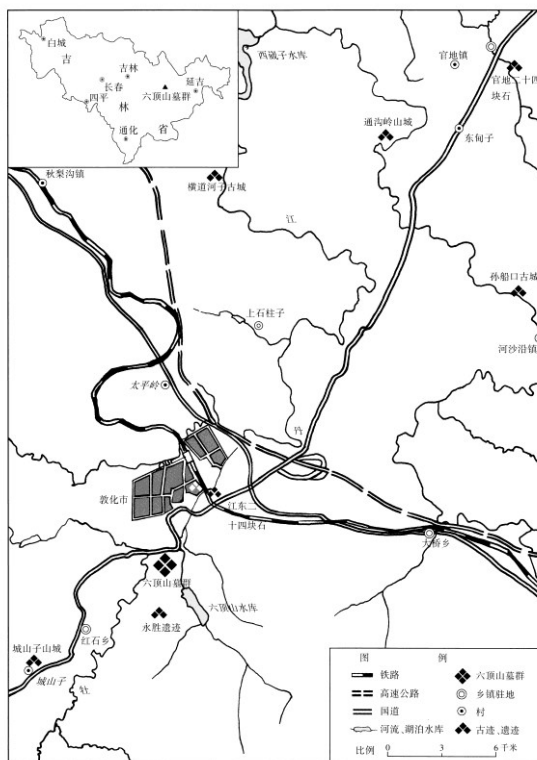


図5-1 六頂山墳墓群の位置

(『六頂山渤海墓葬—2004~2009年清理発掘報告』〈文物出版社、2012年、p.2〉)



六頂山墳墓群が位置する山は、西から東にむかって六つの峰が並んでいることから六頂山と名付けられている<sup>1</sup>。そのうち、西から数えて二番目の峰が主峰で、標高は 603m である。この主峰の南に伸びる尾根の東西の斜面にそれぞれ墳墓群がある。そのうち西側は面積が狭く傾斜が険しいのに対して、東側は箕の形で西側より面積が広く傾斜も緩やかである。このうち西側の墳墓群をⅠ墓区、東側の墳墓群をⅡ墓区と称している（図 5-2）。

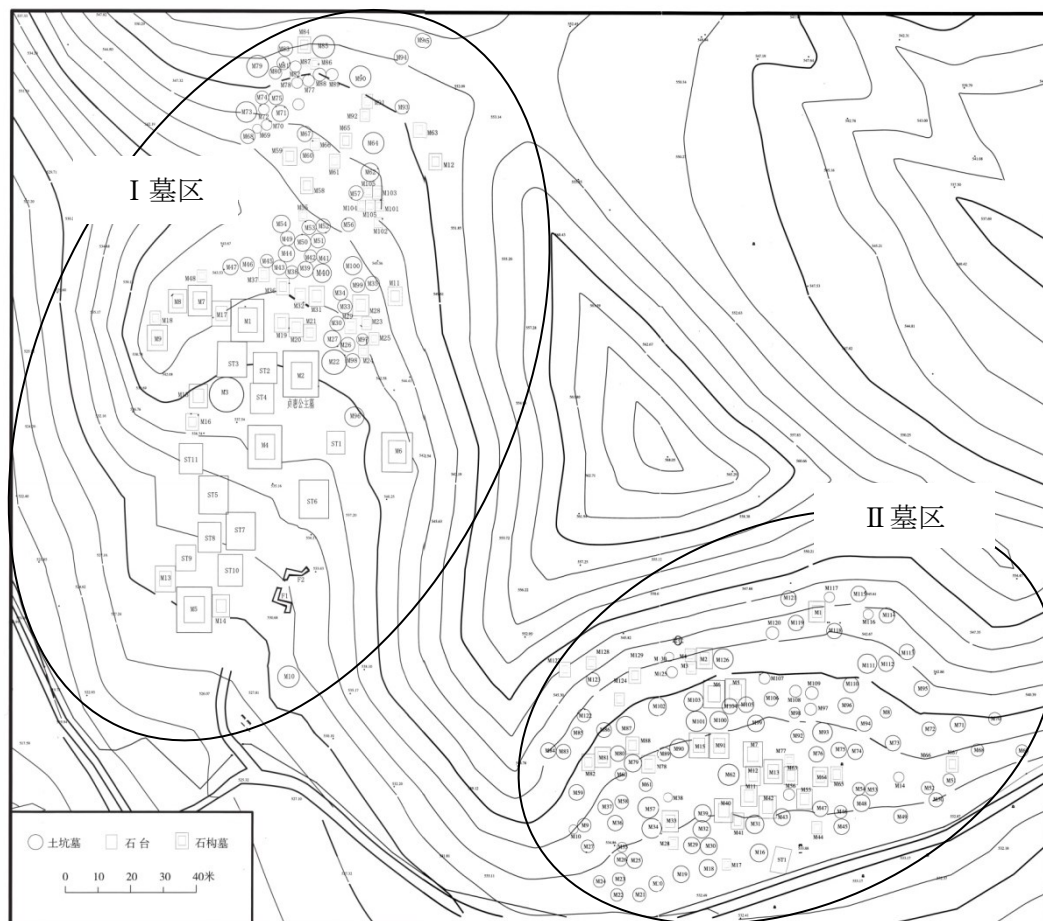


図 5-2 六頂山墳墓群内の墳墓配置図

（『六頂山渤海墓葬—2004~2009年清理発掘報告』の図二に筆者加筆）

さて、最初に六頂山での発掘調査の経緯を確認しておきたい。

方学鳳<sup>2</sup>によると、六頂山墳墓群はすでに満洲国時代に発見されており、盗掘されていたという。また、方によると、その後 1949 年 8 月、敦化県（現在敦化市）啓東中学校の調査で貞惠公主墓碑と石獅子が発見され、同年 9 月には延辺大学の歴史学部の教師と学生たちが調査に駆けつけ、破壊された貞惠公主墓の天井石を修復したという。1953 年～1957 年、吉林省文物管理委員会、吉林省博物館が二回発掘調査し、1958 年、1959 年には、吉林省博物館と吉林師範大学（現、東北師範大学）が継続して発掘調査を行った。これらの一連の

調査により、I 墓区に 30 余基、II 墓区に 50 余基の墳墓があることと、そのうち I 墓区で 12 基の墳墓が発掘されたことにより、貞恵公主墓を含む一部の大型墳墓の様相がある程度判明できた<sup>3</sup>。それまでのおよそ 10 年間の発掘調査によって、六頂山墳墓群は、渤海の王室貴族墓が含まれていることは明らかとなり、先行研究でふれたように渤海史研究に多くの考古学実物資料を提供してきた。

こうして六頂山墳墓群の重要性が認められ、1961 年には中国国務院より「全国重点文物保护单位（遺跡）」と認定されるようになった。

1963 年から 1964 年にかけて、中国と北朝鮮の共同調査考古隊によって、I 墓区の 5 基<sup>4</sup>の墳墓と II 墓区の 15 基の墳墓が発掘調査された。この調査をとおして、これまで確認されていた大型石室墓のほかに土坑墓や中小型の石築墓も判明した。1966 年、北朝鮮側の考古隊によって調査結果がまとめられ<sup>5</sup>、その一員であった朱栄憲の著書は、日本でも公開された<sup>6</sup>。しかしながら、その内容は、高句麗に由来するとされる石室墓の研究のみであり、発掘された土坑墓の情報は脱落していた。そして、中国で調査報告書が公開されたのは、それから 30 余年過ぎた 1997 年であった<sup>7</sup>。

1997 年になり、延辺州文物管理委員会の要請で吉林省地質局の物質探査大隊が地中レーダー探査した結果、I 墓区で 56 基、II 墓区で 110 基の墳墓が検出された。そのおり、両墓区から、それぞれ 1 基の墳墓が発掘され、鉄鏃と銅帯鍔が発見されたという<sup>8</sup>。

2004 年から 2005 年にかけて吉林省文物考古研究所が中心になって、六頂山墳墓群の再調査と、一部の墳墓に対する部分的な発掘調査が行われた。その内容は、その後の発掘調査を含めて六頂山墳墓群の報告書『六頂山渤海墓葬—2004 年～2009 年清理発掘報告』（吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所、文物出版社、2012 年、以下『六頂山報告書』と略称する。）としてまとめられた。ここで『六頂山報告書』にもとづき、その発掘調査の概要と成果を次に述べる<sup>9</sup>。

2004 年～2005 年の調査は、1997 年に行った調査に基づいて、各墳墓に対して逐一調査を行い、2005 年夏まで、計 1.5 万 m<sup>2</sup>の墳墓群内で灌木・雑草の清掃や表土の除去を行った。さらに、墳墓の封石または蓋石と思われるものに対する調査と土墓だと思われるものに対する部分的発掘作業を行い、当該墳墓群に関する悉皆調査を行った。その結果、破損が甚だしい 8 基の墳墓を除いて、I 墓区で 105 基、II 墓区で 130 基、両区で計 235 基の墳墓が確認できた。この 235 基の墳墓をすべて図面に表したのが、前に掲げた図 5-2 である。

このとき発掘した墳墓は、これまでの発掘数が少なかった土坑墓と石槨（棺）墓が中心であり、さらに 1950 年代に発掘した時点の図面情報が不完全だった I 墓区の 10 基の大型墳墓（M1～M10）と M11 を再発掘した。2004 から 2005 年の発掘墳墓数は 36 基に達し、出土した遺物数は 600 余点にのぼっている。

2009 年に「墓群保護工程」が正式に始まり、延辺朝鮮族自治州文物管理弁公室と敦化市文物管理所は、I M2（貞恵公主墓）、I M4、I M8 の墳墓に対して、さらに部分的発掘を行い、I M4 の墳墓の排水システムを明らかにした。また I M2 の墓室構造を再確認した。

『六頂山報告書』では、2010年にすべての作業を終えたと記述している。

六頂山墳墓群に対する発掘調査は、1949年から2010年までの60余年間に3期に分けて行われた。すなわち、1949年～1958年、1963年～1964年、2004年～2010年である。その間、渤海史あるいは関連分野の研究者は六頂山墳墓群を重視して研究を進めてきた。以下、六頂山墳墓群に関する先行研究を整理し、これまでの研究の問題点を指摘したうえで、当該墳墓群の検討を行いたい。

## 第2節 六頂山墳墓群の先行研究

六頂山墳墓群で渤海第三代王大欽茂の次女である貞恵公主の墓碑が発見されたことにより、この墳墓群内の墳墓は渤海前期のものであることは早くから学界の共通認識となっていた。これまでの渤海の墳墓構造や土器編年などは、ほとんど六頂山墳墓群の発掘内容を基準にして行われてきた。そのため、六頂山墳墓群に言及した先行研究は多い。ここでは、六頂山墳墓群に関する主な先行研究を整理する。

1949年に六頂山墳墓群が発見された当時の資料は、非常に限られた情報しか残っていない<sup>10</sup>。

1950年代の調査によって、1959年まで計11基の墳墓を発掘し、80余基の墳墓が発見された。六頂山墳墓群を第一墓区、第二墓区と区別したのもこの時期である。王承礼と曹正榕が1961年発表した論文では、当該墳墓群の墳墓を大方石槨墓、中型石槨墓、小型石棺墓<sup>11</sup>と分類した。しかし、1979年に発表した王承礼の論文では、墳墓を石室墓（方形、長方形）、石棺墓と分類しており、同じ墳墓が時期を前後して、異なる分類がなされていたことがわかる。50年代の調査成果と研究成果は、この王承礼の1979年の論文に集約されている。それによると、以下の知見が得られる。

- (1) 六頂山墳墓群は、渤海前期の王室と貴族の墓地である。
- (2) 敦化の敖東城は、渤海前期の都城・旧国の遺跡地である。
- (3) 貞恵公主墓碑と石獅子の出土は、渤海と中原唐王朝との緊密な関係を反映している。
- (4) 墳墓と出土遺物は、渤海前期（8世紀）の社会面貌と社会発展レベルを示している。

具体的に言えば、墓碑に刻まれた墓誌では、公主に対して孔子と孟子の思想を基準として美化し、墳墓構造や規模の差異は渤海社会の階級間の対立があったことと封建礼制や道德規範があったことを示している。また、玉、鉄、銅製品と土器などの遺物は、渤海の遺物の時期を特定する標準になるだけでなく、精巧なものを生産できるのは渤海の社会生産レベルがある程度に達したということを示すものである。しかし、東京城（上京龍泉府）や中原の遺物と比べると、粗雑なものであり、その社会レベルにはまだ差がある。

- (5) 墳墓と出土遺物には、靺鞨と高句麗の文化要素が見える。

具体的に言うと、夫婦合葬、族葬、二次葬、火葬の埋葬習俗は、靺鞨の特徴的文化要素で、石室封土墓の様式は、高句麗の特徴的文化要素である。

上記のように、この時期の六頂山墳墓群に関する研究で、当該墳墓群が渤海前期の王室と貴族の墳墓であることを明らかにしたうえで、唐との緊密な関係、社会生産水準、靺鞨と高句麗の文化要素の議論が出始めている。墳墓の発掘例は少なく、当該墳墓群の階層も王室・貴族階層に限定されていた。墳墓数が少ないとはいえ、当該研究は社会階層の分析において後の研究に多大な影響を与えたと言えよう。

前述したように、1963年から1964年に中国と北朝鮮が共同調査考古隊を結成して六頂山墳墓群の20基の墳墓を発掘した。北朝鮮側の報告は、発刊当時に発掘調査の整理ができなかったため、13基の墳墓の発掘状況だけを掲載している<sup>12</sup>。中国側の報告は、当時発掘した20基の墳墓をすべて記述している<sup>13</sup>。この20基の墳墓を、中国側の報告書は、8世紀渤海早期の墳墓であることと、石室墓16基、土坑墓4基に分類している。さらに、墳墓周辺で瓦などが発見されたことにより「冢上作屋」の伝統を引く可能性があるとして指摘している。他方、北朝鮮では1970年代に共同発掘隊のメンバーであった朱栄憲が『渤海文化』を刊行し、日本でも翻訳された<sup>14</sup>。そこでは六頂山墳墓群の墳墓を大型石室墓、中型石室墓、小型石室墓などに分類していた。また、『渤海文化』では渤海の墳墓について高句麗墳墓の継承のみを強調し、靺鞨墳墓の要素には全く触れていない。

この1964年までの発掘成果にもとづいて研究していた研究者には、韓国の宋基豪、中国の魏存成、そして日本の臼杵勲がいる。

宋基豪の研究<sup>15</sup>は、六頂山墳墓群の墳墓をすべて渤海の王室貴族墓とみている。その前提のもとで、前渤海時代または渤海時代における粟末靺鞨の墳墓としている松花江第二流域の大海猛、査里巴、老河深墳墓群の墳墓属性との比較、さらに高句麗墓制研究との比較を行った。その結果、六頂山墳墓群は、石室墓やその構造（貞恵公主墓の四隅三角持ち送り式）などは高句麗の文化要素であり、火葬や靺鞨罐などは靺鞨の文化要素であるとした。そのうえで、考古学的<sup>16</sup>にも、身分的に上に行くにつれ、高句麗の文化要素が明確に表れていると結論付けている。六頂山墳墓群のI墓区を南部と北部に分けて検討したことは先駆的な研究である。しかし、当該研究の時点で石室墓が主流で、土坑墓の発掘事例が少ないということで上層部へ行くにつれ、高句麗的要素がみられるという結論は、現在の発掘状況からみると、あまり説得力を持たない。

魏存成の研究<sup>17</sup>は、牡丹江上流域に位置する六頂山墳墓群が第二松花江流域の墓制を継承し、牡丹江中下流域の墳墓形成に影響するものだという位置づけの中での研究である。それまで発見された墳墓を長方形土坑墓、石壙墓、石室墓、石棺墓に分類し、その構造を逐一説明したのち、石棺墓以外の墳墓は木棺または木槨を使用するが、木槨使用の墳墓は火葬、木棺使用墳墓は火葬しない傾向があると指摘した。また、「珍陵」をI墓区M6とし、被葬者を大欽茂の妃としている。さらに、出土遺物は、金属製品のなかで、鉄器の比率と

武器、狩猟道具の製品が減少し、貴金属の比率と日常生活および装飾品が増加しているという。また、六頂山墳墓群の上限を渤海の建国期、下限を 8 世紀後半とし、第 1 回目に上京を都としていた時期にも、ここは王室の墳墓区域として使われたと結論付けている。魏の研究は、六頂山墳墓群全体の議論であり、区域別の議論はしていない。

白杵勲の研究<sup>18</sup>は、六頂山墳墓群を鉄器時代東北アジアの靺鞨社会に位置付ける研究である。当該墳墓群は 8 世紀ごろにあたるという。白杵の研究でも当該墳墓群を区域ごとに分けて考察しており、I 墓区南半は、王族や陪葬が許された上級貴族の墓域と考え、I 墓区北半と II 墓区は、墳墓規模から I 区南半より下位の集団の墓域であるとしている。鉄器時代の東北アジアの社会、とりわけ、靺鞨社会の形成を考察する研究であるため、六頂山墳墓群は一つの事例に過ぎず、区域別に立ち入った詳細な検討はしていない。また、日本には小嶋芳孝<sup>19</sup>による六頂山墳墓群に関する簡単な紹介がある。

前述したように、2004 年から六頂山墳墓群は悉皆調査されている。この 2004 年から 2005 年までの調査成果を取り入れたのが、王志剛の研究<sup>20</sup>である。その研究では、当該墳墓群の墳墓を土坑墓、石槨封土墓、石壙封土墓、石室墓と分類している。また、祭台（石台遺跡）、住居遺跡、I M3 の墓上建築、建築材料を紹介している。王志剛の研究は、六頂山墳墓群の下限を 8 世紀末としている。墳墓構造の変遷においては、土坑墓は、石材を使用してなかったものから使用したものへと、石槨封土墓、石壙封土墓は、石室墓へと変遷したと指摘している。さらに、墳墓群を 5 つの区域に分けている。墳墓類型の集中度により、I 墓区を南、北と 2 つに分けており、II 墓区を 3 つの区域に分けてから、渤海の陵園制度や石構墓が主流になっていく過程を立論している。また、墳墓構造や出土遺物、埋葬習俗などを整理しながら、当該墳墓群は、靺鞨文化を主体とし中国東北地方における各民族の文化要素を取り入れて造営されたものであると結論付けている。この研究は最新資料を取り入れ、多くの点で示唆を与えているが、当該墳墓群の社会階層などに関する議論に及んでいない。

2004 年の六頂山墳墓群に関する発掘調査内容は、2009 年第 6 期の『考古』に簡単な報告文<sup>21</sup>が載せてあり、その「結語」の部分で「墓葬形制」と「墓群年代」に関する議論をしている。「墓葬形制」で、土坑墓の特徴は浅い穴を掘ったのち、薪を積んでその上に棺を置いて火葬したものであるという。石室墓に対しては、これまで II M5、II M6 のように墓壁の低い墳墓を石室墓に含めているが、それを区別すべきだとしている。ただし具体的にどのような名称とすべきか書かれていない。また、I M104、II M3、II M28 のような墳墓は石槨墓と呼ばれてきたが、今回の調査で墓内に木棺、棺釘など木質の痕跡が検出されたことにより「石槨墓」と呼称すべきだとしている。基壇を持っている I M1 や I M5 は石室墓と呼べるが、I M2 と明らかにその構造が異なるため、新しい墳墓構造であるとしている。それは年代の議論とも関係するが、これまで渤海早期と言われた六頂山墳墓群で、780 年築造の貞恵公主墓は、必ずしも最後に築造した墳墓ではなく、墳墓構造、三彩壺（I M5）の副葬品などから判断して、I M1、I M5 は、貞恵公主墓より後の時期に築造した墳墓であるとしており、渤海前期という時代区分を提唱している。さらに、II 墓区では大型石室墓

が発見されず、ⅡM5、ⅡM を含む中小規模の墳墓が多いことと副葬品が少ないことから、多くの墳墓は平民墓（一般の庶民の墳墓）であるとしている。最後にⅡ墓区の土坑墓は、包石を有するものが周縁に位置し、包石をもたないものが中央に位置している。墳墓群が中央から造営されるという論理から、包石を有するものが包石を持たないものより時期的に後の型式であるという。Ⅰ墓区の数少ない土坑墓は包石を有している。したがって、Ⅱ墓区はⅠ墓区より造営時期が早いと断じている。この簡報には限られた情報しか載せていないが、綿密な調査を終えた執筆者らの判断であり、詳しい議論において墳墓群形成などの議論には信憑性があると思われる。しかし、Ⅰ墓区を王室貴族墓、Ⅱ墓区を平民墓と一概にいうのは平板すぎる。渤海の社会様相を検討している筆者には、当該墳墓群に埋葬された多くの被葬者を王室貴族と平民とに2分すること自体には納得しがたい。

2009年の発掘調査の簡報を踏まえた日本での研究として中澤寛将の渤海墓葬研究<sup>22</sup>がある。そこでは、主にⅠ墓区南部の大型石室墓や基壇を伴う石室墓を取り上げ、土坑墓と石壇墓が密集するⅡ墓区とは明らかに様相が異なるとしたうえで、Ⅰ墓区南部の墳墓を8世紀後半代の王族や上級貴族の墓域であると推定している。一方、第Ⅱ墓区では、土坑墓、石壇墓、石室墓、木槨墓が検出されているとしており、第Ⅱ墓区は第Ⅰ墓区とともに、下級貴族層や平民層の墓域と推定している。2009年の簡報より、社会階層の区分においては再分化して王室墓、上級貴族墓、下級貴族墓、平民墓としているが、その区分における下級貴族墓という部分に注目したい。ただ、そもそも貴族という階層の概念に対して、渤海の社会状況に関する議論抜きで取りあげることに疑問を覚える。

最後に、『六頂山報告書』に記された研究成果<sup>23</sup>を取り上げると、以下ようになる。

2009年の大型墓発掘調査における主な成果は、『六頂山報告書』に以下の3点であると書かれている。

第一に、これまで発掘記録されなかったⅠM17号大型石室墓を確認したこと。

第二に、これまで石室墓であると認識していたⅠM10とⅠM3を土坑墓に分類できたことと、そのうちⅠM3から「冢上作屋（墓上建築）」が確認できたこと。

第三に、ⅠM1、ⅠM5から墓室の外壁を発見でき、渤海早期に封土を加えない大型墳墓の存在を確認したこと。

そのほかの成果として、中小型土・石の墳墓の発掘は、渤海早期の墳墓構造、葬送儀礼などへの理解を深めたこと、さらに表土除去の過程で発見した石台や住居の遺跡に関する発掘調査では当該墳墓群の実態についてより明らかになったことを報告書は挙げている。

さらに、2009年の発掘調査で明らかにできた事が次のように述べられている。

第一に、出土した各種の遺物に対する分析を通じて、渤海文化は靺鞨を主体として夫余と高句麗や中原文化の要素を吸収していることが判明した。靺鞨文化の要素は土器や金属器に見ることができ、中原文化の要素は絞胎瓷器、三彩陶器、銅鏡や獣面磚に見ることができ、夫余と高句麗文化の要素は主に瓦に見ることができる。

第二に、墓葬形状の変化や分布状況から、土坑墓が土坑包石墓から土坑石辺墓、石棺（槨）

へと変遷し、石室墓と坑室墓は墓室の形状を二種類に分類でき、また墓室の地表からの深さでも分類できる。土器形式の様相差と第Ⅰ墓区の14号墓と5号墓の重複関係から、石室墓と坑室墓では方形が長方形より古く、墓室の構築位置も地上での構築が地下での構築よりも古い。

第三に、各類型の埋葬様式に見る新旧の変化と墓群における分布状況をもとに、第Ⅱ墓区東側の土坑墓集中区、中央西部の石坑墓集中区、第Ⅰ墓区下部の大型石室墓区に区分することができる。第Ⅰ墓区上部と第Ⅱ墓区西部周辺の二つの区域では、埋葬様式や規模と分布状況が比較的一致していることから、これら二つの区域の墓群は、第Ⅱ墓区の中心部に築造された墓群より新しく、この地域が墓群の拡大により形成された可能性を示している。

第四に、これまでの数次にわたる発掘調査を総括すると、火葬、二次葬（再葬）、合葬の習俗があり、異なった埋葬様式が存在することは、渤海の人びとが多くの種族で構成されていた歴史を反映している。2009年の調査で検出された石組基台と住居跡は、渤海の埋葬儀礼に新たな資料を追加するものとなった。第Ⅰ墓区の3号墓と2号墓から出土した瓦の様相や使用方法に差異があったことは、「冢上に建物を作る」（冢上作屋）習俗の中で「建物」のあり方が異なっていたことを示している。

第五に、2009年の調査では、貴族墓が多く王族墓は貞恵公主墓の一例だけという六頂山墓群に対する従来の見解が支持されている。多数の中・小型の墳墓は、この墓群が王室と関係を持つ貴族の共同墓地だったことを示している。

第六に、墓群の年代については、出土した土器の比較検討から、永吉の查里巴遺跡（查里巴墳墓群）や寧安の虹鱒魚場墳墓群の時期を上限とし、虹鱒魚場墳墓群三期を下限とする8世紀代と比定されている。墳墓群の周辺部に造営された長方形の墓室を地下に持つ第Ⅰ墓区の6号墓と、構築層位の関係からやや新しいと判断された第Ⅰ墓区14号墓は、いずれも9世紀初頭の造営だった可能性がある。

これまでの研究では、考古学資料の増加により、六頂山墳墓群に関する研究も進化したと言える。社会階層に関する議論でも、王室貴族墓や唐との緊密な関係、高句麗・靺鞨との文化的淵源にしぼって議論したことから、墳墓群をいくつかの区域に分け、王室貴族墓、下級貴族墓と平民墓を分けて考えるようになった。また、墳墓構造や埋葬習俗、出土遺物についての傾向もある程度把握できるようになり、研究は格段に進化したと言える。しかし、2004年までの調査は、当該墳墓群の悉皆調査が行われなかった時点での調査であり、それに基づく研究は、墳墓群全体像を把握するには限界があった。悉皆調査後の研究もいくつかあるが、墳墓構造や埋葬習俗、出土遺物などを綿密に検討したうえでの文化要素や社会階層などに関する研究はまだ試みられていない。本章では、以上のような先行研究と問題点を念頭におきながら、当該墳墓群の年代を議論した後、区域ごとにわけて、墳墓構造と分布、埋葬習俗、出土遺物を検討したうえで、8世紀の渤海の社会状況から文化要素と社会階層について考察してみたい。

### 第3節 六頂山墳墓群の年代

六頂山墳墓群には放射性炭素測定（C<sup>14</sup>）の報告がない。そのため、C<sup>14</sup>による墳墓年代の確定は、この墳墓群ではできない。

しかし前述したように、六頂山墳墓群Ⅰ墓区にある2号墓より墓碑が発見されている。その墓碑には「貞恵公主墓□□序」という一文が書かれており、そこに記された紀年に関連する一句は次の通りである。

公主者我 大興宝曆孝感□□□法大王之第二女也  
宝曆四年夏四月十四日乙未□□外第  
春秋四十諡曰貞恵公主宝曆七年冬十一月廿四甲申陪葬於珍陵之西原<sup>24</sup>

ところで、1980～1981年に吉林省和龍県で発掘調査された龍海墳墓群で「貞孝公主墓誌並序」<sup>25</sup>が見つかっている。これは、細かいところを除けば、上記「貞恵公主墓」の字句とほとんど同じである。「貞孝公主墓誌並序」により上記の墓誌を補い、句読して示すと、以下のようになる。

公主者、我 大興宝曆孝感金輪聖法大王之第二女也。  
宝曆四年夏四月十四日乙未、終於外第。  
春秋四十。諡曰貞恵公主。宝曆七年冬十一月廿四甲申、陪葬於珍陵之西原。

閻万章の研究<sup>26</sup>によると、宝曆は、渤海第三代王大欽茂の年号であり、宝曆四年は、777年、宝曆780年にあたる。したがって上記の墓誌文から、貞恵公主は、777年に死亡し、3年経った780年に葬られた。

以上より、IM2は貞恵公主墓とよばれる。ところが、発見された墓誌には築造年代は記されていない。しかし、780年に公主が埋葬されたことから造営時期が780年前後であると推測できる。ところが、そのほかの墳墓が造営された時期については、今のところ不明である。そのため、ここでは墳墓から出土した土器のうち靺鞨罐に注目することによって墳墓の造営時期を考えてみたい。

六頂山墳墓群で靺鞨罐は16基の墳墓から出土している。Ⅰ墓区のM3、5、7、10、24、53、56、104の計8基、Ⅱ墓区のM2、4～6、11、15、42、127の計8基の墳墓である。これらの靺鞨罐について、中澤寛将の「渤海の食器様式の変遷と地域性」に示された靺鞨罐の分類及び編年に従えば、Ⅰ墓区7号墓で刻み目突帯の靺鞨罐（A類）が発見され、Ⅰ墓区56号墓とⅡ墓区127号墓では刻み目は持たないが、口縁端面形が方形を呈する靺鞨罐（C類）が発見され、それ以外の墳墓で刻み目突帯のない靺鞨罐（B類）が発見されている。中澤の靺鞨罐編年によると、A類は7世紀代から8世紀代前半、B類は7世紀代後半から10世紀前四半期、C類は7世紀後四半期から10世紀前半となっている。

『六頂山報告書』では、土器編年と墳墓構造編年、墳墓造営の前後関係および上記の貞



恵公主墓誌の絶対年代などを勘案して、六頂山墳墓群を 8 世紀前半から 9 世紀初期までに造営された墳墓群とみている。

以上の土器編年の研究と『六頂山報告書』での年代比定を勘案して、六頂山墳墓群は、およそ 8 世紀から 9 世紀前半に造営された墳墓群と考えてよいだろう。つまり、現在の資料状況から六頂山墳墓群は 700 年前後から 850 年前後まで造営されたものとみられる。

#### 第 4 節 墳墓構造とその分布

この節では、前掲した渤海の墳墓構造の分類に依拠しながら、六頂山墳墓群の墳墓構造について検討してみたい。

本章第 1 節で述べたように、六頂山墳墓群の東西両墓区には、235 基の墳墓（うち I 墓区 105 基、II 墓区 130 基）が分布している。両墓区の墳墓を構築部材から分類した場合、土築墓と石築墓は発見されているが、磚築墓は発見されていない。土築墓は、単純土坑墓、土坑包石墓、土坑石辺墓に大別できるが、土坑石壁墓と土坑石底墓は見られない。石築墓は、積石石槨（棺）墓、横穴壙室墓、横穴石室墓に分けられるが、板石石槨（棺）墓、横口壙室墓、横口石室墓は認められない。次に墓区ごとに見てみると、I 墓区には上記の墳墓類型がすべてそろっているのに対して、II 墓区では石室墓が発見されていない。ここでは、さらに墓区を分けて考えてみよう。

図 5-4 で示したとおり、I 墓区は、最西端の I M8 から I M2 を経由して最東端の I M6 を結ぶ線を引くと、山麓部の南部（以下 I 墓区南部と称する）と山上部の北部（以下 I 墓区北部と称する）に分けられる<sup>27</sup>。このうち、I 墓区南部には 17 基の墳墓が分布しており、大型石室墓（9 基）を中心に、壙室墓（3 基）、石槨墓（2 基）、土築墓（3 基）が散在している。また、I 墓区南部の土築墓のうち、I M3、I M96 の 2 基は封土に石を覆う土坑包石墓であり、I M10 は単純土坑墓である。さらに、このうちの I M3、I M10 については、外観上の封土の規模は大型石室墓なみである。なかでも I M3 は、包石が基壇の形を持ち、東、中、西、北坑と四つの穴からなる。他方、石槨墓の規模は、他の区部と比べるとさほど差異がない。

I 墓区南部の墳墓の分布の様相は、I M1、I M7～9、I M17～18 の組、I M3、I M15～16 の組、I M5、I M13～14 の組というように 3 組の墳墓群が比較的近くに分布し、そのほかの墳墓は少し離れて単独に分布している。I M5、I M13～14 の組では、I M14 の西側墓壁が I M5 の封土の瓦礫を覆っており、I M5 ほうが先に築造されたことが伺える。つまり、石室墓が現れたのちに壙室墓が築造されたということを示すよい事例であろう。

I 墓区南部では 11 か所の石台遺跡が発見されている。これらの石台遺跡より土器罐、土器破片、銅環、鉄釘、瓦などが発見されたという。『六頂山報告書』によれば、石台遺跡は、臨時的に被葬者の遺体を安置し、そのつど祭祀儀礼をおこなう場所で、釘や瓦の出土から棺や槨を遮蔽する建築物が立っていた可能性も指摘されている。くわしい議論は避けるが、

虹鱒魚場墳墓群でも類似する石台が発見され、黒龍江省文物考古研究所『寧安虹鱒魚場：1992～1995年度渤海墓地考古発掘報告』（文物出版社、2009年。以下、『虹鱒魚場報告書』と略記）では大型墳墓の周辺で見つかったのが、祭壇であると推定されている。両報告書で石台遺跡の機能面の解釈において若干異なっているが、貴族墳墓の葬送施設であるとする点では一致している。なお、I墓区南部の山裾部でオンドルとカマド遺跡が2カ所発見され、住居遺跡であると断定されたようである。葬送儀礼をおこなう者が住む場所ではないかというが、その詳細な議論は今後の同様な発掘事例をまちたい。

次に、I墓区北部の墳墓分布の特徴を取りあげておきたい。まず、挙げられるのは、南部とほぼ同じ範囲内に88基の墳墓が集中して造営されていることである。特に、I墓区北部の南半部と西北部に密集している。墳墓構造からみると、壙室墓（10基）、石槨墓（23基）、土築墓（55基）が互いに混合して分布している。くわえて、石築墓系の石槨墓や壙室墓が集中するその周辺を土築墓がとり囲んでいる。墳墓規模も中小型の墳墓がほとんどである。そのうち、土築墓が6割以上を占めているが、そのうちわけは、単純土坑墓2基、土坑包石墓46基、土坑石辺墓7基<sup>28</sup>となっている。このように土築墓のなかでも土坑包石墓が圧倒的に多い。I墓区北部のこの現象は、土坑墓の発展過程で封土全体に石材を使うことが主流になっていくことを示しており、それは土の流失を防ぐためであったろう。

I墓区北部には南部で発見された付施設である石台遺跡や住居遺跡はない。

このように、同じI墓区でも南部と北部では、墳墓の規模や密集度、付施設などの点で異なっている。南部で貞恵公主墓が発見されたこともあり、南部は渤海の王室貴族の陵墓区域であることは明らかであろう。しかし、北部は墳墓構造などが南部と明らかに異なることから、必ずしも王室貴族墓であるとは言えない。葬送習俗や出土遺物を検討し、築造時期などを議論したのちに、この問題について再び取り上げることにしたい。

次に、II墓区の墳墓構造と分布の様相を確認してみたい。

前述したようにII墓区には石室墓がないけれども、図5-5で示しているとおり、この墓区もI墓区北部のように墳墓が密集している。また墳墓の種類の特徴として、土築墓が主体で、石築墓の石槨墓、壙室墓が所々に散在している。『六頂山報告書』によると密集しているなかでも2カ所の空白区域が存在し、その2カ所によって三つの区域に分けられるという<sup>29</sup>（図5-5参照）。すなわち、II M107～108からII M74を経てII M50を結ぶ線を引いてその東北の方に造営された墳墓群が東部、II M86、88からII M32、39を経てII M17を結ぶ線を引いてその西南の方に造営された墳墓群が西部、両線の間で造営された墳墓群が中部<sup>30</sup>である。若干恣意的な区域の分け方ではあるが、行論の都合上、『六頂山報告書』の示す区分方法に従って、II墓区に関する分析を行うことにしたい。

II墓区東部には、計33基の墳墓が分布している。構造分類による内訳をみると、壙室墓1基（II M1、3%）、石槨墓1基（II M67、3%）、土築墓31基（94%）からなっている。土築墓の内訳は、単純土坑墓21基（東部全体で64%）、土坑包石墓9基、土坑石辺墓1基となっている。つまり、単純土坑墓が圧倒的に多い。図5-5で確認してみると、北側にある壙

室墓ⅡM1の周辺を単純土坑墓ⅡM117～119、ⅡM121の4基の墳墓が取り囲んでおり、南側にある石槨墓ⅡM67の場合も、土坑包石墓であるⅡM66とⅡM68と、単純土坑墓であるⅡM51とⅡM71に囲まれている。石台遺跡や住居遺跡は発見されていない。

Ⅱ墓区中部では、計60基の墳墓のうち、壙室墓11基(18%)、石槨墓15基(25%)、土坑墓34基(57%)が発見されている。土築墓は、単純土坑墓12基、土坑包石墓19基、土坑石辺墓4基がある。土坑包石墓に限っていうと、Ⅱ墓区東部に比べて土築墓が占める割合は多いけれども、Ⅰ墓区北部より少ない。空間配置からみると、壙室墓は、ⅡM2～6とⅡM7、ⅡM11～ⅡM13、ⅡM15、ⅡM40、ⅡM42の二つの組に分けられ、それぞれ中部の北と南に分布している。その周辺は、土築墓や石槨墓によって囲まれている。また、石槨墓はほとんど土築墓の間に単独に分布している。ただⅡM55、ⅡM64～ⅡM65の3基の墳墓は、西から東へ向かって連続して並んでいる。Ⅱ墓区中部の南縁には、Ⅱ墓区の東部と西部にない石台遺跡を1カ所発見している。それは、Ⅰ墓区南部の11カ所の石台遺跡と類似の様相を呈している。しかし、Ⅱ墓区中部には石室墓がなく、石台遺跡と壙室墓との間には土築墓がはさまれている点は異なっている。果たしてⅠ墓区南部に石台の機能と一致するかどうかは不明である。

Ⅱ墓区西部には、計37基の墳墓があり、壙室墓1基(3%)、石槨墓4基(11%)、土築墓32基(86%)からなっている。土築墓が9割近くを占めており、この区域は土築墓が主流となっている。土築墓の内訳は、単純土坑墓14基(44%)、土坑包石墓15基(47%)、土坑石辺墓4基(13%)で、単純土坑墓と土坑包石墓の基数がほぼ同等であり、占める割合もほぼ半々である。空間配置は、西部の北半分に位置する壙室墓1基(ⅡM82)が石槨墓1基(ⅡM81)と隣接するほか、石槨墓はそれぞれ単独に土築墓に囲まれて分布している。土築墓のなかで、やや南のほうに位置する土坑石辺墓3基(ⅡM23、ⅡM25～ⅡM26)が逆「品」字型で分布しているほか、単純土坑墓と土坑包石墓が混ざりあって分布していて、所々で同じ種類の墳墓が集中して分布している様子がみられる。最も西側に位置する単純土坑墓ⅡM83とⅡM84、その両墳墓のすこし東側に土坑包石墓であるⅡM60、ⅡM79～ⅡM80(逆「品」字型)、ⅡM60西南方の土坑包石墓ⅡM9～ⅡM10、ⅡM60の南のほうにあるⅡM37、ⅡM58、ⅡM61の3基の単純土坑墓、さらに、Ⅱ墓区西部のやや東南の方に位置する単純土坑墓ⅡM29～ⅡM30、ⅡM32などの同種類の墳墓がそれぞれ2、3基単位で集中している。

Ⅱ墓区を東部、中部、西部の三部分に分けたため、各墳墓種類の空間配置が若干わかりにくくなった部分がある。ここでは、東部と中部にまたがってⅡM96～98、ⅡM106～110の計8基の単純土坑墓が集中している点を最後に付記しておきたい。

以上、六頂山墳墓群のⅠ、Ⅱ墓区を各区域に分けて、各墳墓構造の分布状況などを確認した。表5-1にまとめたように、Ⅰ墓区南部は石室墓が中心であり土築墓は1基のみで、そのほかの墓区には石室墓がなく、土築墓が優勢である。各区域における各墳墓種類の割合は、Ⅰ墓区北部とⅡ墓区中部が類似しており、Ⅱ墓区東部とⅡ墓区西部が類似する様相

を呈している。I 墓区北部とII 墓区中部の場合、前者は土築墓が6割強、後者は6割弱であるが、石槨墓の割合がほぼ同じなのに対し、壙室墓の割合は前者より後者が増えている。他方、II 墓区東部とII 墓区西部の場合は、前者は土築墓が9割強で、後者は9割弱であり、壙室墓の割合が同じであるのに対し、後者は石槨墓の割合が増えている。

表5-2は、墳墓数が多く、個々の墳墓規模が小さい土築墓が分布しているI 墓区北部とII 墓区南部の各種墳墓の基数と割合を集計したものである。表5-2から各区域の土築墓の種類を比較してみると、単純土坑墓が最も多いのはII 墓区東部で21基(68%)を示しているのに対し、最も少ないのはI 墓区北部で2基(4%)となっている。しかし、土坑石辺墓を確認してみると、単純土坑墓と全く逆の割合を示している。すなわち、I 墓区北部に土坑石辺墓がもっとも多く、46基で当該区域墳墓数の84%を示しているのに対し、II 墓区東部は1基で3%となっているのである。総じて、II 墓区における土坑石辺墓は少なく、中部に4基、西部に3基となっている。中部には土坑包石墓が最も多く19基56%、次に西部で15基47%を数える。ただ、中部と西部の単純土坑墓を見ると、中部で2基少なく、割合も10%弱と低い。これまで述べてきた墓区・区域ごとの墳墓構造の統計と、さらに上述の先行研究にもとづき渤海王国の領域内における墳墓の出現順序を単純土坑墓→土坑包石墓→土坑石辺墓→石槨墓→壙室墓→石室墓と仮定するならば、六頂山墳墓群の場合、II 墓区東部で墳墓が最も早く造営され、次にII 墓区西部、II 墓区中部、I 墓区北部、I 墓区南部という順で墳墓が造営されていったのではないかと推定される。

そこで、次節において各墓区のそれぞれ区域の葬送習俗と出土遺物を点検したのちに、当該墳墓群の年代と社会的様相について検討を試みたい。

表5-1 六頂山墳墓群の区域別墳墓類型の統計(『六頂山報告書』より筆者作成)

	I 墓区南部 (割合)	I 墓区北部 (割合)	II 墓区東部 (割合)	II 墓区中部 (割合)	II 墓区西部 (割合)
壙室墓	3 (18%)	10 (11%)	1 (3%)	11 (18%)	1 (3%)
石槨墓	2 (12%)	23 (26%)	1 (3%)	15 (25%)	4 (11%)
土築墓	3 (18%)	55 (63%)	31 (94%)	34 (57%)	32 (86%)
石室墓	9 (53%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)
合計	17 (100%)	88 (100%)	33 (100%)	60 (100%)	37 (100%)

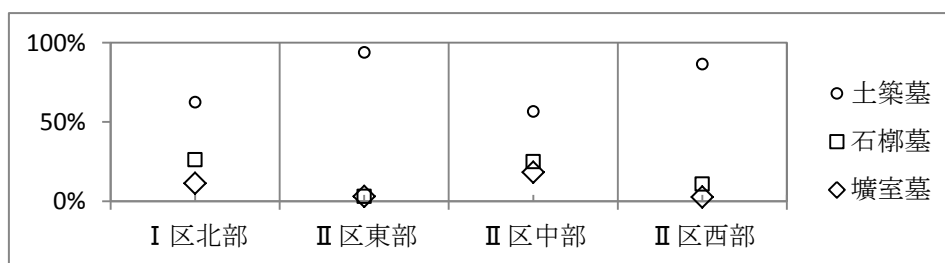


図5-3 各区域の墳墓構造の比率

(表5-1より筆者作成)

表 5-2 六頂山墳墓群の区域別土築墓種類の統計（『六頂山報告書』より筆者作成）

	I 墓区北部 (割合)	II 墓区東部 (割合)	II 墓区中部 (割合)	II 墓区西部 (割合)
単純土坑墓	2 (4%)	21 (68%)	12 (35%)	14 (44%)
土坑包石墓	7 (13%)	9 (29%)	19 (56%)	15 (47%)
土坑石辺墓	46 (84%)	1 (3%)	4 (12%)	3 (9%)
合計	55 (100%)	31 (100%)	34 (100%)	32 (100%)

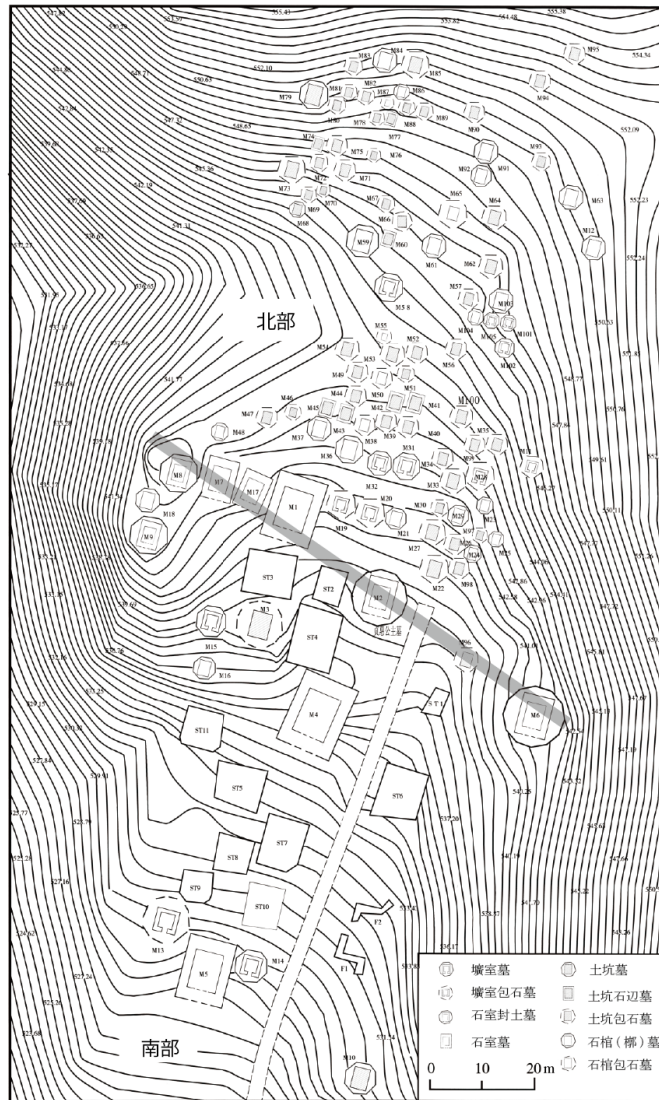


図 5-4 I 墓区墳墓配置図

（『六頂山報告書』 p.9 に加筆）

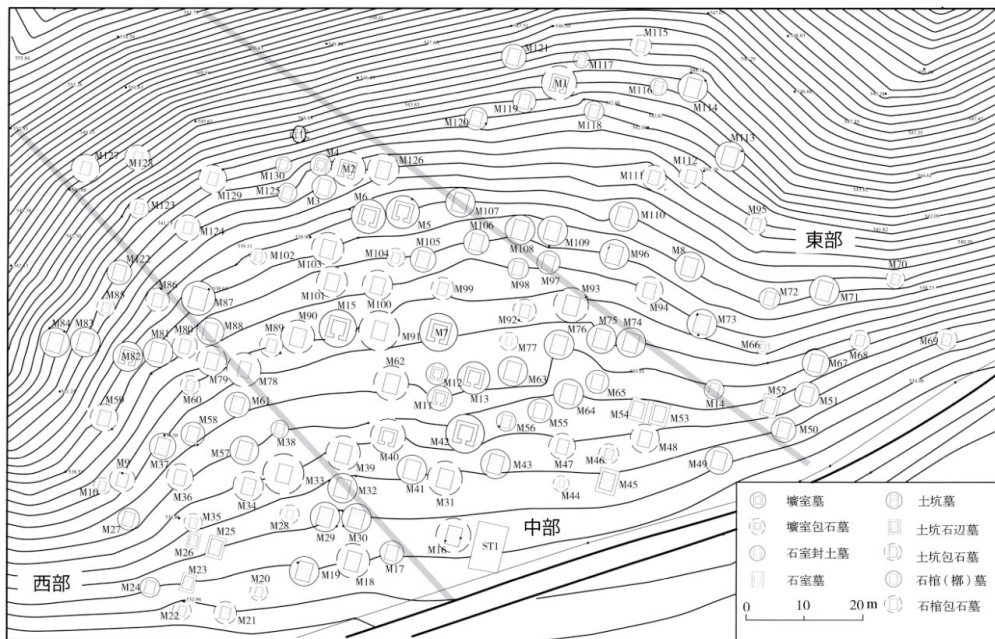


図 5-5 II 墓区墳墓の配置図

(『六頂山報告書』 p.30 に加筆)

## 第 5 節 葬送習俗

六頂山墳墓群からは、火葬、二次葬、多人葬の葬送習俗がうかがえる。

このうち火葬であることは、墳墓の中に焼土、木炭（炭屑、炭塊、炭条）、焼骨が検出されることから判断されている。つまり、ほとんどの火葬墓の場合、墳墓内に遺骨を納めたのち燃やすため、使用された棺や槨が燃焼し炭化し木炭の塊、屑または棒状になり、人骨は焼かれて黒ずんでいる。墓内で火葬されたため、墓内の土や石も焼かれ赤くなったり黒くなったりしている。

六頂山墳墓群の火葬墓を墳墓構造と区域別にみると、I 墓区南部に位置する石室墓にはほとんど火葬が認められない。IM4 には木炭が置いてあるが、それも湿気を取り除くためのものとして理解されている<sup>31</sup>。

壙室墓は、26 基あり、そのうち 7 基が不詳、3 基からは火葬の痕跡が認められない。また 16 基が火葬墓と見られる。区域ごとの分布をみると、火葬痕跡がない IM101 と IM102 は I 墓区北部、II M15 は II 墓区中部に位置する。火葬墓と見られる墳墓は、I 墓区南部に 2 基（IM14、IM15）、北部に 2 基（IM20、IM105）、II 墓区東部に 1 基（IM1）、中部に 9 基（II M2、II M4～7、II M11～13、II M15、II M40、II M42）、西部に 1 基（II M82）がある。II 墓区中部に壙室墓が集中している点は、墳墓構造と分布で検討した。この壙室墓が集中している II 墓区中部に限ってみると、11 基の壙室墓の内、9 基が火葬墓と見られている<sup>32</sup>。壙室墓が多くある墓区では、そのほとんどが火葬されたといえよう。他の区域は

墳墓基数が少なく、葬送様式が不詳の墓が多いため、壙室墓と火葬の関係について詳らかでない。ただ、Ⅰ墓区北部において、10基の壙室墓のうち、葬送様式不詳が6基、火葬痕跡がない墳墓が2基、火葬墓が2基である。Ⅰ墓区北部では火葬墓とそれ以外の墳墓が同じ数になっている。現在の発掘資料状況から、六頂山墳墓群において壙室墓は火葬される場合が多いと言わざるを得ない。

次に、石棺（槨）墓を見てみよう。墳墓群全体で45基がある。そのうち、葬送様式不詳が29基で、火葬痕跡がない墳墓が5基、火葬と見られる墳墓が11基である。

区域別に石棺（槨）墓が多い順から見ていくと、Ⅰ墓区北部に23基もある。そのうち、16基が葬送様式不詳で、4基に火葬の痕跡がなく、3基に火葬が認められる。Ⅱ墓区中部に15基ある。そのうち、11基が葬送様式不詳で、1基に火葬の痕跡がなく、3基に火葬が認められる。Ⅱ墓区西部に4基があり、1基の葬送様式が不詳で、1基に火葬の痕跡なく、2基に火葬が認められる。Ⅰ墓区南部には2基の火葬墓がある。Ⅰ墓区東部に1基あるが、葬送様式不詳である。

土築墓は155基ある。そのうち、葬送様式不詳の墓が34基であり、火葬と見られる墳墓が121基である。葬送様式不詳な墳墓を除くと、土築墓のいずれの構造もすべて火葬の痕跡がうかがえる。土築墓の場合、木棺または木槨も使用していたようであるが、火葬とはいえ、ほとんどの場合炭化されている。その一例を示しておこう。たとえばⅡM74の場合、土葬と火葬の関係をよく示している。土坑内の周縁に木槨の跡があり、墓壙床の中部と両端には断続の木板の灰跡が残存している。木槨は円木で作製、東北隅の保存状態が良好であり、東壁の下には、いまもって長さ約1.5mの未炭化の円木が数本ある。その直径は約8～10cmで、残存の樹皮からみると、これらは松木である。木槨の中には紅褐色の土が充ちており、炭、灰ときめ細かな焼土が混ざり合っている。さらに木槨の範囲内で大量の焼かれた人骨が発見されている。人骨の焼かれた程度は、場所によって異なり、動かすだけで粉になるものや中南部には比較的密集しているものなどとなっている。いずれの骨も比較的細かく、粒状となっており、肢骨が多く、頭骨の破片が北側と東南側で発見されている。これらは相異なる被葬者である可能性が高い。

以上からⅡM74は、二次葬の火葬墓であるが、その人数や性別は判明していない。

このように、頭蓋骨、肢骨、椎骨などの一部分が墓の一角に集中的に埋葬されていて、遺骨の状態が完全でないことから、二次葬と判断されている。このような埋葬方法は、別のところから骨を集めてくることによるのであろう。しかし、それはもともとそうであったかあるいは年月がたつにつれてそうなったかは必ずしもはっきりしない。多人葬は、同一の墳墓内に2個体以上の遺体が安置されていることをいう。ほとんどの場合、頭蓋骨の個数で多人葬と判断するようである。

## 第6節 出土遺物の検討

六頂山墳墓群は、2009年現在で235基の墳墓についての悉皆調査を終えたとはいえ、正式に発掘された墳墓は58基だけである。残りの177基の未発掘墳墓は、封土や表土を含む周辺の調査またはトレンチを設定した試掘調査に留まり、遺物の残存については詳らかでない。そこで、まず区域ごとに発掘状況を確認すると、表5-3の通りである。

表5-3 六頂山墳墓群各区域の発掘状況（『六頂山報告書』より筆者作成）

	全墓群	I 墓区南部	I 墓区北部	II 墓区東部	II 墓区中部	II 墓区西部
墳墓数（基）	235	17	88	33	60	37
発掘数（基）	58	15	15	5	17	6
発掘率	25%	88%	17%	15%	28%	16%

表5-3に示されているように、六頂山墳墓群では25%の墳墓しか発掘されていない。発掘数が最も多いのはI 墓区南部であり、88%の墳墓が発掘されている。この区域は貞恵公主をはじめ、渤海の王室関係人物が埋葬された区域であるということが分かっていたので、この区域の発掘調査が重要視された経緯があったからである。続いて、28%の墳墓が発掘されたのがII 墓区中部である。当該区域にはもともと（2004～2009年調査の前まで）石室墓と称された壙室墓が集中的に造営されており、1963から64年の発掘（15基）ではこの区域が重点的な発掘域となった経緯がある<sup>33</sup>。両区域以外の墳墓発掘率は、いずれもそれぞれの区域で15%～17%の低比率となっている。また発掘された墳墓でも、そのうち9基からは何の遺物も発見されていない。

未発掘の墳墓のなかで、封土や周辺の表土についての調査またはトレンチ試掘を通じて、遺物が発見された墳墓は32基あり、その内訳はI 墓区南部1基（IM13）、北部18基、II 墓区東部2基、中部8基、西部3基である。したがって、2009年現在、計79基の墳墓から遺物を発見したことになる。

以下で行なう出土遺物の区域ごとの分析は、このような発掘調査の状況を前提としている。そこから現れ出た埋葬の様相はあくまで現在の発掘調査から得られたものにとどまる。以下の分析は、後掲の表5-4（p.102）と図5-6（p.103～p.104）に基づきながら行いたい。

### I 墓区南部

17基の墳墓が発見され、発掘墳墓15基、未発掘墳墓2基（IM13、96）である。15基の発掘墳墓のうち、IM15からは遺物が発見されていない。2基の未発掘の墳墓のうち、IM13の墓域範囲内の表土から土器の破片が発見されているが、IM96の遺物状況は不詳である。したがってI 墓区南部では15基の墳墓の埋葬様相が確認できる。

出土遺物の状況を表5-4に従って詳しくみると、玉製品や瑪瑙製品の遺物はそれぞれ3基の墳墓より出土しており、I 墓区南部での出土墳墓率は20%となっている。



そのうち、玉製品は環と璧（ドーナツ状の遺物）の二種類からなる。I M3より玉環2点、I M8より玉環1点、I M4から玉璧1点が発見されている。

他方、瑪瑙製品は珠と管状の遺物であり、I M2（貞恵公主墓）で瑪瑙珠1点、I M3で瑪瑙珠2点、I M14で瑪瑙管1点が発見されている。

先に、玉製品と瑪瑙製品の両方を出土しているI M3をみてみよう。玉環2点と瑪瑙珠3点はI M3の中穴で発見されている。またI M3には、I 墓区南部の唯一ガラス珠（料珠）が発見された墳墓であり、30粒が中穴で、25粒が北穴で発見されている。これらのことから、I M3の四穴のなかでも中穴の被葬者（骨の鑑定で男性）の社会的地位が優位であることが伺える。

玉製品が出土したI M4とI M8をみると、I M4は墓内に排水施設を備えている独特の墳墓構造で注目を浴びていて、遺物も玉璧のほかに金銅製の半球状飾りの残片、銀鐲、銅鐲、銅鈴などの金属製装飾品が出土している。ほかに土器破片、瓦（乳釘文瓦当）、磚、基石などがあり、経済的富裕層に属していることは間違いないだろう。玉環を出土しているI M8は他の同品目出土の墳墓より墓域が小さいだけでなく、玉環以外には棺に使用する釘、土器の鼓腹罐しか発見されないことから、当該墳墓の被葬者はI M3やI M4の被葬者よりやや低い階層ではないかと想像される。

なお、瑪瑙製品を出土しているI M3以外の両墳墓（I M2、I M14）については、ほかの製品も伴出していることから、以下でさらに取り上げることにしたい。

次に、金製品をみてみよう。I M5とI M17の2基の墳墓では金製品が出土（13%）している。I M5からは1959年に金環が出土しているが、その発見場所や具体的な機能については詳細な記述がない。I M5におけるそのほかの伴出物を確認すると、金銅製品の環、杏葉飾、鉸具、帯飾がそれぞれ一点ずつある。そのうち、金銅製杏葉飾は馬具の一種類であるという<sup>34</sup>。理由は、この墓から馬骨が発見されたからであろう。しかし、そのほかの鉸具、帯飾と合わせて考えると、馬具であるとは必ずしも確定できない。馬具のセットとしてそろっているわけではなく、被葬者の革帯部品かも知れない。なぜなら、銅製品の中で革帯部品の一部である鉈尾やアムール型帯飾板（牌飾）なども伴出されているからである。鉄製品としては、棺に使用されたと思われる把手用の環、装飾用の泡釘、接合用の棺釘が発見されている。土器は盃が完全な形で出土したほかは、すべて破片の状態出土している。そのなかには靺鞨罐の口縁部3点が含まれていて、それらは刻み目のない突帯である。ほかに三彩壺が出土しており、I M2の貞恵公主墓の三彩器と同産地のものであるらしい<sup>35</sup>。I M5の規模や遺物状況から察して、王室クラスの階層に属する人物が埋葬されていたとみて大過ないだろう。I M5がI 墓区南部の周縁にあることから、I M2より後の時期に造営されたといわれている<sup>36</sup>。

I M17の墳墓の規模は、I M5に比べてやや小さい。2005年に発掘された墳墓であり、金製品の出土遺物は棺の装飾釘であり、副葬品ではなく棺の装飾品である。伴出遺物としては銀耳環1点、銀泡（画鋲形）釘5点、銅耳環1点、銅製のアムール型帯飾板（牌飾）1

点、棺の銅飾 2 点、鉄釘 1 点、棺釘 18 点と漆器 1 点があり、これらは、耳環など装身具と棺に使用する装飾具に分けられる。そのうち銅製のアムール型帯飾板は、第 I 期の最古段階のもの（上部が水平短刻線付、中部が矩形 2 孔型透かし、下部が鍵穴状文 a 型）で、7 世紀代に位置づけられるものである。墳墓規模や出土遺物から、I M17 は I M5 より劣っていることは時期的な差と考えられる。金製の装飾具を使用できる点から考えて、この時期の高い階層出身の被葬者だと思われる。金銅製品は 5 基の墳墓で出土（33%）している。貞恵公主墓（I M2）の羨道から金銅製泡形釘（円帽釘）が出土している。その機能については、これまでの報告で明言されていない。しかし、鉄製の棺装飾具などの存在を考慮すると、やはり当該金銅製品も棺の装飾具であり、盗掘の際に羨道に残されたのではないかと思われる。貞恵公主墓からは、そのほかにも羨道から墓碑 1 点、石獅子 2 体が発見されている。さらに墓室からは瑪瑙珠、三彩器の器底、鉄製の泡形釘、棺釘、棺環がそれぞれ 1 点ずつと、甲片（小札、鎧の部品？）が 6 点発見されている。当該墳墓の被葬者の身分（公主であること）が明らかであるため、これらの遺物を王室クラスの墳墓の指標にすることができる。

金銅製品を出土している墳墓は、I M2 と前述した I M4、I M5 以外に I M6、I M14 がある。I M6 は、その立地や墳丘規模などにより、貞恵公主墓誌に記されている「陪葬於珍陵之西原」の「珍陵」ではないかという説がある。I M6 から出土した遺物として、銀耳環 1 点、銅丸鞆 1 点、石獅子の耳破片 1 点、若干の土器片と壁画残片と思われる色塗り漆喰 2 点があげられている。これらは、上記 I 墓区南部の諸墳墓から出土した遺物と比べてさほど突出した点はない。しかし、封土の計が 22m を超えることと貞恵公主墓の東に位置することから、現段階では「珍陵」だとみなしてよいだろう。その墓主については、渤海二代王・大武芸、あるいは三代王・大欽茂、または大欽茂の妃と言われており、定かではない。いずれにせよ、墳墓の規模や出土遺物からみて王室級の墳墓であることはほぼ間違いないだろう。

I M14 は、金銅製品を出土した墳墓の中で、唯一、墓室の高さが低い壙室封土墓である。金銅製品は革帯部品である飾付の巡方 1 点である。しかし、ほかに瑪瑙管 1 点、鉄鏃 1 点、鉄飾破片 1 点、棺釘 44 点が発見されている。当該墓区における他の大型石室墓や土築墓より出土遺物の数は若干少な目である。この墳墓と後述する I M1 だけに鉄の武器類である鏃<sup>37</sup>が出土している。前述したように、I M14 は、I M5 のような王室級の墳墓が造営された後に、それを断ち切るかのようにその上に造営されている状況から考えると、I 墓区南部で王室級の墳墓が造営されなくなった後に作られた墳墓ではないかと思われる。I M14 の被葬者は、副葬された装身具などからみて経済的に裕福な階層であると推定できる。

銀製品は、5 基の墳墓より出土（33%）している。出土比率は金銅製品と同じく、やや高めである。前述した I M3（玉、瑪瑙、ガラス製品も伴出）、I M4（玉、金銅製品も伴出）、I M6（金銅製品も伴出）、I M17（金製品も伴出）の外、I M1 から銀製品が出土している。I M1 から出土した遺物には、そのほかに棺釘 1 点、鉄鏃 1 点、土器破片 2 点、香薫 1 点が

ある。大型石室墓から鉄鏃が出土した点は注目に値する。しかし、残念ながら墓室は、盗掘されており、いずれの遺物も封土より発見されたものであるため、被葬者の所有であるかどうかは不明である。そのため、被葬者の社会的地位を推測するのはむずかしいが、隣接する I M17 や I 墓区北部の I M19 などと比べて墓室の規模が大きいことから、王室級の被葬者が埋葬されたと推測しても大きな誤りではないであろう。

銅製品は、7 基の墳墓から出土（47%）している。I 墓区南部で約半数の墳墓から出土したことになる。I M7 と I M9 以外の 5 基の墳墓からは、上記の玉か銀製品のいずれかが伴出している。すなわち、銀製品と共に出土している墳墓は 4 基、金銅製品と共に出土している墳墓は 3 基、金製品と玉製品と共に出土している墳墓は、それぞれ 2 基、瑪瑙やガラス珠を共に出土している墳墓は 1 基となる。

このうち I M7 は、銅製の丸軛 1 点以外に、棺釘 1 点と鞆鞆口縁部 1 点が発見されている。しかし、この鞆鞆は刻み目がある突帯をもっていることから、7 世紀代の型式と推定される。I M17 と隣接する上に、規模もほぼ同じであり、年代も I M17 の銅アムール型帯飾板（牌飾）と同じ 7 世紀代に位置付けられることから、I 墓区南部では、この両墳墓が最も早い時期のものに属するのではないかと考えられる。そのため、I M7 は当該区域の諸墳墓に比べて薄葬であるとはいえ、被葬者の社会的地位が低いとは一概に言えない。

他方、銅の柳形状の釘がある I M9 からは、長頸瓶が出土している。この銅製の釘は封土から発見されたが、長頸瓶はどこで発見されたか明記されていない。この長頸瓶は頸部が長く、胴部の高さで頸部の高さがほぼ同じで、口縁は細い頸部からゆるやかに外反している。渤海王国において最も長期にわたって首都であった上京龍泉府で類似してしたものが見られている。しかし、形状が若干異なるため、その年代の前後関係は不明瞭である。墳墓の規模や出土遺物から判断して、I M9 は明らかに上記の各墳墓より、被葬者は経済的に豊かでないように思われる。しかし、盗掘をうけているため造営年代や被葬者の社会地位についての判断は今後に委ねたい。

鉄製品は、9 基の墳墓で出土（60%）している。半数を超える墳墓より出土したことになるが、主として棺釘が 8 基の墳墓から、武器である鏃が 2 基（I M1、I M14）の墳墓から、防禦用品の鎧の部品と思う甲片が 1 基の墳墓（I M2）から、武器か生活用品か定かでない刀子が 1 基（I M18）の墳墓から出土している。墳墓から出土する鉄製品のほとんどは、釘であって副葬品ではない。武器の出土は刀子まで含めて 4 基となり、I 墓区南部で 26% を占めている。

土器は、10 基の墳墓で出土しており、鉄製品と同様に 6 割以上の墳墓で発見されている。そのうち、鞆鞆またはその口縁部が発見された墳墓は 4 基あり、I 墓区南部で 26% を占めている。また土器のみが発見された墳墓は I M10 と I M13 である。うち、I M10 は単純土坑墓であるが、攪乱されているため土器はほとんど破片の状態出土している。ただ残された鞆鞆破片は、その口縁部の特徴から C 類の鞆鞆である。時代的には、やや新しい型であるだけでなく、立地も I 墓区南部の他の墳墓より離れている。I M13 は未発掘墳

墓であるため後日に委ねたい。

以上、表 5-4 (p.102) に従って I 墓区南部から出土した遺物の状況を確認した。いうまでもないことだが、この区域には王室級の墳墓が存在していることは確かである。その遺物も玉製品、瑪瑙製品をはじめ、金、金銅、銀の貴金属から銅、鉄製の装身具または棺の装飾具など多彩な様相を呈している。土器の中では中原地域の窯で作られたと思われる三彩器 (IM2、IM5) が特徴的であろう。渤海と唐の交易を物語る証拠でもある。また、靺鞨罐や銅のアムール型帯飾板を出土している IM7 と IM17 が I 墓区南部の北端に位置し、7 世紀の様式であると位置付けられる。先に述べたように IM2 (貞恵公主墓) は、780 年前後に墓主が埋葬された墳墓である。さらに I 墓区南部の IM5 は、墓壁の増強施設や周縁にある排水施設があり、また I 墓区南部の辺縁に位置していることから、IM1 と IM2 より後に築造されたといわれる<sup>38</sup>。したがって、I 墓区の王室級の石室墓や土築墓は、北端の方が時期的に早く築造され、南へ向かって築造されたと推定される。なお、IM14 は IM5 の上に築造されているため、IM5 より後の時代に作られたことになる。墳墓の規模、構造、出土遺物から考えて、IM14 は王室級の墳墓とはいえないであろう。ここでは、I 墓区南部が王室クラスの墳墓を含む区域であり、それを反映する出土遺物が発見されていることを念頭におきながら、それ以外の区域の墳墓の出土遺物の状況を確認してみたい。

#### I 墓区北部

I 墓区北部では 88 基の墳墓が発見された。このうち発掘墳墓は 15 基、未発掘墳墓は 73 基である。発掘墳墓のうち 6 基の墳墓は遺物が未発見である。未発掘墳墓のうち 18 基の墳墓から遺物が発見されている。したがって、I 墓区北部では 27 基の墳墓から遺物が発見され、部分的にはあるが、その埋葬の様相を確認できる。

I 墓区北部では、I 墓区南部と異なり、玉、瑪瑙、ガラス、金、金銅製品の遺物は発見されていない。銀製品が、土坑包石墓である IM73 と M75 の 2 基より出土しているだけである。このうち、IM75 の遺物は、封土の調査で発見された。そのほかの遺物の存在は、未発掘のため不詳である。IM73 出土の銀耳環は、西側の穴の中で出土している (上記、土坑墓の説明で IM73 に言及)。そのほかに IM73 から伴出した遺物として、銅巡方 4 点、銅丸鞞 4 点、銅鏡 1 点、棺釘 10、瓶口縁部 1 点<sup>39</sup>がある。銅の巡方、丸鞞と棺釘は、東側から出土しており、また銅の鏡は西坑からで、銀の耳環と同じ穴から出土している。『六頂山報告書』では、こうした遺物の出土状況から東穴の被葬者は男性、西坑の被葬者は女性であると判断している。いわゆる夫婦合葬墓であろう。I 墓区北部で銀製品を出土する 2 基の墳墓のうち、現時点では IM73 のみが発掘されているだけであり、他の墳墓との比較ができない状況にある。ただ、I 墓区南部の大型墳墓、とくに同じ構造の土築墓 IM3 に比べて遺物の質が落ちることは明らかである。

次に、銅製品をみてみよう。これは 7 基の墳墓で出土している。発掘された墳墓では上記 IM73 以外に IM87、IM101、IM102、IM105 の墳墓から出土しており、また未発掘墳墓の IM57、IM66 から出土している。出土品は主に革帯部品である鉸具、巡方、丸

軛である。また耳環、指環といった装身具も出土していて、アムール型帯飾板などはない。

鉄製品出土の墳墓は 15 基があり、そのうち発掘された墳墓は 7 基（I M24、I M 29、I M 60、I M 73、I M 101、I M 102、I M105）、未発掘が 8 基（I M19、I M 21、I M 26、I M 28、I M 41、I M 58、I M 66、I M 79）である。発掘された墳墓の場合、すべての墳墓で棺釘が出土している。そのほかの遺物を出土している墳墓では、I M29 から鉄鉸具針 1 点、I M101 から鉄丸軛 1 点、I M102 から鉄巡方 6 点と鉄鉞尾 1 点が出土している。つまり、棺釘以外の遺物は革帯の部品ということになる。ただし、未発掘墳墓の場合でも、I M19 以外の 7 基のいずれの墳墓からも鉄釘と思われるものが出土しているが、棺釘かどうかは不明である。

I M19 では鉄製のアムール型帯飾板が発見されている。これの上部形状は連珠 a 型、中部は矩形 3 孔型で、前述の臼杵編年案に従うと 8 世紀後半のものになる。また、I M19 と 7 世紀代の遺物を出土した I 墓区南部の I M7、I M17 とは隣接していて距離的極めて近い。しかしながら、距離的に近くとも、遺物の年代は離れているとみられる場合がある。たとえば、8 世紀後半であれば、780 年に貞恵公主が埋葬された I M2 がそれにあたる。したがって、壙室墓 I M19 は I 墓区南部の大型墳墓と同時に、または後に作られた蓋然性が高い。そのほか、釘のほかに I M21 では鉄環を、I M28 では鉄甲片を出土している。前者は装身具、後者は鎧の部品ということになる。未発掘のため、ほかにどのような遺物が伴出するのか現段階では不明である。

土器は 17 基の墳墓で出土している。そのうち、靺鞨罐を出土する墳墓は I M24 と I M56 の 2 基である。I M24 で出土した靺鞨罐は、口縁部に刻み目がない突帯がついているもので B 類に分類でき、胴部は無文であると同時に突帯はついていない。I M56 で出土した靺鞨罐は突帯がついていない口縁部であり、C 類に分類される。胴部は無文でかつ突帯がついていない。中澤寛将の靺鞨罐編年に従うと、ふたつの靺鞨罐は 7 世紀末から 10 世紀前半まで長期間にわたって使われた靺鞨罐であり、現在の編年案によって、I M24 と I M56 の前後関係を明らかにできない。I M53 からは靺鞨罐の口縁部が 2 点発見されているが、刻み目なしの突帯で B 類の靺鞨罐である。なお、胴部はどのような文様であるか詳らかでないため、7 世紀前後から以降のものとしか言えない。ほかに特徴的なものは、I M28 で橋状把手 1 点、I M56 で橋状把手付壺 1 点、I M57 で橋状把手 1 点が発見されたことがある。これらの器種は、第二松花江流域の粟末靺鞨の遺跡でよく発見されている。このように墳墓に同じ器種を埋葬することは、両地域間の人的交流あるいは物的交流を物語る証拠だといえるかもしれない。

以上、I 墓区北部の遺物を種類別に分析した。そこからまず浮彫りになってくるのは、玉、瑪瑙、ガラス、金、金銅の製品が、今の段階で一点も発見されていないことである。遺物では銀製品が最も価値のランクが上である。とはいえ、この銀製品が発見された墳墓であっても、I M75 が発掘されていないのでその詳細は不明である。他方、発掘された I M73 は銀耳環と銅鏡の組、帯銚と棺釘の組に分かれており、銀製品が出土したとはいえ、

薄葬と言わざるを得ない。銅製品を出土した墳墓も帯鍔が主流で、ほかに装身具が発見される程度である。鉄製品もほとんどが棺釘であり、次によくみられるのが帯鍔である。そのほか鉄甲片が 1 基から出土するのみである。ただ、鉄製のアムール型帯飾板は 8 世紀後半に編年されるものであり、I 墓区南部との造営時期を考えるうえで、若干の示唆を与えるものである。土器では、靺鞨罐が発見されたが、B 類と C 類のものであり、現在の編年案では時期の幅が大き過ぎる。橋状把手付壺の発見は、I 墓区北部と第二松花江流域との間で、何等かの人的または物的交流を物語るものであろう。

## II 墓区東部

II 墓区東部では 33 基の墳墓が発見されており、発掘墳墓 5 基、未発掘墳墓 28 基からなる。発掘墳墓の中で II M111 からは遺物が発見されていない。未発掘の墳墓の II M72 周辺から銀製品 1 点、同じく II M97 の周辺から鉄製品 1 点が発見されている。したがって II 墓区東部からは計 6 基の墳墓で遺物が発見されたことになる。

I 墓区北部と同様、II 墓区東部でも玉、瑪瑙、ガラス、金、金銅製品は现阶段で発見されていない。銀製品を出土している墳墓は、II M72（銀鐲 1 点）と II M94（銀耳環 1 点）である。前者は未発掘のため、そのほかの伴出遺物は知られていない。II M94 は発掘され、銅丸鞞 2 点、銅鉸具 1 点、銅鉞尾 1 点、鉄巡方 1 点、鉄刀 1 点、鼓腹罐 1 点と犬歯 1 本が伴出している。この墳墓は一人葬なので、これらの遺物は被葬者一人のために埋納されたことになる。銀製の耳環が出土したこと及び伴出した遺物も他の発掘墳墓より豊富であることから、II M94 の被葬者は、II 墓区東部においては裕福な階層に属しているのではないかと思われ、こうした人物がいわゆる在地社会の首長層クラスではないかと考えられる。

銅製品は 3 基の墳墓で出土している。上記の II M94 を除いて II M1（銅鐲 2 点、銅片 1 枚）と II M8（銅鐲 1 点）からも発見された。II M1、II M8 からはともに銅鐲が出土しているが、いずれも封土から発見されている。また II M1 の墓室内でも銅片 1 枚が出土している。II M1 の伴出遺物として瓶、碗、盤が発見されている。このうち盤は墓室内、碗は墓道、瓶は封土にあった。また、II M8 の場合、墓室内の炭化層のなかから土器片若干が発見された。これらふたつの墳墓の出土遺物を II M94 と比べてみると、やはり数のうえでも質のうえでも劣っていることがわかる。

鉄製品は II M94 から 1 点出土している。II M97 は未発掘墳墓であるため、現時点では 1 点の遺物のみの発見となる。II 墓区東部で発見された鉄製品の特徴を述べると、I 墓区で多くみられる棺釘が一点も発見されていないことがあげられる。発掘率が少ないため、断言できないが、釘の発見数がないということは埋葬方法である棺の使用法になんらかの相違があったのではないかと思われる。これは埋葬習俗と関連する問題である。

土器は 4 基の墳墓で出土する。II M1 については、前述したように瓶、碗、盤が出土しており、類似品はいまのところ確認できていない。II M8、II M14 の土器は破片状態で出土しており器種の復元はできない。II M94 から出土した鼓腹罐は渤海の遺跡でよくみられる鼓腹罐である。

Ⅱ墓区東部は発掘数が少ないことにより、遺物の発見数も少ない。現在の発掘状況からいえば、土坑包石墓であるⅡM94が、この区域において出土遺物が最も豊富である。しかしながら、Ⅰ墓区南部の大型墳墓、特に同じ構造を持っている土坑包石墓ⅠM3の出土遺物と比べるとその差は歴然としている。したがって、2009年の「発掘簡報」が、ⅡM94を王室級の墳墓とせず、平民墓としていること<sup>40</sup>には一部賛成できる。しかし、一概に平民と位置づけることには賛成できない。理由は、上述したように、在地社会における首長層クラスの墳墓と考えた方がよいように思われるからである。このことについては、さらに各区域の遺物出土の様相を確認した後に検討してみる。

## Ⅱ墓区中部

Ⅱ墓区中部では60基の墳墓が発見されており、発掘墳墓17基、未発掘墳墓43基からなる。発掘墳墓のうち2基からは何の遺物も出土していない。未発掘墳墓のうち8基の墳墓から遺物が発見されている。したがって、23基の墳墓より遺物が発見されたことになる。

玉製品はⅡM11の1基だけから出土している。このⅡM11の伴出遺物をみると、瑪瑙珠4点、金環1点、銅巡方2点、銅丸軛4点、銅環1点、鉄巡方1点、棺釘2点、鉄器残片1点、靺鞨罐1点となっている。出土遺物数はⅠM3ほど多くないが、遺物の種類はⅠM3とほぼ同等のものであると言える。

瑪瑙製品は5基の墳墓で出土している。上記のⅡM11とⅡM4、ⅡM46、ⅡM4126で瑪瑙珠が出土している。また、ⅡM15では瑪瑙珠と瑪瑙管が共に出土している。瑪瑙製品を出土しているこの5基の墳墓の伴出遺物をみると、まず目につくのが、いずれの墳墓からも靺鞨罐あるいは靺鞨罐らしい破片が出土していることである。なお、Ⅰ墓区南部の瑪瑙珠出土墓からは、ⅠM3を除いて靺鞨罐が発見されていない。Ⅱ墓区中部におけるこうした現象は、瑪瑙製品と靺鞨罐との間に何らかの関係にあるのではないかと推測させる。

そこで、ここでは他の伴出遺物をも確認しておく。

ⅡM4からはガラス珠1点、銀環2点と銅鐻1点、銅丸(三角)軛1点、鉞尾1点、銅環1点と鉄鏃1点が発見されており、装身具を中心とする出土遺物が豊富であると言えよう。銅の丸軛は他の丸軛と異なって上部の形状が三角形になっていて、銅鉞尾と共に墓室の中央部で出土している。被葬者の腰部につけられていたものであろう。墓室の中央部からは靺鞨罐も出土している。鉄鏃とガラス珠は墓室の北部の木炭層に埋もれていたものである。棺が焼かれて不完全燃焼の木炭が落ちて埋もれたものと想像される。銀環2点が埋土の中で発見されたほか、他の遺物はすべて墓室の周縁で発見されている。

ⅡM6からは瑪瑙珠64粒が発見されたほかに、ガラス珠6点、銅鐻3点、銅耳環1点、銅鉸具1点、銅丸軛1点、銅鈴11点、鉄族4点、鉄巡方5点、鉄丸軛3点、棺釘13点、靺鞨罐破片1点、鼓腹罐1点が発見された。金、金銅、銀製品がないとはいえ、個別の遺物としては数的に多く、瑪瑙珠の出土数は六頂山墳墓群全体で最も多い。またガラス珠や銅鈴なども多いと言えよう。ⅡM6は夫婦とおぼしき男女と3体の二次葬遺骨とが同一墓壙内に埋葬されていることから多くの遺物が埋納されることになったと考えられる。仮に

これが家族葬であるとしても、上記のような多くの品々を埋納できる家族であったわけで、この墳墓を経済的に裕福な階層のものと判断しても差し支えないだろう。

ⅡM15からは、瑪瑙珠2点と瑪瑙管1点、靺鞨罐破片が出土した以外に、銅鉈尾2点、銅丸軛2点、鉄瀟子（ピンセット形）1点と鉄器残片1点が発見されている。この墳墓には頭蓋骨8個が認められ、8人の被葬者が安置されていたはずであるが、骨がばらばらになっているため、その帰属がよくわからないという。8人の被葬者に対して以上のような遺物が埋納されているということは、ⅡM4、ⅡM6、ⅡM11に比べ若干薄葬のようにも思われる。しかしながら、被葬者に対して瑪瑙珠、瑪瑙管、銅鉈尾、丸軛を埋納できたことから、一概に平民墓と判断するのは適切ではないだろう。

ⅡM126からは瑪瑙珠1点、靺鞨罐の底と見られる土器1点のほかに、銀指環1点、銅巡方1点、銅丸軛2点、銅鉈尾1点、銅環1点、銅鳥形飾1点、銅アムール型帯飾板上半部残片1点と下半部残片1点（文様から一個体の可能性あり）、銅アムール型帯飾板の残片1点が出土している。銅アムール型帯飾板は、中央部形状が矩形3孔型で、下部文様が円文b型であり、白杵編年に従うと、8世紀後半に流行したものである。したがって、Ⅰ墓区北部のⅠM19とほぼ同時代のものであろう。ⅡM126は土坑包石墓で、中に二つの槨があり、少なくとも2体の被葬者があったと思われる。また、この墳墓は攪乱されていたため、その正確な埋葬状況は明らかでないが、この墳墓もやはり一般の平民墓といえるものではない。これもまた当該社会の富裕層の墳墓とみなしてよいだろう。

## Ⅱ 墓区西部

Ⅱ墓区西部では37基の墳墓が発見されており、発掘墳墓6基、未発掘墳墓31基である。発掘墳墓のうち、ⅡM86からは遺物が発見されていない。未発掘墳墓のうち、3基から遺物が発見されている。したがって、Ⅱ墓区西部には8基の墳墓から遺物が発見されていることになる。

まず、Ⅱ墓区西部にある墳墓からは玉製品が出土していないことを指摘しておきたい。

次に、瑪瑙製品としては、ⅡM10から瑪瑙珠4点が発見されているのみである。ここからは、伴出遺物として、銅指環1点、銅巡方4点、銅丸軛7点、鉄巡方1点が認められている。ⅡM10は3体の被葬者を埋葬した墳墓であるが、東から西に向けて肢骨のみ三体並んでおり、瑪瑙珠は三人の被葬者の近傍で発見された。また中央にある人骨の胸部と腰部の位置から、銅指環や帯銜具が発見されている。この出土状況から帯銜具が革帯用品であったことを物語っている。なお、Ⅱ墓区西部からは、ガラス製品、金製品、金銅製品、銀製品が発見されていない。

銅製品は、上記のⅡM10以外にⅡM9とⅡM82から発見されている。ⅡM9には少なくとも6体の被葬者があり、遺物としては銅巡方2点、刀子1点、棺釘20点が発見されている。そのうち、銅巡方2点は中央部にあり、一体の被葬者の腹部あたりで発見された。このことから判断してもこれは革帯用品であろう。また、鉄刀子は墓室の西南隅より出土している。棺釘は炭化された木槨の間で発見され、木槨を釘でつなぎ合わせていたことがわ



かる。ⅡM9 はⅡM10 と墓室の構造や規模、とりわけ墓室の南壁を石で積み互いにつないでおり、封土が部分的に連結していることから、両墳墓は緊密な関係があり、同じ家族の墳墓である可能性が指摘されている<sup>41</sup>。いわゆる家族葬のように考えられる。ⅡM9 とⅡM10 の両墳墓は、Ⅰ墓区南部のⅠM3 に比べて豊富な遺物はないが、瑪瑙珠や帯銚具を埋納できた富裕階層といえよう。したがって、両墳墓も単なる平民墓とは言い難い。ⅡM82 から銅製品である耳環 1 点が出土している。他の遺物として、残片であるが鉄の環と思われるもの 1 点、鉄釘 2 点、鼓腹罐の底と思われる土器破片が発見されている。壙室墓であるⅡM82 から発見された遺物は以上である。なお、頭蓋骨破片から 2 体の被葬者が埋葬されたようである。ただ、西壁が破壊されており、もともとの埋葬状況がどうであったかは不詳であり、社会経済的な地位の確定は難しい。

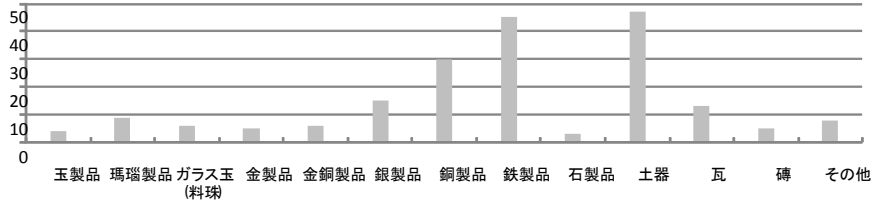
鉄製品は 6 基の墳墓で出土した。上記のⅡM9、ⅡM10、ⅡM82 のほかにⅡM28、ⅡM81、ⅡM84 である。発掘されたⅡM28 は石槨墓であるが、東西の両石槨からなっている。そのうち、西側の方石槨から鉄鏃のみが発見されている。なお、両石槨からは人骨が発見されていない。ⅡM81 も発掘された石槨墓である。人骨は未発見で、発掘の過程で銅鐲らしい遺物 3 点を発見した。ⅡM28、ⅡM81 とも人骨は見当たらず、遺物のみ少量残っている石槨墓の例である。石槨墓はどのような機能を果たす墳墓であるかを考えるよい事例と言え、発掘報告において、これらを安易に平民墓と結論付けるのは早計であろう。なお、未発掘墓ⅡM84 の封土から棺釘 2 枚が発見されており、棺があった可能性を示しているが、まだ完全に発掘されていないため、現時点で検討することはできない。

土器は 4 基の墳墓から出土している。そのうち発掘された上記墳墓ⅡM9 とⅡM82 以外に、未発掘墳墓のⅡM17 とⅡM61 でも発見されている。ⅡM17 は土器破片しかないが、ⅡM61 からは盆の口縁部 1 点、土器胴体部 2 点、橋状把手らしい土器 1 点が発見された。仮にⅡM61 出土の土器が橋状把手であれば、この区域でも第二松花江流域との関係を考慮に入れる必要が生じよう。ただ、この区域では、まだ靺鞨罐は 1 点も発見されておらず、その関係性は詳らかでない。

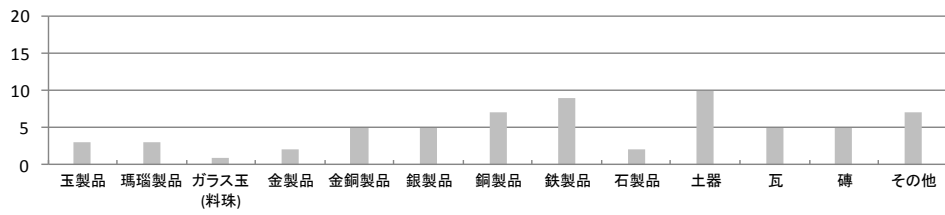
表 5-4 六頂山墳墓群出土遺物の墳墓基数内訳表（『六頂山報告書』より筆者作成）

	玉製品	瑪瑙製品	ガラス玉 (料珠)	金製品	金銅製品	銀製品	銅製品	鉄製品	石製品	土器
墓群全体 (79)	4 (5%)	9 (11%)	6 (8%)	5 (6%)	6 (8%)	15 (19%)	30 (38%)	45 (57%)	3 (4%)	47 (59%)
Ⅰ墓区南部 (15)	3 (20%)	3 (20%)	1 (7%)	2 (13%)	5 (33%)	5 (33%)	7 (47%)	9 (60%)	2 (13%)	10 (67%)
Ⅰ墓区北部 (27)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (7%)	7 (26%)	15 (56%)	1 (4%)	17 (63%)
Ⅱ墓区東部 (6)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	2 (33%)	3 (50%)	3 (50%)	0 (0%)	4 (67%)
Ⅱ墓区中部 (23)	1 (4%)	5 (22%)	5 (22%)	3 (13%)	1 (4%)	6 (26%)	11 (48%)	13 (57%)	0 (0%)	15 (65%)
Ⅱ墓区西部 (8)	0 (0%)	1 (13%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (38%)	6 (75%)	0 (0%)	4 (50%)

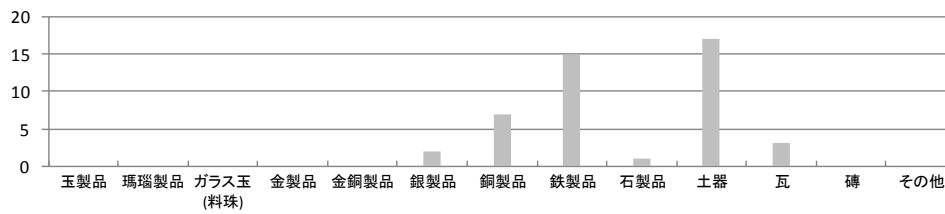
I・II 墓区全体



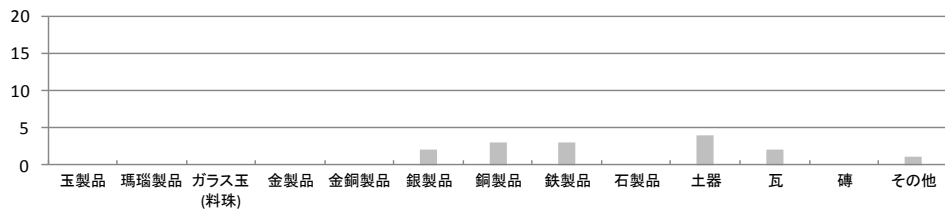
I 墓区南部(15)



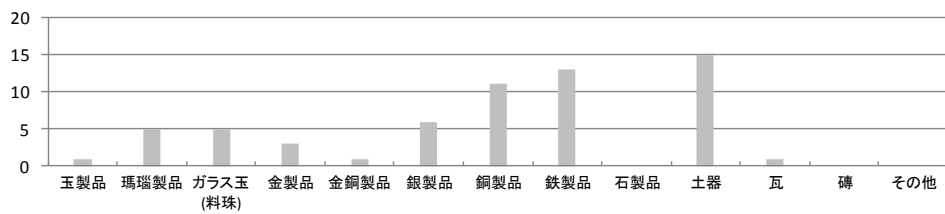
I 墓区北部(27)



II 墓区東部(6)



II 墓区中部(23)



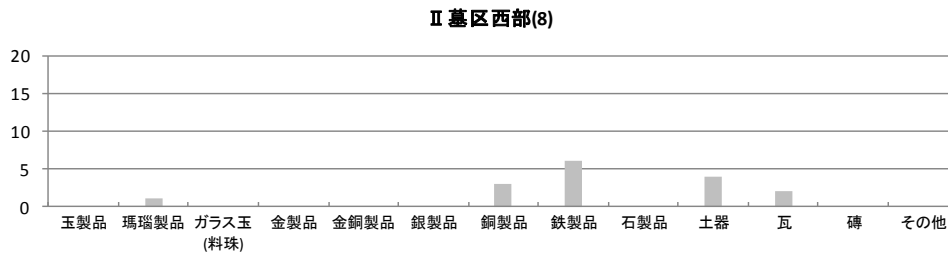


図 5-6 各墓域の出土遺物の個数 (『六頂山報告書』より筆者作成)

## 第 7 節 六頂山墳墓群よりみた在地社会

この節では、六頂山墳墓群の 5 つの区域とこの地域の在地社会の様相を確認しておこう。

すでに述べたように、墳墓の構造様式や副葬品の内容を念頭にいれると、Ⅰ墓区南部とほかの区域は、著しく異なっている。たとえば、本論文末尾の付表 2 (pp.162~174) には、六頂山墳墓群のうち規模の大きい一部の墳墓が記入されているが、とりわけⅠ墓区南部にある墳墓は、ほかの区域に比べて大きい。それは、先に挙げた図 5-2 (p.79)、図 5-4 (p.91)、図 5-5 (p.92) の墳墓配置図からも一目瞭然である。さらに、土築墓の全墳墓で占める割合がⅠ墓区南部では 2 割に達していないことに対し、ほかの区域は 3 割を超えている。逆に石室墓がⅠ墓区南部で 5 割以上発見されることに対し、ほかの区域では、現段階で発掘されていない。これらのことは、Ⅰ墓区南部のもつ特殊性を示すものとしてよい。

また、副葬品のなかで、高価な瑪瑙製品、ガラス製品、金製品、金銅製品は、Ⅰ墓区南部とⅡ墓区中部で発掘されたが、ほかの区域では発掘されていない。そのほかの埋納された製品では各区域ではそれほど特徴を見出せない。このことは、Ⅰ墓区では、南部の墳墓に埋葬された被葬者が経済的に優位であり、Ⅱ墓区では、中部の墳墓に埋葬された被葬者が経済的に優位であることを示している。Ⅰ墓区南部にⅠM2 (貞恵公主墓) があることはすでに述べたが、南部に造営されたそのほかの墳墓も同様な身分、すなわち渤海王国の王室と関連する被葬者が埋葬されたものであると思われる。Ⅰ墓区北部に造営された墳墓が王室墓ではないことは明らかであるが、それがどの階層の墳墓であるかは確かではない。

Ⅰ墓区北部の墳墓の構造や副葬品は、Ⅱ墓区の 3 つの区域にある墳墓と類似している。したがって、Ⅰ墓区北部、Ⅱ墓区東部、Ⅱ墓区中部、Ⅱ墓区西部を一つのグループとして理解できよう。そのグループの中で、Ⅱ墓区中部の副葬品内容をあらためて確認すると、瑪瑙、金製品などが出土していることから、ほかの区域に比べて豊かであることがわかる。また、靺鞨罐はⅡ墓区でしか発掘されていない。この種の遺物は、後章でとりあげる王室墓でも発見されていない。渤海王国の勢力拡張につれて領域内に取り込まれていった在地地域では、やがて靺鞨罐が墳墓に埋葬されなくなる傾向を示めしている。すなわち、靺鞨罐が発見されたⅡ墓区は、Ⅰ墓区南部に比べてより埋葬の年代が古いと考えられる。

このような現象をどのように解釈<sup>42</sup>しうるのだろうか。

本章では、六頂山墳墓群を渤海王国の初興の地付近にある墳墓としている。時間的には、8世紀代、つまり第1章の渤海王国の時期区分でいう前期にあたる。王室の成員である公主の墳墓はI墓区南部において発掘されているが、国王の墳墓はいまだ確認されていない。現段階において、六頂山墳墓群のI墓区南部にある墳墓は王室と関連がある墳墓群とみてよいが、国王墓は定かではない。いいかえれば、国王の墳墓はここにはない可能性がある。とはいえ、この墓区に営まれた墳墓の被葬者たちは、おおむね渤海王国の王権に近い支配層の人びとであることに間違いはないであろう。このことは、I墓区南部以外の墳墓とは非常に異なる埋葬の様相を呈していることから確かめられる。

次に、在地社会とその有力者層に関する文献史料の検討結果を六頂山墳墓群に適用してみると、以下のようにいえるだろう。たとえば区域別墳墓類型(表5-1参照)から明らかのように、六頂山地域で生活していた人びと(『類聚国史』に見える「靺鞨人」や「土人」であろう)によって営まれた墳墓が、土築墓を中心とするI墓区北部やII墓区の墳墓であったと考えられる。その中でも、出土した副葬品の質や量などの検討から明らかのように、II墓区中部の墳墓の出土品には、やや経済的に優位な人びとによって営まれていたと思われるものが含まれており、このことから(これはあくまでも傍証でしかないことは承知の上であるが)彼らこそが在地社会の有力者層、すなわち『類聚国史』に記された「首領」などに任じられた在地社会の有力者層ではなかったかと推測している。渤海王国はこうした既存の在地社会のうえに政治的影響力を行使することで成立したものであり、それにともない渤海王国の王室を取り巻く人々もまたこの地で生活をするようになっていったと考えられる。そのため、元来の在地社会と異なる埋葬様式を採用した墳墓(石室墓に代表され、公主墓では壁画や墓誌など唐の墓葬文化の影響を含む)が、王室の移住とともにI墓区南部に出現したのである。それがI墓区南部の墳墓様相であると思われる。それは、また文献史料でしばしば取り上げられるところの渤海王国前期に高句麗と靺鞨の両勢力によって王国が建設されたという言説と付合しているように思われる。こうした渤海王国の在地社会との関係は、王国の領域拡大と遷都をともないながら維持されるように仕組まれたと推測される。渤海王国の各地に営まれた墓葬文化は、王国と在地社会との関係をうかがう社会的、文化的指標のひとつとして取りあげる意味があると考えられる。

## 注

- <sup>1</sup> 筆者の出身地は敦化市である。六頂山にはダムとお寺(正覚寺)と本文で取り上げる六頂山墳墓群(現地では公主墳と呼称)などがあるので、当地ではかなり有名な観光地である。筆者は2003年8月、2006年7月、2012年3月計三回に渡って六頂山墳墓群付近の遺跡地を踏査したことがある。近年(2012年の確認)になって、「六頂山」は「六鼎山」と改名しただけでなく、さらなる観光地整備を行っている。
- <sup>2</sup> 当時、延辺大学歴史科の学生であった方学鳳の回想。方学鳳『渤海主要遺跡考察散記』(延辺大学出版社、2003年、p.2)。
- <sup>3</sup> 王承礼「敦化六頂山渤海古墓群調査簡記」(『吉林省文物工作通訊』1957年)、王承礼、曹正榕「吉林敦化六頂山渤海古墓」(『考古』1961年第6期)、王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」(『社会科学戦線』、1979年第3期)。
- <sup>4</sup> 1949年～1958年の発掘調査での12基の墳墓以外の5基の墳墓である。

- 
- 5 朝中共同考古学発掘隊『中国東北地方の遺跡発掘報告（1963～1965）』（朝鮮語）（社会科学院出版社、1966年）。
  - 6 朱栄憲著・在日本朝鮮人科学者協会歴史部会訳『渤海文化』（雄山閣、1979年）。
  - 7 中国社会科学院考古研究所「六頂山渤海貴族墓地」（『六頂山与渤海鎮』中国大百科全書出版社 1997年）。
  - 8 王志剛「六頂山渤海墓葬研究」（吉林大学碩士學位論文 2008年）、吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所「吉林敦化市六頂山墓群 2004年発掘簡報」（『考古』2009年第6期）、吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所『六頂山渤海墓葬—2004～2009年清理発掘報告』（文物出版社、2012年10月）。
  - 9 『六頂山報告書』pp.4～5
  - 10 王承礼「敦化六頂山渤海古墓群調査簡記」（『吉林省文物工作通訊』1957年、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社 1997年、pp.245～247）、王承礼、曹正榕「吉林敦化六頂山渤海古墓」（『考古』1961年第6期、pp.298～301、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社 1997年、pp.248～251）、王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」（『社会科学戦線』1979年第3期、pp.200～210）などが、現地での調査経緯を簡単に触れているだけである。
  - 11 王承礼、曹正榕「吉林敦化六頂山渤海古墓」（『考古』1961年第6期、pp.298～301、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社 1997年、pp.248～251）。
  - 12 朝中共同考古学発掘隊『中国東北地方の遺跡発掘報告（1963～1965）』（社会科学院出版社、1966年）。
  - 13 中国社会科学院考古研究所「六頂山渤海貴族墓地」（『六頂山与渤海鎮』中国大百科全書出版社、1997年）。
  - 14 朱栄憲著・在日本朝鮮人科学者協会歴史部会訳『渤海文化』（雄山閣、1979年）。
  - 15 宋基豪「六頂山古墳群と建国集団」（『渤海社会文化史研究』ソウル大学校出版文化院、2011年、pp.3～64、原題「六頂山古墳群の性格と渤海建国集団」、『汕耘史学』8、1998年12月）、宋基豪著、清水信行訳「六頂山古墳群の性格と渤海建国集団」（『青山考古』24、2008年、pp.45～90）。
  - 16 宋基豪『渤海政治史研究』（一潮閣、1995年、pp.45～76）。
  - 17 魏存成「牡丹江上游敦化六頂山墓葬」（『渤海考古』（第三章 墓葬）、文物出版社、2008年、pp.211～226）。
  - 18 白杵勲「六頂山墳墓群」（『鉄器時代の東北アジア』（第4章 靺鞨社会の形成—後期鉄器時代）、同成社、2004年、pp.232～233）。
  - 19 小嶋芳孝「六頂山墓群」（『アジア遊学』107、2008年、pp.126～127）。
  - 20 王志剛「六頂山渤海墓葬研究」（吉林大学碩士學位論文、2008年）。
  - 21 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所「吉林敦化市六頂山墓群 2004年発掘簡報」（『考古』2009年第6期、pp.3～14）。
  - 22 中澤寛将「六頂山墳墓群」（『北東アジア中世考古学の研究—靺鞨・渤海・女真—』（第7章 墓葬からみた渤海の地域社会、六一書房、2012年、pp.186～189）。
  - 23 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所『六頂山渤海墓葬—2004～2009年清理発掘報告』（文物出版社、2012年10月）。
  - 24 王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」（『社会科学戦線』1979年第3期、pp.200～210）。
  - 25 延辺朝鮮族自治州博物館「渤海貞孝公主墓発掘清理簡報」（『社会科学戦線』1982年第1期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社 1997年、pp.261～266）。



## 第6章 虹鱒魚場墳墓群の検討

第5章で扱った六頂山墳墓群は渤海王国の前期に造営された墳墓群であった。第6章で取りあげる虹鱒魚場墳墓群は、時期区分からいえば渤海王国の後期、9世紀後半から10世紀前半にわたって造営されたもので、渤海王国の都、上京龍泉府の西に位置している。本章では、当該墳墓群における墳墓の分布状況、規模、構造、出土遺物などを分析することを通して、渤海王国後期における在地社会の動向を検討したい<sup>1)</sup>。

### 第1節 墳墓の概要—立地、構造、埋葬形態—

虹鱒魚場墳墓群は、牡丹江の西6km、上京龍泉府遺跡の西8kmに位置している(図6-1)。墳墓群は、およそ4万m<sup>2</sup>(東西220m、南北200m)に広がり、周辺の地表より数十cm高い熔岩テラス状砂丘の上に分布している。

図6-2で示したように、この墳墓群は二つの墓区に分けられる。東西にのびる細い道を境に、南と北の二つの砂丘がそれぞれの墓区となる。北側をⅠ墓区と称し、南側をⅡ墓区と称する。Ⅰ墓区には39基の墳墓があり、Ⅱ墓区には284基の墳墓がある。Ⅰ墓区の敷地面積は小さく、Ⅱ墓区は比較的大きい。くわえて、Ⅱ墓区には7座の方壇と一つの建築物遺跡がある。Ⅰ墓区の南側は緩やかだが、北側は険しくなっている。Ⅱ墓区も南側は緩やかだが、北側は険しい。大部分の墳墓はⅡ墓区の南側に集中している。また、Ⅰ墓区とⅡ墓区の東、西、北側には墳墓が散在している。ほとんどの墳墓は南方向にむいている。虹鱒魚場墳墓群の造営年代については、六頂山墳墓群や龍海墳墓群のように正確な年代がわかる墳墓はない。『虹鱒魚場報告書』に記された放射性炭素(C<sup>14</sup>)年代測定値データによると、そのうちM2283号墓の人骨測定では、842年～1003年とされ、木の年輪により補正した場合には898～1036年とされる<sup>2)</sup>。いずれにせよ推定される年代の幅が約100年以上と、これらの値は参考データの一つにすぎない。

しかし、698年から926年にかけて存在した渤海王国と9世紀後半から10世紀前半まで営まれた虹鱒魚場墳墓群とは、時期の上で重なっている。そこで、本章では、虹鱒魚場墳墓群は渤海後期を中心に、継続して墳墓が造営されたものとして論を進める。したがって、造営年代の確度を少しでも高めるためにも、第2節で述べるように土器の編年に基づいた墳墓の編年を試みる必要がある。

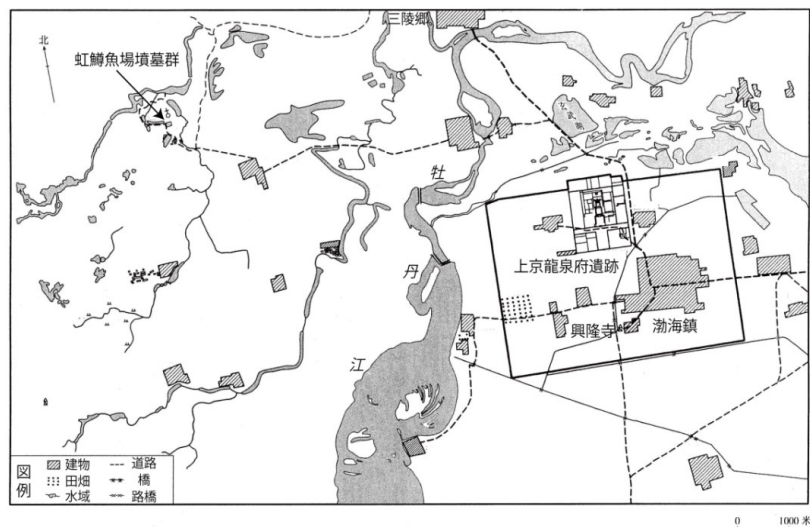


図 6-1 虹鱒魚場墳墓群の位置図 (『虹鱒魚場報告書』 p.4 図を加筆修正)

虹鱒魚場墳墓群の墳墓は、その構造と材質によって、石室墓、石壙墓、石棺墓、埴室墓、埴・石混築墓に分けられる。そのうち、I 墓区の墳墓は、すべて石で造られた石室墓、石壙墓、石棺墓で、II 墓区の墳墓は、2 基の埴室墓、1 基の埴・石混築墓を除いて、ほかはすべて石で造られた石室墓、石壙墓、石棺墓である。

石室墓<sup>3</sup>は、単室墓と双室墓に分類できる。そのうち、単室墓は、さらに墓道によって以下のように分けられる。

- 長方形墓室の壁面（多くは南面）の中央に墓道を設けた T 形単室石室墓
- 長方形墓室の壁面（多くは南面）の端に墓道を設けた L 形単室石室墓
- 長方形墓室で墓道がない単室石室墓（長方形単室石室墓）

石壙墓は、石材で墓壙を築造した墳墓である。虹鱒魚場墳墓群の中で、この類の墳墓の数は少ない。そのほかに石棺墓<sup>4</sup>があり、この類型の墳墓は、一種の葬具に当たるといってもよい。このように墳墓を分類すると、I 墓区、II 墓区における内訳は、次のようになる。

I 墓区の 39 基は、長方形単室石室墓 16 基 (41%)、石壙墓 10 基 (26%)、石棺墓 7 基 (18%)、双室石室墓 1 基 (2%)、形状不明の墳墓 5 基 (13%) からなる。また、II 墓区の 284 基は、T 形単室石室墓 88 基 (31%)、L 形単室石室墓 61 基 (21%)、長方形単室石室墓 79 基 (28%)、石壙墓 20 基 (7%)、石棺墓 19 基 (7%)、双室石室墓 3 基 (1%)、埴室墓 2 基 (0.7%)、埴室混築墓 1 基 (0.4%)、形制不明 11 基 (4%) からなる。このように、虹鱒魚場墳墓群では 9 割以上が石墓（石室墓、石壙墓、石棺墓）である。このうち、I 墓区の墳墓には、墓道がある墳墓がなく、II 墓区には墓道がある墳墓（T 形・L 形単室石室墓）が 284 基のうち 149 基もある。なお、王志剛の墳墓分類に従うと、上記分類の T 形単室石室墓と L 形単室石室墓が壙室墓にあたる。



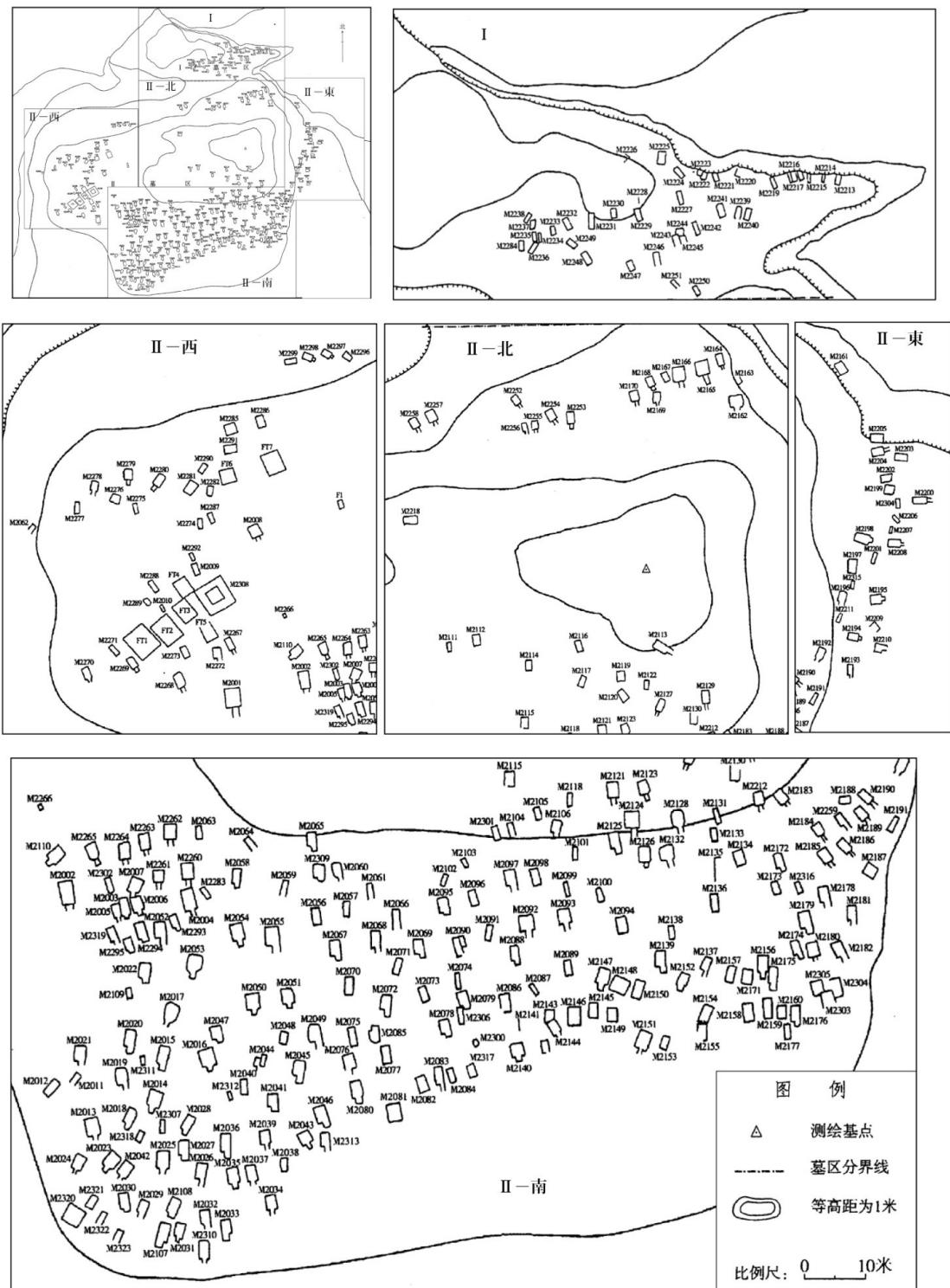


図 6-2 虹鱒魚場墳墓群の墳墓分布図 (『虹鱒魚場報告書』 pp.7~8)

また、図 6-3 は、墳墓の規模の分布を示している。図の中で墳墓番号を記した 12 基以外の墳墓は、すべて墓室面積 7 m<sup>2</sup>以下、高さ 1m 以下である。このうち墳墓群の最大墳墓は、M2001（墓室の長さ 413cm、幅 330cm、高さ 140cm）である。これは、Ⅱ墓区に位置する半地下構築の T 形単室石室墓で、墓室と墓道の壁には堅い白色石灰が塗られている。出土遺物の数は 160 点を数える。遺物については、後述するが、中には、金銅製や銀製、瑪瑙製などの装飾品が目を引く。そして、『虹鱒魚場報告書』は祭壇との距離の近さから、M2001 号墓が貴族墓であると推定している<sup>5</sup>。Ⅱ墓区の西側に 7 座の祭壇（FT1～FT7）が位置している。

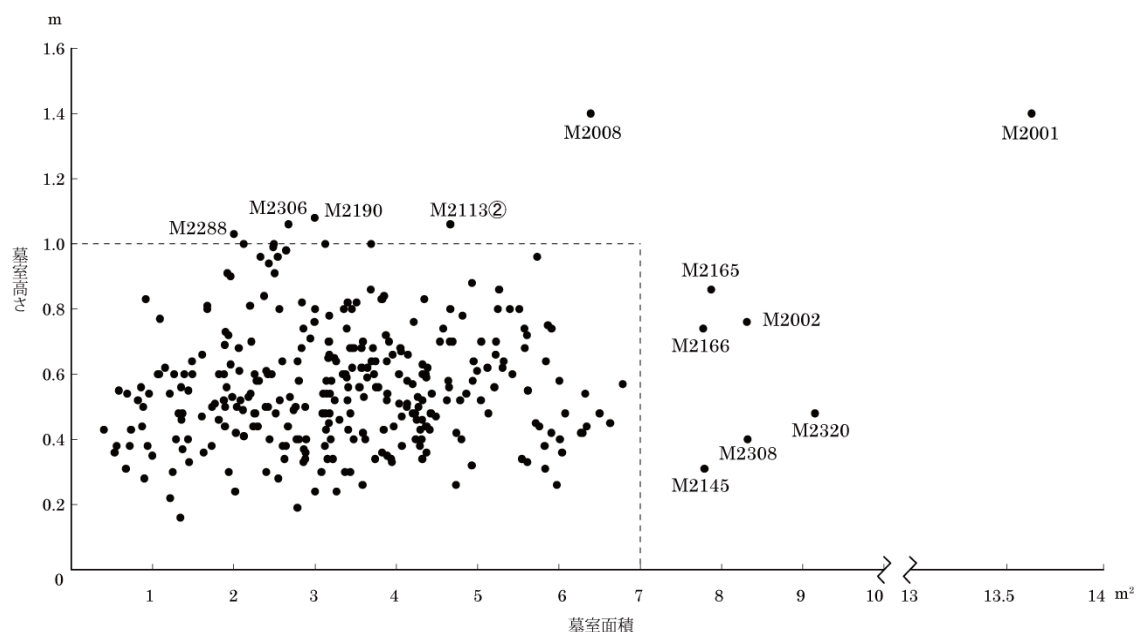


図 6-3 虹鱒魚場墳墓群内の墳墓の規模（『虹鱒魚場報告書』より筆者作成）

この祭壇の近くに位置する大型墳墓には M2008 あり、M2001 と同じくⅡ墓区に位置する T 形単室石室墓で、半地下構築である。墓室（長さ 284cm、幅 225cm、高さ 140cm）の規模は、墳墓群の中で M2001 に次いで大きい。封土の円丘は、7m を超え、内部墓室内部構造の天井は持ち送り式になっている。残念ながら、見つかっている人骨は、下顎骨が一つと肢骨がわずかである。この骨から墓主が女性であることが分かっている。副葬品はなく、埋土出土遺物には、土器蓋破片や靱鞆罐とみられる破片と瑪瑙管 1 点がある。祭壇の付近にある大型墳墓には M2288 があり、Ⅱ墓区に位置する長方形単室石室墓で、地下構築である。M2288 の墓室の長さは 280cm、幅は 80cm、高さ 103cm である。また、M2190、M2306 などの墳墓の規模は大きい、祭壇から遠く離れているのが特徴である。M2190（長さ 214cm、幅 140cm、高さ 108cm）は、Ⅱ墓区の南側の東端に位置し、地下構築の長方形単室石室墓である。M2306（長さ 334cm、幅 80cm、高さ 106cm）は、Ⅱ墓区の南側の中間に位置し、地下構築の石壙墓である。M2113 は、墳墓群全体のほぼ中央に位置し、二つ

の層位からなっている。そのうち、下層にある M2113②は規模が比較的大きいが、上層の墳墓に攪乱があるため、提示した規模の数値は必ずしも建造当時の数値といえない。それゆえ、ここでは検討の対象から外すことにする。

以上、大型墳墓 5 基のうち、注目されるのは M2001 と M2008 である。とりわけ、M2001 は、人骨、出土遺物（副葬品と埋土遺物）がともに多い。次に、ほかの墳墓群の中で渤海墳墓であると確定された墳墓と比較してみる。これらの虹鱒魚場墳墓群の大型墳墓を六頂山墳墓群の I M2（貞恵公主墓）、I M6（珍陵）、81 龍海 M1（貞孝公主墓）、04 龍海 M3（順穆皇后墓）、三陵郷王陵区の M1（三霊屯古墳）などの墳墓の規模（長さ、幅、高さ）と比較したのが、図 6-4 である。この 3 次元棒グラフは、底面の 2 軸を墳墓の長さ、幅に割り当て、棒の高さを墳墓の高さに割り当てている。ここで、墳墓の面積は、長さ、幅の積なので、その位置から、面積の比較ができる。手前が面積大で、奥が小である。つまり、墳墓の規模だけを見るとき、虹鱒魚場の M2001 と M2008 以外の墳墓は、他の墳墓群王族墳墓より、敷地面積と高さの数値が、小さい。M2001、M2008 号墓は、他の墳墓群の王族級の墳墓に劣らない大きさである。

また、大型墳墓の特徴は、周辺に祭壇が見られることである。先に述べたように六頂山墳墓群でも同様に大型墳墓の周辺に祭壇が見られる。しかしながら、龍海墳墓群と三陵王陵区で祭壇らしきものは見つかっていない。また、龍海墳墓群と三陵王陵区の大型墳墓のなかに棺床が見られるが、六頂山墳墓群と虹鱒魚場墳墓群の墳墓からは棺床が見られない。このような差異は、六頂山墳墓群、虹鱒魚場墳墓群、龍海墳墓群の地域差あるいは墓主の階層差、時間的変遷に由来するものであろうか。このような異同については、埋葬習俗や遺物なども合わせた更なる検討が俟たれる。

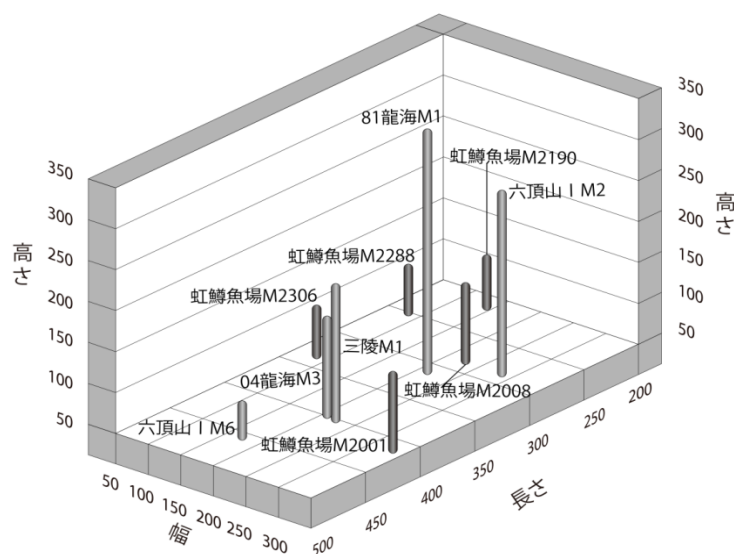


図 6-4 虹鱒魚場墳墓群大型墳墓と渤海王族墳墓の規模比較（各「報告」より筆者作成）

被葬者の性別は、男性の骨が 215 体、女性の骨が 119 体、不明が 154 体からなり、判明している限りでは、墳墓群全体の男女比が 1.8 : 1 であることが分かる。男性のみの墳墓が 63 基、女性のみの墳墓が 31 基、男女ともに埋葬されている墳墓が 46 基ある。また、火葬の墳墓が 7 基しかないことに注目したい。第 2 松花江流域の粟末靺鞨の墳墓とされる大海猛墳墓群や查里巴墳墓群及び六頂山墳墓群には、火葬の墳墓が多く見られるのに比べて虹鱒魚場墳墓群では著しく少ない。火葬は、後の金代女真人の埋葬形態に多く見られる。『金史』巻 1 によると、金代女真人は、渤海時代の黒水靺鞨であるとされ、渤海時代には黒龍江中流域に居住していたとされる。そこは虹鱒魚場墳墓群の北方に位置している。火葬は靺鞨社会に多く見られるが、虹鱒魚場墳墓群には、あまり見当たらないのが特徴的である。このことは、後に取り上げる靺鞨罐が多く見られることと対照的である。

このような埋葬形態には時間的推移が見られるものであるのか、そして、男性と女性の墳墓の副葬品には差が見られるものなのか、見られるとするなら、どのように解釈できるのであろうか。これらの問題を持って、次に、これらの墳墓の構造や埋葬形態を念頭におきながら、まず墳墓の編年を試みる。その上で、男性と女性の所有物と思われる武器類と装飾品類の出土遺物を検討してみることにしたい。

## 第 2 節 出土遺物による墳墓の編年

虹鱒魚場墳墓群の 323 基の墳墓中、259 基から遺物が出土している。また、64 基からは一点の遺物も発見されていない。Ⅰ墓区の 39 基の墳墓中、出土した遺物は 109 点で、副葬品の 32 点と埋土出土遺物の 77 点からなる。このうち 25 基の墳墓の埋土から出土した遺物 77 点（埋土からの土器破片を含まない）は、葬俗と関連があると『虹鱒魚場報告書』に書かれている。また、Ⅱ墓区の 284 基の墳墓から出土した遺物は、1433 点（埋土からの土器破片を含まない）にのぼる。そのうち、副葬品は 979 点あり、埋土出土遺物は 554 点である。両墓区からの出土遺物は、主に生活用品、生産道具、武器、装飾品などである。出土数が多いのは土器、その次に銅器、鉄器、また銀製、金銅製、瑪瑙製の装飾品の類である。

土器の中で出土数が一番多いのは長腹罐であり、副葬品が出土している 259 基の墳墓の中で半数を超える 143 基から出土している。ここでいう長腹罐とは、上記墳墓分析指標で提示した靺鞨罐である。ここでは、これらの出土遺物から「靺鞨罐」を中心に墳墓の編年を行い、帯金具などを含めたそのほかの遺物に基づいて、当該社会の構造について検討してみたい。

### 第 1 項 虹鱒魚場墳墓群における靺鞨罐の編年

『虹鱒魚場報告書』は、墳墓から出土した土器の全体について三期に分けて編年している。

1 期：ほぼすべてがⅠ墓区の採集品であり、完全な土器は、すべて墓室の中から出土し

ている。土器は、砂を混ぜた胎土で、表面は、紅・褐色を呈し、素面、手捏ね、焼成温度は低く、斑点が多い。土器の口縁部には刻み文様の突帯があり、個別の突帯には4等分の指圧紋で飾られている。主な土器は、長腹罐（靺鞨罐）と鼓腹罐である。

2期：土器の多くが砂を混ぜた胎土で、手捏ねである。一部の土器のみ口縁部にロクロ整形がなされ、少数の長腹罐口縁部に刻みの突帯が、貼りつけられている。刻みの突帯は数の上で著しく減り、口縁部には刻みがない突帯が、多く見られる。

3期：2期の土器の特徴は、見られない。土器は、依然として胎土に砂を混ぜ、器体は、手捏ねであるが、ほとんどの土器の口縁部にロクロ整形がなされ、形を整えていて、少数の灰色土器と細かい砂を混ぜた土器もある。器種器形が多様化し、形態は、成形され、文様には沈線文、楔形押印文、波状沈線文などがある。

靺鞨罐（上記の長腹罐のこと、以下同じ）について『虹鱒魚場報告書』の分類編年案と足立・木山の分類編年案と比べたとき、口縁部に刻みが有る突帯から刻みが無い突帯に変化している点で一致している。『虹鱒魚場報告書』の2期と3期の大きな変化は、口縁部にロクロ整形している土器が多いことを足立・木山の論では明確に指摘しなかったところである。しかしながら、『虹鱒魚場報告書』では、胴部に文様が有るものと無いものとをすべて3期に分類している。足立・木山の分類案を参考すると、胴部に文様が有るかどうかも分類の指標になり得る。したがって、ここでは虹鱒魚場墳墓群の靺鞨罐を次のように分類する。

1期 口縁部に刻み突帯があってロクロ整形せず、胴部に文様がないもの

2期

a類 口縁部に刻み突帯が無くロクロ整形せず、胴部に文様が有るもの

b類 口縁部に刻み突帯が無くロクロ整形せず、胴部に文様が無いもの

3期

a類 口縁部に刻み突帯が無くロクロ整形して、胴部に文様が有るもの

b類 口縁部に刻み突帯が無くロクロ整形して、胴部に文様が無いもの

ここでは『虹鱒魚場報告書』と同様に完全な形で出土した靺鞨罐（土器破片は含まない。以下同じ）を編年の対象とする。その上で、口縁部に刻み突帯の有無を1期から2期への編年指標に、口縁部にロクロ整形したか否かを2期から3期への編年指標にする。それに加えて、胴部の文様の有無を分類の指標にする。

墳墓より出土した靺鞨罐は、126点を数える。その内訳は、1期1点、2期a類3点、2期b類36点、3期a類34点、3期b類52点である（以下2期a類、2期b類、3期a類、3期b類をそれぞれ、2a、2b、3a、3bと略す）。虹鱒魚場墳墓群の靺鞨罐は2b土器（29%）と3期の土器（86点、68%）を中心に出土していることが分かる。さらに、2、3期のなかでも胴部に文様が無いb類土器（88点、70%）が多い。2b、3bの土器は、まさに足立・木山の提起した渤海後期の無文化土器に位置づけられる。

3b の土器が増えた原因として、土器生産における組織的集約化が考えられる。中澤寛将によると、「陶質土器<sup>6</sup>生産は、渤海の中期以降に都城・城郭（平地城）周辺で組織化され、次第に集落レベルにまで拡散した」<sup>7</sup>ことが分かる。また、木山は「陶質土器の普及とともに、ロクロ整形の靺鞨罐が 8 世紀代から次第に増加する。このため、靺鞨罐も家内生産から集約的生産に転化したと考えられる。9 世紀代になると靺鞨罐の数量は減りはじめ、渤海末期においては陶質土器が多くを占めるようになる」<sup>8</sup>と指摘している。中澤、木山の研究から、渤海中期以降または 9 世紀代に入って、靺鞨罐も陶質土器と同様に以前の家庭内の手捏ね生産から集約的組織化生産に変化することによって、口縁部のロクロ整形された 3 期土器が多くなったと推定できる。さらに、3 期靺鞨罐の中にも、胴部もロクロ成形したものが若干認められる。しかしながら、その多くは、口縁部に整形したもののばかりである。このように見てくると虹鱒魚場墳墓群から出土した靺鞨罐は、渤海中期以降の特徴を持つものが大半を占めていることが分かる。

## 第2項 靺鞨罐による墳墓の編年

次に、上記の靺鞨罐の編年に基づいて墳墓の編年を試みる。ここでは、土器が完全な形で出土していない場合には、靺鞨罐であるかどうか判断し難いところがあるため、完全な形で靺鞨罐が出土している 82 基の墳墓を編年の対象にする。

I 墓区には、39 基の墳墓が分布している。M2249 のみ 2 点の靺鞨罐が出土している<sup>9</sup>。この 2 点のうち、M2249:1 は 2a、M2249:2 は 3b とみられる。『虹鱒魚場報告書』によると、墳墓形制、土器組成および土器の編年から考えて、I 墓区の墳墓は、II 墓区の墳墓より時代的に古いとされる<sup>10</sup>。しかしながら、靺鞨罐の編年から墓区の年代を考えると、II 墓区の M2280 で 1 期または 2 期の土器がみられるので、必ずしも I 墓区のほうが古いとはいえない。M2249 から出土した靺鞨罐が、のちの混入でなければ、2 期から 3 期に属するものが出土していることになり、M2249 は、時代的に新しいことになる。II 墓区には分布する 284 基の墳墓のうち、81 基の墳墓に靺鞨罐が見られる。その内訳は T 形単室石室墓 44 基、L 形単室石室墓 16 基、長方形単室石室墓 10 基、双室石室墓 2 基、石墳墓 3 基、石棺墓 3 基、埴墓 1 基、形制不明 2 基である。出土した靺鞨罐の点数は、124 点になる。

表 6-1 は、靺鞨罐が出土している 82 基の墳墓の編年を整理したものである。II 墓区の場合、12 基から複数の時期（1～2 期または 2～3 期）にまたがる靺鞨罐が出土している。たとえば、M2280 からは M2280:2 と M2280:8 の二つの靺鞨罐が出土しており、このうち、M2280:8 は 1 期、M2280:2 が 2b 靺鞨罐である。また、M2261 では 2a 土器と 3b 土器が出土している。さらに、M2205、M2212 の場合には、2b、3a、3b など 3 種類の土器がともに出土している。こうしたことから、これらの墳墓は、複数の時期にまたがって造営された墳墓ではないかと考えられる。その裏付けとして、この 12 基の墳墓の被葬者数の埋葬形態を調べてみると次のようになる。

M2001、M2254、M2205 が 4 人二次葬、M2280、M2007、M2034 が 3 人二次葬、M2052

が 2 人二次葬、M2212 が 1 人二次葬、M2261、M2085、M2262 は肢骨がわずかであるため何人何次葬であるかが不明である。また、M2022 には人骨がない。被葬者数と埋葬形態を判明できる 8 基のうち、M2212 を除いて全部多人葬である。複数の時期に分けてこの 7 基の墳墓に被葬者を埋葬したと考えられる。1 人二次葬である M2212 だけは、靺鞨罐は 2b、3a、3b のものが出土している。異なる時期の土器を所有、もしくは使用していたものを埋葬した可能性が高いであろう。1 人葬で、古い時期と新しい時期の土器が伴出した場合、埋葬時点を新しい時期とみなしてよいと思われる。したがって、この墳墓は 3 期に編年できよう。このようなことから、II 墓区の場合、靺鞨罐によって、1～2 期の墳墓が 1 基、2 期の墳墓は 16 基、2～3 期の墳墓が 10 基、3 期の墳墓が 54 基と整理することができる<sup>11</sup>。虹鱒魚場墳墓群は 1～3 期にわたって造営されたが、とりわけ、渤海後期に多くの墳墓が造営されたとみてとることができよう。

表 6-1 靺鞨罐による墳墓の編年 (M2249 以外すべて II 墓区)

墳墓編年	靺鞨罐編年	墳墓番号	備考
1～2 期	1・2b	M2280	1 基
2 期	2a・2b	M2298	16 基
	2b	M2020、M2045、M2124、M2165、M2166、M2168、M2172、M2183、M2188、M2201、M2252、M2289、M2293、M2294、M2313	
2～3 期	2a・3b	M2249、M2261	11 基
	2b・3a	M2001、M2052、M2254	
	2b・3b	M2007、M2022、M2034、M2085、M2262	
	2b・3a・3b	M2205、M2212 (一人二次葬 3 期)	
3 期	3a	M2002、M2004、M2005、M2014、M2041、M2044、M2061、M2064、M2076、M2154、M2162、M2171、M2204、M2208、M2256、M2279、M2311、M2320、M2322	53 基
	3a・3b	M2015、M2024、M2026、M2031、M2121、M2255、M2257	
	3b	M2013、M2017、M2021、M2025、M2029、M2035、M2043、M2062、M2092、M2133、M2141、M2157、M2161、M2163、M2164、M2170、M2175、M2184、M2185、M2194、M2200、M2202、M2259、M2264、M2268、M2310、M2318	

(『虹鱒魚場報告書』より筆者作成)

### 第 3 節 他の出土遺物の検討

これまで靺鞨罐を用いて墳墓の編年を試みてきた。虹鱒魚場墳墓群からは、銅器、鉄器、さらに銀製、金銅製、瑪瑙製の装飾品などが多く出土している。しかしながら、2000 点を越える出土遺物をすべて取り上げるのではなく、ここでは、社会構造の分析に資すると考えられる遺物を取り上げて検討する。

さらに、靺鞨罐は、これを使用した人々の民族性をあらわす資料として分析の対象とされてきたと述べたが、「靺鞨」の民族性と関連ある遺物には「帯飾板」もある。たとえば、

天野哲也は、この「帯飾板」をアムール型、円型、チュルク型に分類し、靺鞨社会の特徴を研究している<sup>12</sup>。

靺鞨の遺跡とされる楊屯大海猛墳墓群（6～8世紀）、永吉查里巴（6～8世紀）、コルサコフ墓地（8～10世紀）などを研究した天野によると、靺鞨社会においてアムール型・円型とチュルク型は、別々に出土する傾向が強い。アムール型・円型は女性が墓主である墳墓によくみられ、ベルトにつける装身具であり、耳環や珠などと相関関係が強く、呪術的な原始宗教の色合いが強いとされる。チュルク型は、男性が墓主である墳墓でよくみられ、武器類の鉄鏃や刀子などの遺物とともに出土され、戦闘的性格が強いとされる。また、アムール型・円型（牌飾）を研究している王培新は、アムール型・円型は東北アジアの4～11世紀の間、靺鞨と女真人社会の中で、シャーマンが神を呼ぶ法器具であるという。また、伊藤玄三は日本・新羅・渤海における帯金具の出土を唐の諸制度が伝わった証拠であるという。これらの研究を参考にしながら、以下に、虹鱒魚場墳墓群から出土したアムール型・円型とチュルク型などの帯飾板と装身具・武器類との関係を整理しておきたい。

アムール型帯飾板は、I墓区のM2228に1点、II墓区のM2184に2点、M2194に1点、M2205に3点、M2254に1点の計8点が出土している。円型帯飾板は、II墓区のM2184で1点出土している（図6-5）。そのうち、5基の墳墓からは、全て3期に該当する靺鞨罐が出土している。このうち、M2205は4人の墓で、2b・3a・3bにまたがって土器が出土しており、そのほかの3基より出土した土器もすべて3bの土器であることから、4基のうちでも古い時期に造営された可能性が考えられる。

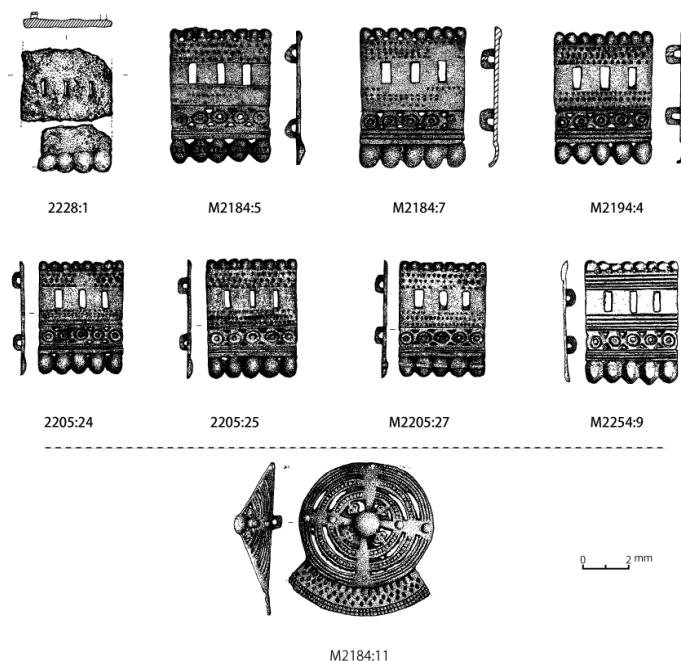


図 6-5 虹鱒魚場墳墓群のアムール型と円型帯飾板  
（『虹鱒魚場報告書』より筆者構成）



I 墓区の墳墓から確認すると、M2228 は、形状不明で、人骨もない。墓域の周辺にアムール型帯飾板、装飾品の瑪瑙珠、銅耳環があり、武器はない。そのほかの遺物に靺鞨罐口縁部破片、鼓腹罐、鉄器がある。

II 墓区にある M2184、M2194、M2205、M2254 のアムール型帯飾板の出土状況を確認すると以下の通りである。

M2184 は、T 形石室墓ではあるが、人骨は少なく、葬俗も不明である。なぜか『虹鱒魚場報告書』には墓主の性別が女性と記述されている。円型帯飾板 1 点は墓室の東北部にあり、近くに遺骨がある。アムール型帯飾板一点は、墳墓中央の遺骨の近くにあり、もう一点のアムール型帯飾板は、墳墓の東北隅から出土している。ほかの出土遺物には、靺鞨罐 (3b)、瓮、瑪瑙珠、銅環、鉄螺旋器、銅鳥頭飾、鉄鈎、鉄鏃、鉄刀などがある。装飾品の瑪瑙珠、銅環、銅鳥頭飾のような装飾品とともに、鉄鏃、鉄刀のような武器が出土している。これらのうち、装飾品は、墓室の副葬品と見られるのに対し、武器は埋土から出土している。このことから、墓室に置かれている副葬品と埋土に包まれている遺物の性質は異なる可能性がある。副葬品は、被葬者が生前に所有したものであり、埋土の遺物は墳墓築造の際にまたは祭祀の際に埋めたものである可能性が高い。したがって、M2184 のアムール型帯飾板と円型帯飾板は、装飾品との相関関係が強いといえる。

M2194 (T 形石室墓) も成年の墳墓で、人骨が少ないため、性別は不明である。アムール型の帯飾板 1 点が、東北隅から出土している。そのほかの遺物に、靺鞨罐 (3b)、瓮、鼓腹罐および短頸壺、長頸壺と見られる破片がある。武器と装飾品は出土していないので、アムール型帯飾板との相関関係は、不明である。

M2205 では、アムール型とチュルク型帯飾板が共に出土している。天野のいう「異種併存例」にあたる<sup>13</sup>。石壙墓である M2205 の平面図を見る限り、アムール型の帯飾板 3 点は、墓室中央部にある女性遺骨の腰部と、児童頭骨の間から出土しており、チュルク型帯飾板は墓室東南隅にあるもう一人の女性と児童の遺骨の近くで出土している。この墳墓は、計 4 人が埋葬されており、女性を中心とする墓であるといえる (児童については性別不明)。出土遺物は、靺鞨罐 (2b・3a・3b) とアムール型帯飾板、チュルク型帯飾板のほかに、長腹壺、鼓腹罐、広肩罐、瓮、斂口罐、鉄釘、鉄鏃、銅耳環、鉄矛、銅螺旋器、銅鈍尾、鉄片、鉄器、石環、鉄螺旋器、瑪瑙珠、布紋瓦破片がある。装飾品には銅耳環、瑪瑙珠があり、武器には鉄鏃、鉄矛がある。女性中心の墳墓でアムール型帯飾板とチュルク型帯飾板が出揃い、武器も装飾品も出土している墳墓である。

M2254 は、T 形石室墓で 4 人二次葬である。被葬者の構成は、成年男性 2 人と成年女性 2 人からなる。墓室の北側に 1 人の成年男性頭骨、南側に 1 人の成年女性頭骨、そして、墓道から成年男女頭骨が一つずつある。墓室南側の成年女性の頭骨の北側からアムール型帯飾板 1 点が出土していることから、女性の副葬品と推定される。ほかの遺物は、靺鞨罐 (3b)、鼓腹罐、細頸壺、短頸壺、瓮破片がある。武器と装飾品は、出土していない。

以上、アムール型と円型帯飾板が出土した 5 基の墳墓を確認してみた。このうち、3 基

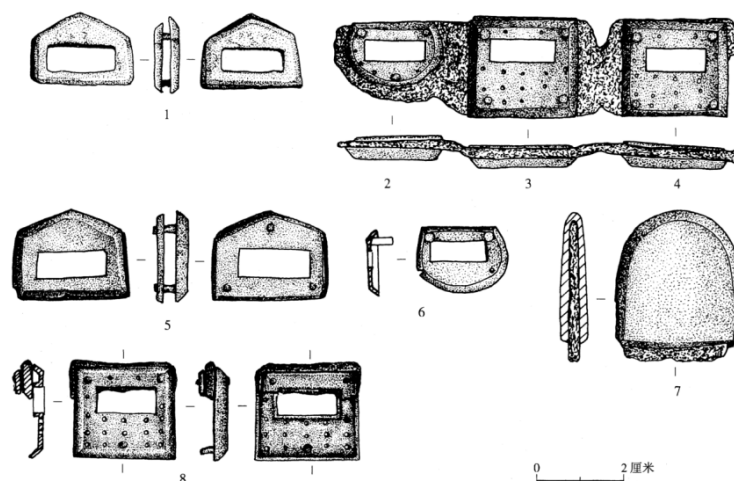
(M2184、M2205、M2254)は、女性と関連がある。装飾品と関連がある墳墓は3基(M2228、M2184、M2205)ある。しかしながら、装飾品と関連がある3基のうち2基(M2184、M2205)の墳墓には武器も見られる。墳墓の編年で3期に該当するM2184は、埋土から武器が見られることから被葬者の所有物ではない可能性が高い。とすると、M2184もアムール型または円型帯飾板が装飾品と強い相関関係を示す例になる。また、2~3期に跨るM2205に、武器と強い相関関係をもつチュルク型帯飾板があることは重要である。つまり、2~3期より3期にわたって、アムール型帯飾板は、一貫して装飾品と強い相関関係を持っていたといえる。これと関連して注意すべきなのは、アムール型と円型帯飾板が装飾品のみと伴出する場合(M2228)はあっても、武器のみと伴出する場合はないということである。虹鱒魚場墳墓群においてアムール型帯飾板の出土例は5例、円型帯飾板出土例は1例しかない。それにもかかわらず、天野が靺鞨社会の特徴を言及する際に取り上げたアムール型と円型の二種類の帯飾板と女性、装飾品との強い相関関係が認められる。つまり、靺鞨社会との関連性を示唆するアムール型と円型帯飾板は、渤海後期にあたる虹鱒魚場墳墓群においては僅少でありながらもその元来の性格を保持しているといえる。

アムール型・円型帯飾板と対照的に考えられるのがチュルク型帯飾板である。なぜなら、大貫静夫の指摘のように、アムール型・円型の二種類の帯飾板は、靺鞨と関連する遺跡にしか見られない在地系遺物だと言えるのに対して、チュルク型帯飾板は、唐や遼や高句麗の墓からも出土していて、それらの影響を受けたものともいえるからである<sup>14</sup>。中国では帯鍔と呼び、日本では帯鍔をさらに巡方(長方形)、丸軀(半円形または圭字形)と分類している。鉸具、鉞尾などを組み合わせ、ベルトに装着する帯金具になる。孫秀仁の研究によると、吊り下げ用の長方形の穴が開き、多数を帯上に並べる巡方、丸軀の帯鍔は、唐代初期(7世紀)から遼代前期(10世紀)に流行したという<sup>15</sup>。

渤海時代の遺跡だといわれる吉林省和龍北大墳墓群遺跡(龍海墳墓群の西4kmに位置)の28号墓(M28)からは、鉸具1、巡方4、丸軀8、鉞尾1計14点からなる完全な形での帯金具が出土している<sup>16</sup>。また、同墳墓群の2号墓(M2)と9号墓(M9)には、装着状態の出土も見られる。東アジアにおけるチュルク型帯飾板を研究した伊藤玄三は、青銅製または鉄製の鍔は、同時代の日本、新羅、渤海にみられ、官人の位階を表すものである<sup>17</sup>という。渤海のチュルク型帯飾板(帯鍔)が、唐の制度を模倣し、材質と数によって官領の位階を規定したかどうかについては、触れていない。ここでは、ひとまず当該社会における身分を示す象徴として機能していた可能性を指摘しておく。

虹鱒魚場墳墓群には40基の墳墓からチュルク型帯飾板が出土している。和龍北大墳墓群28号墓(M28)出土の帯金具が示すように、数量と種類(鉸具・巡方・丸軀・鉞尾)ともに完全な形での帯金具は、出土していない。M2095の出土遺物(図6-6)からわかるように巡方2点と丸軀1点が皮の帯につながり、チュルク型帯飾りが帯金具としての機能を持っていたと思われる。和龍北大墳墓群28号墓出土の帯金具が示すような帯金具規定があったかどうか詳らかでない。和龍北大墳墓群28号墓は1人一次葬に対して、虹鱒魚場墳墓群

の 40 基の墳墓は、ほとんどが多人葬または二次葬のような埋葬形態をとっていることとも関係あるかと思われる。このような埋葬形態をとることにより、人骨と副葬品が何らかの原因で攪乱したのではないかと思われる。ほかに、もし上記の帯金具規定があったとすれば、実際入手できなかった事情も挙げられる<sup>18</sup>。虹鱒魚場墳墓群に完形の帯飾板のセットがないので、官僚の位階制の議論はこれ以上進めることはできない。



图三五五 M2095 随葬器物  
 1、5. I 式銅帶鐙 (M2095: 1、2) 2、6. II 式銅帶鐙 (M2095: 4、3) 3、4、8. III 式銅帶鐙 (M2095: 5~7)  
 7. 銅舵尾 (M2095: 8)

図 6-6 M2095 の副葬品

(『虹鱒魚場報告書』 p.293)

ところで、アムール型帯飾板が 5 基の墳墓で見つかっているのに対して、チュルク型帯飾板が 40 基の墳墓で見られることは、この墳墓群の性質を考える上で一つのポイントになると思われる。靺鞨系といわれる遺物が著しく少なく、唐や高句麗でみられた遺物が比較的多くみられることは、外来の影響を大きく受けたためではないかと思われる。

また、アムール型帯飾板を出土している 5 基の墳墓の 4 基が靺鞨罐を出土しているのに対し、チュルク型帯飾板を出土している 40 基の墳墓のうち 18 基に靺鞨罐が出土している。事例は少ないがアムール型帯飾板が靺鞨罐と強い相関関係を示していることに比べて、チュルク型帯飾板と靺鞨罐との相関関係は弱いと言わざるを得ない。これは搬入品とみられるチュルク型帯飾板を付けた人々が、靺鞨罐を所有しなくなったか、あるいは「靺鞨」と関係ない者であったかは詳らかでない。このことは、虹鱒魚場墳墓群が単なる「靺鞨」社会の墳墓ではないことを示唆している。

次に、チュルク型帯飾板埋納の意味するところが、時期的に変化したかどうかについて考察する。表 6-2 (p.123) は、靺鞨罐によって編年できるチュルク型帯飾板出土の墳墓をまとめたものである。墳墓の編年に従って分類し、チュルク型帯飾板(巡方・丸柄)の数量と被葬者、武器、装飾品の出土状況を示してある。この表をふまえ、虹鱒魚場墳墓群に

におけるチュルク型帯飾板出土の墳墓が、どのような様相を見せているかを考察してみたい。

表 6-2 に基づいて時期別にみていこう。1～2 期の M2280 は、武器である鉄鏃を伴出している T 形単室石室墓である。複数の時期に渡って埋葬された 3 人二次葬の墳墓で、成年男女と 10 歳前後の児童の被葬者からなっており、家族葬のようである。どの時点でどの遺体の副葬品としてチュルク型帯飾板 1 点を埋納されたか定かではないが、鉄鏃と伴出した事例とみられる。

2 期の 2 墳墓のうち、M2168 は武器と装飾品が伴出した T 形単室石室墓である。3 人二次葬の成年男性 2 人と女性 1 人の墳墓であり、巡方や武器、装飾品類は墓室の西北隅に集中しており、成年男性の骨に近いところから出土している。この場合も、どの遺体の副葬品であるかを決定することはできない。しかし、巡方が武器および装飾品と伴出している墳墓でなる。

2～3 期に当たる 5 基のうち、武器と伴出している墳墓は、M2001、M2205、M2212 の 3 基である。M2001 と M2205 は、装飾品の瑪瑙珠や銅耳環も伴出している。

M2001 は、先に述べたように T 形単室石室墓で、墳墓の規模が大きいだけでなく、副葬品も豊富である。とくに目を引くのは、金銅製の装飾品である。このような豪華なものが出土しているにもかかわらず、チュルク型帯飾板 2 点をはじめとする帯金具に鉄製のものが目立つ。そのほかの墳墓で青銅製のチュルク型帯飾板が出土することと対照的である。6 人二次葬の被葬者の構成は、成年男性が 2 体、成年女性が 2 体、年齢性別不明が 2 体である。複数の時期に墳墓を造営したと見られるため、副葬品の所有者を確定できない。しかしながら、鉄製の副葬品だけに絞って考えて見ると、この墳墓には、武器類の鏃と甲片、装飾品の釵もあることから、チュルク型帯飾板が武器および装飾品と伴出した事例として認められる。

上記の M2205 は、女性中心の石壇墓である。しかしながら、チュルク型帯飾板と武器および装飾品とが伴出されている。くわえて、アムール型帯飾板も出土していることから、装飾品はアムール型帯飾板と、武器はチュルク型帯飾板と組み合わせて埋納されたとも考えられる。

M2212 は、男性 1 人の二次葬であり、チュルク型帯飾板と武器である鉄鏃のみが出土しており、天野のいう韃靼社会におけるチュルク型帯飾板の典型出土例といえるであろう。その一方で、同時期の M2007 からはチュルク型帯飾板が出土しているのだが、同時に装飾品である瑪瑙珠だけが出土しており、武器類は 1 点も出土していない。M2007 は 3 人二次葬で、30 歳前後の女性の遺体に対して副葬されたものかもしれない。そうであるとすれば、同墓からは男性 2 体が出土しているにもかかわらず、武器は 1 点も出土していないことになる。

3 期の墳墓 10 基のなかで、武器と伴出するのは、5 基 (M2013、M2121、M2208、M2161、M2171) ある。そのうち、鉄鏃などの武器だけが伴出している墳墓は、3 基 (M2013、M2161、M2171) あり、男女ともに埋葬している多人 (2 人～6 人) 二次葬墳墓である。なお、墳墓の構造は、T 形単室石室墓、石壇墓、長方形単室石室墓などで、それぞれ異なっている。武

器および装飾品とともに出土している墳墓は、2基（M2121、M2208）ある。両墳墓ともT形単室石室墓である。M2121は、男女からなる3人二次葬の埋葬形態をとり、それぞれの副葬品の対象者は不明である。

それに比べて、M2208からは成年男性の骨のみが見つかり、副葬品の中には武器類の鉄鏃や鉄刀がある。同時に、装飾品としては瑪瑙珠、料珠が副葬されている。これを2～3期におけるM2212と比較すると、男性墳墓の中に数多くの副葬品が埋納された事例として注目されよう。同時期の墳墓の中でL形単室石室墓であるM2256においては、チュルク型帯飾板と装飾品である銅耳環だけが出土している。そのほかの4基の墳墓からは、武器と装飾品類は出土していない。また、M2092は男性1人二次葬であり、M2204では女性の肢骨のみが見つかり、2～3期、3期において男性のみの墳墓はM2212、M2092、M2208の3基があるのに対して、女性のみの墳墓はM2204のみである<sup>19</sup>。

以上、18基の墳墓に対する整理から次の2点を確認できよう。

第一に、18基の墳墓のうち女性の骨だけが見られる墳墓はM2204のみで、そのほかの墳墓のすべてに男性の骨が認められることから、チュルク型帯飾板が男性被葬者との関連をうかがわせる点である。

第二に、時期別にチュルク型帯飾板と武器および装飾品との伴出状況が変わっていることが分かる。たとえば、チュルク型帯飾板は、1～2期においては副葬品の所属が不明であるにもかかわらず、鉄鏃のみとともに出土する。それに対して、2期においては依然として所属は不明であるが、武器および装飾品とともに出土する。2～3期においては副葬品の所属不明の墳墓で武器および装飾品とともに出土する例がある。同時に、装飾品のみと出土する場合もある。また、男性墳墓であるM2212（1人二次葬）からは武器のみと出土している。さらに、3期になると、副葬品の所属不明の墳墓からは武器のみと伴出するもの、武器および装飾品と伴出するもの、装飾品のみと伴出するものなどのように伴出状況は多様になる。それにくわえて、男性のみの墳墓であるM2208からは武器および装飾品がともに出土している。すなわち、虹鱒魚場墳墓群においては、時代が下るに従って、チュルク型帯飾板は、依然として武器と関連して埋納されていたが、さらに装飾品とも関連して埋納されるようになったと思われる。

7世紀～8世紀と想定される松花江流域の查里巴墳墓群や大海猛墳墓群、黒龍江下流域のコルサコフ墳墓群の墳墓遺跡を分析した天野は、靺鞨社会の特徴として、チュルク型帯飾板を所有しているのは男性の被葬者で、武器との関連が強いと指摘した。さらに天野は、コルサコフ墳墓群を分析する際に、チュルク型帯飾板の戦闘的性格を指摘している。しかしながら、虹鱒魚場墳墓群から出土した武器がすべて戦闘と関係するとは言いきれないように思われる。たとえば、渤海王国の中心に位置する牡丹江流域に営まれた虹鱒魚場墳墓群で、9世紀後半の墳墓に装飾品とともに埋納されたチュルク型帯飾板の存在は、それまでの靺鞨社会内部におけるチュルク型帯飾板の性格が変わりつつあったことを物語っているのではないだろうか。

以上の分析では、渤海王国においてチュルク型帯飾板が位階制などの制度と関連して取り入れられていたかどうかは不明である。その一方で、チュルク型帯飾板は、社会身分の象徴として機能していたのではないかと思われる。とりわけ、都城周辺に居住している靺鞨人やその社会と渤海王権とが取り結んでいたであろう関係の一端を検討する手がかりとなろう。M2001は、墳墓の構造、祭壇との位置、そして出土遺物の量・質の面において、有力者の墳墓であることをうかがわせている。このような豊富な副葬品を埋納できる階層が存在していたと言えよう。先に述べた天野の指摘をふまえ、チュルク型帯飾板の出土状況を考えあわすと、チュルク型帯飾板を保有した被葬者層は、渤海国家の成長とともにその社会的性格を変えていったように思われる。

表 6-2 チュルク型帯飾板・靺鞨罐共出の墳墓属性 (『虹鱒魚場報告書』より筆者作成)

期	墳墓番号	構造	靺鞨罐	巡方点数	丸靴点数	葬俗	遺体	装飾品類	武器類
1~2期	M2280	T	1①2b①	①		3人二次葬	10歳前後の児童、成年女性、成年男性		鉄鏃①
2期	M2165	T	2b①	①		6人二次葬	成年女性、成年男性、成年男性、成年男性、成年男性、成年		
	M2168	T	2b①		①	3人二次葬	成年男性、成年男性、成年女性	銅環②、銅耳環①	鉄鏃①
2~3期	M2001	T	2b①、3a①	②		4人二次葬	30歳前後男性、25~30歳男性、成年女性(鈍器の傷)、成年女性、不明、不明	金銅製飾①、金銅製帯飾③、銀鬘①、銀鳥髪飾①、銀鳥頭飾①、鉄釵①、包金銅耳環①、瑪瑙珠⑤、藍色料珠①、玉管②、黒色料珠①、灰色料珠①	鉄鏃⑥、鉄甲片④、
	M2007	T	2b②、3b③	①		3人二次葬	成年男性、30歳前後女性、成年男性	瑪瑙珠①	
	M2052	L	2b①、3a①	④		2人二次葬	25~30歳女性、成年		
	M2205	K	2b③、3a①、3b③		①	4人二次葬	成年女性、成年女性、児童、児童	銅耳環⑧、銅螺旋器③、アムール型帯飾板③、瑪瑙珠①	鉄鏃④、鉄牙①、
	M2212	T	2b①、3a①、3b①		①	1人二次葬	成年男性		鉄鏃①
3期	M2013	T	3b②	③	⑤	6人二次葬	12~13歳女性、25~30歳男性、15~16歳女性、45~50歳男性、成年女性、17~18歳男性		鉄刀①、鉄鏃①
	M2025	T	3b①	鉄①、銅①		3人二次葬	30歳前後男性、55歳前後女性、成年男性		
	M2092	Ts	3b①	①		1人二次葬	成年男性		
	M2121	Ts	3a①、3b①	①		3人二次葬	成年女性、30~35歳男性、30歳前後女性、成年男性	銅耳環①	鉄鏃①
	M2170	T	3b①		②	4人二次葬	30~40歳男性、30~40歳男性、成年、30歳前後男性		
	M2204	T	3a①	①	①		肢骨わずか、成年女性		
	M2208	T	3a①		①		肢骨わずか、成年男性	鉄環①、瑪瑙珠 36、藍色料珠①	鉄鏃①、小鉄刀①、鉄長刀①
	M2161	K	3b①		②	2人二次葬	成年男性、成年女性		鉄甲片①
	M2171	C	3a①	③	⑦	5人二次葬	成年、成年男性、成年女性、成年男性、22歳女性		鉄刀①、鉄鏃③
	M2256	L	3a①	②		人骨無		銅耳環①	

凡例：①②...は出土個数を示す。TはT形単室石室墓、TsはT形単室埴底墓、LはL形単室石室墓、Cは長方形単室石室墓、Kは石墳墓を示す。

## 第4節 虹鱒魚場墳墓群よりみた在地社会

まず、立地条件からみると、虹鱒魚場墳墓群は、牡丹江を挟んで上京龍泉府遺跡、三陵郷王墓区などがおかれている渤海王国の中心地の近くにある。牡丹江流域には渤海の墳墓群とみられる遺跡が多い。698年に牡丹江上流域、現在の吉林省敦化市に建国された渤海王国は、その北方地域の諸種族を統括していく<sup>20</sup>。その北方の諸種族とは、『隋書』巻81靺鞨伝などに記されているように、7部に分かれる諸靺鞨集団であった<sup>21</sup>。その一方、渤海王国は、幾度かの遷都を経て794年から926年まで上京龍泉府にその都を置く<sup>22</sup>。虹鱒魚場墳墓群がつくられたところは渤海王国の中心地であり、かつそれまでの靺鞨が居住していた地域であった。

虹鱒魚場墳墓群では、第2松花江流域や黒龍江流域の靺鞨社会において盛んに造られた土壇墓はみられず、99%が壙室墓であり、墓道がついた単室墓（T形とL形）が主流である。そのほとんどの墳墓は、面積が7㎡以下、高さが1m以下である。なかでもM2001やM2008は、ほかの墳墓群の王族墳墓に比べてさほど劣らぬ規模を誇るが、築造の複雑さや、多人共同埋葬の点、遺物の質を考慮すると、王族墳墓の被葬者より階層的に高い地位にある人びとの墳墓とは到底考えられない。その埋葬形態も多人葬が一般的で、靺鞨の埋葬習俗といわれる火葬は極めて少ない。さらに墳墓群全体の中で男性の被葬者が女性より2倍弱多いということも指摘できる。

なお、先行研究から、虹鱒魚場墳墓群より出土した靺鞨罐の多くは、渤海中後期（9世紀後半）の土器に位置付けられる。靺鞨罐出土の墳墓を、ここではひとまず1期、1～2期、2期、2～3期、3期と編年した。また、靺鞨社会の特徴をあらわすアムール型帯飾板と円型帯飾板は、出土した墳墓5基、計9点あるのに対して、唐や突厥の影響を受けたチュルク型帯飾板は、出土した墳墓40基、計124点にのぼる。そして、前者の5基からはすべて靺鞨罐が出土し、後者は18基の墳墓から靺鞨罐が出土している。

このうち、靺鞨罐を出土した墳墓からの3種類の帯飾板の出土状況を分析してみると、アムール型帯飾板と円型帯飾板は、1～3期を通して装飾品との関連が目立つ。一方、チュルク型帯飾板は、時期によって武器および装飾品との関係が多様化の様相を見せている。それにくわえ、上記の石室やチュルク型帯飾板などの増加、火葬の減少などから考えると、渤海王国の上京龍泉府遷都は、それまでのこの地の靺鞨社会の葬送習俗に影響を与えたのではないと思われる。とはいえ、その影響は緩慢であったと考えられる。靺鞨罐、アムール型または円型帯飾板の出土が示すように、靺鞨系のものを残しながらチュルク型帯飾板などを徐々にうけいれていったのではないと思われる。

虹鱒魚場墳墓群は、六頂山のⅠ墓区北部とⅡ墓区の様相が似ているが、埋葬習俗においては火葬が明らかに少ない。また、被葬者の経済的優位を示す鍔帯、金銀瑠璃製品、耳環などの出土により、これらは在地有力者層の墳墓であると仮定できるのではないと思われる。こうした階層化された靺鞨社会が渤海王国を支えていたのであろう。すなわち、渤海

王国は、こうした在地社会の有力者層、すなわち首長層による在地社会の支配を温存しつつ王国の秩序下に編成し、彼らに対しては、後期の文献史料（たとえば「中台省牒」）に見られる「大首領」のような称号を付与していたのではないかと考える。

最後に、虹鱒魚場墳墓群について、その墳墓の構成要素を中心に整理してみると図 6-7 のように表現することができ、このようにして在地社会の有力者層を描き出すことができるのではないだろうか。すなわち、図 6-7 のなかで種々の要素の重なり合う部分、とりわけ靺鞨文化を継承する埋納物にくわえてチュルク型帯飾板に武器、さらに瑪瑙や耳環などの装飾品を副葬品として埋葬された成人男性たちのなかには、上記文献史料などに記された首長層、いわゆる「首領」層が含まれていたのではないかと思われる。

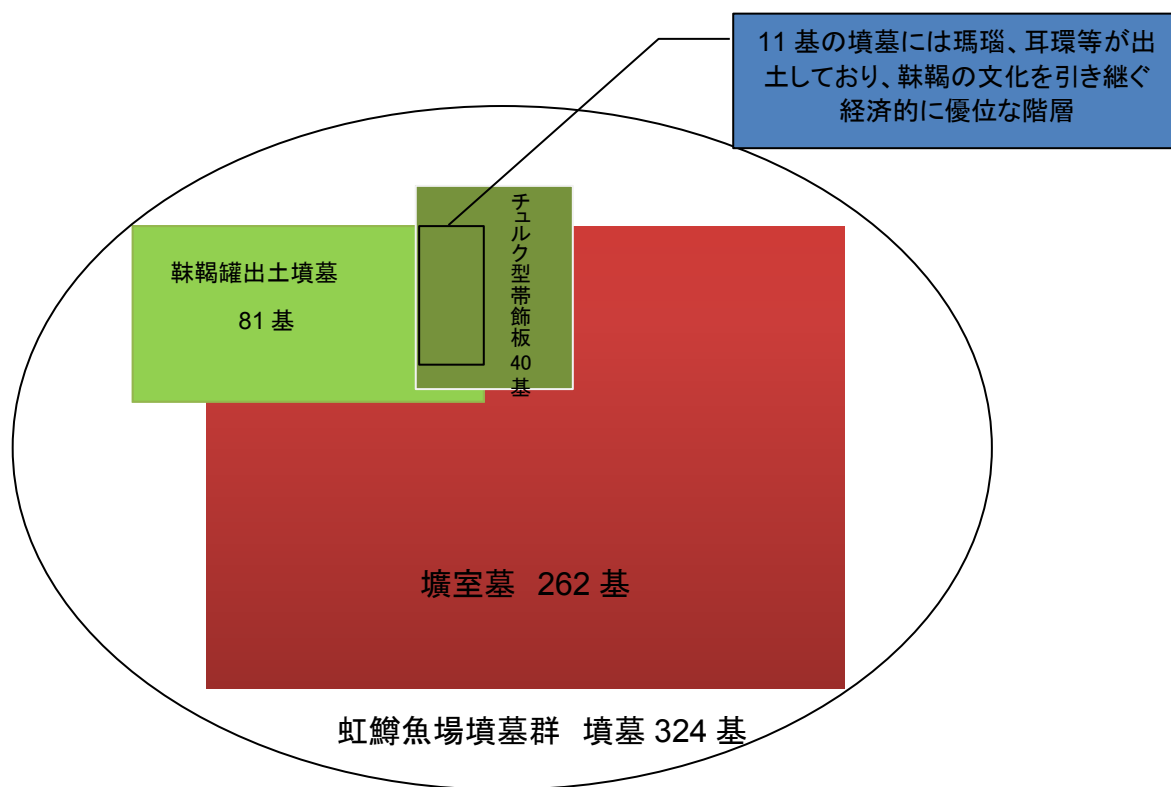


図 6-7 虹鱒魚場墳墓群の在地有力者層推定墳墓

(『虹鱒魚場報告書』より筆者作成)

## 注

<sup>1</sup> 本章は 2011 年 3 月に発表した（第 5 章注 42a.）論文である。論文執筆当時、筆者は『虹鱒魚場報告書』しか入手できなかった。のちに、金銀玉「寧安虹鱒魚場渤海墓葬研究」（2011 年吉林大学碩士論文）と金鎮光「虹鱒魚場古墳群の社会的地位及び性格—古墳の類型と分布状況を中心に—」（『高句麗渤海研究』第 42 輯、2012 年 3 月。pp.51~80）を入手した。両研究は当該墳墓群の考古学的研究を行い、金鎮光の研究では墳墓群に埋葬された被葬者の社会的地位は平民だけではないと結論付けている。

<sup>2</sup> 『虹鱒魚場報告書』p.559。ただし、M2283 号墓を説明した報告内容を確認すると、M2283 号墓には人骨なしと書かれていて、矛盾している。



- 3 石室墓は、石材で築造した墳墓である。一部の保存状態がよい墳墓の中には棺釘が見つかっており、木棺が入っていたことを示唆している。墳墓は地表、半地下、地下の築造に分けられる。墳墓は大小均一でない石材で一段ずつ平らに積みあげて造られている。一部の墳墓には大きい石板を立てて壁を築いたものもある。石材は荒く加工したものもあるし、まったく加工していないものもある。一部の墳墓の底には平らな石板を組み合わせて敷かれている。残る一部の墓室には礫石と紅磚が敷かれたものもある。
- 4 石棺墓の規模は小さく、一般的に未成年者を埋葬している。さらに、石棺の中には他の葬具が見当たらない。築造方法は、最初に地表より下に向けて長方形の穴を掘った後に、または直接地表の上に石板を立てて四壁を作る。そこに人を葬り天井を覆う。なお、墳墓の破壊がひどく、形状不明のものもある。
- 5 『虹鱒魚場報告書』 p.533。
- 6 本論文では靺鞨土器を中心的に取り上げたが、渤海の土器の中で陶質土器も重要な位置を占めている。木山克彦「渤海土器の展開と周辺地域」（『月刊 考古学ジャーナル』605、ニューサイエンス社、2010年 p.18）によると、還元炎焼成・ロクロ利用の土器のことを「陶質土器」というが、本論文で取り扱う3期の靺鞨土器の多くもこの「陶質土器」の部類に入るのではないかと思う。
- 7 中澤寛将「土器生産とその組織化-渤海から女真への展開プロセス-」（『アジア遊学』107、2008年、pp.70～79）。
- 8 木山克彦「渤海土器の展開と周辺地域」（『月刊 考古学ジャーナル』605、ニューサイエンス社、2010年、p.18）。
- 9 ほかにI墓区で採集された靺鞨土器5点あるが、この5点すべて1期の靺鞨土器である。しかし、どの墳墓より出土した遺物かはわからないため、墳墓の編年はできない。
- 10 『虹鱒魚場報告書』 p.51。
- 11 さらに墳墓間の層位関係より墳墓の編年も考えられるが、靺鞨土器出土墳墓と関連する層位関係を持っている墳墓は次のようになる。M2005⇒M2003、M2260⇒M2004、M2007⇒M2006、M2293、M2294⇒M2052、M2259⇒M2186（A⇒Bは、AがBより新しい段階）M2003は3a期土器を出土しているM2005より古い段階に、M2006は3b土器を出土しているM2007より古い段階に、M2186は3b期の土器を出土しているM2259より古い段階に、M2260は3a期土器を出土しているM2204号墓より新しい段階に築造されたとみなすことができる。しかしながら、ただちにM2003が2期、M2006とM2186、M2260は3期の墳墓だとは判断しがたい。
- 12 天野哲也「オホーツク文化期北海道島にもたらされた帯飾板の背景」（『北方史の新視座』、雄山閣、1994年、pp.45～73）、天野哲也「靺鞨」社会の特徴：コルサコフ墓地の帯飾板を中心に」（『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、1995年、pp.571～599）。この「帯飾板」に関わる用語は複数存在する。以下の叙述で、天野哲也の研究成果に依拠するため、その用語に従うことにしたい。天野のいう「帯飾板」のうち、チュルク型は、古代の中国または日本でいう「帯鈎」というものである。鉸具、鉤尾と合わせて帯金具と呼ばれる。天野のいうアムール型・円型帯飾板を「帯飾」と称する場合もあり、中国では、しばしばアムール型帯飾板を「方牌飾」と、円型帯飾板を「円牌飾」と呼ぶ。王培新は「靺鞨—女真系帯飾」と称している。
- 13 天野哲也は「オホーツク文化期北海道島にもたらされた帯飾板の背景」（『北方史の新視座』雄山閣1994年、p.54）で、楊屯大海猛墳墓群において、アムール型とチュルク型帯飾板が出揃った37号墓と43号墓を「異種併存例」とした。
- 14 大貫静夫『東北アジアの考古学』（同成社、1998年、p.216）。
- 15 孫秀仁「略論海林山嘴子渤海墓葬の形制、伝統和文物特徴」（『中国考古学会第一屆年會論文集(1979)』1980年、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年、pp.425～429に所収）。
- 16 延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「和龍北大渤海墓葬清理簡報」（『東北歴史与考古』、1982年第1期、pp.205～206）。
- 17 伊藤玄三「新羅・渤海の鈎帯金具について」（『法政史学』(40)、1988年3月、p.39）。
- 18 天野哲也「靺鞨」社会の特徴：コルサコフ墓地の帯飾板を中心に」（『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館1995年、p.595）。
- 19 M2205は女性を中心とする墳墓であって、児童の性別がわからない現時点では、女性の墳墓と断定しがたい。
- 20 酒寄雅志「渤海国家の史的展開と国際関係」『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001年、pp.49～97、初出1979年）。
- 21 考古学的検討を行った白杵勲に依拠すれば、渤海の北方地域には「共通した土器変遷や、透彫帯金具（本論文でいうアムール型帯飾板）の共有などを見るかぎり、周辺諸部との間に「靺鞨」とくくられるような共通性を保持しながら、文物・情報の交流をもっていたと考えられる」集団がいたと思われる。白杵勲『鉄器時代と東北アジア』（同成社、2004年、p.218）。
- 22 『旧唐書』巻199渤海伝。

## 第7章 チェルニャチノ5 渤海墳墓群の検討

『新唐書』巻219 渤海伝には、渤海王国の15府のうち14府は諸種族の故地であると記録されている<sup>1</sup>。そのなかで率賓府だけは「率賓故地」と書かれており、渤海王国の前にもどのような種族が生息していたかは不明である。渤海中心地域（5京地域）をはじめとする他の地域は、文献史料を通じて、渤海時代の社会様相をある程度推定できるが、渤海率賓府地域については当時の社会様相をほとんどうかがうことができない。これまで考古学の発掘調査の成果を援用しながら、地名考証<sup>2</sup>、府所在地<sup>3</sup>、支配時期<sup>4</sup>などの問題が議論されてきた。しかし、率賓府の下に置かれた在地社会についてはまだ検討の余地があるように思われる。

第7章では、まず文献史料を通じて渤海率賓府地域について確認し、次に当該地域の一箇所が発掘されたチェルニャチノ5 渤海墳墓群を検討することにより、率賓府の一在地社会について明らかにしてみたい。

### 第1節 史料による「率賓府」の様相

渤海王国の率賓府は、後の遼、金、清代の記録<sup>5</sup>により、現在の中国黒龍江省とロシアの沿海地方に跨る綏芬河流域に比定されている。渤海の前に、綏芬河流域にはどのような種族が生息していたか、現在残されている史料では詳らかでない。ただ、『隋書』巻81 靺鞨伝には靺鞨七部の住地記録<sup>6</sup>があり、靺鞨諸部族のそれぞれの住地が記されている。研究者によってその住地の現在地の比定は確定していないが、綏芬河流域は靺鞨の号室部の住地であるという説がある<sup>7</sup>。靺鞨の号室部の前身は沃沮または北沃沮であるといわれている<sup>8</sup>。

靺鞨の号室部についていえば、『旧唐書』巻199 靺鞨伝による<sup>9</sup>と、高句麗が滅亡した後、当地の詳しい状況はよくわからず、たとえ残った人がいたとしても渤海の編戸にされたという。つまり、「渤海の編戸」の語があらわすように、靺鞨の号室部が居住した綏芬河流域は渤海の支配に組み込まれたことがうかがえる。ただ、いつの時点で綏芬河流域が渤海の支配下に組み込まれたかについての詳細な記録はない。そこで、『新唐書』巻219 渤海伝に依拠してその時期を推定してみると、「子武藝立、斥大土宇、東北諸夷畏臣之」と記されており、渤海の第二代王大武芸時代（719～738年）に、東北諸部族への影響力を与えたといわれているから、8世紀前半に渤海の勢力はすでに綏芬河流域に影響を与えていたのだろう。また「貞元（785年～804年）時、東南徙東京」という記録によると、8世紀末葉、現在の中国琿春市八連城に比定される東京龍源府に遷都した。酒寄雅志は「東京龍源府は、北の東寧から綏芬河沿いにウスリースク、さらに興凱湖（ハンカ湖）南部など、現在のロシア沿海地方への進出の拠点にもなった」という<sup>10</sup>。さらに、「率賓府」が見える『新唐書』渤海伝は、835年ごろ唐人・張建章が渤海への使節として一年間滞在した後著した『渤海国記』によるものだという<sup>11</sup>。つまり、渤海の勢力は綏芬河流域においては8世紀中葉から

影響を与えはじめ、9世紀前半には確実に当該地域を支配下においたということがわかる。しかし、現在の史料からは、どのような在地社会に対して渤海の勢力が浸透し、それによって在地社会はどのような変化を遂げたかについては詳らかでない。以下において、当該地域で発掘調査された墳墓群の資料を中心に検討し、渤海王国の辺境に位置する率賓府の一在地社会の様相に触れてみたい。

## 第2節 チェルニャチノ5 渤海墳墓群の概要

チェルニャチノ5 渤海墳墓群は、ロシアの沿海地方オクチャプリスキー地区チェルニャチノ村の南西3.3kmにあり、綏芬河の右岸最上位のテラス状台地の上に立地する。墳墓群の範囲は、長さ450m、幅35～60m、面積約3万m<sup>2</sup>と推定されているが、さらに発見される可能性がある。当該テラス状台地は西北部の高い所から東南部の低い所へ緩やかに傾斜しており、墳墓も西北部から東南部に向かってほぼ整列した状態で分布する。この周辺に対する調査の結果、新石器、沃土、靺鞨、渤海などにおける種々の文化段階に属する墓地遺跡、集落遺跡が16か所で確認され、発掘者は当該墳墓群を靺鞨から渤海の時代にかけて造営された墳墓群としている<sup>12</sup>。中国の領域内では、渤海の墳墓群が多く発掘されている(p.63の図4-1)が、ロシア沿海地方で、はじめての渤海時代の墳墓群の発見例ということもあって、チェルニャチノ村付近のほかの遺跡に比べて詳細な調査がなされてきた。

### 第1項 発掘調査の経緯

1997年にロシア研究者Yu.G.ニキチンは、チェルニャチノ5 渤海墳墓群を発見し、1998年から2002年までロシア側が単独で発掘調査し、2003年から2008年まで韓国の発掘調査団と共同で発掘調査している。当該墳墓群は、6つの区域に分かれており、1区域、2区域（さらに2-1区域、2-2区域、2-3区域に分割）は主にロシア側で、3区域（さらに3-1区域、3-2区域、3-3区域）、4区域、5区域6区域は韓国側と共同で発掘している。（図7-1）

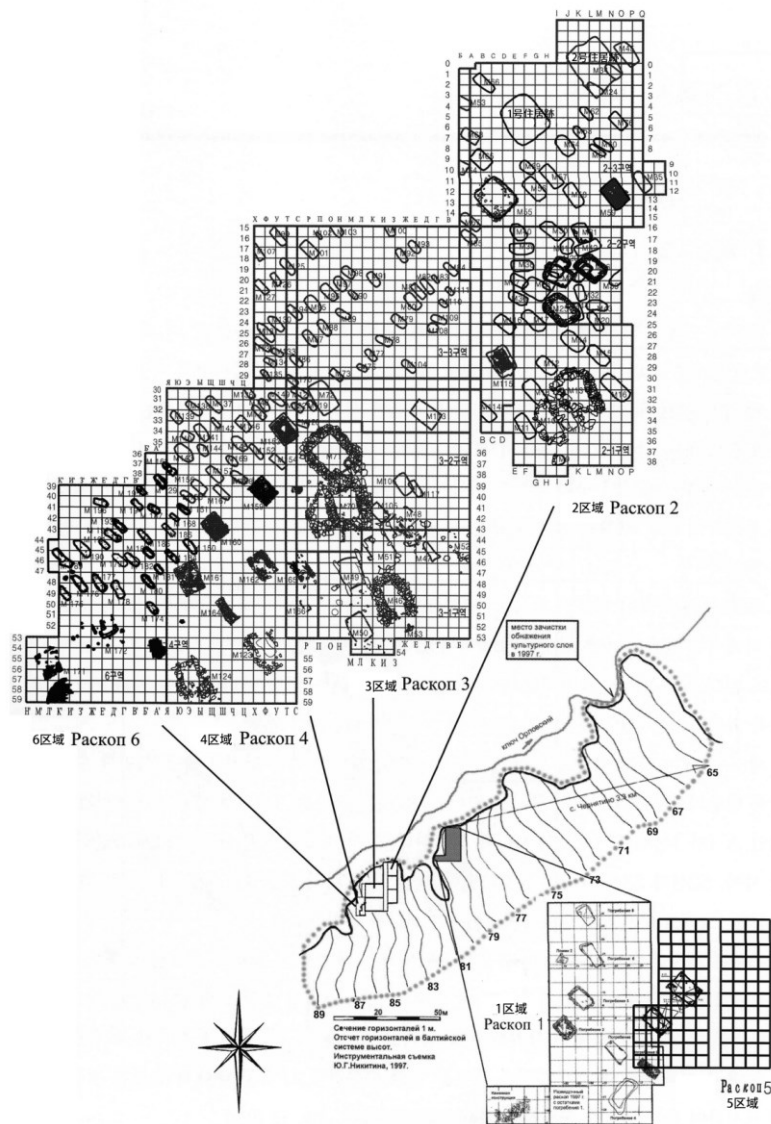


図 7-1 チェルニャチノ 5 渤海墳墓群の墳墓分布図

(『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (IV)』2009年、p.23)

現在、確認できる発掘調査の内容は、2002年までロシア側が発掘調査した墳墓と2003年から2008年までロシア側と韓国側が共同で発掘した墳墓と墳墓の下層に位置する2棟の居住遺跡<sup>13</sup>である。その間に調査された墳墓数は、①2002年までの41基<sup>14</sup>、②2003年から2008年までの147基であるという(但し、②については、実際に報告書に載せられている墳墓数は152基ある)。ここでは、②の152基の墳墓の状況を中心に検討し、①についてはその詳細な内容を確認できなかったため、参考程度にとどめておく。

## 第2項 チェルニャチノ5墳墓群に関する先行研究

2012年の段階で、ロシア、韓国、日本、中国の研究者によるチェルニャチノ5墳墓群に関する研究について、中国と日本<sup>15</sup>では、当該墳墓群の概要的な紹介が多い。これに対して、ロシアと韓国では発掘調査に基づき、年代推定、墳墓の分類、土器の分類と編年、ほかの遺跡の出土遺物との類似性などについて研究<sup>16</sup>がなされてきた。チェルニャチノ5墳墓群は、靺鞨、渤海時代（6世紀～9世紀）に跨って造営された墳墓群であることと、石室墓は渤海中央部（牡丹江流域、図們江流域）の影響をうけて9世紀に造営されたものであるという。さらに、M71は渤海の武将墓であるとされており、鉄の太刀、鏃、槍などが出土する墳墓を武将墓とみる傾向がある<sup>17</sup>。

これまでの先行研究では、チェルニャチノ5墳墓群の社会様相の一部について触れられている。しかし、墳墓群の年代推定や区域ごとの遺物の埋葬様相、さらに当該地域の社会様相に触れた議論についてはまだ検討の余地がある。

以下において、まずチェルニャチノ5墳墓群の年代測定値、土器編年、墓制を取り上げながら年代を推定し、その年代推定を活用して当該墳墓群を三つの部分、三つの時期に区分する。そして、各部分における出土遺物を取り上げながら、各時期における埋葬様相を検討した上で、率賓府の一地方社会について議論してみたい。

## 第3節 チェルニャチノ5渤海墳墓群の年代および墳墓分布

### 第1項 放射性炭素(C<sup>14</sup>)年代測定値およびOSL年代測定値

チェルニャチノ5墳墓群からは、16のサンプルより放射性炭素(C<sup>14</sup>)年代測定値、4つのサンプルからOSL年代測定値(光ルミネッセンス(optically stimulated luminescence))が得られている。

表 7-1、放射性炭素(C<sup>14</sup>)年代測定値<sup>18</sup>

No.	墓号	実験室番号	サンプル	年代(AD)	較正值	出土土器
1	M46	SNU03-643	木炭	1190±40B。	830年	圧痕がある胴部片を含む靺鞨系土器36点と口縁部片、ロクロ製土器胴部片6点と底部片1点文様があるロクロ制胴部片1点
2	M48	SNU04-602	木炭	1400±40BP	640年	B4靺鞨罐1点
3	M50	SNU03-645	木炭	1170±40BP	840年	靺鞨土器胴部片数点とロクロ製土器底部片2点、
4	M55	SNU04-600	木炭	1680±40BP	380年	B4靺鞨罐、ロクロ製土器
5	M56	SNU04-601	木炭	1690±40BP	270 or 370年	B1靺鞨罐
6	M59	SNU04-599	木炭	1360±40BP	680年	A4靺鞨罐、手製靺鞨土器底部片
7	M60	SNU04-603	木炭	1590±40BP	480年	鼓腹罐2
8	M60	Ka-13488	付着炭化物	1310±50BP	690年	
9	M60	Ka-13489	付着炭化物	1310±45BP	690年	
10	M61	SNU04-604	木炭	1850±60BP	160年	B4靺鞨罐1
11	M70	SNU04-598	木炭	1500±80BP	540年	鼓腹罐

No.	墓号	実験室番号	サンプル	年代 (AD)	較正值	出土土器
12	M71	SNU04-597	木炭	1180±40BP	840年	B4 靺鞨罐 2、B1 靺鞨罐 1
13	M73	SUN05-821	木炭	1430±50BP	610年	A4 靺鞨罐
14	M80	SUN05-822	木炭	1510±50BP	540年	靺鞨罐底部片
15	M109	SUN05-823	木炭	1470±50BP	590年	A4 靺鞨罐、B4 靺鞨罐
16	M115	SUN05-824	木炭	1290±60BP	760年	B4 靺鞨罐 2

表 7-2、OSL 年代測定値<sup>19</sup>

No.	墓号	年代	出土遺物
1	M66	455±80	A4 靺鞨罐 2、A 靺鞨罐口縁部 1、靺鞨罐底部片、鼓腹罐 1
2	M80	575±60	靺鞨罐底部片
3	M96	735±70	A 靺鞨罐口縁部片、靺鞨罐底部片、鼓腹罐、肩部片 1、胴部片 1、底部片 1
4	M109	1025±50	A4 靺鞨罐、B4 靺鞨罐

表 7-1 の網掛けの部分の年代測定値は、墳墓から出土した遺物から、報告者によってその較正值年代が否定されているものである。表 7-2 の M109 の年代データは出土遺物より、OSL の年代が否定されている<sup>20</sup>。このように、C<sup>14</sup>年代測定値および OSL 年代測定値によると、当該墳墓群はおよそ 6 世紀前後から 9 世紀中頃まで造営されたことになる。

## 第2項 土器編年による年代の推定—靺鞨罐を中心に—

上記の C<sup>14</sup>年代測定値および OSL 年代測定値により得られた結果について、次に土器編年との対比を試みたい。

靺鞨、渤海時代の土器についていえば、野焼き土器と陶質土器に大きく分かれる。そのうち野焼き土器の場合、ロクロを使用したものと使用していないものに分けられる。野焼き土器の器形は、碗、鼓腹罐、靺鞨罐に分けることができる。第 4 章で述べたように、靺鞨罐とは、4 世紀から 11 世紀にかけて<sup>21</sup>、黒龍江流域、松花江流域など東北アジアの大河流域における遺跡で広汎に見られる酸化炎焼成の手捏ね深鉢形または花瓶形の土器である。器高 30cm 程度の大型品から、器高 10cm 程度の小型品までさまざまな大きさのものがつくられ、貯蔵・煮沸に加え、銘々器として使用されたい<sup>22</sup>。

靺鞨罐を中心にした土器の編年は、ロシアのチャーコーバ、日本の臼杵勲<sup>23</sup>をはじめ、大貫静夫<sup>24</sup>、菊池俊彦<sup>25</sup>、中国では、喬梁をはじめ<sup>26</sup>、譚英傑ほか<sup>27</sup>、金太順<sup>28</sup>、劉曉東・胡秀然<sup>29</sup>、張玉霞<sup>30</sup>、劉曉東<sup>31</sup>、林棟<sup>32</sup>、王樂<sup>33</sup>が研究を重ねてきており、近年、足立拓郎<sup>34</sup>、木山克彦<sup>35</sup>、中澤寛将<sup>36</sup>が土器の分類を口縁部突帯<sup>37</sup>の特徴、胴部の文様、ロクロの使用などの属性によって区分している。これらの属性に基づいて、木山、中澤は、「河口・振興」集落遺跡、クラスキノ城跡での層位関係などに基づいて編年案を提示している。研究者によって、分類の仕方と編年案は若干の差異がある。しかし、口縁部の突帯の刻み目あるもの（A 類）から刻み目ないもの（B 類）へ変化することは、だいたい一致している。これまでの靺鞨罐研究において発掘調査資料を最も多く取り上げた中澤の編年案を参考すると、700 年を境として、その前の時代は A 類の靺鞨罐が優勢であり、後の時代は B 類の靺鞨罐が優

勢であることがわかっている<sup>38</sup>。また、時代が下るにつれ、ロクロを使用した土器、還元炎焼成の陶質土器が普及しているという<sup>39</sup>。靺鞨罐の編年案に基づき、チェルニャチノ 5 墳墓群について測定が行われた年代値と比較してみたのが表 7-3 である。

表 7-3、年代測定値と出土靺鞨罐の比較

墓号	年代	出土靺鞨罐の特徴
M66	455±80 年	A 靺鞨罐 2、A 靺鞨罐口縁部 1
M48	640 年	B 靺鞨罐
M109	590 年	A 靺鞨罐、B 靺鞨罐
M73	610 年	A 靺鞨罐
M59	680 年	A 靺鞨罐、手製靺鞨土器底部片
M96	735±70 年	A 靺鞨罐口縁部片、靺鞨罐底部片
M115	760 年	B 靺鞨罐 2
M50	840 年	靺鞨土器胴部片数点とロクロ製土器底部片 2 点、
M71	840 年	B 靺鞨罐 2、B 靺鞨罐 1

(筆者作成)

表 7-3 のように、700 年以前と測定された M48 と M109 の中で B 類の靺鞨罐が一部認められ、700 年以後の M96 でも A 類の靺鞨罐が一部みられることになるが、C<sup>14</sup>年代測定値と OSL 年代測定値と現段階の土器編年とは、ほぼ一致すると評価できよう。つまり、綏芬河流域の靺鞨罐の口縁部特徴も、刻み目ある突帯 (A 類) から刻み目のない突帯 (B 類) へと変遷したといえよう。

### 第3項 年代による墳墓の分布—墓制と関連しながら—

A 類靺鞨罐の出土した墳墓と B 類靺鞨罐の出土した墳墓を墳墓群の墳墓分布図にプロットしてみると、A 類の靺鞨罐は、おおむね墳墓の北西部で出土し、南東部では出土していない。B 類の靺鞨罐は墳墓群全体に跨って出土する様相を呈する。しかし、ロクロを使用して成形・整形した土器、陶質土器はおもに南東部で多く出土している (図 7-2)。北西部と南東部の境界部には A 類靺鞨罐と B 類靺鞨罐を伴出する墳墓がある。ロクロ使用の土器も念頭に入れながら靺鞨罐の口縁部突帯の特徴に基づいて、当該墳墓群を北西部、南東部、境界部のように三つの部分に分けることができるだろう。また各部分で特徴的な墓制としては、北西部ではほとんど砂礫の土を掘って造営した土壙墓、南東部では石室墓が群れを成して三か所に分かれて分布し、境界部ではいわゆる「敷石墓」が中心に分布している。さらに C<sup>14</sup>年代測定値と OSL 年代測定値をみると、北西部の M80 は 540 年、M73 は 610 年、M109 は 590 年にあたり、境界部分の M115 は 760 年、南東部の M46 は 840 年、M71 は 830 年となっている。

次に、渤海の墓制について少し触れながら年代を考えてみたい。渤海墓制の最新の研究を参照すると、渤海の墳墓はおおむね、土壙竪穴墓、土石混築墓、石壙墓、石棺墓、壙室墓、石室墓、磚室墓に分類される<sup>40</sup>。東北アジアにおいて靺鞨の伝統的墓制は、土壙墓であ

り、扶餘、高句麗、沃沮などの種族または唐の影響を受けて様々な形式へ変化したという<sup>41</sup>。また、靺鞨の墓制は土壙墓<sup>42</sup>が主であり、高句麗の墓制は石室墓<sup>43</sup>が主であるということもあり、石室墓の造営を以て渤海による靺鞨支配を跡付ける研究もある<sup>44</sup>。特に、渤海の9世紀後半になると石室墓が優勢になり、中心地域の虹鱒魚場墳墓群のようにすべて石室墓を中心とした石築墓になっていく<sup>45</sup>。

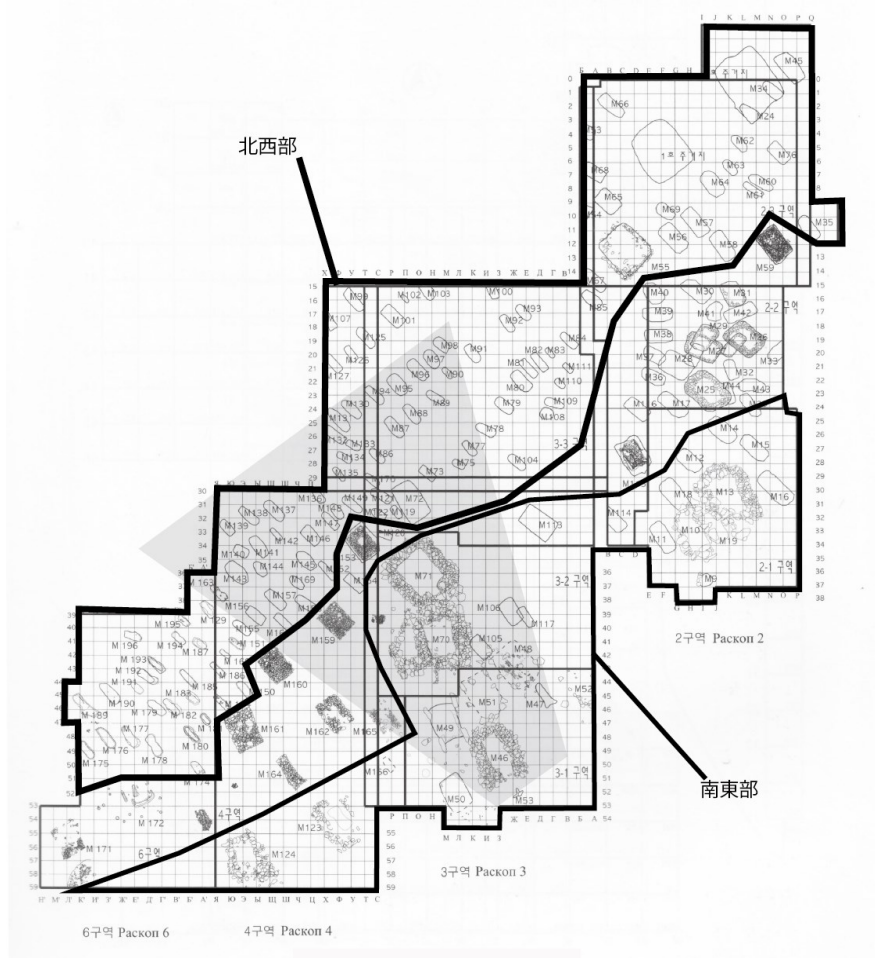


図 7-2 チェルニャチノ 5 墳墓群墳墓部分図

(『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (IV)』2009年、p25 に加筆)

チェルニャチノ 5 渤海墳墓群の境界部に位置する敷石墓 (M59、M115、M153、M159、M160、M161、M162、M164、M165、M171、M172) については、発掘した当時、地面に石のみ敷かれており、上部には何の構造物も確認されていないというのが大半であった。ただし、M115 は土壙内で、M153 は南部の方に積石がみられたという。石積み壁などはないが、墳墓の規模 (面積 9m<sup>2</sup>)、敷石の状況を見ると、六頂山墳墓群で発掘された壙室墓 II M5 に類似している。墓制研究によると壙室墓の出現時期は渤海早期、およそ 7 世紀前半



にあたる。チェルニャチノ 5 渤海墳墓群の M115 の C<sup>14</sup>年代測定値は 760 年になり、およそ 1 世紀の隔りがある。

年代推定の結果と渤海の墓制の推移を合わせて考えてみると、北西部は渤海の勢力が及ぶ以前の 700 年以前の時代を中心に造営されたこととなろう。その上限は靺鞨罐の様式などから考えて墳墓群発掘者の提示した 6 世紀というのが妥当だろう。次に、境界部は、渤海の勢力が影響を及ぼしはじめた 750 年代前後を中心とする 8 世紀を中心に造営されたということになる。また、南東部は渤海の勢力が確実に入った 830 年以後に造営されたのではないと思われる。その下限をひとまず渤海滅亡の 926 年を指標とすれば、10 世紀前半ということになる。

次に、各部分での土器以外の出土遺物を検討することによって、各時期における埋葬様相を検討してみよう。

#### 第 4 節 遺物の埋葬様相

墳墓群内の年代測定値及び土器の靺鞨罐と墓制に基づいた年代推定により、チェルニャチノ 5 墳墓群を北西部（6～7 世紀）、境界部（8 世紀）、南東部（9～10 世紀）に仮に分けてみた。この節では、土器以外の遺物を検討することによって、チェルニャチノ 5 墳墓群の埋葬様相を見ることにしたい。表 7-4 は、三つの墳墓の分布地域を対象に、墳墓ごとに出土した遺物を玉製品、ガラス珠、銀製品、銅製品、鉄製品、石製品、その他の遺物に分けて作成したものである。以下において、表 7-4 に従って、チェルニャチノ 5 墳墓群内の各部における墳墓からの出土遺物の埋葬様相を検討してみたい。

##### ① 北西部

74 基の墳墓から遺物が出土した。主要な出土遺物の鉄製品は、59 基の墳墓から出土した（80%）。鉄製品のなかで、槍、太刀、刀子、鏃、小札など狩猟または戦闘用具と思われる鉄製品を出土する墳墓が 36 基（49%）、北西部全体でいうと、半数近くの墳墓で出土した。ついで鉄製品の中ではベルトのバックルである鉄鉸具がもっとも多く、25 基（34%）の墳墓で出土した。鉄製品を出土する墳墓のうち 7 基（9%）の墳墓から騎馬人物像（M154）、環（M55、M56、M72）、鈴（M73）、牌飾（アムール形帯飾板、M72、M101、M176）などの青銅製品が出土した。一方、青銅製品を出土している墳墓では、すべて鉄製品を伴出している。銀製品の耳環は 9 基（12%）から出土し、うち 5 基で鉄製品と共に出土した。玉製品（ガラス製品を含む）の装身具を出土している墳墓は 25 基（34%）で、鉄製品が伴出している墳墓は 20 基、石製品も 7 基（9%）の墳墓で見られる。

北西部の出土遺物のいくつかの特徴的な埋葬様相をみると、鉄製品は北西部の全域にわたって出土し、伴出した遺物は玉製品が最も多く、青銅製品と石製品が最も少ない。境界部や南東部に比べ、鉄製の武器類は北西部で多く埋納され、なかで太刀は北西部のみで発見されている。こうした鉄製品が一般的な副葬品であったことは、鉄の消費の多さを示唆

している。

玉製品、ガラス製品が出土した墳墓の分布をみると、M72、M157を中心に分布する様相をみせる。M72は北西部の土壙墓の中で最大の墳墓である。M72の東北に位置するM77の場合、割れた部分を銀片で接着してある玉環が出土するのみならず、玉珠やガラス珠からなる首飾りと鉄短剣も伴出している。M157の西に位置するM163は、玉製品とガラス珠20個を出土し、鉄製の太刀（長さ65.8cm）を伴出している。玉製品を出土した墳墓のうちM101やM178のように北東部と南西部に単独で存在する墳墓もあるが、M72とM157の付近には玉製品、ガラス製品、銀製品を出土する墳墓が集中している。

## ② 境界部

8基の墳墓の中で鉄製品を出土した墳墓は6基（75%）、そのうち武器類を出土した墳墓は5基（63%）、青銅製品を出土した墳墓は3基（37%）である。青銅製品出土の墳墓はすべて鉄製品を伴出しており、それも刀子や鏃などの武器類である。玉製品出土の墳墓は4基（50%）で、石製品出土の墳墓は2基（25%）であり、銀製品出土の墳墓はない。また、太刀や槍など接戦武器は出土していない。サンプル数が少ないため、割合が高くなっていることもあるが、傾向としては北西部に比べ鉄製品出土の墳墓がやや減り、銅製品、玉製品、石製品出土の墳墓が増えている。

玉製品を出土しているM153とM159が近くに位置し、M115とM171が離れている様相を見せている。M153からは青銅品の騎馬人物像や鈴、鐸、鉄製品の刀子や鏃が出土し、M159からは青銅の環や鉄製の刀子などが出土しており、ほかの墳墓より埋葬品が豊かである。

北西部と同様、玉製品、ガラス製品を出土している墳墓が集中している埋葬様相を呈しているが、銀製品の出土比率が減ること、太刀、槍などの武器は出土していないのが北西部との相違である。

## ③ 南東部

9基の墳墓のうち、鉄製品出土の墳墓5基（56%）、青銅製品出土の墳墓3基（33%）、ガラス珠を含む玉製品出土の墳墓6基（67%）、石製品出土の墳墓1基（11%）である。銀製品は出土していない。

南東部は、石室墓（M46、M70、M71、M123、M124）、土石墓（M48、M49）、土壙墓（M9、M105、M106、M113）のように墳墓形式が混じっている。したがって墳墓形式ごとに遺物が埋葬された様子を見る必要がある。石室墓M71では、紅玉珠2つ、槍、鏃などの出土遺物がある。またここで出土した鏃は人骨にささった状態で出ており、武将墓であるとされる墳墓である。M123にはガラス珠8個、刀子と鏃が出土し、M124は玉環と鏃が出土した墳墓である。両墳墓は鏃が人骨にくっついて出土していないことと、M71をはじめとする石室墓（M46、M70）が集中している墓域とはやや離れていることから、必ずしも武将墓とみることはできない。土石墓M48とM49は、M71などの石室墓が集中する墓域にあり、石室墓のM46の下層に位置する。出土遺物をみると、玉製品などの遺物は出て

おらず、M48 では鉄刀子が、M49 では鉄釘が出土するのみである。土壙墓 M105、M106、M113<sup>46</sup>のうち、M105 にはガラス珠と牌飾が共出し、M106 では玉環と玉珠首飾りが出土している。両墳墓は M71 などの石室墓が集中する墓域と近く、M105 の場合は M70 石室墓と一部重複関係があり、M70 の北東墓壁の下で発見されている。M113 は両墓の東北部にやや離れたところに位置する。白色の玉石が出土するのみで、ほかの遺物は出土していない。

南東部も、M71 をはじめとした石室墓が集中する地域に玉製品などを出土した墳墓が集中しているが、M123、M124 など玉製品が出土することも看過できない。

南東部の埋葬様相をみると、鉄製品の出土する墳墓の比率は境界部よりも減り、青銅製品、銀製品の出土墳墓はほぼ同じで、玉製品の出土する墳墓の比率が高くなっている。武器の太刀が出土しておらず、槍も M71 の人骨にさされた状態で出土している。

以上、三つの時期に分かれている三つの部分の遺物の中でも鮮明な特徴を表す鉄製品と玉製品の出土墳墓の比率を中心に検討してみた。ここで墳墓群全体の出土遺物の様相をまとめてみると、

- 1、三つの時期にわたって玉製品を出土する墳墓が集中する（図 7-2 の梯形部分）
- 2、年代が古い北西部から年代が新しい南西部へむけて、鉄製品とくに鉄製武器の出土比率が減る一方、玉製品やガラス製品などの出土比率が増える

ということがわかる。さらに、2 については、北西部から南東部に向かって鉄製品の出土比率が 80%から 56%に減少する一方、玉製品やガラス珠のような装身具の出土比率は 34%から 67%へと増加することがわかる。また、鉄製品のなかの太刀、槍などの接戦武器の遺物が端的に減少している埋葬様相が看取される。そして、全 3 期のなかで、渤海王国の勢力が浸透した時期、つまり 8 世紀から鉄製品の埋納比率が減り、玉製品の埋納比率が増加している。具体的には、鉄製品のなかでも太刀、槍などの武器類の遺物が減っていく。戦闘用具の埋納が下火になり、交易などによる玉製品などの装身具が珍重されていったのではないかと思われる。

表 7-4、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群での土器以外の出土遺物

区域	墓制	遺構	玉製品				ガラス珠	銀製品		青銅製品								
			玉環	玉管	玉珠	その他		耳環	騎馬人物像	丸斬	巡方	環	鈴	鐸	牌飾	その他		
南東部	土 M9																	板
	土石 M48																	
	土石 M49																	
	石 M71				● (紅2)													
	土 M105																	
	土 M106		●			●29												青銅片1
	土 M133					白色の玉石1												
石 M123																		
石 M124		●																
境界部	敷石 M59																	
	敷石 M115				●	白色軟玉製円盤												
	敷石 M153			●														
	敷石 M159				● (紅1)													鐸の珠
	敷石 M162																	
	敷石 M164																	
	敷石 M171					● (紅6)												
敷石 M172																		
北西部	土 M24																	
	土 M32																	
	土 M33																	
	土 M34																	
	土石 M55																	
	土 M56																	
	土 M58																	
	土 M61																	
	土 M63																	
	土 M64																	
	土 M65																	
	土 M66																	
	土 M67																	
	土 M69																	
	土 M72				● (紅3)	白色玉珠1												
	土 M73		●	● (薄青)														
	土 M75																	
	土 M77		●2	●														
	土 M78																	
	土 M79																	
	土 M82																	
	土 M83																	
	土 M84																	
	土 M85																	
	土 M86																	
	土 M88																	
	土 M89																	
	土 M92																	
	土 M93																	
	土 M94																	
	土 M95																	
	土 M99																	
	土 M101																	
	土 M103																	
	土 M104																	
	土 M109																	
	土 M111																	
	土 M116																	
	土 M121																	
	土 M129																	
	土 M131																	
土 M132		●																
土 M135																		
土 M137					● (紅3)													
土 M138		●																
土 M139																		
土 M140																		
土 M143		●2																
土 M144																		
土 M145																		
土 M146					● (紅1)													
土 M147		●			● (紅1)													
土 M148																		
土 M149																		
土 M151																		
土 M152																		
土 M154		●																
土 M157		●																
土 M158																		
土 M163		●2	● (紅2、白2、褐1、緑)	● (紅1)														
土 M167																		
土 M169																		
土 M176																		
土 M178		●																
土 M179																		
土 M180																		
土 M181																		
土 M183																		
土 M184																		
土 M185																		
土 M187																		
土 M189																		
土 M190																		
土 M195																		

表 7-4、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群での土器以外の出土遺物（つづき）

区域	墓制	遺構	鉄製品										石製品					その他遺物				
			釘	槍	太刀	短剣	刀子	鎌	小札	鉸具	環	その他	黒曜石	砥石	環	磨石器	その他					
南東部	土 M9																					
	土 M48					●																
	土 M49		●2																			
	石 M71		●				●									●				棍棒状石製品		
	土 M105																				金継2（棺付属品）	
	土 M106																					
	土 M113																					
石 M123						●														鉄片十数個		
石 M124						●3																
境界部	敷石 M59		●			●																
	敷石 M115		●11																		クロノフカ文化土器の取手	
	敷石 M153					●																
	敷石 M159					●																
	敷石 M162					●																
	敷石 M164																				●	
	敷石 M171						●2														ロ字遺物	
敷石 M172															●							
北西部	土 M24					●																
	土 M32																				チェーン	
	土 M33																					
	土 M34																					
	土 M55						●															
	土 M56		●5																			
	土 M58		●4																			8字形遺物
	土 M61																					●
	土 M63																					
	土 M64			●																		
	土 M65			●																		
	土 M66																					
	土 M67																					鉄片
	土 M69			●		●																●
	土 M72		●11																			●
	土 M73																					●
	土 M75																					●
	土 M77																					●
	土 M78																					小さい塊40 円錐形遺物
	土 M79																					●
	土 M82																					●
	土 M83																					●2
	土 M84																					(破片24)
	土 M85																					
	土 M86																					
	土 M88																					
	土 M89																					●
	土 M92																					鉄片3
	土 M93																					
	土 M94																					U字鉄片
	土 M95																					●2 円錐形遺物5、三角鉄片1
	土 M99																					●
	土 M101																					●8 鏝2
	土 M103																					●
	土 M104																					●
	土 M109																					●3
	土 M111																					●
	土 M116																					●
	土 M121																					●
	土 M129																					●3 鉄片1
	土 M131																					
土 M132																					●2 スプリング状遺物	
土 M135																					●	
土 M137																					●	
土 M138																						
土 M139																					●3	
土 M140																					スラグ	
土 M143																					●	
土 M144																					●	
土 M145																					● ハバキ3	
土 M146																					● チェーン	
土 M147																						
土 M148																						
土 M149																					●2 機能用途不明の遺物片4 ハバキ1	
土 M151																					●	
土 M152			●																		●	
土 M154																					●	
土 M157																					●	
土 M158			●																		●	
土 M163																					● 鉄片1	
土 M167																					●	
土 M169																					● スプリング遺物、円錐形遺物	
土 M176																					●	
土 M178																					● チェーン1、鉄片1	
土 M179																					● ハバキ1、遺物片3	
土 M180																					●	
土 M181																					●	
土 M183																					●	
土 M184																					● 鉄片1	
土 M185																					●	
土 M187																						
土 M189			●			●															● ハバキ1	
土 M190																					●5	
土 M195																					● 連珠形遺物2	

(M9 は、魏存成『渤海考古』(文物出版社、2008年、p.281)による。M9 以外は下記の報告書より整理

- a 『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (I) :第 1・2 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』
  - b 『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (II) :第 3 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』
  - c 『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (III) :第 4 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』
  - d 『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (IV) :第 6 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』
- 網掛けしたものは太刀と思われるもの)

## 第5節 渤海率賓府の一在地社会

本章の第4節までで、文献史料から渤海王国による率賓府地域の統合過程を推定した後、率賓府の一在地社会に営まれたチェルニャチノ 5 渤海墳墓群の年代推定、遺物の出土比率からの埋葬様相の検討を行った。以下、それを受けて渤海の辺境にある率賓府の一在地社会の社会様相について触れてみる。

まず、それぞれの時期において玉製品の出土する墳墓が区域的に集中する現象について、これは当該地域の首長層の動向と何らかの関連があるのではないかと推測される。

このような現象は、特に『隋書』巻81 靺鞨伝にある「邑落俱有酋長、不相總一」という記録及び『類聚国史』巻193 渤海沿革記事<sup>47</sup>に記された首領の存在を想起させる。これらの記事は率賓府地域の記録ではなく、靺鞨あるいは渤海全体にかかわる記録である。邑落には独立性を有する酋長がいることや、渤海王国の地方では大村には都督に任命された村長が、その次の大きさの村には刺史に任命された村長がおり、またその下部には首領に任命された「百姓」とよばれた在地の有力者が存在していたと記されていた。ところで、綏芬河流域が靺鞨号室部の居住地と見なすことができるならば、6~7世紀のチェルニャチノ 5 墳墓群の北西部は、号室部のうち、ある部落によって造営されたと思われる共同墓地の一つであり、そのなかでも玉製品、ガラス製品などの奢侈品を入手でき在地の有力者たちの墳墓が集中的に存在したのではないかと考えられる。その後、8世紀になって渤海王国がこの地域に影響力を及ぼし、境界部の墳墓が造営されるようになり、さらに、9~10世紀には渤海王国の支配力が及ぶようになって以降、南東部の墳墓が造営されるようになった。しかし、玉製品を出土する墳墓は依然として集中して存在した。これは、渤海王国統治下の時代になっても、在地の有力者層が保ってきた地域社会の秩序を解体することをせず、『中台省牒』に見られる「大首領」のような肩書きを与え、ときには彼らを対唐貿易、対日貿易に参加させることによって包摂したという<sup>48</sup>ことと関連するかもしれない。いずれにしてもチェルニャチノ 5 渤海墳墓群からうかがえる率賓府下の一地方社会の在地有力者層は、一般の民衆と墓域を分けることなく共同で墓地を利用しつづけていたようである。これは、身分や階級によって墓域を分ける牡丹江上流域の六頂山墳墓群や牡丹江中流域の渤海鎮付近の墳墓群（三霊屯、虹鱒魚場墳墓群）、あるいは海蘭江流域の龍頭山墳墓群などと異なる形態である。つまり、綏芬河流域に位置する率賓府下の一地方社会では、渤海王国支配下の時代を含めてそれ以前の時代から同一墓地を利用したようで、大きな変化はなかった。いいかえれば、在地社会のありように大きな変化はなかったということになる。

それでは、次に、時系列でみたとき、鉄製品とくに鉄製武器を出土する墳墓の比率が減少する一方に対して、玉製品などを出土する墳墓の比率が増加する現象について検討してみよう。

この現象で第一に注目すべきは、鉄製品のうち特に太刀、槍などの武器の埋納が下火になっていくことである。このことは、渤海王国の勢力が浸透する以前には太刀、槍などの

埋納が隆盛だったということを意味する。この鉄製武器の減少傾向については、状況判断ではあるが、以下のように説明できるのではないだろうか。すなわち、6世紀末から7世紀中葉まで、靺鞨内部では高句麗と対抗する勢力と協力する勢力に分かれており、隋唐帝国と高句麗との戦争に靺鞨諸部族が巻き込まれたことが『旧唐書』、『冊府元龜』などの文献史料で確認でき、鉄製武器の埋納は、こうした状況と無関係ではないように思われる。渤海王国の時代である8世紀、9世紀に戦争がなかったとは言えないが、6世紀、7世紀のような大規模戦争はみあたらない。チェルニャチノ 5 墳墓群での鉄製武器の埋納が次第に減少する傾向にあったのもこうした時代背景となんらかの関係があるのではないかと思われる。

さらに8世紀、9世紀になると玉製品が出土する墳墓の比率が増えていく。これは、渤海王国による交易の構造と関連があると思われる。玉製品をはじめとするガラス製品や青銅製品、鉄製品などには、中国の松花江流域や牡丹江流域の出土遺物と類似品が多くみられる。いくつかの例を挙げると次の通りである。M77 出土の玉環は銀で接着したものであるが、松花江流域の査里巴墳墓群遺跡<sup>49</sup>の M31 から出土している玉環も金属片で接着している。また M77 で出土する銀耳環は、牡丹江上流域の六頂山墳墓群<sup>50</sup>の II M11 や II M13 の銀耳環とほぼ同じ形式（一端を中に曲げる）である。M153、M154 で見られる騎馬人物像は、松花江流域の大海猛遺跡<sup>51</sup>の T8 から出土した騎馬人物像とよく似ており、類似品は同じ綏芬河流域の団結遺跡や南ウスリースク遺跡<sup>52</sup>などでもみられる。M105 出土の牌飾（アムール型帯飾板）は、牡丹江中流の虹鱒魚場墳墓群<sup>53</sup>の M2184 出土の牌飾とまったく同じ形式のものである。さらに M163 の太刀は、牡丹江下流域の石場溝墳墓群<sup>54</sup>で出土した太刀と似ており、M49 で出土する鏃は、松花江流域の大海猛遺跡<sup>55</sup>のものと同形式のものである。

このように、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群から出土した遺物は、松花江流域や牡丹江流域から出土した遺物に似ているものが多い。これらの遺物は、すべて自ら生産したものとはいえない。たとえば、綏芬河流域では、玉の生産地がいまだに確認されていない<sup>56</sup>。しかしながら、当該墳墓群においては、玉製品が 35 基の墳墓から出土している。この地域にもっとも近い玉の生産地としては中国遼寧省の岫巖県になろう。おそらくは、当該地域にもたらされた玉製品をはじめとする多くの遺物は交易によるものであろう。ほかの遺物もすべて交易によって持たされたかどうかは不明だが、同形式の出土遺物の存在から、当該地域は、松花江流域、牡丹江流域となんらかの交流または交易があったことが推論できる。また、牌飾（アムール型帯飾板）などのような遺物は黒龍江（アムール川）流域にも多くみられ、それは突厥や中央アジアからもたらされた文化の遺物であるといわれている<sup>57</sup>。

チェルニャチノ 5 墳墓群内で玉製品などを出土した墳墓の被葬者は、そのような製品を入手できた在地の有力者層（首領層を含む）ではなかったかと推測される。さらに、渤海王国の辺境地域に位置する率賓府下の在地社会において、一部の有力者層による在地社会での交易への関与などが行われ富の集中が進んだのではないかと思われる。東北アジアにおいて戦争が激しかった 6、7 世紀に比べて相対的に平和だった 8、9 世紀には、渤海王国

の境域内で首領層により玉製品をはじめとする種々の物品の交易がより安定的に行われ、当該墳墓群の玉製品の出土墳墓の比率を増加させたのではないかと思われる。つまり、このような現象は、率賓府下の一地方社会が渤海王国全体の交易構造の中に組み込まれた結果であったかもしれない。これは、出土遺物から導かれたひとつの仮説に他ならない。しかしながら、現時点では渤海王国の中心地域の墳墓群（六頂山、虹鱒魚場）のように金製または金銅製の遺物が一つも出土していない。これに対して率賓府の所在地だと有力視されている大城子古城遺跡では、金銅製の遺物が多数出土<sup>58</sup>している。これに対してチェルニャチノ 5 渤海墳墓群からそうした遺物は出土していない。こうしたことから、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群が位置する率賓府下の一地方社会においては、金製や金銅製の品物の流通はほとんどなかったとも思われるが、六頂山や虹鱒魚場などの墳墓群の出土状況をふまえると、むしろそうした奢侈品に値する品物を埋納する習俗はなかったのではないかとも思われる。このことは、埋納習俗とも関連して検討したい課題のひとつである。

チェルニャチノ 5 渤海墳墓群では、全体として土壙墓、靺鞨罐、アムール型帯飾板などで代表される靺鞨系文化と、石室墓、鼓腹罐などの高句麗系文化が混在している。それは、6、7世紀には靺鞨文化が優勢であった。そして、8、9世紀になると渤海王国の影響でいわゆる高句麗系文化と見られる諸要素が入り込んだことによるものと思われる。つまり、渤海王国の社会は、一般に高句麗系文化と靺鞨系文化の上に成り立っており、一部の地域（とくに牡丹江上中流域）では両文化が混在する現象も看取される<sup>59</sup>。チェルニャチノ 5 渤海墳墓群は靺鞨系文化が優勢の状態から渤海文化（高句麗系文化と靺鞨文化を内包し、統合していた地域の文化を取り入れた文化）が優勢の状態に移行しているよい事例であろう。

## 注

- <sup>1</sup> 『新唐書』卷 219 渤海伝「（前略）地有五京、十五府、六十二州。以肅慎故地為上京，曰龍泉府，領龍、湖、渤三州。其南為中京，曰顯德府，領盧、顯、鐵、湯、榮、興六州。濊貊故地為東京，曰龍原府，亦曰柵城府，領慶、鹽、穆、賀四州。沃沮故地為南京，曰南海府，領沃、晴，椒三州。高麗故地為西京，曰鴨渌府，領神、桓、豐、正四州；曰長嶺府，領瑕、河二州。扶餘故地為扶餘府，常屯勁兵扞契丹，領扶、仙二州；鄭頡府領鄭、高二州。挹婁故地為定理府，領定、潘二州；安邊府領安、瓊二州。率賓故地為率賓府，領華、益、建三州。拂涅故地為東平府，領伊、蒙、沱、黑、比五州。鐵利故地為鐵利府，領廣、汾、蒲、海、義、歸六州。越喜故地為懷遠府，領達、越、懷、紀、富、美、福、邪、芝九州；安遠府領寧、鄆、慕、常四州。又郢、銅、涑三州為獨奏州。涑州以其近涑沫江，蓋所謂粟末水也。龍原東南瀕海，日本道也。南海，新羅道也。鴨渌，朝貢道也。長嶺，營州道也。扶餘，契丹道也。俗所貴者，曰太白山之菟，南海之昆布，柵城之豉，扶餘之鹿，鄭頡之豕，率賓之馬，顯州之布，沃州之綿，龍州之紬，位城之鐵，盧城之稻，湄沱湖之鯽。果有九都之李，樂游之梨。（後略）」。
- <sup>2</sup> 金毓黻「地理考」『渤海國志長編』（千華山館、1934年）。
- <sup>3</sup> 鳥山喜一「王国の四至」『渤海史考』（奉公会、1915年、p.294）、鳥山喜一著、船木勝馬編「率賓府」『渤海史上の諸問題』（風間書房、1968年、pp.195～197）、和田清「渤海国地理考」（『東洋学報』36(4)、1954年3月、pp.1～53）、張泰湘「唐代率賓府辨」（『歴史地理』第2輯、1982年、pp.176～180）、郭毅生「率賓府、恤品路和開元城」（『歴史地理』第2輯、1982年、pp.181～187）。
- <sup>4</sup> 酒寄雅志「渤海の王都と領域支配」（『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、p.147、初出1998）。
- <sup>5</sup> 『遼史』卷 38 地理志 2「率賓府，刺史。故率賓國地。」『遼史』卷 38 地理志 2「康州，下，刺史。世宗遷渤海率賓府入戶置，屬顯州。初隸長寧宮，後屬積慶宮。統縣一：率賓縣。本渤海率賓府地。率賓縣本渤海率賓府地。」『遼史』卷 48 百官志 4「東京道三十七州：穆、賀、盧、鐵、崇、耀、嬪、遼西、康、宗、海北、巖、集、祺、遂、韓、銀、安遠、威、清、雍、湖、渤、郢、銅、涑、率賓、定理、鐵利、



吉、麓、荆、勝、順化、連、肅、烏。」『金史』卷 24 上京路 恤品路「恤品路，節度使。遼時，為率賓府，置刺史。本率賓故地。」『清史稿』卷 56 吉林 寧安府「明，綏芬河地，置率賓江衛。光緒二十八年，置綏芬撫民同知。」

6 『隋書』卷 81 靺鞨傳「靺鞨，在高麗之北，邑落俱有酋長，不相總一。凡有七種：其一號粟末部，與高麗相接，勝兵數千，多驍武，每寇高麗中。其二曰伯咄部，在粟末之北，勝兵七千。其三曰安車骨部，在伯咄東北。其四曰拂涅部，在伯咄東。其五曰號室部，在拂涅東。其六曰黑水部，在安車骨西北。其七曰白山部，在粟末東南。勝兵並不過三千，而黑水部尤為勁健。自拂涅以東，矢皆石鏃，即古之肅慎氏也。…開皇初，使者與其徒皆起舞，其曲折多戰鬥之容。」

7 干志耿『黒龍江古代民族史綱』（黒龍江人民出版社 1987 年、p.232）、馬一虹『靺鞨、渤海与周边国家、部族關係史研究』（中国社会科学出版社、2011 年、p.72）。

8 前掲注 2。

9 『旧唐書』卷 199 渤海靺鞨傳「伯咄、安居骨、號室等部，亦因高麗破後奔散微弱，後無聞焉，縱有遺人，並為渤海編戶。」

10 前掲注 4。

11 古畑徹「渤海建国關係記事の再検討——中国側史料の基礎的研究」（『朝鮮学報』113、1984 年、pp.1～52）。

12 『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(IV):第 6 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009 年、pp.18~19）。

13 2003 年からの発掘調査は、2005 年から 2009 年までロシア語と韓国語を併記した報告書が 4 セット（1 セットはそれぞれロシア語報告書、韓国語報告書、写真帳の三冊からなる）が刊行されている。その詳細は以下の通りである。

a.『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (I) :第 1・2 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、以下発行先同、略す。2005 年）。b.『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(II):第 3 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（2006 年）c.『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(III):第 4 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（2007 年）d.『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(IV):第 6 次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（2009 年）。

14 ロシア語文献を確認していないため、2005 年から韓国側とともに刊行した報告書および関連の研究論文によってロシア側の 2002 年までの発掘基数を確認したが、報告書 I（2005 年刊行）では 45 基とし、報告書 II～IV（2006、2007、2009 年刊行）では 41 基とする。ロシア側が、1998～1999 年に 1 区域、2000 年と 2001 年に 2-1 区域、2002 年に 2-2 区域を発掘調査したという内容と考え合わせると、41 基が正しい。したがって、後に刊行した報告書で修正したことになる。また、その内容については、2003 年韓国で行われた「海東盛国『渤海』特別展記念国際学術大会」というシンポジウムで鄭昔培の「沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群」に関する報告で、この 24 基墳墓の状況を間接的に確認できる。鄭昔培「沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群」（『渤海考古学の最新成果』ソウル大学校博物館海東盛国『渤海』特別展記念国際学術大会、2003 年、pp.27～39）

15 中国でチェルニャチノ 5 墳墓群を紹介しているのは、魏存成「契爾良基諾 5 号墓地」『渤海考古』（文物出版社、2008 年、pp.280～281）魏存成「契爾良基諾 5 号墓地」（『渤海考古』p.280）によると、[俄] Ю・Г・尼基京、Е・И・蓋爾蔓著、宋玉彬訳「綏芬河流域契爾良基諾 5 号早期中世紀時代墓地考察的某些結果」（『東北亞歴史与考古情報』総第 41 期、2004 年）というチェルニャチノ 5 墓地に関する中国語の訳文もあるが筆者は未確認。日本でチェルニャチノ 5 墳墓群を紹介しているのは、Yu.G.ニキチン、チョンソクベ著、清水信行訳「2003～2004 年スイフン河流域のチェルニャチノ 5 墓地遺跡調査の成果」（『青山考古』23、2006 年、pp.123～144）清水信行「チェルニャチノ 5 墓地遺跡」（『アジア遊学』107、2008 年、pp.112～114）中澤寛将「考古学からみた渤海の地域社会」（『情報の歴史学』中央大学出版部、2011 年、pp.62～64）。

16 筆者はロシア語学力がないためロシアの研究は確認できていない。韓国でのチェルニャチノ 5 墳墓群を紹介しているのは、Yu.G.ニキチン「スイフン河流域のチェルニャチノ 5 渤海武将墓」『古朝鮮高句麗渤海発表論文集』高句麗研究財団、2005 年、pp.561～584）鄭昔培、Yu.G.ニキチン「チェルニャチノ 5 渤海古墳群の古墳類型と出土遺物」（『高句麗研究』26 輯、2007 年、pp.55～97）鄭昔培「沿海州中世時代の最新研究成果」（『2011 Asia Archaeology』韓国国立文化財研究所、2011 年、p.164）。

17 注 13 報告書 a.pp.137～138、報告書 d.p.136。

18 注 13 報告書 a.pp.161～170、報告書 b. II pp.313～317

19 注 13 報告書 b. II p.317

20 鄭昔培、Yu.G.ニキチン「チェルニャチノ 5 渤海古墳群の古墳類型と出土遺物」（『高句麗研究』26

輯、2007年3月、pp.72)。

- 21 靺鞨罐の時代的上限と下限については、菊池俊彦「靺鞨の同仁文化」(『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会、1995年、pp.211~212)。
- 22 白杵勲「靺鞨社会の形成—後期鉄器時代」(『鉄器時代の東北アジア』同成社、2004年、p.181)。
- 23 白杵勲「靺鞨文化の年代と地域性」(『日本と世界の考古学・現代考古学の展開』雄山閣、1994年)の中にはロシアのチャーコーバの見解を紹介している。
- 24 大貫静夫「同仁文化系統の土器の編年」(『東北アジアの考古学』同成社、1998年、p.204)。
- 25 菊池俊彦「靺鞨の同仁文化」(『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会、1997年、pp.179~224)。
- 26 喬梁「靺鞨陶器分期初探」(『北方文物』1994年第2期 pp.30~41)同「靺鞨陶器の地域区分・時期区分および相関する問題の研究」(『北東アジア交流史研究:古代と中世』塙書房、2007年、pp.211~233)。
- 27 譚英傑ほか「渤海墓葬中出土几种主要陶器類型的演变」(『黒龍江区域考古学』1991年、p.82)。
- 28 金太順「渤海墓葬研究中的幾箇問題」(『考古』1997年第2期、pp.17~46)。
- 29 胡秀然・劉曉東「渤海陶器類型学傳承淵源的初步探索」(『北方文物』2001年第4期、pp.37~43)。
- 30 張玉霞「牡丹江流域渤海遺跡出土陶器的類型学研究」(『辺疆考古研究』第4輯、2005年、pp.194~209)。
- 31 劉曉東「靺鞨文化研究」(吉林大学碩士學位論文、2007年)。
- 32 林棟「靺鞨文化陶器的区系探索」(吉林大学碩士學位論文、2008年)。
- 33 王樂「中国境内渤海陶器研究」(吉林大学博士学位論文、2009年)。
- 34 足立拓朗「渤海前期の「靺鞨系土器」について」(『青山考古』17、2000年)。
- 35 木山克彦「渤海土器の編年と地域差について」(『北方圏の考古学』I、2007年4月)、同「ロシア沿海地方の渤海土器」(『海と考古学』第8号、2012年、pp.57~77)。
- 36 中澤寛将「渤海の食器様式と土器生産」(『古代』123、2010年3月)。
- 37 前でも説明したが、突帯に関して、隆起線、隆起帯、凸帯、隆帯などの名称で呼ばれているが、本論文では突帯にする。
- 38 注36のp.139第1表参照。

年代	野焼き土器								ロク ロ製 深鉢	陶質 土器	振興遺跡	クラスキノ城 址	上京龍泉府	その他	本稿での時期区分	
	靺鞨罐															
	A1	A2	A3	A4	B1	B2	B3	B4								
600																
698														西石崗		靺鞨期
700																第1段階
												34区5号住居	第1次上京	紅罽 M2205 羊草溝 M110、M117 六頂山		第2段階
800																
														大城子墓地		I期
													瓦壁土坑埋土	第2次上京		II期
900 926																
													井戸跡中層			III期
													1号住居	東丹国		渤海滅亡後
1000																

- 39 前掲注35、前掲注36。
- 40 王志剛「渤海墓葬類型研究」(『中国考古学会第十二次年会論文集』文物出版社、2010年 pp.151~166)。
- 41 李蜀蕾「渤海墓葬類型演变再探討」(『北方文物』2005年第1期、pp.35~45)。
- 42 宋基豪「六頂山古墳群と建国集団」(『渤海社会文化史研究』ソウル大学出版文化院、2011年、pp.3~64、初出1998年)清水信行「六頂山古墳群の性格と渤海建国集団」(『青山考古』23、2008年、pp.45~90)。
- 43 東潮「高句麗における横穴式石室墳の出現と展開」(『高句麗考古学研究』吉川弘文館、1998年、pp.119~199)。
- 44 金鎮光「石室墓造営を通じてみた渤海の北方経営」(『高句麗渤海研究』30輯、2008年、pp.153~173)。
- 45 拙稿「渤海墳墓研究試論—虹鱒魚場墳墓群の検討を中心に—」(『国際学研究』創刊号、2010年、pp.19~44)。
- 46 M9号墓は今回確認した資料には詳細なことが書かれていない。
- 47 『類聚国史』卷193渤海「其(渤海)国、延袤二千里、無州県館駅、処処有村里、皆靺鞨部落。其百

---

姓者靺鞨多、土人少。皆以土人為村長、大村曰都督、次曰刺史、其下百姓皆曰首領。」

- 48 鈴木靖民「渤海の首領に関する基礎的研究」（『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年、pp.433～481、初出1979年）。同「渤海の首領制—渤海の社会と地方支配—」（『歴史学研究』547（増刊号）、1985年、pp.54～57）。同「渤海国家の構造と特質—首領・生産・交易—」（『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、pp.298～320、初出1999年）。
- 49 吉林省文物考古研究所「吉林永吉查里巴靺鞨墓地」（『文物』1995年第9期、pp.29～47）。
- 50 中国社会科学院考古研究所「六頂山渤海貴族墓地」（『六頂山与渤海鎮』中国大百科全书出版社、1997年、pp.4～42）。
- 51 吉林市博物館「吉林永吉楊屯大海猛遺址」（『考古学集刊』第5輯、1987年、pp.120-151）。
- 52 E.V.アスタシュエンコヴァ、鄭昔培訳「渤海住民の表現および装飾—応用美術—沿海州遺跡発掘調査資料を通じて—」（『高句麗渤海研究』42、2012年3月、p.177～195）。
- 53 黒龍江省文物考古研究所『寧安虹鱒魚場1992～1995年度渤海墓地考古発掘報告』（文物出版社2009年）。
- 54 黒龍江省文物考古研究所「黒龍江省牡丹江樺林石場溝墓地」（『北方文物』1991年第4期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年、pp.397～405）。
- 55 注51、吉林省文物工作隊、吉林市博物館、永吉県文化局「吉林永吉楊屯遺址第三次発掘」『考古学集刊』第7輯、1991年、pp.23～50）。
- 56 E.V.アスタシュエンコヴァ、鄭昔培訳「渤海住民の表現および装飾—応用美術—沿海州遺跡発掘調査資料を通じて—」（『高句麗渤海研究』42、2012年、p.193）。
- 57 菊池俊彦「書評E・И・デレヴァンコ著『黒龍江中流の靺鞨の遺跡』」（『史学雑誌』86(2)、1977年2月、pp.202～208）。E・И・傑烈維揚科著、林樹山、姚風訳『黒龍江沿岸の部落』（吉林文史出版社、1987年）。馮恩学「黒水靺鞨的装飾品及淵源」（『華夏考古』2011年第1期、pp.113～118）。
- 58 張泰湘「唐代率賓府辨」（『歴史地理』第2輯、1982年、p.179）。
- 59 小嶋芳孝「渤海考古学の現状と課題—渤海都城の変遷と水系を考える—」（『東アジアの古代文化』96、1998年、p.138）では「各都城周辺の遺跡のあり方から、上京龍泉府は高句麗的な産業基盤を否定し、靺鞨の伝統的な生活基盤である交易を国家の機軸としていた可能性を」論じた。また三上次男の「図們江水系は高句麗の影響が強く、牡丹江水系の遺跡のあり方とは異なっていることを」紹介している。三上次男「渤海の瓦」（初出『座右室』10・11・12号、1947年、『高句麗と渤海』吉川弘文館1990年所収）。さらに中澤寛将「考古学からみた渤海の地域社会」（『情報の歴史学』、中央大学出版部、2011年、p.81）では「渤海の文化変動と地域性について考古資料を用いながら検討してきた。渤海建国によって、旧来からの文化が急激に変化する地域、緩やかに変化する地域、伝統的な文化が継続する地域に大きく分けることができる。地方社会において新たな文化を受容する場合、石室墓の導入に顕著に見られるように、伝統性を保持しながら新たな文化を選択的に受容するという状況を読み取ることができる。」とある。

## 第8章 王室墓と非王室墓の特徴

第5章から第7章において、渤海の墳墓群の中で三つの典型的な墳墓群（六頂山墳墓群、虹鱒魚場墳墓群、チェルニャチノ 5 渤海墳墓群）を取り上げた。その検討内容を受けて、この第8章では、ひとまず渤海の墳墓群全体の特徴をまとめておくことにしたい。そこで、まず貞恵公主墓、貞孝公主墓、順穆皇后墓を中心とする王室墓の特徴をまとめ、次に、それと対応する非王室墳墓群とみなせる虹鱒魚場墳墓群を中心に取り上げる。その作業をつうじて在地社会有力者層の墳墓様相を確認し、ついでに、六頂山墳墓群と龍海墳墓群（貞孝公主墓、順穆皇后墓が位置する）の非王室墳墓に関しても言及したい。チェルニャチノ 5 墳墓群は、渤海の辺境に位置する墳墓群であり、近くに比較できる王室墓が発見されていないため、王室墓との比較をしなかった。

### 第1節 王室墓の特徴

渤海王国時代の墳墓のうち、墓誌銘から紀年が明確になっているのは、六頂山墳墓群にある780年埋葬の貞恵公主墓（IM2）、龍海墳墓群にある792年埋葬の貞孝公主墓（81M1）及び830年埋葬の順穆皇后墓（05M3）の3基の墳墓である。龍海墳墓群の孝懿皇后墓（05M12）でも墓碑が見つかったという報告はあるが、内容が公開されていないため、詳細はわからない。このうち、貞恵公主と貞孝公主はそれぞれ渤海第3代国王大欽茂の次女と四女であり、順穆皇后は第10代国王大明忠の皇后である。また、詳細はわからないが、報告<sup>1</sup>によると、孝懿皇后は第3代国王大欽茂の皇后であるという。

この王室墓の研究において、魏存成は、渤海の王室は、高句麗とほとんど関係がなく、唐の影響を受けて造営されたものだ<sup>2</sup>と指摘している。宋基豪は、貞恵公主墓と貞孝公主墓の墓誌銘に「皇上」がみられ、順穆皇后墓の墓誌銘に「皇后」が見られることから、渤海が皇帝国であったことを主張する<sup>3</sup>。また、田村晃一は、貞恵公主墓と貞孝公主墓を比較して、渤海の王室墓には、貞恵公主墓のように高句麗的文化要素が含まれているものと、貞孝公主墓のように唐の影響が含まれているものとが存在すると推定しており、両公主墓の墓誌銘を分析して両者は夫とともに葬られたことを指摘し、さらに夫の種族によってその墳墓の様相が異なるのだと結論づけた<sup>4</sup>。魏、宋、田村の研究には、王室墓からみられる渤海の社会的様相の分析において傾聴すべき論点がある。しかし、これらの先行研究には渤海社会の上層部である王室の墳墓のみを取り扱っているという限界があり、筆者が関心を持っている渤海の非王室墓、さらには在地社会の議論には及んでいない。これらのことを念頭におきながら、以下においてまず王室墓の特徴から検討してみたい。

上記のように、六頂山墳墓群の貞恵公主墓（IM2）、龍海墳墓群の貞孝公主墓（81M1）と順穆皇后墓（05M3）が渤海の王室墓であることは、発見された墓誌から確定できる。そこで、まずこの3基の墳墓の特徴を検討し、これらを基準にしてそのほかの王室墓と思わ

れる墳墓の特徴と分布を考えてみたい。

表 8-1 に提示した「確定王室墓の属性表」は、3 基の墳墓の属性を構造と出土遺物に分けてまとめたものである。

表 8-1 確定王室墓の属性表<sup>5</sup>

構造

墓名	造営年代	方向	墓室						墓道		封土		
			構築材料	平面形状	長 (m)	幅 (m)	高 (m)	墓室面積	位置	長 (m)	幅 (m)	形状	高 (m)
貞恵公主墓 (六頂山 I M2)	777-780 年	204°	石	正方形	2.8-2.94	2.66-2.84	2.68	8.3	南	11	2.45	円形	1.5
貞孝公主墓 (81 龍海 M1)	792 年	170°	磚	長方形	3.1	2.1	3.4	6.5	南	7.1	南 5.75 北 3.3	墳墓の上に塔がある。	
順穆皇后墓 (04 龍海 M3)	830 年 (遷)	墓道 172° 墓室 185°	石	長方形	4	1.9-2.4	1.65	9.6	南	6.4	2.3-2.7	現地表と同じ平面	

出土遺物

	出土場所	陶器	金銅製遺品	金属類	瓦埴類	壁画	墓碑	玉石類	その他
貞恵公主墓 (六頂山 I M2)	封土				平瓦				
	墓道				埴 70				
	甬道		金銅製円帽銅釘 4				墓碑 1	石獅子	
	墓室			鉄釘					
貞孝公主墓 (81 龍海 M1)	盗洞	陶俑顔部の破片 2	金銅製金具 2	鉄片 3					
	甬道		金銅製金具 5、金銅製円頭釘 7 (一部盗洞)	鉄釘 7 (一部墓道の盗洞)	埴	人物壁画 2	墓碑 1		
	墓室					人物壁画 10			埴積床の付近で漆片
	墓道	陶片 2		金銅製金具 1					
順穆皇后墓 (04 龍海 M3)	盗洞			金銅製装飾品、金銅製円頭釘					
	墓室	三彩の馬頭・馬の体、三彩の獣							埴積床
	甬道						墓碑 1		
三陵 M2	填土	陶獣頭残片、陶獣足、陶器残片		鉄鏃	文字瓦				蚌壳

この属性表からわかるように、渤海の公主また皇后の墓室の規模は、おおむね長さ 3m 以上、幅 2m 以上、高さ 1.5m 以上と見なすことができる。さらに、墓室底平面の長さ：幅の比率をみると、貞恵公主墓が 1.07 : 1、貞孝公主墓が 1.48 : 1、順穆皇后墓が 1.86 : 1 にな

る。つまり、墓室底平面の形は、貞恵公主墓は正方形に近い形、貞孝公主墓は長方形、順穆皇后墓も長方形である。このような墓室形状の変化は、780年、790年、830年という時間の推移による変化であるのか、それとも、六頂山墳墓群（墓室が正方形である貞恵公主墓）と龍海墳墓群（墓室が長方形である貞孝公主墓と順穆皇后墓）の地域性による変化であるか、この3基の墳墓の比較だけでは明らかにできない。3基墳墓のほかの属性の比較と、今後の発見に委ねられるが3基以外の王室墳墓の確定およびその比較検討が必要とされよう。

3基の墳墓の属性のうち、墓道について見てみると、3基とも中央に墓道が設置されているが、その形は大きく異なる。図8-1(p.148)で確認できるように、貞恵公主墓は長い直道型墓道を持ち、貞孝公主墓は墓室から外に向かって広がる逆梯型の墓道を持ち、順穆皇后墓は墓室から外に向かっての内側と外側の両方が広がり、中央が凹んでいる形の墓道を持っている。

3基とも構築材料には石材を使っているが、貞孝公主墓は埴・石をともに使用しているのに対して、そのほかの2基は石のみを使用している。材料について、貞孝公主墓の埴は加工したものであることはいうまでもないが、そのほかの2基の石材も加工された切石で、墳墓の内外の壁は整然に配置されている。多大な労力と時間をかけて築造したことは間違いない。構築層位をみると、貞恵公主墓は築造当時の山の地山から半地下に位置し、ほかの2基は地下に位置している。

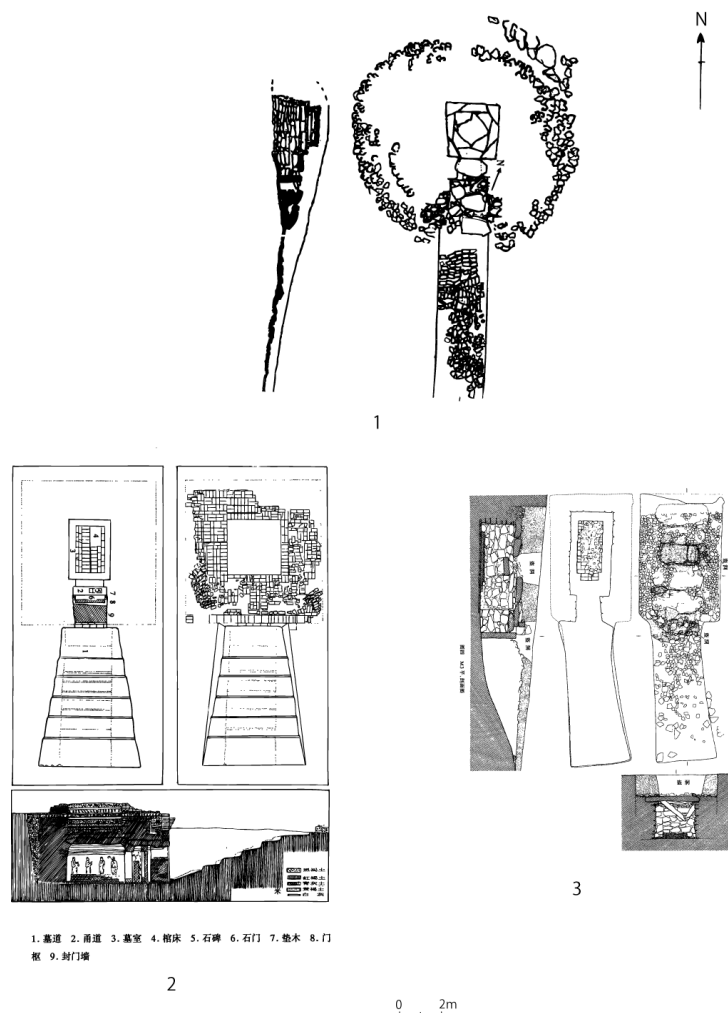
そのほかの同異点をさらに述べると、曲がった長い釘が3基とも出土していることから、木棺を使った可能性が高いが、貞恵公主墓には埴積の棺台がなく、ほかの2基にはある。また、天井の構造をしてみると、貞恵公主墓は三角持ち送り式で、貞孝公主墓は平行持ち送り式であるのに対して、順穆皇后墓は大きな板石で覆った平天井になっている。なお、これらの石材は、いずれも加工されている。

出土遺物をみると、3基とも金製または金銅製の製品が出土している。陶器類において、貞恵公主墓にはなく、代わりに石獅子が出土しているが、貞孝公主墓には陶俑の顔面の破片、陶片などが出土しており、順穆皇后墓からは三彩陶器、陶製の馬頭などが出土している。貞孝公主墓の甬道と墓室のなかには人物立像壁画が見られるが、ほかの2基には見られない。

これらの墳墓の同異点をまとめると、渤海の王室墓は、墓室の規模が、おおむね長さ3m以上、幅2m以上、高さ1.5m以上で、墓道をもち加工された石材で構築し、天井を持つ石室墓である。釘の出土から、木棺を使用した可能性が高く、一部の墳墓には埴積棺台が置かれている。これは、天井石がない墳墓を中心とする非王室墳墓とは対照的である。また、出土遺物のなかに、金、金銅などの製品、陶で作られた俑や動物がある。これらの点は渤海王室墓の特徴といえるだろう。また、王室墓からは、多人葬や火葬が見られず、副葬品のなかに、靺鞨罐やアムール型帯飾板、チュルク型帯飾板などが発見されていない。

このような渤海王室墓の特徴に基づいて、墓誌などの紀年資料が出土していない渤海の

墳墓から王室墓と思しき墳墓を推定することができよう。例えば、牡丹江下流域に位置する三陵屯墳墓群の1号墓（三霊墳）をみると、墓室の長さは4m、幅は2.2m、高さは1.8～2.4mになり、上記の3基の王室墳墓の墓室規模に相当する。さらに、構築材料は加工された石であり、平行持送式の天井を持っている。築造の層位は地下になっている。ただし、副葬品は盗掘され残っていないので、埋葬遺物の状況は不明である。さらに、1号墓の西南30mに位置する2号墓をみると、墓室の長さは3.9m、幅は3.3m、高さは2.45mで、三角持送式の天井の壁面に蓮花文様の壁画が描かれている。副葬品のなかには、陶製の獣頭、獣足などの破片が見つかった。これらのことを勘案してみると、2号墓も王室墓と推定することができよう。三陵屯墳墓群には、このほかに3号墓、4号墓、5号墓が見つかるが、詳細な内容は公開されていない。今後の資料公開が俟たれるが、1号墓と2号墓の構造からみて、ここではひとまず三陵屯墳墓群を渤海の王室墳墓群であると確定したい。



渤海の王室墓 1 貞惠公主墓、2 貞孝公主墓、3 順穆皇后墓

図 8-1 確定王室墓

(1は王志剛「渤海墓葬類型研究」、2は『渤海遺跡』、3は『考古』2009年6期)

## 第2節 非王室墳墓の特徴

第1節で渤海王国の王室墓を取り上げた。本節では、王室墓と対応して非王室墳墓について取りあげてみたい。ここでは、王室墓の附近に位置する非王室墳墓群だと思われる虹鱒魚場墳墓群を中心に取り上げたい。虹鱒魚場墳墓群の埋葬特徴を王室墓と比較することから在地社会有力者層の様子を検討してみたい。

すでに第6章で述べたように、虹鱒魚場墳墓群においては王室墓のような大型石室墓はなく、天井から墓床までの高さが1m未満の壙室墓が全体の8割を占めている。

副葬品をみると、この墳墓群からは、施釉陶器や三彩などの高級陶器は出土せず、靺鞨罐を中心として、陶質土器が出土するのがその特徴である。また、銅製を中心としたアムール型帯飾板、チュルク型帯飾板が出土している。これは上記の王室墓では見られない遺物である。完全な形の靺鞨罐を出土した墳墓は81基あり、くわえて口縁部や胴部などの破片が出土した墳墓も多いので、靺鞨罐を副葬した墳墓はさらに多いと考えられる。アムール型帯飾板を出土した墳墓は5基あるのに対してチュルク型帯飾板を出土している墳墓は40基になる。ここでは、出土例が多い靺鞨罐とチュルク型帯飾板を中心に虹鱒魚場墳墓群の墳墓の様相を探り、さらに六頂山墳墓群と龍海墳墓群の非王室墳墓についても言及しておきたい。

墳墓の分析指標でも取り上げたように、靺鞨罐は6～11世紀東北アジアの靺鞨人の居住地域に広くみられる土器様式の一つである。最近、木山克彦は靺鞨罐の成立について、その成立過程が辿れるのはアムール川中流域のポリツェ文化のみであり、松花江第二流域や牡丹江流域などの地域では当該地域の前代からの土器製作の伝統が温存されたと論じた<sup>6</sup>。靺鞨罐の使用主体は、すべて「靺鞨人」だとは言いきれないが、この種類の土器を使用または副葬した人々は靺鞨文化と深く関係したと言えるだろう。

虹鱒魚場墳墓群からは、69基<sup>7</sup>の壙室墓より完全な形の靺鞨罐が出土している。この数値は、靺鞨罐出土の墳墓81基の中で8割以上を壙室墓がしめていることを意味する。なお、262基を数える壙室墓のなかで靺鞨罐を出土したのは3割近くである。したがって、靺鞨罐を出土した墳墓のうちで壙室墓のしめる割合は高いことに比べ、壙室墓のうちで靺鞨罐を出土している墳墓数はかえって少ないといえる。

チュルク型帯飾板は40基の墳墓で出土しているが、そのうち36基の墳墓は壙室墓であり、9割を占めている。しかしながら、264基の壙室墓全体のなかでチュルク型帯飾板を出土したものは2割にも満たない。

さらに、虹鱒魚場墳墓群のなかで靺鞨罐とチュルク型帯飾板をともに出土している墳墓は19基あるが、すべて壙室墓である。この数はチュルク型帯飾板出土墳墓40基の5割弱になり、靺鞨罐出土墳墓81基の2割強になる。

このような現象をどのように解釈できるだろうか。中澤寛将によると、渤海王国時代の牡丹江中流域で虹鱒魚場墳墓群が造営された地域は、旧来の伝統文化が急激に変化する地



域に当たっているという。中澤はその根拠として、石室墓（ここでいう壙室墓）が中心を占めていて、墳墓内での靺鞨罐など副葬容器の埋納位置が、墓室の奥から墓室の入り口附近に変化することと、墳墓の主軸方向については東北方向が主体だったものから北西—東南方向が主体になるものへと変化することをあげている<sup>8</sup>。筆者が、虹鱒魚場墳墓群の靺鞨罐、アムール型帯飾板、チュルク型帯飾板などの出土遺物を検討した結果得られた見方、つまり、靺鞨文化が外来の文化の影響を受けて緩慢に変化したという点で通ずる。ただし、中澤のいう墓室内の副葬容器の位置と墳墓主軸方向の変化は渤海時代の前後との比較であって、同時代同墳墓群内での比較検討ではない。そこで、ここでは虹鱒魚場墳墓群内の壙室墓と靺鞨罐とチュルク型帯飾に注目して、次のような解釈を試みたい。

壙室墓は、この呼称を提唱した王志剛が指摘<sup>9</sup>するように、靺鞨人の伝統的土坑墓から周辺民族の石棺墓、石壙墓、石室墓を取り入れて、渤海独自の墳墓が造営されるようになった結果だと思われる。このことは、9世紀後半に造営されたと思われる虹鱒魚場墳墓群で、8割以上の壙室墓が造営されたことと一致すると考えられる。

また、靺鞨罐を副葬した被葬者はすべて靺鞨人とは言えなくても、これによって靺鞨文化の要素が残っていたことを窺い知ることができよう。さらに、靺鞨罐が埋納された8割以上の被葬者は壙室墓を使用している。これらのことは、虹鱒魚場墳墓群周辺に居住し、靺鞨の伝統文化を引き継ぐ人たちが、渤海独自の墓制である壙室墓を取り入れたことを意味している。しかしながら壙室墓のうち靺鞨罐出土の墳墓は3割ほどであり、残り7割の壙室墓への被葬者は靺鞨文化と決別したか、あるいは、はじめから靺鞨文化とは無縁の人たちであったからかもしれない。

次に、チュルク型帯飾板が出土した墳墓を見てみよう。鈐帯とも呼ばれるこの遺物は、大貫静夫が指摘するように、唐や突厥からの外来文化の影響がみられる<sup>10</sup>。また、中澤寛将は、チュルク型帯飾板はベルトを構成する重要な帯金具であるが、完帯の出土は少なく、単体として出土するのが特徴であるという。そして、クラスキノ遺跡の北西部の石室墓に出土した完帯のチュルク型帯飾板は、身分制をあらわすものであり、官人層が帯びていたと推測される<sup>11</sup>。ところで、虹鱒魚場墳墓群のチュルク型帯飾板も単体のものが主流である。チュルク型帯飾板をすべて官制の象徴とみなせると断定はできない。しかし、当該帯飾板を副葬することができた階層は、その出土量（墳墓全体の324基のうち40基のみに出土）からみても、経済的に優位な階層に属する人たちであったと推定できよう。チュルク型帯飾板の出土墳墓40基は36基が壙室墓であり、うち靺鞨罐を伴出している墳墓は19基である。このことは、チュルク型帯飾板が出土した墳墓は、壙室墓が主体であり、渤海の主流の墓制を採用していたこととなる。こうした靺鞨罐を伴出する19基の墳墓は靺鞨文化を引き継ぐ有力者層の墳墓である可能性は高いであろう。各墳墓のそのほかの副葬品もあわせて考えると、160点の副葬品を出土したM2001をはじめ、チュルク型帯飾板出土の墳墓の中で11基の墳墓には瑪瑙珠や耳環などの豊富な副葬品が埋葬されている。虹鱒魚場墳墓群の中で、この11基の墳墓の被葬者は靺鞨文化を引き継ぎ、また経済的にも優位な階層にあ

ったことは否めない。さらなる精査が必要である。現在の渤海考古学資料において、靺鞨文化を引き継ぐ経済的に優位な人たちが、文献史料に見られる「首領」であるという確証はない。ただし、それを否定する確証もない。ここでは、ひとまず、この11基の墳墓の被葬者を、『類聚国史』に見える「都督」や「刺史」及び「百姓（首領）」に任命された、有姓の「土人」もしくは「靺鞨人」と関係する可能性があるということだけ指摘するにとどめたい。

以上、壙室墓、靺鞨罐、チュルク型帯飾板を取り上げ、渤海の靺鞨文化の推移と官僚または首領階層の墳墓を推定してみた。これらの特徴を、牡丹江上流域に位置する六頂山墳墓群と図們江流域に位置する龍海墳墓群にあてはめるとどのようになるのであろうか。

六頂山墳墓群ではⅠ墓区北部とⅡ墓区を中心に壙室墓が造営されており、靺鞨罐とチュルク型帯飾板もⅠ墓区北部とⅡ墓区で出土している。それはⅠ墓区南部に貞恵公主墓を代表とする王室墓があるのと対照的である。Ⅰ墓区北部とⅡ墓区の靺鞨罐とチュルク型帯飾板を出土した墳墓は壙室墓のみならず、ⅡM126のように、土石混築墓からも少なからず出土している。虹鱒魚場墳墓群のように壙室墓を中心に靺鞨罐とチュルク型帯飾板が出土したということではない。チュルク型帯飾板を出土した墳墓をみると、副葬品が豊富であり、靺鞨罐を伴う場合と伴わない場合がある。六頂山墳墓群は、虹鱒魚場墳墓群と極めて似ている出土遺物の状態を示しているといえる。異なる点をいえば、六頂山墳墓群には土坑墓、土石混築墓などの墓制が確認でき、また火葬墓が多く見られることである。

一方、龍海墳墓群は、すべての墳墓の情報を公開していないため、虹鱒魚場墳墓群のように数量的検討はできない。その前提のもとで検討を進めることにしたい。龍海墳墓群をみると、山上の貞孝公主墓や順穆皇后墓のような代表的な王室墓に比べて、山下の非王室墳墓群は、すべて天井を伴う石室墓であり、靺鞨罐もない。チュルク型帯飾板は出土しているが、ほかの副葬品は極めて少ないことが、虹鱒魚場墳墓群と異なる墳墓の様相である。

以上のような非王室墳墓群の様相の異同は、渤海の河川流域に沿って遺跡が分布していることと関連があるように思われる。渤海の遺跡を流域ごとに分析した研究者に小嶋芳孝<sup>12</sup>、魏存成<sup>13</sup>がいる。魏存成は、渤海の墳墓群を第二松花江中流域、牡丹江上流域、牡丹江中流域、図們江流域、綏芬河流域などに分けて論述したのち、渤海の墳墓は、靺鞨の墳墓が主体をなし、流域ごとにほかの民族の葬制を取り入れて変遷したものであると把握している。本章で取りあげた六頂山墳墓群は牡丹江上流域、虹鱒魚場墳墓群は牡丹江中流域、龍海墳墓群は図們江流域に当たる。河川流域は渤海の社会や国家の情勢と関連して重要な地理的意味を持っている。牡丹江上流域は698年に渤海が建国した地であり、牡丹江中流域は7世紀中葉に遷都して、上京龍泉府がおかれた地である。図們江流域も一時的（天宝中、742～756年）ではあるが、中京顕徳府がおかれた地である。

このように考えると、本章で取りあげた三つの墳墓群は牡丹江流域と図們江流域に大別できる。牡丹江上流域の六頂山墳墓群と牡丹江上流域の虹鱒魚場墳墓群は、靺鞨罐とチュルク型帯飾板などの出土の様相はきわめて似ている。それに比べ、図們江流域の様相は異

なっている。このような墳墓の地域性は、渤海王権の支配と関連して各地域に独自性が維持されたかどうかといった分析の材料になると思われる。今後さらなる資料の蓄積と精査を通じて、その理由を解明したいと考えている。

## 注

- 1 吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文物管理委員会弁公室「吉林和龍市龍海渤海王室墓葬発掘簡報」（『考古』2009年第6期、p.38）。
- 2 魏存成「渤海王室貴族墓葬」（『中国考古学第三次年会論文集』、1981年。『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年、pp.340～344）。
- 3 宋基豪「龍海区域の古墳発掘であらわれた渤海国の性格」（『高句麗渤海研究』38、2010年。『渤海社会文化史研究』ソウル大学出版文化院、2011年、pp.350～370に再録）。
- 4 田村晃一「貞恵公主墓と貞孝公主墓の意味するもの（渤海の王陵・貴族墓とその被葬者（その1）」（『青山考古』27、2011年、pp.83～104）。
- 5 王志剛「六頂山渤海墓葬研究」（吉林大学碩士學位論文、2008年）、王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」（『社会科学戦線』1979年第3期、pp.200～210）吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文物管理委員会弁公室「吉林和龍市龍海渤海王室墓葬発掘簡報」（『考古』2009年第6期、pp.23～39）、延辺博物館「和龍県龍海渤海墓葬」（『博物館研究』1983年第3期、『高句麗渤海研究論文集』6 哈爾濱出版社、1997年、pp.375～379）、王志剛「六頂山渤海墓葬研究」（吉林大学碩士學位論文、2008年）、王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」（『社会科学戦線』1979年第3期、pp.200～210）、朱国忱・朱威『渤海遺跡』（文物出版社、2002年、pp.15～21）と魏存成『渤海考古』（文物出版社、2008年 pp.164～168）。
- 6 木山克彦「靺鞨・渤海・女真の考古学」（『アイヌ史を問いなおす—生態・交流・文化継承』（『アジア遊学』139）、2011年、p.141）。
- 7 ここでの数値は靺鞨罐が完全な形で出土した場合だけであるため、不完全な破片なども考慮に入れると、数値はさらに上がる。しかし、確定できるのはやはり完全な形であるため、ここではこの数値に依拠して分析することにする。
- 8 中澤寛将「考古学からみた渤海の地域社会」（『情報の歴史学』、2011年、pp.64～67）。
- 9 王志剛「渤海の墓葬類型研究」（『中国考古学会第十二次年会論文集』、文物出版社、2010年、pp.151～166）。
- 10 大貫静夫『北東アジアの考古学』（同成社、1998年）。
- 11 前掲注6の pp.70～72。
- 12 小嶋芳孝「渤海考古学の現状と課題—渤海都城の変遷と水系を考える—」（『東アジアの古代文化』96、1998年、p.118～138）。
- 13 魏存成「渤海墓葬の特点」（『渤海考古』文物出版社、2008年、p.283～290）。

## 終章

第1部では文献史料を、第2部では考古学資料を整理した。これまでの整理において、在地社会という視点から渤海王国の国家像を探ろうと試みた。この終章で、本研究で得られた結論とこれからの研究課題をまとめておきたい。

### 第1節 結論

本論文は、渤海王国の歴史を在地社会の有力者層の観点から再構成しようと試みたものである。

研究史を整理した結果、これまでの渤海王国の研究において以下にあげる二つの問題点があるといえる。

第一に、渤海王国の歴史展開に重要な位置にある在地社会の有力者層の検討がほとんどなされなかったことである。

本論文は、史実の考証から国民国家の歴史物語を乗り越えて、現在の国家にまたがる地域社会の視点から、渤海王国の歴史を多民族国家であるとする観点を引き継ごうとした。一方で、これまでの渤海王国の歴史に関する研究は、その視座を中央の政権側に置きがちで、その延長線上で在地社会について言及する傾向にあった。その理由は、渤海王国に関する文献史料が限られており、在地社会の記録が少ないことにある。しかし、渤海王国の229年の歴史を時期区分してみるとわかるように、その建国初期には、渤海王国はあくまで東北アジア地域を代表する一つの勢力に過ぎず、王国が置かれていた地域の諸民族社会に依存せざるを得なかった。前期から渤海王国は国家体制を整えつつ、東北アジア地域に散在していた諸民族社会を統合しながらその領域を拡大していった。しかしながら、北部靺鞨の一つである黒水靺鞨などの種族を完全には統合しきれなかったようである。このような渤海王国の領域拡大の過程を勘案すると、在地社会の動向は決して無視できないと考える。とりわけ、その靺鞨諸民族のなかで支配的地位にあった有力者層あるいは「首領」と呼ばれた人びとの動向は、王国の歴史像と歴史展開を究明するのに重要な位置を占めている。これまでの研究では、史料上の制約から在地社会にいた有力者層からの視点があまり重視されてこなかったといえる。

第二に、渤海王国の歴史に関する研究は、方法論的に文献史学からのアプローチと考古学からのアプローチに分離されてきたことである。

渤海王国の歴史を多民族国家であるとする論点から研究史を紐解くと、従来の研究は、文献史学と考古学との両方の成果を取り入れる試みもあった。しかし、大勢は文献史料からのアプローチと考古学資料からのアプローチに分かれている。その理由は、文献史学が読み解く渤海王国の社会及び国家像と、考古学資料から導かれる社会及び国家像が異なっているからである。唐や日本など外国の記録からなる文献史料の内容は、現地での一つの

土器や一基の墳墓が示す現象とすぐには結びつかないからである。しかし、同じ対象を見据えようとする以上、文献史料であろうと考古学資料であろうと、一方に依拠して考察するのは限界があるといわざるを得ない。その両方を有機的に結びつけようと試みたのが本論文である。

そこで、本論文では、在地社会にいた有力者層の動向を念頭におきながら、序章で研究史を整理し、問題の所在を提示した。第1部では、文献史料より在地社会の諸種族からみた渤海王国の時期区分及び在地社会の有力者層の動向を検討した。第2部では、考古学資料のなかで墳墓群資料を取り上げ、渤海王国の在地社会という視座から渤海王国の歴史像とその歴史的展開について論述しようとした。

第1部では、おもに文献史料を扱い、具体的に以下のような結論を得た。

第1章では、文献史料を手がかりに渤海王国と在地社会諸種族との関係について時期区分をして、その概要を示した。渤海王国は、前期つまり建国初期における東北アジア諸種族の代表的地位を得て、次第に領域を拡大して行く。この過程で在地社会における最大の勢力である黒水靺鞨への対応から、前期と後期に時期区分をした。このうち、前期では、高句麗や南部靺鞨の統合と北部靺鞨一部の統合を基準に、三つの段階に分けられ、後期では、黒水靺鞨の統合と離脱を基準に、三つの段階に分けられることを明らかにした。

第2章では、第1章で行った時期区分に基づいて、渤海王国の前期を対象に、『類聚国史』渤海沿革記事を検討し、在地社会の「首領」の存在を議論した。少し詳しく言えば、「首領」の解釈に関連すると思われる「百姓」や「土人」を検討するため、中国正史から用例を集めた。その検討の結果、『隋書』の用語が「渤海沿革記事」に多く参照されていたという石井正敏の見解を再確認した。そのうえで、「百姓」、「土人」の用語を解釈し、当該記事のなかの渤海の「首領」は、靺鞨各部の下に位置付けられる落に存在した有姓者の「靺鞨人」と「土人」であると考えた。一方、都督の職に任じられたのは、靺鞨部落のうちで大村の村長（「土人」の酋長）で、刺史はそれに次ぐ規模の村里の村長（「土人」の酋長）であると考えられる。これら官職は、渤海王国によって認められたものであり、前期の渤海王国は、こうした都督・刺史・首領に任命された在地社会の有力者層によるそれぞれの部落民への支配秩序を温存したまま地方支配を進めていったと推測した。

第3章では、渤海王国後期の在地有力者層、とりわけ首領層の動向がうかがえる「咸和十一年渤海王国中台省牒」を取り上げて、在地社会の様相を探ってみた。その結果、渤海王国の後期には、在地社会が、一旦、王国に統合されていたことが明らかになった。後期の第三段階の在地社会については、首領層の活動を示す確実な史料は見当たらない。しかし、『遼史』や『三国史記』、『高麗史』などに散在する記事を用いて、渤海王国が衰退期を迎えるにつれ、在地社会では、独自の活動が頻繁に再開されたことが確認できた。

第2部では考古学資料を取り上げ、以下のような結論を得た。

第4章では、渤海王国に関連する考古学資料の概要を述べた。そのなかで、当時の社会の様相をもっとも確実に表すのは墳墓群資料であると考え、墳墓群を分析する指標である墳墓形態、埋葬習俗、副葬品について説明をくわえた。

第5章では、渤海王国の初興の地である六頂山墳墓群の詳細な検討を通じて、火焼された土坑墓、靺鞨罐をはじめとする靺鞨社会の様相と石室墓、陶質土器などで代表される高句麗社会の様相、それらが融合して現れた壙室墓（T形、L形、長方形石室墓）の営まれた在地社会を浮き彫りにした。とくに各墳墓を分析する指標を整理した結果、在地有力者層の墳墓の存在を推定するとともに、渤海王国後期の墓制（墳墓形式や副葬品など）に重要な影響を及ぼした可能性を指摘した。

第6章では、渤海後期に比定される虹鱒魚場墳墓群を検討した。当該墳墓群にはほとんどが壙室墓（T形、L形、長方形石室墓）であり、土坑墓は見えず、火焼された墳墓が少なく、靺鞨罐が多く出土した。さらに、これらを複眼的に検討したのちに、虹鱒魚場墳墓群からも在地有力者層が存在していたことを明らかにすることができた。

第7章では、文献史料でほとんど伺えない渤海王国の率賓府に置かれた一つの在地社会について、主としてチェルニャチノ5渤海墳墓群の検討を行なった。この墳墓群は、6～7世紀、8世紀、9世紀などの三段階に分けられ、六頂山墳墓群で見られた土坑墓、壙室墓などが見られることから、王国の辺境に位置する在地社会でも渤海王国の墓制を取り入れていた過程を解明した。そのうえで、各部（北西部、境界部、南東部）の墳墓群の中間に位置する墳墓が6～9世紀の各段階における在地有力者層の墳墓であると推論した。

第8章では、王室墓と非王室墓を墳墓形式、副葬品などを取り上げて比較し、在地社会有力者層の存在形態を浮き彫りにした。

文献史料と考古学資料の両方を取り上げ、渤海王国の在地社会について研究した結果、まず、文献史料学からは、在地社会に存在する「首領」層が渤海王国の統合下に入ったが、黒水靺鞨のような靺鞨社会にある一部の「首領」層は、最後まで独自性を維持していたことがわかった。次に、考古学資料の墳墓群資料の検討を通じては、はじめは独立的な文化要素を持っていた在地社会の墓制は、渤海王国の発展に伴って融合がはじまるが、王室墓とは峻別されていたことが明らかになった。

こうして文献史料、考古学資料の両方から、在地社会の有力者層の様相をある程度確認することができた。在地社会の有力者層について、その渤海王国の社会と国家における位置と動向は、具体的に次のように結論づけられる。

渤海王国の前期においては、在地の有力者層は渤海建国以前からの在地社会に対する支配権を維持し、渤海政権と拮抗できる地位にあった。それは『冊府元龜』などの対唐外交記事、『続日本紀』に記載されている対日外交記事からうかがうことができる。律令体制などを導入し、渤海王国が国家的成長を遂げていくにつれて、各地に散在する在地社会にお

ける有力者層は、渤海王国の国家体制に編入されていった。そうした渤海王国の前期は、地理的にも最も遠くに位置した黒水靺鞨を支配下に編入するにいたるまでである。

しかしながら、その国家的な編入の実態は、在地社会に対する完全な支配ではなく、在地社会の有力者層を王国につなぎとめて間接的に支配する羈縻支配体制であったと推定される。それは、王国の後期において、王権内部に内紛がおこると在地社会そのものが王国から離脱する傾向を示すことから伺うことができる。また、「海東の盛国」と称された時期においては、在地社会の独自の活動は確認することはできないが、滅亡する十数年前から在地社会が独自の活動を再開していることから確認できる。

渤海政権の在地社会への支配は、文化的融合をとまなうものであったと思われる。その証拠として、墳墓群資料にみられる墳墓の形態と副葬品の変遷があげられる。たとえば、前期に属する六頂山墳墓群には渤海以前の在地社会の有力者層の墳墓が存在し、そこには王室の墳墓が造営されるが、両者は、墳墓形態（土壙墓と石室墓）や靺鞨罐の埋納の有無において著しく異なる。しかしながら、後期の虹鱒魚場墳墓群では、墳墓形態は壙室墓が主流となり、靺鞨罐がほとんどの墳墓で発掘される。一方、辺境地域に目を向けると、土壙墓から石室墓への変遷過程が確認できた。さらに、王室墓と非王室墳墓を比較すると、王室墓は石室墓であり、靺鞨罐を基本的に副葬しないが、非王室墳墓ではその逆であると思われる。このような現象は、渤海王国が在地社会の有力者層を支配する際に、文化的な内容を即座に変更させたのではなく、在地社会の文化的独自性を容認した結果であり、政治的に行った羈縻支配の結果ではなかったかと推測する。こうした政治と文化における在地社会の独自性こそ、渤海王国 229 年間の歴史の変遷をささえた要因の一つであると思われる。

## 第2節 課題

以上、本研究で得られた結論をまとめてみた。在地社会とその有力者層に着目し、渤海王国の社会と国家を解明しようと試みた。しかしながら、文献史料、考古学資料両方面からの研究には、次のようないくつかの課題が残されている。

第一に、文献史料の研究では、在地社会の視点から渤海の歴史の時期区分を試みたことによって「首領」や有姓者の存在及び動向に関する研究をある程度深化させることができたと思われる。しかしながら、その具体的な動向については、史料上の制約によって、徹底的な分析が行き届かず、くわえて、同時代の東アジア世界の状況にほとんど触れられなかった。とりわけ、渤海王国の在地社会と遊牧世界との関係は、まったく取り上げることができなかった。考古学資料の墳墓を整理する過程で、火葬といった埋葬様式やチュルク型帯飾板などの遺物は、遊牧世界の要素を呈していることが判明したにもかかわらず、本研究では、この点についてまったく取り上げられなかった。また、渤海王国時代の文献史

料の検討が中心となり、遼、金代の渤海人に関する文献史料にほとんど触れられなかったため、考古学資料に対応する文献史料の時間幅は非常に狭くなっている。さらに、渤海王国時代においても、遷都、五京制度も在地社会と少なからず関係していたと思われる。けれども、本研究では在地社会と遷都および五京制度の設置背景との関連の追求はできておらず、今後の課題として残されている。

第二に、考古学資料の研究では、刊行されている報告書に基づき墳墓群を中心に検討した。それは遺跡・遺物を調査した考古学資料に基づいて、当該地域の在地社会の様相を探ろうとした試みであった。墳墓の研究では、これから公開される資料にもとづく墳墓群の検討、さらに比較作業、その上に得られるそれぞれ地域の在地社会の様相についての検討を深化させる必要がある。また、集落、都城の遺跡については、墳墓群資料との対照作業を進めつつ、渤海王国の在地社会と有力者層の状況を解明する必要がある。

第三に、文献史料と考古学資料の比較研究では、考古学資料を扱う際に文献史料の成果を取り入れようとした。しかしながら、葬送習俗の検討は不十分で、とくに、在地有力者層の実態について文献史料と考古学資料の両方からの検討はまだまだ充分ではない。渤海王国に存在した在地社会がどのように変化したか、またその在地社会を変化させる要因として、有力者層だけでなく、たとえば庶民層は、どのような存在であり、彼らは渤海王国の行方にどのように影響され、またどのように影響したかという問題は大きな課題として残っている。

本論文は、1300年前の渤海王国に生活していた多くの人々が、日々どのように暮らし、自ら属していた社会と国家にどのようにかかわっていたかを解明するにあたっての基礎的な作業にほかならない。



## 付表・付図

付表 1 渤海墳部群一覧表

NO.	墳墓群	行政所在地	立地条件	河川流域	近くの遺跡	数	出典	備考
1	虹鱒魚場	中国黒龍江省寧安市	寧安市西南 45 km 渤海鎮虹鱒魚場北部の熔岩台地にある沙丘の上	牡丹江中流	上京龍泉府遺跡	323	寧安虹鱒	
2	三陵屯	中国黒龍江省寧安市	寧安市三陵郷三陵村北中部 牡丹江北岸	牡丹江中流	上京龍泉府遺跡	5	『東京城』 『渤海遺跡』	
3	大牡丹	中国黒龍江省寧安市	大牡丹屯西北約 0.5km の西山麓	牡丹江中流	上京龍泉府遺跡	5	考古 6004	
4	東蓮花村	中国黒龍江省寧安市	渤海鎮の西 12 km の東蓮花村 玄武岩台地の西 虹鱒魚場墓地の東南 4 km	牡丹江中流	上京龍泉府遺跡	1	北文 0302 7-8c 東北亜	
5	大朱屯	中国黒龍江省寧安市	渤海鎮大朱屯村の西北 2 km 牡丹江左岸の台地上	牡丹江中流	上京龍泉府遺跡	70	考古 6211 『六渤』	
6	沙河子	中国黒龍江省海林市	沙河子鎮の北 0.75 km 牡丹江東岸の傾斜地	牡丹江下流		3	考古 6004	
7	羊草溝	中国黒龍江省海林市	海林市柴河鎮 頭道河子村東南 3 km 羊草溝屯東北 1 km 牡丹江左岸の段丘上	牡丹江下流		112	北文 9803	頭道河子 1、2 墓群
8	二道河子	中国黒龍江省海林市	海林市の東北 60 km 牡丹江左岸の段丘上	牡丹江下流		20	北文 8701	
9	北站	中国黒龍江省海林市	海林市の東北 37 km 柴河鎮所在の北站村 1.5km 西の西山麓に分布 牡丹江の左岸	牡丹江下流		52	北文 8701	頭道河子 4 墓 群
10	山嘴子	中国黒龍江省海林市	新安郷山嘴子村東の土崗上 牡丹江の支流海浪河北岸	牡丹江下流		130	考古 6211	
11	三道河子中学	中国黒龍江省海林市	牡丹江左岸の谷	牡丹江下流	興農古城	8	『高渤』 P425 『渤遺』 『渤考』 7-8c 東北亜	
12	石場溝	中国黒龍江省樺林市	牡丹江市東北の石場溝村西南 0.5 km の丘陵上	牡丹江下流	南城子	18	北文 9104	
13	六頂山	中国吉林省敦化市	敦化市街地の南 5 km 六頂山の南斜面にある尾根	牡丹江上流	永勝遺跡 城山子山城	235	社線 7903 『六研』 『六渤』 考古 0906	
14	龍海	中国吉林省和龍市	和龍市の東北 25 km 龍頭山中部の東麓の台地上	海蘭江	西古城	80	博研 8303 考古 0906	

NO.	墳墓群	行政所在地	立地条件	河川流域	近くの遺跡	数	出典	備考
15	龍湖	中国吉林省和龍市	和龍市の東北 25 km 龍頭山北部の東麓台地上	海蘭江	西古城 蚕頭城	4	博研 9301	
16	北大	中国吉林省和龍市	和龍市の東北 25 km 海蘭江の北岸台地上	海蘭江	西古城	70	東考歴 8201 文物 9401	
17	河南屯	中国吉林省和龍市	市の東北 25 km 海蘭江の南	海蘭江	河南屯古城 西古城	2	文物 7308	
18	前甸子	中国吉林省撫松市	撫松県挿水郷前甸子屯の西南 0.5 kmの丘陵上 周辺を松花江支流頭道江に囲まれる	松花江		3	博研 8303	
19	東清	中国吉林省安図県	明月鎮西南 87 kmの東清村東北 1 km 松花江支流古洞河の左岸の盆地上	松花江		13	『渤海研』	
20	馬滴達	中国吉林省琿春市	琿春市東北 50 km 琿春河北岸の馬滴達山の南麓の台地上	琿春河	八連城	1	博研 8402	
21	仲坪	中国吉林省汪清県	仲坪林場の東 350m 山麓の傾斜地、小百草溝と嘎呀河の合流地から 7km	図們江	高城古城	17	『渤海研』	
22	涼水果園	中国吉林省図們市	涼水鎮の北の山麓傾斜地 図們江の北岸	図們江	八連城	17	博研 9503	
23	大城子	中国黒龍江省東寧市	東寧県の東北側、綏芬河南岸	綏芬河	大城子古城	4	考古 8203	
24	チルニヤチノ 5	ロシア沿海州地方	沿海地方ウツァブリ地区チルニヤチノ村の南西 3.3 km スイフン川の右岸最上位のテラス状台地	綏芬河	種々の文化段階に 属する墓地遺跡、 集落遺跡など 16 ヶ所	100 以上	ア遊 107	
25	ウラスノ	ロシア沿海州地方	沿海地方ハウン地区ウラスノ村					
26	富居里	朝鮮咸鏡北道清津市	清津市の北 45 km 富居里の西 2 kmほど富居平原城の付近の山	富居川	富居士城	500	7-8 東北亜・ ア遊 6・『渤海墳墓』	
27	淵車谷	朝鮮咸鏡北道清津市	富居里の西 3 kmほどの淵車谷	富居川	富居士城・山城	16	『東古』99・ 『渤海墳墓』	
28	ダレゴル (다래굴)	朝鮮咸鏡北道清津市	富居里の西 2.5 km	富居川	富居石城	50	『渤海墳墓』	
29	ハブジョン	朝鮮咸鏡北道清津市	土城古墳群の西南	富居川	富居石城	250	『富居里』	
30	玉生洞	朝鮮咸鏡北道清津市	富居里東北の 2 kmの玉生洞	富居川	富居石城	15	『富居里』	
31	土城	朝鮮咸鏡北道清津市	富居里古墳群の西南	富居川	富居石城	200	『富居里』	

NO.	墳墓群	行政所在地	立地条件	河川流域	近くの遺跡	数	出典	備考
31	土城	朝鮮咸鏡北道清津市	富居里古墳群の西南	富居川	富居石城	200	『富居里』	
32	ドクドン	朝鮮咸鏡北道清津市	富居里西南 4 km の程ドクトン部落の北部の城の西	富居川	ドクドン城	100	『富居里』	
33	昌徳	朝鮮咸鏡北道花台郡	ジョンムン里(정문리)北の 3 km	龍山川		30	『渤海墳墓』	
34	稜山洞	朝鮮咸鏡北道花台郡	花台郡ジュイリ(주위리)の西にある稜山の西部尾根の東	龍山川、稜山川		8	『渤海墳墓』	
35	ソド洞	朝鮮咸鏡北道花台郡	花台郡ジュイリ(주위리)の西にある稜山の西部尾根の西	花台川		35	『渤海墳墓』	
36	錦城里	朝鮮咸鏡北道花台郡	花台郡所在地の西 22km のナムデ(남대)川の左岸	ナムデ川	ソンサンリ(성상리)土城	4	『渤海墳墓』	壁画墓有
37	弓心	朝鮮咸鏡北道会寧市	図們江の東 4 km	図們江	インケリ(인계리)土城	300 (27)	『渤海墳墓』	
38	坪里	朝鮮咸鏡南道北清郡	北清郡青海土城の北 8 km 離れた所		青海土城	700 (50)	『渤海墳墓』	
39	梧梅里	朝鮮咸鏡南道新浦市	新浦市の東北 15km、西北 8 km にリョンゾンリ(룡전리)山城、近くに梧梅里寺蹟		リョンゾンリ山城	10	『渤海墳墓』	

付表 1 は、以下の参考文献より筆者作成。

- 1 黒龍江省文物考古研究所『寧安虹鱒魚場:1992～1995 年度渤海墓地考古発掘報告』（文物出版社、2009 年）。
- 2 東亜考古学会『東京城 渤海国上京龍泉府址の発掘調査』1939 年。
- 3 朱国忱・朱威『渤海遺跡』（文物出版社、2002 年）。
- 4 呂遵祿「黒龍江寧安、林口発見的古墓葬群」（『考古』1962 年第 11 期）。
- 5 黒龍江省文物考古研究所「黒龍江省寧安市東蓮花村渤海墓葬」（『北方文物』2003 年第 2 期）。
- 6 中国社会科学院考古研究所「大朱屯渤海墓葬」（『六頂山与渤海鎮』中国大百科全書出版社、1997 年）。
- 7 呂遵祿「黒龍江寧安、林口発見的古墓葬群」（『考古』1962 年第 11 期）。
- 8 黒龍江省文物考古研究所「黒龍江省海林市羊草溝墓地的発掘」（『北方文物』1998 年第 3 期）。
- 9 于匯歴「黒龍江海林二道河子渤海墓葬」（『北方文物』1987 年第 1 期）。
- 10 黒龍江省文物考古研究所「黒龍江海林北站渤海墓試掘」（『北方文物』1987 年第 1 期）。
- 11 孫秀仁「略論海林山嘴子渤海墓葬の形制、伝統と文物特徴」（『中国考古学会第一屆年會論文集（1979）』1980 年）。
- 12 『7-8 世紀東亞地区歴史与考古國際學術討論會論文集』（科学出版社、2001 年）。
- 13 魏存成『渤海考古』（文物出版社、2008 年）。

- 12 黒竜江省文物考古研究所「黒竜江省牡丹江樺林石場溝墓地」（『北方文物』1991年第4期）。
- 13 王承礼「敦化六頂山渤海古墓群調査簡記」（『吉林省文物工作通訊』1957年）。  
 王承礼、曹正榕「吉林敦化六頂山渤海古墓」（『考古』1961年第6期）。  
 王承礼「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」（『社会科学戦線』1979年第3期）。  
 中国社会科学院考古研究所「六頂山渤海貴族墓地」（『六頂山与渤海鎮』中国大百科全書出版社、1997年）。  
 王志剛『六頂山渤海墓葬研究』（2008年吉林大学碩士學位論文）。  
 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所「吉林敦化市六頂山墓群2004年発掘簡報」（『考古』2009年第6期）。
- 14 延辺博物館「和龍県龍海渤海墓葬」（『博物館研究』1983年第3期）。
- 15 朴潤武「龍頭山龍湖墓区調査と発掘」（『渤海史研究』4、延辺大学出版社、1993年）。
- 16 延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「吉林省和龍県北大渤海墓葬」（『文物』1994年第1期）。  
 延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「和龍北大渤海墓清理簡報」（『東北歴史与考古』1982年第1期）。
- 17 郭文魁「和龍渤海古墓出土の幾件金飾」（『文物』1973年第8期）。
- 18 龐志国・柳嵐「撫松県前甸子渤海古墓清理簡報」（『博物館研究』1983年第3期）。
- 19 鄭永振・嚴長録『渤海墓葬研究』（吉林人民出版社、2000年）。
- 20 張錫瑛「琿春馬滴達渤海塔基清理簡報」（『博物館研究』1984年第2期）。
- 21 鄭永振・嚴長録『渤海墓葬研究』（吉林人民出版社、2000年）。
- 22 王春栄「吉林省図們市涼水園渤海墓葬清理簡報」（『博物館研究』1995年第3期）。
- 23 黒竜江省文物工作隊・吉林大学歴史系考古專業「黒竜江省東寧県大城子渤海墓葬発掘簡報」（『考古』1982年第3期）。
- 24 『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群（I）：第1・2次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2005年）。  
 『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群（II）：第3次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2006年）。  
 『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群（III）：第4次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2007年）。  
 『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群（IV）：第6次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009年）。  
 鄭昔培「沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群」（『渤海考古学の最新成果』ソウル大学校博物館海東盛国‘渤海’特別展記念国際学術大会、2003年 pp.27～39  
 Yu.G.ニキチン「スイフン河流域のチェルニャチノ5渤海武将墓」（『古朝鮮高句麗渤海発表論文集』高句麗研究財団、2005年）。  
 清水信行「チェルニャチノ5墓地遺跡の発見」（『アジア遊学』107、2008年）。
- 25～32 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学研究所『渤海の古墳（朝鮮考古学全書42中世編19）』（ジニンジン、2009年）。  
 東北歴史財団編『富居里一帯の渤海遺跡』（東北歴史財団編、2011年）。  
 金宗赫『東海岸一帯渤海遺跡』（中心、2002年）。
- 33～39 朝鮮民主主義人民共和国科学院考古学研究所『渤海の古墳（朝鮮考古学全書42中世編19）』（ジニンジン、2009年）。

付表 2 渤海墳墓墓室規模一覽

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
1	六頂山	I M1	300	290	140
2	六頂山	I M2	294	284	268
3	六頂山	I M4	350	320	104
4	六頂山	I M5	280	170	120
5	六頂山	I M6	460	180	98
6	六頂山	I M7	300	240	130
7	六頂山	I M8	290	120	100
8	六頂山	I M9	200	120	60
9	六頂山	I M11	240	210	50
10	六頂山	I M12	220	80	73
11	六頂山	I M13	300	200	
12	六頂山	I M14	300	120	60
13	六頂山	I M15	236	135	42
14	六頂山	I M16	250	100	60
15	六頂山	I M17	320	130	110
16	六頂山	I M18	230	90	170
17	六頂山	I M19	200	80	
18	六頂山	I M20	200	200	30
19	六頂山	I M21	100		
20	六頂山	I M24	100	50	40
21	六頂山	I M28	350		
22	六頂山	I M29	400	105	60
23	六頂山	I M39	450		
24	六頂山	I M48	250	50	
25	六頂山	I M50	280	150	
26	六頂山	I M55	100	40	
27	六頂山	I M58	280	120	
28	六頂山	I M60	175	65	40
29	六頂山	I M61	250	140	
30	六頂山	I M66	470		
31	六頂山	I M68	200		
32	六頂山	I M74	270	150	50
33	六頂山	I M87	130	66	30
34	六頂山	I M91	250	120	
35	六頂山	I M92	200	100	
36	六頂山	I M101	294	132	28
37	六頂山	I M102	302	166	56
38	六頂山	I M103	118	54	28
39	六頂山	I M104	121	62	58
40	六頂山	I M105	264	146	86
41	六頂山	II M1	244	162	40
42	六頂山	II M2	360	220	40
43	六頂山	II M3	255	70	85
44	六頂山	II M4	280	240	
45	六頂山	II M5	285	265	50
46	六頂山	II M6	270	255	50
47	六頂山	II M7	340	280	60
48	六頂山	II M8	300	150	40
49	六頂山	II M9	307	236	90
50	六頂山	II M10	236	224	60
51	六頂山	II M11	280	220	60

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
52	六頂山	Ⅱ M12	260	215	30
53	六頂山	Ⅱ M13	320	290	50
54	六頂山	Ⅱ M14	250	164	35
55	六頂山	Ⅱ M15	280	250	60
56	六頂山	Ⅱ M25	250	95	
57	六頂山	Ⅱ M26	130	58	
58	六頂山	Ⅱ M28 東	130	50	20
59	六頂山	Ⅱ M28 西	200	85	50
60	六頂山	Ⅱ M39	250	150	25
61	六頂山	Ⅱ M41	300	230	
62	六頂山	Ⅱ M42	500	460	
63	六頂山	Ⅱ M44	150	80	
64	六頂山	Ⅱ M45	400	250	
65	六頂山	Ⅱ M64	200	100	
66	六頂山	Ⅱ M72	200		
67	六頂山	Ⅱ M74	270	110	17
68	六頂山	Ⅱ M77	280	130	
69	六頂山	Ⅱ M78	250	100	50
70	六頂山	Ⅱ M81	250	130	50
71	六頂山	Ⅱ M86	300	210	18
72	六頂山	Ⅱ M88	220	100	
73	六頂山	Ⅱ M90	225	120	
74	六頂山	Ⅱ M91	280	130	
75	六頂山	Ⅱ M94	220	110	20
76	六頂山	Ⅱ M106	330		6
77	六頂山	Ⅱ M127	110	50	45
78	虹鱒魚場	M2001	413	330	140
79	虹鱒魚場	M2002	392	212	76
80	虹鱒魚場	M2003	300	135	68
81	虹鱒魚場	M2004	310	180	68
82	虹鱒魚場	M2005	240	130	38
83	虹鱒魚場	M2006	254	170	34
84	虹鱒魚場	M2007	260	184	52
85	虹鱒魚場	M2008	284	225	140
86	虹鱒魚場	M2009	258	92	84
87	虹鱒魚場	M2010	172	58	35
88	虹鱒魚場	M2011	213	104	70
89	虹鱒魚場	M2012	264	166	62
90	虹鱒魚場	M2013	255	184	70
91	虹鱒魚場	M2014	256	188	78
92	虹鱒魚場	M2015	280	166	56
93	虹鱒魚場	M2016	270	225	48
94	虹鱒魚場	M2017	294	214	42
95	虹鱒魚場	M2018	252	142	62
96	虹鱒魚場	M2019	260	156	67
97	虹鱒魚場	M2020	256	135	62
98	虹鱒魚場	M2021	218	178	52
99	虹鱒魚場	M2022	240	240	44
100	虹鱒魚場	M2023	292	192	72
101	虹鱒魚場	M2024	216	160	68
102	虹鱒魚場	M2025	260	152	66
103	虹鱒魚場	M2026	284	184	70

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
104	虹鱒魚場	M2027	215	180	72
105	虹鱒魚場	M2028	258	160	50
106	虹鱒魚場	M2029	225	140	34
107	虹鱒魚場	M2030	226	150	74
108	虹鱒魚場	M2031	220	164	51
109	虹鱒魚場	M2032	221	126	64
110	虹鱒魚場	M2033	228	142	65
111	虹鱒魚場	M2034	230	151	40
112	虹鱒魚場	M2035	232	160	68
113	虹鱒魚場	M2036	260	168	59
114	虹鱒魚場	M2037	238	150	68
115	虹鱒魚場	M2038	242	80	53
116	虹鱒魚場	M2039	244	175	50
117	虹鱒魚場	M2040	249	96	50
118	虹鱒魚場	M2041	260	164	53
119	虹鱒魚場	M2042	240	142	56
120	虹鱒魚場	M2043	230	170	70
121	虹鱒魚場	M2044 右	204	42	56
122	虹鱒魚場	M2044 左	130	104	56
123	虹鱒魚場	M2045	275	180	64
124	虹鱒魚場	M2046	246	160	34
125	虹鱒魚場	M2047	170	148	48
126	虹鱒魚場	M2048	196	153	24
127	虹鱒魚場	M2049	272	222	36
128	虹鱒魚場	M2050	220	191	48
129	虹鱒魚場	M2051	266	204	60
130	虹鱒魚場	M2052	260	166	46
131	虹鱒魚場	M2053	260	250	48
132	虹鱒魚場	M2054	250	175	44
133	虹鱒魚場	M2055	330	190	42
134	虹鱒魚場	M2056	320	112	26
135	虹鱒魚場	M2057	310	86	44
136	虹鱒魚場	M2058	234	122	33
137	虹鱒魚場	M2059	256	74	50
138	虹鱒魚場	M2060	246	150	100
139	虹鱒魚場	M2061	261	74	72
140	虹鱒魚場	M2062	222	86	56
141	虹鱒魚場	M2063	204	96	90
142	虹鱒魚場	M2064	236	90	41
143	虹鱒魚場	M2065	220	112	60
144	虹鱒魚場	M2066	350	80	58
145	虹鱒魚場	M2067	250	150	56
146	虹鱒魚場	M2068	270	130	82
147	虹鱒魚場	M2069	230	136	82
148	虹鱒魚場	M2070	296	116	48
149	虹鱒魚場	M2071	300	110	46
150	虹鱒魚場	M2072	240	160	63
151	虹鱒魚場	M2073	240	110	38
152	虹鱒魚場	M2074	288	70	24
153	虹鱒魚場	M2075	296	76	28
154	虹鱒魚場	M2076	334	180	40
155	虹鱒魚場	M2077	270	125	60

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
156	虹鱒魚場	M2078	240	151	54
157	虹鱒魚場	M2079	256	155	44
158	虹鱒魚場	M2080	230	156	70
159	虹鱒魚場	M2081	284	190	80
160	虹鱒魚場	M2082	280	113	70
161	虹鱒魚場	M2083	298	130	72
162	虹鱒魚場	M2085 右	240	60	55
163	虹鱒魚場	M2085 左	133	44	55
164	虹鱒魚場	M2086	266	162	40
165	虹鱒魚場	M2087	230	60	66
166	虹鱒魚場	M2088	186	102	73
167	虹鱒魚場	M2089	280	120	60
168	虹鱒魚場	M2090 右	144	51	43
169	虹鱒魚場	M2090 左	290	108	43
170	虹鱒魚場	M2091	310	100	54
171	虹鱒魚場	M2092	275	204	33
172	虹鱒魚場	M2093	290	234	57
173	虹鱒魚場	M2094	248	155	43
174	虹鱒魚場	M2095	246	145	62
175	虹鱒魚場	M2096	230	96	54
176	虹鱒魚場	M2097	260	190	58
177	虹鱒魚場	M2098	280	130	59
178	虹鱒魚場	M2099	276	68	52
179	虹鱒魚場	M2100	220	94	61
180	虹鱒魚場	M2101	242	81	63
181	虹鱒魚場	M2102	206	78	47
182	虹鱒魚場	M2103	164	54	50
183	虹鱒魚場	M2104	294	108	66
184	虹鱒魚場	M2105	240	75	91
185	虹鱒魚場	M2106	250	142	56
186	虹鱒魚場	M2107	308	180	34
187	虹鱒魚場	M2108	223	174	52
188	虹鱒魚場	M2109	234	74	50
189	虹鱒魚場	M2110	244	151	86
190	虹鱒魚場	M2111	174	50	44
191	虹鱒魚場	M2112	200	140	40
192	虹鱒魚場	M2113 上層	268	174	80
193	虹鱒魚場	M2113 下層	268	174	98.5
194	虹鱒魚場	M2114	210	90	44
195	虹鱒魚場	M2115	186	155	36
196	虹鱒魚場	M2116	261	128	60
197	虹鱒魚場	M2117	220	100	81
198	虹鱒魚場	M2118	182	60	77
199	虹鱒魚場	M2119	200	160	58
200	虹鱒魚場	M2120	238	126	80
201	虹鱒魚場	M2121	260	148	84
202	虹鱒魚場	M2122	212	70	64
203	虹鱒魚場	M2123	220	174	83
204	虹鱒魚場	M2124	260	212	80
205	虹鱒魚場	M2125	230	140	34
206	虹鱒魚場	M2126	290	218	54
207	虹鱒魚場	M2127	264	147	64



No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
208	虹鱒魚場	M2128	280	180	52
209	虹鱒魚場	M2129	252	160	60
210	虹鱒魚場	M2130	270	160	60
211	虹鱒魚場	M2131	254	74	60
212	虹鱒魚場	M2132	268	198	62
213	虹鱒魚場	M2133	240	100	61
214	虹鱒魚場	M2134	280	150	57
215	虹鱒魚場	M2135 西長残	385		
216	虹鱒魚場	M2136	320	90	50
217	虹鱒魚場	M2137	230	120	50
218	虹鱒魚場	M2138	227	80	60
219	虹鱒魚場	M2139	240	150	53
220	虹鱒魚場	M2140	240	156	64
221	虹鱒魚場	M2141	303		
222	虹鱒魚場	M2142	200	120	30
223	虹鱒魚場	M2143	240	143	30
224	虹鱒魚場	M2144	286	150	38
225	虹鱒魚場	M2145	380	205	31
226	虹鱒魚場	M2146	220	153	30
227	虹鱒魚場	M2147	284	208	42
228	虹鱒魚場	M2148	255	260	45
229	虹鱒魚場	M2149	226	180	38
230	虹鱒魚場	M2150	320	148	42
231	虹鱒魚場	M2151	274	214	75
232	虹鱒魚場	M2152	220	130	37
233	虹鱒魚場	M2153	256	100	80
234	虹鱒魚場	M2154 残	230	154	56
235	虹鱒魚場	M2155 残	233	140	24
236	虹鱒魚場	M2156	264	168	54
237	虹鱒魚場	M2157	262	130	43
238	虹鱒魚場	M2158	265	98	64
239	虹鱒魚場	M2159	326	130	40
240	虹鱒魚場	M2160	185	110	50
241	虹鱒魚場	M2161	264	170	47
242	虹鱒魚場	M2162	224	260	38
243	虹鱒魚場	M2163 残	170	170	40
244	虹鱒魚場	M2164	252	133	80
245	虹鱒魚場	M2165	320	246	86
246	虹鱒魚場	M2166	324	240	74
247	虹鱒魚場	M2167	240	120	34
248	虹鱒魚場	M2168	240	181	83
249	虹鱒魚場	M2169	264	161	46
250	虹鱒魚場	M2170	276	202	74
251	虹鱒魚場	M2171	266	164	60
252	虹鱒魚場	M2172	250	104	38
253	虹鱒魚場	M2173	220	103	48
254	虹鱒魚場	M2174	232	116	53
255	虹鱒魚場	M2175	280	162	70
256	虹鱒魚場	M2176	240	131	54
257	虹鱒魚場	M2177	252	72	46
258	虹鱒魚場	M2178	270	160	52
259	虹鱒魚場	M2179	252	150	56

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
260	虹鱒魚場	M2180	228	162	64
261	虹鱒魚場	M2181	264	120	45
262	虹鱒魚場	M2182	260	159	51
263	虹鱒魚場	M2183	220	136	76
264	虹鱒魚場	M2184	204	140	74
265	虹鱒魚場	M2185	232	188	44
266	虹鱒魚場	M2186	270	180	54
267	虹鱒魚場	M2187	230	190	36
268	虹鱒魚場	M2188	160	79	60
269	虹鱒魚場	M2189	186	134	100
270	虹鱒魚場	M2190	214	140	108
271	虹鱒魚場	M2191	276	90	99
272	虹鱒魚場	M2192	260	170	48
273	虹鱒魚場	M2193	242	106	52
274	虹鱒魚場	M2194	230	180	66
275	虹鱒魚場	M2195	258	226	31
276	虹鱒魚場	M2196	314	186	64
277	虹鱒魚場	M2197	320	160	62
278	虹鱒魚場	M2198	317	200	44
279	虹鱒魚場	M2199	240	200	40
280	虹鱒魚場	M2200	294	146	43
281	虹鱒魚場	M2201	244	94	44
282	虹鱒魚場	M2202	270	190	48
283	虹鱒魚場	M2203	328	160	80
284	虹鱒魚場	M2204	260	192	61
285	虹鱒魚場	M2205	290	180	66
286	虹鱒魚場	M2206	204	73	6
287	虹鱒魚場	M2207	150	60	28
288	虹鱒魚場	M2208	263	150	33
289	虹鱒魚場	M2209 長残	245	156	36
290	虹鱒魚場	M2210	260		38
291	虹鱒魚場	M2211	184	52	54
292	虹鱒魚場	M2212	220	154	59
293	虹鱒魚場	M2213 長残	254	100	96
294	虹鱒魚場	M2214 長残	96	58	38
295	虹鱒魚場	M2215 長残	214	65	60
296	虹鱒魚場	M2216	194	84	36
297	虹鱒魚場	M2217 左	208	60	30
298	虹鱒魚場	M2217 右	220	88	30
299	虹鱒魚場	M2218	290	170	88
300	虹鱒魚場	M2219	266	71	69
301	虹鱒魚場	M2221 長残	292	128	34
302	虹鱒魚場	M2222 長残	160	164	34
303	虹鱒魚場	M2223 長残	180	96	38
304	虹鱒魚場	M2224	260	80	52
305	虹鱒魚場	M2225	308	150	52
306	虹鱒魚場	M2227	282	80	60
307	虹鱒魚場	M2229	236	120	68
308	虹鱒魚場	M2230	246	127	100
309	虹鱒魚場	M2231	266	94	91
310	虹鱒魚場	M2232	225	90	42
311	虹鱒魚場	M2233	152	76	62

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
312	虹鱒魚場	M2234	143	48	54
313	虹鱒魚場	M2235	184	51	38
314	虹鱒魚場	M2236	242	100	50
315	虹鱒魚場	M2237	192	92	51
316	虹鱒魚場	M2238	184	70	40
317	虹鱒魚場	M2239	261	122	54
318	虹鱒魚場	M2240	288	118	52
319	虹鱒魚場	M2241	270	114	30
320	虹鱒魚場	M2242	250	90	48
321	虹鱒魚場	M2243	240	88	49
322	虹鱒魚場	M2244 長残	224	220	32
323	虹鱒魚場	M2245 長幅残	126	115	33
324	虹鱒魚場	M2246	298	125	60
325	虹鱒魚場	M2247	228	102	96
326	虹鱒魚場	M2248	299	120	42
327	虹鱒魚場	M2249	190	120	58
328	虹鱒魚場	M2250	186	90	80
329	虹鱒魚場	M2251	212	64	46
330	虹鱒魚場	M2252	280	188	86
331	虹鱒魚場	M2253	240	145	68
332	虹鱒魚場	M2254	260	194	70
333	虹鱒魚場	M2255	228	143	64
334	虹鱒魚場	M2256	204	104	100
335	虹鱒魚場	M2257	274	205	55
336	虹鱒魚場	M2258	246	155	83
337	虹鱒魚場	M2259	182	92	81
338	虹鱒魚場	M2260	290	160	58
339	虹鱒魚場	M2261	286	210	58
340	虹鱒魚場	M2262	240	194	70
341	虹鱒魚場	M2263	260	162	76
342	虹鱒魚場	M2264	286	182	56
343	虹鱒魚場	M2265	254	125	78
344	虹鱒魚場	M2266	120	60	38
345	虹鱒魚場	M2267	275	115	65
346	虹鱒魚場	M2268	311	190	74
347	虹鱒魚場	M2269	243	142	80
348	虹鱒魚場	M2270	253	144	62
349	虹鱒魚場	M2271	242	113	49
350	虹鱒魚場	M2272	252	124	48
351	虹鱒魚場	M2273	260	132	68
352	虹鱒魚場	M2274	220	60	48
353	虹鱒魚場	M2275	189	76	40
354	虹鱒魚場	M2276	210	210	43
355	虹鱒魚場	M2277	280	80	44
356	虹鱒魚場	M2278	212	150	48
357	虹鱒魚場	M2279	260	176	74
358	虹鱒魚場	M2280	243	170	58
359	虹鱒魚場	M2281	280	190	64
360	虹鱒魚場	M2282	236	112	98
361	虹鱒魚場	M2283	183	50	83
362	虹鱒魚場	M2284	232	59	37
363	虹鱒魚場	M2285	246	233	96

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
364	虹鱒魚場	M2286	246	172	48
365	虹鱒魚場	M2287	228	60	48
366	虹鱒魚場	M2288	250	80	103
367	虹鱒魚場	M2289	152	70	60
368	虹鱒魚場	M2290	160	76	22
369	虹鱒魚場	M2291	224	138	48
370	虹鱒魚場	M2292	120	56	31
371	虹鱒魚場	M2293	182	134	40
372	虹鱒魚場	M2294	228	140	40
373	虹鱒魚場	M2295	194	119	58
374	虹鱒魚場	M2296	221	142	58
375	虹鱒魚場	M2297	229	158	40
376	虹鱒魚場	M2298	196	150	71
377	虹鱒魚場	M2299	270	120	52
378	虹鱒魚場	M2301	225	108	94
379	虹鱒魚場	M2302	258	110	82
380	虹鱒魚場	M2303 長残	330	181	26
381	虹鱒魚場	M2304 幅残	260	182	26
382	虹鱒魚場	M2305 長残	242	168	47
383	虹鱒魚場	M2306	334	80	106
384	虹鱒魚場	M2307	220	90	53
385	虹鱒魚場	M2308	320	260	40
386	虹鱒魚場	M2309	293	195	45
387	虹鱒魚場	M2310	299	130	35
388	虹鱒魚場	M2311	164	50	52
389	虹鱒魚場	M2312	134	30	43
390	虹鱒魚場	M2313	205	118	60
391	虹鱒魚場	M2314	172	31	36
392	虹鱒魚場	M2315	180	60	60
393	虹鱒魚場	M2316	224	92	68
394	虹鱒魚場	M2317	244	130	70
395	虹鱒魚場	M2318	178	68	54
396	虹鱒魚場	M2319	220	126	40
397	虹鱒魚場	M2320	304	301	48
398	虹鱒魚場	M2321	246	180	48
399	虹鱒魚場	M2322	146	92	16
400	虹鱒魚場	M2323	214	130	19
401	チェルニャチノ5	M21	204	122	20
402	チェルニャチノ5	M22	234	145	24
403	チェルニャチノ5	M24	155	88	29
404	チェルニャチノ5	M34	154	67	17~20
405	チェルニャチノ5	M35	190	101	12
406	チェルニャチノ5	M45	210	114	30~32
407	チェルニャチノ5	M47	158	63	4
408	チェルニャチノ5	M48	300	240	
409	チェルニャチノ5	M49	280	210	18
410	チェルニャチノ5	M50	259	174	12
411	チェルニャチノ5	M51	320	210	
412	チェルニャチノ5	M52	280		
413	チェルニャチノ5	M55	360	320	27~32
414	チェルニャチノ5	M56	320	148	
415	チェルニャチノ5	M57	230	110	

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
416	チェルニャチノ5	M58	230	120	
417	チェルニャチノ5	M59	230	160	
418	チェルニャチノ5	M60	159	68	
419	チェルニャチノ5	M61	137	34	23~26
420	チェルニャチノ5	M62	136	56	25~29
421	チェルニャチノ5	M63	152	95	18
422	チェルニャチノ5	M64	124	60	35~42
423	チェルニャチノ5	M65	196	110	22~27
424	チェルニャチノ5	M66	203	98	25~27
425	チェルニャチノ5	M67	178	86	10
426	チェルニャチノ5	M68	170	91	18~20
427	チェルニャチノ5	M69	170	70	23~27
428	チェルニャチノ5	M72	280	180	15~20
429	チェルニャチノ5	M73	138	54	20
430	チェルニャチノ5	M75	110	50	20
431	チェルニャチノ5	M76	181	98	31~32
432	チェルニャチノ5	M77	128	50	26
433	チェルニャチノ5	M78	180	85	30
434	チェルニャチノ5	M79	168	57~60	20
435	チェルニャチノ5	M80	137	46	22
436	チェルニャチノ5	M81	150	50	9
437	チェルニャチノ5	M82	158	48	16
438	チェルニャチノ5	M83	97	40	9
439	チェルニャチノ5	M84	150	60	21
440	チェルニャチノ5	M85	160	110	
441	チェルニャチノ5	M85	187	110	16~18
442	チェルニャチノ5	M86	140	63	35
443	チェルニャチノ5	M87	152	57	52
444	チェルニャチノ5	M88	137	58	18
445	チェルニャチノ5	M89	116	45	27
446	チェルニャチノ5	M90	102	39	23
447	チェルニャチノ5	M91	150	77	25
448	チェルニャチノ5	M92	136	45	22
449	チェルニャチノ5	M93	127	56	22
450	チェルニャチノ5	M94	175	65	20
451	チェルニャチノ5	M95	220	84	54
452	チェルニャチノ5	M96	167	60	42
453	チェルニャチノ5	M97	106	53	30
454	チェルニャチノ5	M98	132	72	20
455	チェルニャチノ5	M99	190	65	25
456	チェルニャチノ5	M100	95	63	30
457	チェルニャチノ5	M101	180	100	26
458	チェルニャチノ5	M102	70	35	10
459	チェルニャチノ5	M103	145	80	30
460	チェルニャチノ5	M104	157	75	43
461	チェルニャチノ5	M105	120	90	
462	チェルニャチノ5	M106	190	134	6
463	チェルニャチノ5	M107	147	58	35
464	チェルニャチノ5	M109	162	57	16
465	チェルニャチノ5	M110	90	43	12
466	チェルニャチノ5	M111	86	35	4.5
467	チェルニャチノ5	M113	330	180	23

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
468	チェルニャチノ5	M115	250	180	
469	チェルニャチノ5	M116	193	96	
470	チェルニャチノ5	M119	104	48	5
471	チェルニャチノ5	M120	110	42	8
472	チェルニャチノ5	M121	138	35~40	14
473	チェルニャチノ5	M123	203	147	
474	チェルニャチノ5	M124	165	140	20
475	チェルニャチノ5	M125	198	70	40
476	チェルニャチノ5	M126	140	50~56	25
477	チェルニャチノ5	M127	184	57	25
478	チェルニャチノ5	M129	126	40	35
479	チェルニャチノ5	M130	185	75	25
480	チェルニャチノ5	M131	210	65	15
481	チェルニャチノ5	M132	178	65	17
482	チェルニャチノ5	M133	118	48	10
483	チェルニャチノ5	M134	123	48	17
484	チェルニャチノ5	M135	128	45	7~10
485	チェルニャチノ5	M136	118	60	5~10
486	チェルニャチノ5	M137	180	78	30
487	チェルニャチノ5	M138	180	70	20
488	チェルニャチノ5	M139	134	64	20
489	チェルニャチノ5	M140	120	65	30
490	チェルニャチノ5	M141	182	84	40
491	チェルニャチノ5	M142	104	35	12
492	チェルニャチノ5	M143	198	127	36
493	チェルニャチノ5	M144	136	75	34
494	チェルニャチノ5	M145	180	84	35
495	チェルニャチノ5	M146	163	90	30
496	チェルニャチノ5	M147	164	60	30
497	チェルニャチノ5	M148	95	58	30
498	チェルニャチノ5	M149	175	70	30
499	チェルニャチノ5	M150	155	60	33
500	チェルニャチノ5	M151	125	43	30
501	チェルニャチノ5	M152	178	48	25~30
502	チェルニャチノ5	M153	220	150	
503	チェルニャチノ5	M154	162	65	21
504	チェルニャチノ5	M155	155	66	25
505	チェルニャチノ5	M156	162	73	30
506	チェルニャチノ5	M157	145	80	38
507	チェルニャチノ5	M158	152	37~43	
508	チェルニャチノ5	M159	228	175	
509	チェルニャチノ5	M160	240	180	
510	チェルニャチノ5	M161	280	200~220	
511	チェルニャチノ5	M162	260	185	
512	チェルニャチノ5	M163	145	50	22
513	チェルニャチノ5	M164	260	80~100	
514	チェルニャチノ5	M165	224	145	
515	チェルニャチノ5	M166	64	61	
516	チェルニャチノ5	M167	148	45	11
517	チェルニャチノ5	M168	87	32	12
518	チェルニャチノ5	M169	135	54	31
519	チェルニャチノ5	M170	135	50	10~15

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
520	チェルニャチノ5	M171	235	170	
521	チェルニャチノ5	M175	142	55~120	15
522	チェルニャチノ5	M176	165	65	22
523	チェルニャチノ5	M177	178	57	28
524	チェルニャチノ5	M178	170	65	30
525	チェルニャチノ5	M179	155	60	23
526	チェルニャチノ5	M180	125	44	26
527	チェルニャチノ5	M181	87	35	12
528	チェルニャチノ5	M182	145	42	25
529	チェルニャチノ5	M183	94	38	25
530	チェルニャチノ5	M184	152	46	31
531	チェルニャチノ5	M185	162	50	27
532	チェルニャチノ5	M186	140	45	29
533	チェルニャチノ5	M187	120	59	16
534	チェルニャチノ5	M189	140	60	16
535	チェルニャチノ5	M190	170	67	19
536	チェルニャチノ5	M191	110	51	15
537	チェルニャチノ5	M192	134	45	17
538	チェルニャチノ5	M193	132	35	17
539	チェルニャチノ5	M194	120	46	26
540	チェルニャチノ5	M195	98	46	18
541	チェルニャチノ5	M196	134	50	11
542	81 龍海	M1	310	210	340
543	82 龍海	M1	230	118.5	105
544	82 龍海	M2	245	83.5	60
545	82 龍海	M3	175	52.5	45
546	82 龍海	M4	282	80.5	82
547	82 龍海	M5	255	74	50
548	82 龍海	M6	242	115	83
549	82 龍海	M7	255	106	52
550	04 龍海	M2	560	180	160
551	04 龍海	M3	400	215	165
552	04 龍海	M7	340	110	80
553	04 龍海	M8	320	185	165
554	04 龍海	M10	340	180	200
555	04 龍海	M13	360	190	170
556	04 龍海	M14	230	70	80
557	73 和龍北大	M1	290	110	90
558	73 和龍北大	M2	270	95	85
559	73 和龍北大	M3	235	105	80
560	73 和龍北大	M4	287	100	70
561	73 和龍北大	M5	230	84	
562	73 和龍北大	M6	260	110	53
563	73 和龍北大	M7	250	105	65
564	73 和龍北大	M8	245	95	65
565	73 和龍北大	M9	260	85	87
566	73 和龍北大	M10	220	80	99
567	73 和龍北大	M11	249	85	70
568	73 和龍北大	M12	228	104	57
569	73 和龍北大	M13	184		
570	73 和龍北大	M14	257	88	61
571	73 和龍北大	M15	250	86	58

No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
572	73 和龍北大	M16	266	70	55
573	73 和龍北大	M17	260	100	80
574	73 和龍北大	M18	213	133	65
575	73 和龍北大	M19	270	145	78
576	73 和龍北大	M20	290	120	45
577	73 和龍北大	M21	240	92	65
578	73 和龍北大	M22	220	100	74
579	73 和龍北大	M23	265	95	65
580	73 和龍北大	M24	230	100	78
581	73 和龍北大	M25	230	100	85
582	73 和龍北大	M26	250	70	60
583	73 和龍北大	M27	250	76	83
584	73 和龍北大	M28	240	120	90
585	73 和龍北大	M34	230	149	66
586	73 和龍北大	M35	290	170	80
587	88 和龍北大	M1	195	80	65
588	88 和龍北大	M2	240	68	65
589	88 和龍北大	M4	185		48
590	88 和龍北大	M5	220	90	55
591	88 和龍北大	M6	235	72.5	90
592	88 和龍北大	M7	275	105	120
593	88 和龍北大	M8	230	57.5	45
594	88 和龍北大	M9	260	75	90
595	88 和龍北大	M10	220	97.5	85
596	88 和龍北大	M11	217	77.5	80
597	三陵	M1	400	220	210
598	三陵	M2	390	330	245
599	河南屯	M1	240	140	47
600	河南屯	M2	240	140	47
601	石場溝	M1	230	130	50
602	石場溝	M2	232	156	54
603	石場溝	M3	235	106	72
604	石場溝	M4	220	104	83
605	石場溝	M5	234	50	50
606	石場溝	M6	205	140	65
607	石場溝	M7	195	68	30
608	石場溝	M8	235	110	95
609	石場溝	M9	235	80	95
610	石場溝	M10	216	117	65
611	石場溝	M11	205	135	68
612	石場溝	M12	235	70	50
613	石場溝	M13	175	136	50
614	石場溝	M14	245	80	70
615	石場溝	M15	225	180	60
616	石場溝	M16	265	128	80
617	石場溝	M17	230	115	75
618	石場溝	M18	305	225	125
619	二道河子	M1	195	100	110
620	二道河子	M2	200	90	130
621	二道河子	M3	200	50	70
622	二道河子	M4	290	220	70
623	馬滴達	M0	274	186	230



No.	墳墓群名	墳墓番号	長さ	幅	高さ
624	北站	M1	245	130	95
625	北站	M2	220	180	75
626	北站	M3	300	210	70

付表2は、以下の文献より筆者作成。

黒龍江省文物考古研究所『寧安虹鱒魚場:1992~1995年度渤海墓地考古発掘報告』（文物出版社、2009年）。

吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所『六頂山渤海墓葬—2004~2009年清理発掘報告』（文物出版社、2012年10月）。

中国社会科学院考古研究所『六頂山与渤海鎮:唐代渤海国の貴族墓地与都城遺址』（中国大百科全書出版社、1997年、p.32）。

王志剛『六頂山渤海墓葬研究』（2008年吉林大学硕士学位论文論文、p.22）。

『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群（I）:第1・2次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2005年）

『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群（II）:第3次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2006年）。

『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群（III）:第4次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2007年）

『沿海州チェルニャチノ5渤海古墳群（IV）:第6次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009年）。

黒龍江省文物考古研究所「黒龍江省海林市羊草溝墓地的発掘」（『北方文物』1998年第3期、pp.32~33）。

黒龍江省文物考古研究所「黒龍江省牡丹江樺林石場溝墓地」（『北方文物』1991年第4期。『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、pp.400~401）。

黒龍江省文物考古研究所「黒龍江海林北站渤海墓試掘」（『北方文物』1987年第1期；『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、p.412）。

于匯歴「黒龍江海林二道河子渤海墓葬」（『北方文物』1987年第1期；『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、p.409）。

吉林省文物考古研究所「吉林永吉查里巴靺鞨墓地」（『文物』1995年第9期、pp.34~38）。

吉林省文物考古研究所『榆樹老河深』（文物出版社、1987年、p.98）。

吉林市博物館「吉林永吉楊屯大海猛遺址」（『考古学集刊』第5輯、1987年、p.138）。

吉林省文物工作隊、吉林市博物館、永吉県文化局「吉林永吉楊屯遺址第三次発掘」（『考古学集刊』第7輯、1991年、pp.41~43）。

延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「和龍北大渤海墓清理簡報」（『東北歴史与考古』1982年第1期。『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年、p.361）。

附表3 鞣鞣罐属性一览

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	颈	備考
1	M2001:109		腹有烟薰的痕迹		侈口	腹径略大于口径	平底	素面		口饰一圈附加堆纹		
2	M2001:157	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口		平底			肩饰两道凹弦纹		
3	M2002:13	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	口径略大于腹径	平底			肩饰两道凹弦纹夹水波纹		
4	M2004:1	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底	长腹		肩饰水波纹夹弦纹		
5	M2005:2	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	腹最大径略大于口径	平底			劲下饰三道凹弦纹,上两道中间饰一排锥刺纹		
6	M2007:1		腹部上有烟薰的痕迹			腹最大径略大于口径	平底	素面				
7	M2007:14		腹部上有烟薰的痕迹			腹最大径略大于口径	平底	素面				
8	M2007:2	口沿经过慢轮修整	腹部上有烟薰的痕迹	重唇较窄		腹径均大于口径	平底	素面				
9	M2007:3		腹部上有烟薰的痕迹	重唇间距较大		口近似于小盘口,其直径大于腹径	平底	素面				
10	M2007:5		腹部上有烟薰的痕迹									
11	M2013:2	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	口大于腹部	平底	素面				
12	M2013:3	口沿经过慢轮修整		方唇	侈口	腹最大径大于口径	平底	素面				
13	M2014:1	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底		鼓腹	底饰“十”字符号		
14	M2014:2	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底		鼓腹	底饰“一”字符号		
15	M2015:1	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面		底饰凸“十”字		
16	M2015:2	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
17	M2017:1	口沿经过慢轮修整	腹下呈斑驳不均	重唇	侈口	口径大于腹最大径	平底					
18	M2020:2		腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径大于腹径	平底		筒形			
19	M2021:2	口沿经过慢轮修整		重唇		腹径大于口径	平底					
20	M2022:2	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	腹最大径大于口径	平底	素面				
21	M2022:3			圆唇	侈口		平底	素面	筒形			
22	M2024:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底	素面	鼓腹	底饰押记		
23	M2024:3	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底	素面	鼓腹			
24	M2025:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	方唇	侈口		平底		鼓腹			
25	M2026:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹		侈口	腹径大于口径	平底	素面		唇饰两道凹弦纹		
26	M2026:2	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	圆唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	颈	備考
27	M2029:1	口沿经过慢轮修整	腹部有斑纹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
28	M2031:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底	素面	鼓腹			
29	M2031:2	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底	素面	鼓腹	中间饰一道凸弦纹		
30	M2034:4	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底	素面	鼓腹			
31	M2034:5		腹部留下烟薰的痕迹	重唇		口径大于腹径	平底	素面				
32	M2035:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	尖圆唇	侈口	口径与腹径相同	平底	素面			束颈	
33	M2041:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底			肩饰两道凹弦纹夹水波纹		
34	M2043:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径大于腹径	平底					
35	M2043:2	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	尖圆唇	子口	口径略大于腹径	平底				束颈	
36	M2044:1	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底	素面	垂腹	肩饰“×”符号		
37	M2045:1		腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径大于腹径	平底	素面				
38	M2052:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径与腹径相同	平底			肩饰水波纹夹弦纹,颈部饰一“×”符号		
39	M2052:2		腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
40	M2061:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径大于腹径	平底			肩饰锥刺纹夹附加堆纹		
41	M2062:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底					
42	M2064:1	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底			肩饰弦纹夹水波纹		
43	M2076:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径与腹最大径相同	平底			肩饰一道凹弦纹		
44	M2085:1		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
45	M2085:2	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
46	M2092:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径大于腹径	平底	素面				
47	M2121:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底			肩饰凹弦纹夹水波纹		
48	M2121:2	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
49	M2124:4		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
50	M2124:5		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
51	M2133:2	口沿经过慢轮修整	腹有斑纹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底	素面				
52	M2141:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	尖圆唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
53	M2154:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底	素面		底饰“土”字符号		

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	颈	備考
54	M2157:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
55	M2161:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	圆唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
56	M2161:24	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	圆唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
57	M2162:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径与腹径相同	平底			肩饰斜线锥刺纹夹凹弦纹		
58	M2163:1	口沿经过慢轮修整		尖圆唇	侈口							
59	M2164:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径与腹径相同	平底	素面				
60	M2165:3		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
61	M2166:5		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径与腹径相同	平底		筒形			
62	M2168:8		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径与腹径相同	平底	素面				
63	M2170:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
64	M2171:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇		口径略大于腹径	平底			肩饰两道凹弦纹中间夹锥刺纹,底饰“十”字纹,重唇中间饰一道弦纹		
65	M2172:2		腹部有烟薰的痕迹	圆唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
66	M2175:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
67	M2183:5			重唇	侈口	口径大于腹径		素面				
68	M2184:12	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径等于腹径	平底	素面				
69	M2185:3	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	口径大于腹径	平底	素面				
70	M2188:1			唇中间微凹呈重唇其间距较大	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
71	M2194:2	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
72	M2200:2	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底					
73	M2200:3	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底					
74	M2201:1		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
75	M2202:1	口沿经过慢轮修整	腹有斑纹和烟薰的痕迹	重唇中间微凹	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
76	M2204:1	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面		腹部和颈部有斑纹		
77	M2205:1		腹部有烟薰的痕迹	圆唇	侈口			素面				

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	颈	備考
78	M2205:15	口沿经过慢轮修整			侈口		平底		垂腹	腹饰“十”字款,腹饰一椭圆形圆圈		
79	M2205:2		腹部有烟薰的痕迹	两唇中间微凹,间距较大	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
80	M2205:29	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹		侈口	腹径大于口径		素面				
81	M2205:30	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹		侈口	腹径大于口径		素面				
82	M2205:48	口沿经过慢轮修整	腹部留下烟薰的痕迹		侈口	腹径大于口径		素面				
83	M2205:8		腹部有烟薰的痕迹	两唇中间微凹,间距较大	侈口	腹径略大于口径	平底	素面				
84	M2208:39	口沿经过慢轮修整		圆唇	侈口	口径略大于腹径	平底			肩饰一圈凹弦纹		
85	M2212:1		腹部有烟薰的痕迹	圆唇	侈口		平底	素面	微折腹			
86	M2212:4	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇		腹径大于口径	平底	素面				
87	M2212:5	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底			肩饰“爪”字形纹饰		
88	M2249:1		腹部有烟薰的痕迹	重唇,唇为手制,其间距较大	侈口	口径与腹径基本相同	平底	素面		腹饰阴刻十字符号		
89	M2249:2	口沿留下轮修痕迹	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
90	M2252:1		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口,近似于小盘口	口径略大于腹径	平底	素面				
91	M2252:2		腹部有烟薰的痕迹	口沿饰锯齿纹	侈口,近似于小盘口	口径略大于腹径	平底	素面				
92	M2255:1	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	腹径略大于口径		素面		底饰“十”字符号		
93	M2255:10	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底	素面				
94	M2256:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底			肩饰水波纹夹弦纹		
95	M2257:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
96	M2257:2	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底			肩饰一圈凹弦纹		
97	M2257:3	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
98	M2257:4	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底	素面				

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	頸	備考
99	M2259:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
100	M2262:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
101	M2262:3		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底	素面				
102	M2262:4	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
103	M2262:7		腹部有烟薰的痕迹	方唇	侈口	腹径略大于口径	平底	素面				
104	M2264:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
105	M2268:3	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
106	M2279:3	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径与腹径相同	平底			肩饰两道凹弦纹和“×”符号	束颈	
107	M2279:4	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径与腹径相同	平底			肩饰两道凹弦纹和“×”符号	束颈	
108	M2280:2		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底		筒形			
109	M2280:8	口沿饰一圈锯齿附加堆纹	腹部有烟薰的痕迹		侈口		平底		垂腹			
110	M2289:3		腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
111	M2293:1		腹部有烟薰的痕迹	圆唇	侈口	口径大于腹径	平底	素面				
112	M2294:1			尖唇	侈口	口径与腹径相同	平底		筒形			
113	M2298:1		器表有烟薰的痕迹	尖圆唇	侈口	腹径略大于口径				肩饰一道圈凸弦纹		
114	M2298:2		器表有烟薰的痕迹	重唇	侈口		平底	素面	垂腹			
115	M2310:3	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底	素面				
116	M2311:2	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径略大于口径	平底			肩饰一阴刻符号,底饰凸“十”字		
117	M2313:2		腹部有烟薰的痕迹		侈口	腹径略大于口径	平底	素面		唇饰两道凹弦纹		
118	M2318:2	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
119	M2320:1	口沿经过慢轮修整		重唇	侈口	腹径大于口径	平底	素面		底饰凸“十”字		
120	M2322:1	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径大于口径	平底			肩饰一凹弦纹		
121	征集:3			唇饰一圈锯齿附加堆纹	侈口	腹径大于口径	平底	素面				
122	征集:4			唇饰一圈锯齿附加堆纹	侈口	腹径与口径基本相等	平底	素面				

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	頸	備考
123	征集:8			唇饰一圈锯齿附加堆纹	敞口, 近似于盘口状	口径大于腹径	平底	素面	鼓腹			
124	征集:9			唇饰一圈锯齿附加堆纹	侈口	直径	平底	素面	圆鼓腹			
125	征集:12			唇饰一圈锯齿附加堆纹	侈口	腹径与口径相等	平底	素面				
126	征集:13			唇饰一圈锯齿附加堆纹	侈口	口近似于盘口状,腹径与口径基本相等	平底	素面				
127	采:39	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径与口径基本相同	平底	素面				
128	采:40	口沿经过慢轮修整	腹部有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径与口径基本相同	平底	素面				
129	FT2:1	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口	腹径与口径基本相同	平底	素面				
130	FT2:2	口沿经过慢轮修整	腹有烟薰的痕迹	重唇	侈口	口径略大于腹径	平底	素面				
131	64M205:5			唇沿折起, 口沿下部起凸棱	口较广	最大腹径位于器身中上部	平底		腹微鼓,弧腹	肩部有一周凹弦纹和六个并列相连的交叉形划纹		
132	M202:8			唇沿折起, 口沿下部起凸棱	口较广		平底	素面	腹微鼓			
133	M205:6			唇沿折起, 口沿下部起凸棱	口较广		平底	素面	腹微鼓、腹壁近直			
134	M205:8			唇沿折起, 口沿下部起凸棱	口较广		平底	素面	腹微鼓			
135	M211:10			唇沿折起, 口沿下部起凸棱	口较广		平底	素面	腹微鼓			
136	I MT5:9					最大腹径位于器身下部			垂腹			
137	M102:1			重唇	侈口	腹最大径约在器身中部			腹微鼓	口唇外缘挤压出一周凹槽和凸棱,颈下部饰一周凸弦纹,下唇饰一周锯齿状纹		

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	頸	備考
138	M103:3			重唇	侈口	腹最大径约在器身中部	器底中部有一人为穿透的圆孔		腹微鼓	口唇外缘挤压出一周凹槽和凸棱,颈下部饰一周凸弦纹		器形不规整
139	M104:4		器身内外壁有大量烟炱	重唇	侈口		平底		腹部较直			
140	M105:7	完全系手工控制而成,制作粗糙		口沿外翻成厚圆唇	侈口		平底					
141	M106:12	完全系手工控制而成,制作粗糙		圆唇	侈口					颈下部饰一周凸弦纹	颈部较长	器形不规整,近似椭圆
142	M106:14			方唇	侈口	腹最大径约在器身中部			腹微鼓	口唇外缘挤压出一周凹槽和凸棱,形成重唇,颈下部饰一周凸弦纹		
143	M107:12			重唇	侈口	腹最大径约在器身中部			腹微鼓	口唇外缘挤压出一周凹槽和凸棱,颈下部饰一周凸弦纹		
144	M109:11		器身内外壁附着大量黑色烟炱	重唇	侈口	腹最大径约在器身中部			腹微鼓	口唇外缘挤压出一周凹槽和凸棱,颈下部有两周凹弦纹		
145	M109:9			重唇	侈口	腹最大径约在器身中部			腹微鼓	口唇外缘挤压出一周凹槽和凸棱,颈下部饰一周凸弦纹,紧贴其下饰三周锥刺纹,其下又饰三周刻划水波纹		
146	M110:17			重唇	侈口		平底		鼓腹、腹部略下垂			
147	M111:4			重唇	侈口	腹最大径约在器身中部			腹微鼓	口唇外缘挤压出一周凹槽和凸棱,颈下部饰一周凸弦纹,一侧		



No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	頸	備考
										頸下部飾一橢圓形鈕		
148	M111:5	完全系手工控制而成,制作粗糙		圓唇	侈口		平底	素面			頸部較短	器口部近似橢圓
149	M115:4	完全系手工控制而成,制作粗糙		厚圓唇	侈口		平底			頸下部飾一周凸弦紋	頸部較長	
150	M115:5			重唇	侈口	腹最大徑約在器身中部		素面	腹微鼓	口唇外緣擠壓出一周凹槽和凸棱		
151	M115:6			厚圓唇	侈口	腹最大徑約在器身中部			腹微鼓	口唇外緣擠壓出一周凹槽和凸棱,形成重唇,頸下部飾一周刻划鋸齒紋		
152	M117:6	完全系手工控制而成,制作粗糙		圓唇	侈口		平底	素面			頸部較短	
153	M117:7	器表有輪修痕迹		方唇	侈口		平底		鼓腹	口唇外緣擠壓出一周凹槽和凸棱,唇外緣稍稍凸起,頸下部有一周微凸的條狀弦紋,器底有抹壓形成的弧狀布紋		
154	M118:6			厚圓唇	侈口	腹最大徑約在器身中部			腹微鼓	唇外側下端飾斜向刻划紋,頸下部飾一周戳印圓點紋,肩部一端飾一豎向條狀鑿耳		器耳末端殘
155	M201:14	器表經壓磨		重唇	侈口	腹最大徑約在器身中部		素面	腹微鼓	口唇外緣擠壓出一周凹槽和凸棱		
156	M202:5			重唇	侈口	腹最大徑約在器上部	平底		微鼓腹	頸下部飾一周凸弦紋		器形不甚對稱
157	M203:1	捏制,制作粗糙	內外壁有黑色烟炱	方唇	侈口		平底		腹部微折鼓			器胎較厚
158	M203:6			重唇	侈口	腹最大徑約在器上部	平底		微鼓腹	一側頸部有刻划的橫置的“日”字		

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	頸	備考
										图形,其下饰一周凸弦纹		
159	M206:11			重唇	侈口	腹最大径约在器身中部		素面	腹微鼓	口唇外缘挤压出一周凹槽和凸棱		
160	M17:1			方唇	侈口		平底	素面	腹微鼓			
161	M18:2	慢轮修整		方唇,唇内凹	侈口					器腹靠上部饰一戳印纹		
162	M16:7	口沿经过慢轮修整		唇部内下凹	侈口					颈下部饰一周弦纹	有颈	腹下部残
163	M16:8			重唇	侈口		平底		鼓腹、腹部略下垂、腹下部略内收			
164	M12:2			重唇	侈口		平底		鼓腹			
165	M15:3	经慢轮修整		重唇	侈口		平底		鼓腹			
166	M6:3			重唇	侈口		平底		鼓腹			
167	M16:4			重唇	侈口	口径略大于腹径	平底		鼓腹	腹壁较直		
168	M15:1				侈口				鼓腹		束颈	
169	M18:5	口沿经过慢轮修整		唇部饰有指甲纹	重唇		平底		鼓腹	腹部饰一道凹弦纹		
170	M5:1	口沿经过慢轮修整		唇部饰有指甲纹	重唇		平底		鼓腹	腹部饰一道凹弦纹		
171	M5:2	口沿经过慢轮修整			重唇					颈部饰有阴刻“十”字纹	有颈	腹下部残
172	M18:4			重唇	侈口		平底		鼓腹	腹部饰一道凸弦纹		唇部无纹饰
173	M10:6			重唇	侈口		平底		鼓腹	腹部饰一道凸弦纹		唇部无纹饰
174	M11:1			重唇	侈口	口径与腹径略同	平底		鼓腹	腹部饰一道凸弦纹		唇部无纹饰
175	M12:3			重唇	侈口					腹部上部饰有等距平行的三道凹弦纹		
176	M3:1			重唇						器腹上部饰一周指甲纹		
177	83HBM2:1	制作粗糙		重唇		口径近于最大腹径			腹略直	颈下部一道凸弦纹	束颈	下部残缺,火候

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	颈	備考
												较低
178	83HBM2:2			重唇		口径小于最大腹径	底略内凹		垂腹	颈下部有一道凸弦纹	束颈	
179	83HBM3:1			重唇		口径小于最大腹径	底略内凹		垂腹,略鼓腹	颈下部有一道凸弦纹	束颈	
180	M4:3			重唇	侈口		平底		深腹	颈部饰一周凸纹,肩部可见一个阴刻十字		
181	M3:2			方唇	敞口		平底	素面	微鼓腹		折颈	
182	M3:14			圆唇	口微敞		平底稍大		腹微弧下垂	腹饰一周凸棱	窄沿	
183	采:4			圆唇	敞口		平底		腹微鼓	腹饰凸棱垂纹		
184	M36:6			圆唇	敞口	斜沿略宽	平底	素面	腹微鼓			
185	M31:2			圆唇	口微敞	口外沿微大于内沿	平底		腹微鼓	口沿饰锯齿纹、腹饰一周凸弦纹		器形不规整
186	M31:3			圆唇	口微敞	口外沿微大于内沿	平底		腹微鼓	口沿饰锯齿纹、腹饰一周凸弦纹		器形不规整
187	M28:1			圆唇	口微敞	口外沿大于内沿	平底			沿上饰锯齿纹腹较鼓		
188	M11:2			圆唇	口微敞	口外沿与内沿径宽略相等	平底		腹壁较直			
189	M14:13			圆唇	口微敞	口外沿与内沿径宽略相等	平底		腹壁较直			
190	M14:1			圆唇	敞口	口外沿小于内沿	平底		腹微鼓	腹饰刻划的锯齿纹		
191	采:11			圆唇	敞口	口外沿小于内沿	平底		腹微鼓	腹饰一周凸弦纹与刻划叶脉纹		
192	上 23:3			双唇外敞			平底		腹微鼓			
193	上 26:1			双唇外敞			平底		腹壁较直	下唇饰有按压纹		
194	上 14:1			双圆唇外侈			平底		腹微鼓	下唇饰有按压纹		颈部内凹明显
195	上 1:1				口外敞较大		大平底		微鼓腹偏下		颈内凹	

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	頸	備考
196	上 33:12			圓唇外敞			平底		鼓腹偏下	下唇飾斜刻划纹,腹上部飾三周斜刻划纹,頸下部有二道篔点纹	长斜頸	
197	上 28:2			双唇相距较寬			平底		腹較鼓	下唇飾有锯齿纹和五个等距的偏长乳钉纹,頸下肩部有三道凸弦纹,弦纹中间还有斜凸棱纹飾	弧曲頸	
198	上 2:8			圓唇,双唇相距较寬			平底		腹較鼓	肩部有三道斜线纹,下唇有刻划纹	弧曲頸	
199	H1:6		器表陶色不均		侈口	口径大于腹徑			下腹微弧	口沿下飾一周锯齿花边堆纹,腹上部飾一周由四条刻划纹组成的波浪纹		
200	T9①:24	器表經打磨			侈口	口径大于腹徑	小平底		腹微弧	口沿下飾一周、腹徑下飾两周锯齿堆纹,露出犀合的砂粒和三母碎片,但仍較光滑		
201	M11:2				口沿下飾一周锯齿堆纹					腹間飾四条压划纹,其下飾由连点纹组成的斜直线纹一周		
202	H1:4				口微侈	口径小于腹徑	小平底		腹微鼓	口沿下一周锯齿堆纹,腹間一周堆纹		
203	T5①:6			重唇	口微侈	口径小于腹徑	小平底		腹微鼓	口沿下一周锯齿堆纹		
204	M1:6				口微侈口	腹徑相等			腹微鼓	口沿下一周锯齿纹,腹刻划波浪纹		

No.	出土番号	製作方法	煙跡	口緣部①	口緣部②	徑	底	腹①	腹②	文様	頸	備考
205	T9①:25			重唇	侈口	口径略小于腹颈	底较大		腹微鼓	唇间一周凹弦纹,颈间饰一周凸弦纹	束颈	
206	T7①:11	口沿内外及颈间轮修痕迹明显		方唇	小卷沿	口径略小于腹颈	底较大		腹微鼓	沿下有一周凹弦纹,颈间饰一周凸弦纹	束颈	
207	M31:1				侈口		平底		腹壁微弧	口沿下饰一周附加堆纹		器形不甚规正
208	M8:1			圆唇	口微侈		小平底		腹微鼓	口沿下饰一周锯齿状附加堆纹	束颈	
209	T10②:4				侈口		平底		腹微鼓	口沿下饰一周锯齿状附加堆纹,腹上部饰七周纹饰,从上至下为折线,圆点凹弦纹,篦点斜线等共同组成图案	束颈	器形规正
210	M5:1	轮修		方唇	侈口		平底		微鼓腹,腹较直	颈腹间饰凹弦纹一周	束矮直颈	
211	M22:1			圆唇	侈口	最大腹径偏上	平底		鼓腹	口沿下饰一周锯齿状附加堆纹,其上饰四个水滴状钮,腹上部饰附加堆纹两周,其下压印斜篦点纹一周	束颈	
212	M2:1	轮修		方唇						腹部饰五周单线或双线凹弦纹,弦纹间饰四周单线连续水波纹,器底印“十”字形符号	束颈	
213	M37:1			双唇	敞口	大口小底	平底		腹微鼓			
214	M47:1			折缘圆唇			平底					

附表 3 は、以下の文献より筆者作成。

黒龍江省文物考古研究所『寧安虹鱒魚場:1992~1995 年度渤海墓地考古発掘報告』（文物出版社、2009 年）。

吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所『六頂山渤海墓葬—2004~2009 年清理発掘報告』（文物出版社、2012 年 10 月）。

中国社会科学院考古研究所『六頂山与渤海鎮:唐代渤海国的贵族墓地与都城遺址』（中国大百科全书出版社、1997 年、p.32）。

王志剛『六頂山渤海墓葬研究』（2008 年吉林大学碩士學位論文、p.22）。

黒龍江省文物考古研究所「黒龍江省海林市羊草溝墓地的発掘」（『北方文物』1998 年第 3 期、pp.32~33）。

黒龍江省文物考古研究所「黒龍江省牡丹江樺林石場溝墓地」（『北方文物』1991 年第 4 期。『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社 1997 年、pp.400~401）。

黒龍江省文物考古研究所「黒龍江海林北站渤海墓試掘」（『北方文物』1987 年第 1 期；『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社 1997 年、p.412）。

于匯歷「黒龍江海林二道河子渤海墓葬」（『北方文物』1987 年第 1 期；『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社 1997 年、p.409）。

吉林省文物考古研究所「吉林永吉查里巴靺鞨墓地」（『文物』1995 年第 9 期、pp.34~38）。

吉林省文物考古研究所『榆樹老河深』（文物出版社、1987 年、p.98）。

吉林市博物館「吉林永吉楊屯大海猛遺址」（『考古学集刊』第 5 輯、1987 年、p.138）。

吉林省文物工作隊、吉林市博物館、永吉県文化局「吉林永吉楊屯遺址第三次発掘」（『考古学集刊』第 7 輯、1991 年、pp.41~43）。

延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「和龍北大渤海墓墓清理簡報」（『東北歴史与考古』1982 年第 1 期。『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社 1997 年、p.361）。

付表4 渤海と日本の外交使節一覧・渤海使と日本の迎接使一覧

渤海→日本

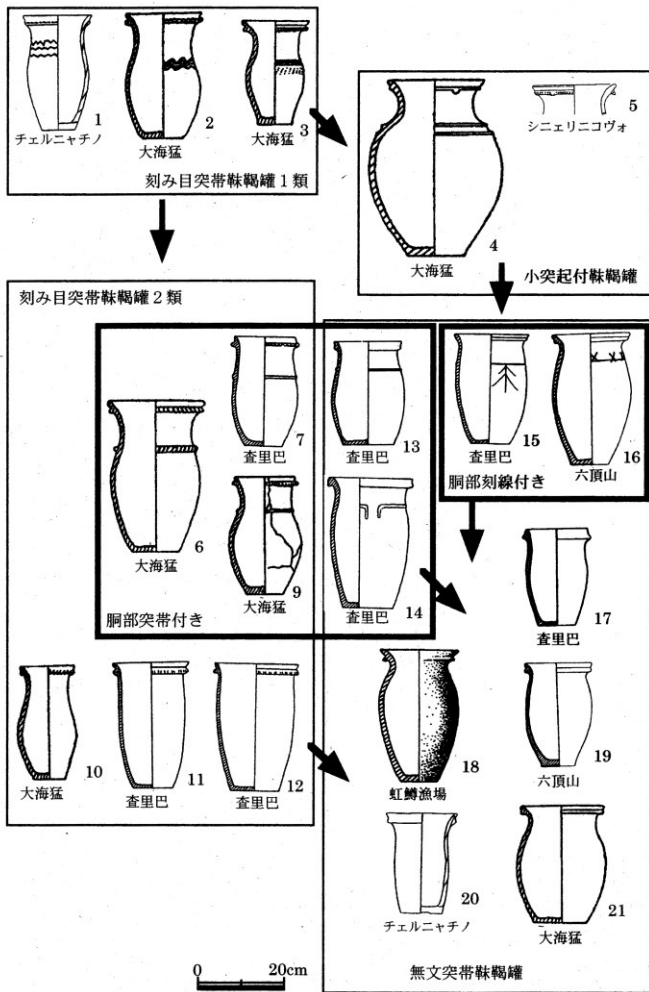
回数	来着年	西 曆	渤海使節名										存問使	領客使		
			大使	副使	判官	録事	訳語	史生	天文生	箱工	首領					
1	神亀 4	727	高仁義	徳周	舍航								高齊徳			
2	天平 11	739	胥要徳	己珍蒙									己開棄蒙			
	天平 18	746											鉄利人			
3	天平勝宝 4	752	慕施蒙											坂上老人		
4	天平宝字 2	758	楊承慶	楊泰師	憑方礼											
5	天平宝字 3	759	高南申	高興福	李能本 解臂鷹 安貴宝											
6	天平宝字 6	762	王新福	李能本	楊懷珍 連能信											
7	宝亀 2	772	老万福	慕昌祿												
8	宝亀 4	775	烏須弗													
9	宝亀 7	776	史都蒙		(大)高福思 (少)高鬱琳 高瀨源	(大)史通仙 (少)高珪宜										
10	宝亀 9	778	張仙寿													
11	宝亀 10	779	高洋弼					高説昌								
12	延暦 5	786	李元泰													
13	延暦 14	795	呂定琳													
14	延暦 17	798	大昌泰													
15	大同 4	809	高南容										高多仏			
16	弘仁 1	810	高南容													
17	弘仁 5	814	王孝廉	高景秀	高英善 王昇基	朝仁貞 烏賢徳	李俊雄						滋野貞主	坂上今継 坂上今雄		
18	弘仁 9	818	慕感徳													
19	弘仁 10	819	李承英													
20	弘仁 12	821	王文矩													
21	弘仁 14	823	高貞泰	璋璋									紀末成 葉島主			
22	天長 2	825	高承祖	高如岳	王文信 高孝英	高成仲 陳崇彦	李隆郎 李承宗								布留高庭	
23	天長 4	827	王文矩													
24	承和 8	841	賀福延	王宝璋	高文暉 烏孝慎	高文宣 高平信 安寛喜	季憲寿 高応順	王祿昇 李朝清	晋昇堂	28人	65人		小野恒柯 山代氏益	小野恒柯 豊隆安人		
25	嘉祥 1	848	王文矩	烏孝慎	(大)馬福山 (少)高忠順	(大)高文信 (中)多安春 (少)李英貞(貞)							累犬養貞守 山口西成	累犬養貞守 山口西成		
26	貞観 1	859	烏孝慎	周元伯									笏田安雄 安倍清行	笏田安雄 (弘宗安人) 安倍清行		
27	貞観 3	861	李居正										藤原春景	藤原春景 葛井善宗		
28	貞観 13	871	楊成規	李興成	李周慶 賀王貞	高福成 高観 李孝信							大春日安守 (菅原道真) 美努清名 源舒	大春日安守 美努清名		
	貞観 15	873	崔宗佐	大陳洞	門孫宰											
29	貞観 18	876	楊中遠										大春日安名 占部月雄	大春日安名 占部月雄		
30	元慶 6	882	裴璵	高周封									大藏善行 高階茂範	大藏善行 高階茂範		
31	寛平 4	892	王亀謀										藤原善根 小野良弼			
32	寛平 6	894	裴璵										三統理平 中原岳			
33	延喜 8	908	裴璵										藤原博文 秦維興	小野葛根 藤原守貞		
34	延喜 19	919	裴璵										橘惟親 依知秦広助			
	延長 7	929	裴璵													

日本→渤海

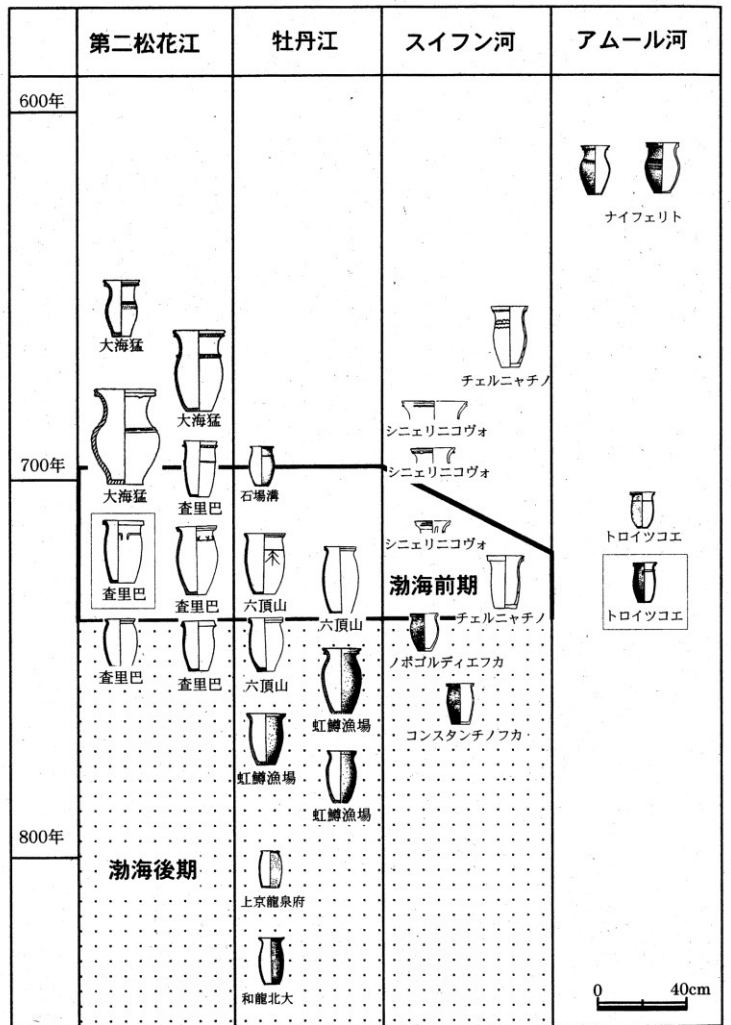
	出 発 年	西 曆	月 日	出 港 地	使 節 名	帰 国 年	西 曆	月 日
1	神亀 5	728	6.5	能登	引田虫麻呂	天平 2	730	8.29
2	天平 12	740	4.20		大伴犬養	天平 12	740	10.5
3	天平宝字 2	758	2.10 以降		小野田守・高橋虫麻呂・物部浄人ら 63 人	天平宝字 2	758	9.18
	天平宝字 3	759	1.30		高元度・内蔵全成・羽栗翔	天平宝字 3	759	10.18
4	天平宝字 4	760	2.20		陽侯玲瑯	天平宝字 4	760	11.11
5	天平宝字 6	762	3.28 以降		高麗大山・伊吉益麻呂	天平宝字 6	762	10.1
6	天平宝字 7	763	2.20		多治比小耳・平群虫麻呂・板振鎌東	天平宝字 7	763	10.6 以前
7	宝亀 3	772	9.21	能登国福良津	武生鳥守	宝亀 4	773	10.13
8	宝亀 8	777	5.23		高麗殿繼	宝亀 9	778	9.21
9	宝亀 10	779	2.2		大網広道			
	延暦 6	787	2.19	越後国				
10	延暦 15	796	5.17	越後国か	御長広岳・桑原秋成	延暦 15	796	10.2
11	延暦 17	798	5.19		内蔵賀茂麻呂・御使今嗣	延暦 17	798	12.27 以前
12	延暦 18	799	4.15		滋野船白	延暦 18	799	9.20
13	弘仁 2	811	4.27		林東人・上毛野繼益	弘仁 2	811	10.2

酒寄雅志『渤海と古代の日本』（校倉書房、2001年）





第6図 鞆鞆罐分類概念図 (Nikitin and Gelman 1998; 吉林省博物館1987; 田村1998; 吉林省文物考古研究所 1995; 中国社会科学院考古学研究所1997; 黒竜江省文物考古研究所1997)



第7図 鞆鞆罐編年試案図(本図では渤海文化中・後期を一括して後期としている)(出典は文末に記載)

### 付図1 足立氏の分類概念図と編年試案図

足立拓朗「渤海前期の「鞆鞆系土器」について」(『青山考古』17、2000年)

## 参考文献

### [著書]

【中国語著書】（筆画順）

1. A.И.奥克拉德尼科夫著、莫潤先・田大畏訳『浜海遙遠の過去』（商務印書館、1982年）。
2. У.В.沙弗庫諾夫など著、宋玉彬訳『渤海国及其俄羅斯遠東部落』（東北師範大学出版社、1997年）。
3. 王小甫『盛唐時代与東北亜政局』（上海辞書出版社、2003年）。
4. 王承礼『渤海簡史』（黒龍江人民出版社、1984年）。
5. 王承礼など『渤海国志三種』（天津古籍出版社1992年）。
6. 王承礼『中国東北の渤海国与東北亜』（吉林文史出版社、2000年）。
7. 王禹浪、魏国忠『渤海史新考』（哈爾濱出版社、2008年）。
8. 中国社会科学院考古研究所『六頂山与渤海鎮:唐代渤海国の貴族墓地与都城遺址』（中国大百科全書出版社、1997年）。
9. 方学鳳『渤海主要遺跡考察散記』（延边大学出版社、2003年）。
10. 尹鉉哲『渤海国交通運輸史研究』（華齡出版社、2006年）。
11. 吉林省文物志編委会『敦化市文物志』（吉林省文物志編集委員会、1985年）。
12. 吉林省文物志編委会『和龍県文物志』（吉林省文物志編集委員会、1984年）。
13. 吉林省文物考古研究所『榆樹老河深』（文物出版社、1987年）。
14. 吉林省文物考古研究所など『西古城:2000~2005年度渤海国中京顕徳府故址田野考古報告』（文物出版社、2007年）。
15. 吉林省文物考古研究所『田野考古集粹』（文物出版社、2008年）。
16. 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所『六頂山渤海墓葬—2004~2009年清理發掘報告』（文物出版社、2012年）。
17. 朱国忱・朱威『渤海遺跡』（文物出版社、2002年）。
18. 朱国忱・魏国忠『渤海史稿』（黒龍江省文物出版編集室、1984年）。
19. 朱国忱・魏国忠・郝慶云『渤海国史』（中国社会科学出版社、2006年）。
20. 李陳奇・趙鉄夫『海曲華風』（文物出版社、2010年）。
21. 李徳山『隋唐時期東北边疆民族与中央王朝關係史研究』（香港亜州出版社、2008年）。
22. 李殿福・孫玉良『渤海国』（文物出版社、1987年）。
23. 李宗侗『中国史学史』（中国友誼出版公司、1984年）。
24. 宋玉彬・A.И.伊夫里耶夫・E.И.格尔曼『俄羅斯滨海边疆区渤海文物集粹』（文物出版社、2013年）。
25. 林攀『失落的渤海古国』（華齡出版社、2010年）。
26. 国家文物局『中国文物地図集：吉林分冊』（広東省地図出版社、1989年）。
27. 金毓黻『渤海国志長編』（千華山館、1934年）。
28. 延边博物館『延边文物簡編』（延边人民出版社、1988）。
29. 禹碩基など『渤海国与東亜細亜』（遼寧大学出版社、1995年）。
30. 馬一虹『靺鞨、渤海与周辺国家、部族關係史研究』（中国社会科学出版社、2011年）。
31. 孫玉良『渤海史料全編』（吉林文史出版社、1992年）。

32. 孫進己・孫海編集『高句麗渤海研究集成（1～6）』（哈爾濱出版社、1997年）。
33. 黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系『河口与振興』（科学出版社、2001年）。
34. 黒龍江省文物考古研究所『渤海上京城:1998～2007年度考古発掘調査報告』（文物出版社、2009年）。
35. 黒龍江省文物考古研究所『寧安虹鱒魚場:1992～1995年度渤海墓地考古発掘報告』（文物出版社、2009年）。
36. 黒龍江省文物考古研究所『考古・黒龍江』（文物出版社、2011年）。
37. 張碧波・張軍『渤海国外交史研究』（黒龍江人民出版社、2011年）。
38. 程妮娜『東北史』（吉林大学出版社、2001年）。
39. 曾憲麗『渤海歴史研究論文索引』（吉林文史出版社、2010年）。
40. 馮恩学『俄国東西伯利亚与遠東考古』（吉林大学出版社、2002年）。
41. 楊志軍『東北亜考古資料訳文集：渤海專号』（北方文物雜誌社、1998年）。
42. 楊雨舒・蔣戎『唐代渤海国五京研究』（香港亜州出版社、2008年）。
43. 楊保隆『渤海史入門』（青海人民出版社、1988年）。
44. 楊軍『渤海国民族構成与分布研究』（吉林人民出版社、2007年）。
45. 鄭永振・嚴長録『渤海墓葬研究』（吉林人民出版社、2000年）。
46. 鄭永振『渤海史研究（11）』（延辺大学出版社、2002年）。
47. 鄭永振『高句麗渤海靺鞨墓葬比較研究』（延辺大学出版社、2003年）。
48. 鄭永振・李東輝・尹鉉哲『渤海史論』（吉林文史出版社、2011年）。
49. 劉曉東『渤海文化研究』（黒龍江人民出版社、2006年）。
50. 滕紅岩『渤海史文献史料簡篇』（吉林文史出版社、2006年）。
51. 魏存成『渤海考古』（文物出版社、2008年）。
52. 譚英傑など『黒龍江区域考古学』（中国社会科学出版社、1991年）。

【日本語著書】（五十音順）

1. A・P・オクラードニコフ著、加藤九祚・加藤晋平訳『シベリアの古代文化—アジア文化の源流—』（講談社、1974年）。
2. E.H.カー著、清水幾太郎訳『歴史とは何か』（岩波書店、1962年）。
3. 赤羽目匡由『渤海王国の政治と社会』（吉川弘文館、2011年）。
4. ア・ペ・オクラドニコフ他著、荻原眞子・中島寿雄・中村嘉男訳『シベリア極東の考古学』（河出書房新社、1982年）。
5. 天野哲也など『中世東アジアの周縁世界』（同成社、2009年）。
6. 天野哲也など『北方世界の交流と変容:中世の北東アジアと日本列島』（山川出版社、2006年）。
7. 池内宏『満鮮史研究（中世 第1冊）』（荻原星文館、1943年）。
8. 池内宏『満鮮史研究（中世 第2冊）』（座右宝刊行会、1937年）。
9. 石井正敏『日本渤海関係史の研究』（吉川弘文館、2001年）。
10. 石母田正『日本の古代国家』（岩波書店、1971年）。
11. 一瀬和夫、福永伸哉、北條芳隆編『墳墓構造と葬送祭祀』（同成社、2011年）。
12. 井上秀雄他訳注『東アジア民族史 2—正史東夷伝（東洋文庫 283）』（平凡社、1976年）。
13. 上田雄、孫栄健『日本渤海交渉史』（六興出版、1990年）。

14. 上田雄『渤海使の研究—日本海を渡った使節たちの軌跡—』(明石書店、2002年)。
15. 上田雄『渤海国—東アジア古代王国の使者たち—』(講談社、2004年)。
16. 上田正昭監修『古代日本と渤海:能登からみた東アジア:TOGI 渤海シンポジウム』(大巧社、2005年)。
17. 臼杵勲『鉄器時代の東北アジア』(同成社、2004年)。
18. 大貫静夫『東北アジアの考古学』(同成社、1998年)。
19. 金子修一『隋唐の国際秩序と東アジア』(名著刊行会、2001年)。
20. 菊池俊彦『北東アジア古代文化の研究』(北海道大学図書刊行会、1995年)。
21. 菊池俊彦『北東アジアの歴史と文化』(北海道大学出版会、2010年)。
22. 吉林省博物館『吉林省博物館』(講談社、1988年)。
23. 児玉幸多『平安時代(上)(図説日本文化史大系)』(小学館、1958年)。
24. 駒井和愛『中国都城・渤海研究』(雄山閣出版、1977年)。
25. 斎藤優『半拉城と他の史蹟』(半拉城址刊行会、1978年)。
26. 在日本朝鮮社会科学者協会歴史部会編『高句麗・渤海と古代日本』(雄山閣、1993年)。
27. 酒寄雅志『渤海と古代の日本』(校倉書房、2001年)。
28. 佐藤信『日本と渤海の古代史』(山川出版社、2003年)。
29. 白鳥庫吉『塞外民族史研究.下(白鳥庫吉全集:第5巻)』(岩波書店、1970年)。
30. シャルロット・フォン・ヴェアシュア著、河内春人訳『モノが語る日本対外交易史(七〜一六世紀)』(藤原書店、2011年)。
31. 朱栄憲著・在日本朝鮮人科学者協会歴史部会訳『渤海文化』(雄山閣、1979年)。
32. 朱国忱・魏国忠著、浜田耕策訳『渤海史』(東方書店、1996年)。
33. 鈴木靖民『古代対外関係史の研究』(吉川弘文館、1985年)。
34. 鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流』(名著出版、1996年)。
35. 鈴木靖民『古代日本の異文化交流』(勉誠出版、2008年)。
36. 鈴木靖民『日本の古代国家形成と東アジア』(吉川弘文館、2011年)
37. 鈴木靖民編『日本古代の王権と東アジア』(吉川弘文館、2012年)
38. 鈴木靖民など編『訳注日本古代史の外交文書』(八木書店、2013年)。
39. 田村晃一『東アジアの都城と渤海』(東洋文庫、2005年)。
40. 田村晃一『渤海都城の考古学的研究(Ⅱ)』(東洋文庫、2007年)。
41. 田村晃一『クラスキノ(ロシア・クラスキノ村における一古城址の発掘調査)』(渤海文化研究中心、2011年)。
42. 津田左右吉『満鮮歴史地理研究1~2(津田左右吉全集 第11~12巻)』(岩波書店、1964年)。
43. 鄭永振著・成澤勝編『古ツングース諸族墳墓の比較研究』(東北大学東北アジア研究センター、2003年)。
44. 鳥山喜一『満州国古蹟古物調査報告書(三) 間島省の古蹟』(満州国国務院文教部編、1942年)。
45. 鳥山喜一『渤海史考』(目黒書店、1915年)。
46. 鳥山喜一『失われた王国—渤海国小史』(翰林出版、1949年)。
47. 鳥山喜一『渤海史上の諸問題』(風間書房、1968年)。
48. 東亜考古学会『東京城 渤海国上京龍泉府址の発掘調査』(東亜考古学会、1939年)。

49. 東京帝国大学文学部編『満鮮地理歴史研究報告（第1～11）』（東京帝国大学文学部、1926年）。
50. 東京帝国大学文学部編『満鮮地理歴史研究報告（第16）』（東京帝国大学文学部、1941年）。
51. 東北亜歴史財団編、濱田耕策監訳『渤海の歴史と文化』（明石書店、2009年）。
52. 中澤寛将『北東アジア中世考古学の研究:靺鞨・渤海・女真』（六一書房、2012年）。
53. 西嶋定生『中国古代国家と東アジア世界』（東京大学出版会、1983年）。
54. 新妻利久『渤海国史及び日本との国交史の研究』（東京電気大学出版局、1969年）。
55. 新野直吉『古代東北と渤海使』（歴史春秋、2003年）。
56. 沼田頼輔『日満の古代国交』（明治書院、1933年）。
57. 野村崇・宇田川洋『続縄文・オホーツク文化』（北海道新聞社、2003年）。
58. 浜田久美子『日本古代の外交儀礼と渤海』（同成社、2011年）。
59. 濱田耕策『渤海国興亡史』（吉川弘文館、2000年）。
60. 日野開三郎『東北アジア民族史（日野開三郎東洋史学論集第14巻）』（三一書房、1988年）。
61. 日野開三郎『東北アジア民族史（日野開三郎東洋史学論集第15巻）』（三一書房、1991年）。
62. 日野開三郎『東北アジア民族史（日野開三郎東洋史学論集第16巻）』（三一書房、1990年）。
63. 廣瀬憲雄『東アジアの国際秩序と古代日本』（吉川弘文館、2011年）。
64. 藤井一二『天平の渤海交流:もうひとつの遣唐使』（塙書房、2010年）。
65. 古畑徹『王溥『唐会要』復元のための基礎的研究』（平成9年度～平成11年度科学研究費補助金基盤研究(C)(2)研究成果報告書、2000年）。
66. 堀敏一『中国と古代東アジア世界—中華的世界と諸民族—』（岩波書店、1993年）。
67. 堀敏一『東アジアのなかの古代日本』（研文出版、1998年）。
68. 三上次男『高句麗と渤海』（吉川弘文館、1990年）。
69. 蓑島栄紀『古代国家と北方社会』（吉川弘文館、2001年）。
70. 水野清一など『北満風土雑記』（座右宝刊行会、1938年）。
71. 矢島玄亮『日本国見在書目録:集証と研究』（汲古書院、1984年）。
72. 箭内互など著『満洲歴史地理（第1～2巻）』（南満洲鉄道、1913年）。
73. 湯沢質幸『古代日本人と外国語:源氏・道真・円仁・通訳・渤海・大学寮』（勉誠出版、2001年）。
74. 吉井秀夫『朝鮮三国時代の墳墓における棺・槨・室構造の特質とその変遷』（平成18年度～平成21年度科学研究費補助金(基盤研究C)研究成果報告書、京都大学大学院文学研究科、2010年）。
75. 吉井秀夫『古代朝鮮墳墓に見る国家形成』（京都大学学術出版会、2010年）。
76. 李成市『東アジアの王権と交易—正倉院の宝物が来たもうひとつの道—』（青木書店、1997年）。
77. 李成市『古代東アジアの民族と国家』（岩波書店、1998年）。
78. 李殿福著、西川宏訳『高句麗・渤海の考古と歴史』（学生社、1991年）。
79. 渡辺信一郎『中国古代の王権と天下秩序—日中比較史の視点から—』（校倉書房、2003年）。

【韓国語著書】(ハングル音順、日本語は筆者。)

1. 고구려연구재단, 러시아 극동 역사고고 민속학 연구소동북아역사재단 『러시아 연해주 크라스키노성 발굴 보고서』 (고구려연구재단, 2004년) .  
高句麗研究財団、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所 『ロシア沿海州クラスキノ渤海寺院址発掘報告書』 (高句麗研究財団、2004年)。
2. 고구려연구재단 『발해사 자료집』 (고구려연구재단, 2004년) .  
高句麗研究財団 『渤海史資料集』 (高句麗研究財団、2004年)。
3. 김경태 『考古學의 理論과 方法論: 考古學의 主要 概念들』 (주류성출판사, 2006년) .  
金敬泰 『考古学の理論と方法論: 考古学の主要概念』 (周留城出版社、2006年)。
4. 김종혁 『동해안 일대의 발해 유적에 대한 연구』 (중심, 2002년) .  
金宗赫 『東海岸一帶渤海遺跡に関する研究』 (中心、2002年)。
5. 김종복 『발해정치외교사』 (일지사, 2009년) .  
金鐘福 『渤海政治外交史』 (一志社、2009年)。
6. 동북아역사재단 『발해사연구논저목록』 (동북아역사재단, 2005년) .  
東北亜歴史財団 『渤海史研究論著 目録』 (東北亜歴史財団、2005年)。
7. 동북아역사재단 『새롭게 본 발해사』 (동북아역사재단, 2007년) .  
東北亜歴史財団 『新たにみる渤海史』 (東北亜歴史財団、2007年)。
8. 동북아역사재단 『발해의 역사와 문화』 (동북아역사재단, 2007년) .  
東北亜歴史財団 『渤海の歴史と文化』 (東北亜歴史財団、2007年)。
9. 동북아역사재단, 러시아 극동 역사고고 민속학 연구소 『2007 러시아 연해주 크라스키노 발해성 발굴 보고서』 (동북아역사재단, 2008년) .  
東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所 『2007 ロシア沿海州クラスキノ渤海城発掘報告書』 (東北亜歴史財団、2008年)。
10. 동북아역사재단; 러시아과학원 극동분소 역사고고민속학연구소 『연해주 크라스키노 발해성 (2008년도) 한·러 공동 발굴보고서』 (동북아역사재단, 2010년) .  
東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所 『沿海州クラスキノ渤海城 (2008年度) 韓・ロ共同発掘報告書』 (東北亜歴史財団、2010年)。
11. 동북아역사재단; 러시아과학원 극동분소 역사고고민속학연구소 『연해주 크라스키노 발해성 (2009년도 1~2) 한·러 공동 발굴보고서』 (동북아역사재단, 2011년) .  
東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所 『沿海州クラスキノ渤海城 (2009年度 1~2) 韓・ロ共同発掘報告書』 (東北亜歴史財団、2010年)。
12. 동북아역사재단 『고대 환동해 교류사-2 부 발해와 일본』 (동북아역사재단, 2010년) .  
東北亜歴史財団 『古代環東海交流史 2部 渤海と日本』 (東北亜歴史財団、2010年)。
13. 동북아역사재단; 러시아과학원 극동분소 역사고고민속학연구소 『연해주 크라스키노 발해성 (2010년도) 한·러 공동 발굴보고서』 (동북아역사재단, 2011년) .  
東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所 『沿海州クラスキノ渤海城 (2010年度) 韓・ロ共同発掘報告書』 (東北亜歴史財団、2011年)。
14. 동북아역사재단 『부거리 일대의 발해유적』 (동북아역사재단, 2011년) .  
東北亜歴史財団 『富居里一帶の渤海遺跡』 (東北亜歴史財団、2011年)。
15. 동북아역사재단; 러시아과학원 극동분소 역사고고민속학연구소 『연해주 크라스키노 발해성 (2011년도) 한·러 공동 발굴보고서』 (동북아역사재단, 2012년) .

- 東北亜歴史財団、ロシアアカデミー極東分所歴史考古民俗学研究所『沿海州クラスキノ渤海城（2011年度）韓・ロ共同発掘報告書』（東北亜歴史財団、2012年）。
16. 『러시아연해주발해유적(제1차한·러공동발굴조사보고서)』（대륙연구소,1994년）.  
『沿海州渤海遺蹟(第1次韓・ロ共同発掘調査報告書)』（大陸研究所出版部、1994年）。
  17. 방학봉『발해불교연구』（연변대학출판사,1998년）.  
方学鳳『渤海仏教研究』（延辺大学出版社、1998年）。
  18. 방학봉『발해경제연구』（흑룡강조선민족출판사,2001년）.  
方学鳳『渤海經濟研究』（黒龍江朝鮮人民出版社、2001年）。
  19. 방학봉『발해주요유적을 찾아서』（연변대학출판사,2003년）.  
方学鳳『渤海主要遺跡考察散記』（延辺大学出版社、2003年）。
  20. 방학봉『발해의 주요교통로 연구』（연변인민출판사,2003년）.  
方学鳳『渤海主要交通路研究』（延辺人民出版社、2003年）。
  21. 사회과학원 력사연구소『발해 및 후기 신라사(조선전사 5,중세편)』（과학백과사전종합출판사,1979년）.  
朝鮮社会科学院歴史研究所『渤海及び後期新羅史(朝鮮全史 5、中世篇)』（科学百科事典総合出版社、1979年）。
  22. 사회과학원 고고학연구소『발해의 무덤(조선고고학전서 42 중세편 19)』（진인진, 2009년）.  
朝鮮社会科学院考古学研究所『渤海の墳墓(朝鮮考古学全書 42 中世編 19)』（ジニンジン、2009年）。
  23. 宋基豪『渤海 政治史 研究』（一潮閣, 1995년）.  
宋基豪『渤海政治史研究』（一潮閣、1995年）。
  24. 송기호『발해 사회문화사 연구』（서울대학교출판문화원,2011년）.  
宋基豪『渤海社会文化史研究』（ソウル大学校出版文化院、2011年）。
  25. 유득공 지음;송기호 옮김『발해고』홍익출판사,2000년）.  
柳得恭著、宋基豪訳『渤海考』（弘益出版社、2000年）。
  26. 임상선『발해사의 이해』（신서원, 1991년）.  
林相先『渤海史の理解』（新書苑、1991年）。
  27. 임상선『발해의 지배세력 연구』（신서원, 1999년）.  
林相先『渤海の支配勢力研究』（新書苑、1999年）。
  28. 임상선『발해사 바로읽기 발해사 쟁점과 연구』（동재, 2008년）.  
林相先『渤海史の正しい読み 渤海史争点と研究』（トンジェ、2008年）。
  29. 장재진 외『발해 대외관계사 자료 연구』（동북아역사재단,2011년）.  
張在進など『渤海対外関係史資料研究』（東北亜歴史財団、2011年）。
  30. 정석배;Yu.G.니끼친『연해주 체르냐찌노 5 발해고분군(I)(제1·2차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』（한국전통문화학교 문화유적과,러시아연방 극동국립기술대학교,2005년）.  
鄭昔培、Yu.G.ニキチン『(沿海州) チェルニャチノ 5 渤海古墳群 (I) :第1・2次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟発掘調査』（大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、2005年）。
  31. 정석배;Yu.G.니끼친『연해주 체르냐찌노 5 발해고분군(II)(제3차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』（한국전통문화학교 문화유적과,러시아연방

- 극동국립기술대학교, 2006년).
- 鄭昔培, Yu.G.ニキチン『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(II) (第3次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2006年)。
32. 정석배; Yu. G. 니끼친; Ya. E. 비스카레바. 『연해주 체르냐찌노 5 발해고분군(III) (제4차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』 (한국전통문화학교 문화유적과, 러시아연방 극동국립기술대학교, 러시아과학원 극동지소 역사학고고학민족학연구소, 2007년).
- 鄭昔培, Yu.G.ニキチン, Ya. E. 비스카레바 『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(III) (第4次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2007年)。
33. 정석배, Yu. G. 니끼친[외] 『연해주 체르냐찌노 5 발해고분군(IV) (제6차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』 (한국전통문화학교 문화유적과, 러시아연방 극동국립기술대학교, 러시아과학원 극동지소 역사학고고학민족학연구소, 2009년).
- 鄭昔培, Yu.G.ニキチンなど『沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群(IV) (第6次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009年)。
34. 정석배, Yu. G. 니끼친[외] 『연해주 체르냐찌노 2 옥저·발해 주거유적(I) (제5차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』 (한국전통문화학교 문화유적과, 러시아연방 극동국립기술대학교, 러시아과학원 극동지소 역사학고고학민족학연구소, 2008년).
- 鄭昔培, Yu.G.ニキチンなど『沿海州チェルニャチノ 2 沃沮・渤海住居遺跡(I) (第5次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2008年)。
35. 정석배, Yu. G. 니끼친[외] 『연해주 체르냐찌노 2 옥저·발해 주거유적(II) (제6차 한·러 공동 연해주 발해문화유적 발굴조사)』 (한국전통문화학교 문화유적과, 러시아연방 극동국립기술대학교, 러시아과학원 극동지소 역사학고고학민족학연구소, 2009년).
- 鄭昔培, Yu.G.ニキチンなど『沿海州チェルニャチノ 5 沃沮・渤海住居遺跡(II) (第6次韓ロシア共同沿海州渤海文化遺蹟發掘調査)』(大韓民国文化財庁韓国伝統文化学校、ロシア連邦極東国立技術大学校、ロシア科学院極東支所歴史学考古学民族学研究所、2009年)。
36. 정영진, 윤현철, 이동희 『고분으로 본 발해 문화의 성격』 (동북아역사재단, 2006년).
- 鄭永振, 尹玄哲, 李東輝 『古墳でみた渤海文化の性格』 (東北亜歴史財団、2006年)。
37. 조선유적유물도감 편찬위원회 『발해의 유적과 유물』 (서울대학교 출판부, 2002년).
- 『朝鮮遺蹟遺物図鑑』編纂委員会『渤海の遺跡と遺物』(ソウル大学校出版部、2002年)。
38. 조중공동고고학발굴대 『중국동북지방의 유적발굴보고』 (사회과학원출판사, 1966년).
- 朝中共同考古学發掘隊『中国東北地方の遺跡發掘報告 (1963~1965)』(社会科学院出版社、1966年)。
39. 崔茂藏 譯 『高句麗·渤海文化:中國 考古學者의 發掘報告書』 (集文堂, 1985년).
- 崔茂藏訳 『高句麗·渤海文化:中国考古學者の發掘報告書』 (集文堂、1985年)。



40. 한규철 『발해의 대외관계사:남북국의 형성과 전개』 (신서원, 2005년) .  
韓圭哲 『渤海の対外関係史』 (新書苑、1994年)。
41. 한규철[외] 『발해 5경과 영역 변천』 (동북아역사재단, 2007년) .  
韓圭哲など 『渤海 5京と領域変遷』 (東北亜歴史財団、2007年)。

## [論文]

### 【中国語論文】(筆画順)

1. E·И·傑烈維揚科著、林樹山、姚風訳 『黒龍江沿岸の部落』 (吉林文史出版社、1987年)。
2. 干志耿 『黒龍江古代民族史綱』 (黒龍江人民出版社 1987年)。
3. 于匯歴 「黒龍江海林二道河子渤海墓葬」 (『北方文物』 1987年第1期、『高句麗渤海研究集成』 6、哈爾濱出版社、1997年)。
4. 王成国 「唐代渤海国姓氏研究」 (『北方論叢』 192、2005年第4期)。
5. 王承礼 「敦化六頂山渤海古墓群調査簡記」 (『高句麗渤海研究集成』 6、哈爾濱出版社、1997年、初出『吉林省文物工作通訊』 1957年)。
6. 王承礼、曹正榕 「吉林敦化六頂山渤海古墓」 (『考古』 1961年第6期)。
7. 王承礼 「敦化六頂山渤海墓清理発掘記」 (『社会科学戦線』 1979年第3期)。
8. 王承礼 「記唐代渤海国咸和十一年中台省致日本太政官牒」 (『北方文物』 1988年第3期)。
9. 王楽 「中国境内渤海陶器研究」 (2009年吉林大学博士学位論文)。
10. 王志剛 「六頂山渤海墓葬研究」 (2008年吉林大学碩士學位論文)。
11. 王志剛 「渤海の墓葬類型研究」 (『中国考古学会第十二次年会論文集』 文物出版社、2010年)。
12. 王培新 「靺鞨—女真係銅帶飾及相關問題一」 (『北方文物』 1997年第2期)。
13. 中国社会科学院考古研究所 「六頂山渤海貴族墓地」 (『六頂山与渤海鎮』 中国大百科全書出版社、1997年)。
14. 吉林市博物館 「吉林永吉楊屯大海猛遺址」 (『考古学集刊』 第5輯、1987年)。
15. 吉林省文物工作隊、吉林市博物館、永吉県文化局 「吉林永吉楊屯遺址第三次発掘」 (『考古学集刊』 第7輯、1991年)。
16. 吉林省文物考古研究所 「吉林永吉查里巴靺鞨墓地」 (『文物』 1995年第9期)。
17. 吉林省文物考古研究所、吉林大学边疆考古研究中心 「吉林琿春市八連城内城建築基址的発掘」 (『考古』 2009年第6期)。
18. 吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文物管理委員会辦公室 「吉林和龍市竜海渤海王室墓葬発掘簡報」 (『考古』 2009年第6期)。
19. 吉林省文物考古研究所・延辺朝鮮族自治州文物管理委員会辦公室 「吉林和龍市竜海渤海王室墓葬発掘簡報」 (『考古』 2009年第6期)。
20. 吉林省文物考古研究所・敦化市文物管理所 「吉林敦化市六頂山墓群 2004年発掘簡報」 (『考古』 2009年第6期)。
21. 吉林省文物工作隊、吉林市博物館、永吉県文化局 「吉林永吉楊屯遺址第三次発掘」 (『考古学集刊』 第7輯、1991年)。
22. 佟柱臣 「『渤海記』 著者張建章『墓志』考」 (『黒龍江文物叢刊』 1981年第6期)。

23. 延邊朝鮮族自治州博物館「渤海貞孝公主墓發掘清理簡報」(『社会科学戰線』1982年第1期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社1997年)。
24. 延邊朝鮮族自治州博物館・和龍縣文化館「和龍北大渤海墓清理簡報」(『東北歷史与考古』1982年第1期)。
25. 林棟「靺鞨文化陶器的区系探索」(2008年吉林大學碩士學位論文)。
26. 宋玉彬「渤海都城故址研究」(『考古』2009年第6期)。
27. 李殿福「從考古學上看唐代渤海文化」(『學習与探索』1984年4期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
28. 李蜀蕾「渤海墓葬類型演變再探討」(『北方文物』2005年第1期)。
29. 金太順「渤海墓葬研究中的幾箇問題」(『考古』1997年第2期)。
30. 金銀玉「寧安虹鱒魚場渤海墓葬研究」(2011年吉林大學碩士論文)。
31. 孫仁傑「高句麗積石墓葬具研究」(『高句麗研究文集』延邊大學出版社、1993年)。
32. 孫秀仁「略論海林山嘴子渤海墓葬的形制、傳統和文物特徵」(『中國考古學會第一屆年會論文集(1979)』1980年、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
33. 孫秉根「渤海墓葬的類型与分期」(『漢唐与边疆考古研究』1994年、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
34. 孫進己「渤海民族的形成發展過程」(『東北民族史研究1』中州古籍出版社、1994年)。
35. 黑龍江省文物考古研究所「黑龍江海林北站渤海墓試掘」(『北方文物』1987年第1期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
36. 黑龍江省文物考古研究所「黑龍江省牡丹江樺林石場溝墓地」(『北方文物』1991年第4期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
37. 黑龍江省文物考古研究所「黑龍江寧安虹鱒魚場墓地的發掘」(『考古』1997年第2期)。
38. 胡秀然・劉曉東「渤海陶器類型學傳承淵源的初步探索」(『北方文物』2001年第4期)。
39. 張玉霞「牡丹江流域渤海遺跡出土陶器的類型學研究」(『边疆考古研究』第4輯、2005年)。
40. 張泰湘「唐代率賓府辨」(『歷史地理』第2輯、1982年)。
41. 喬梁「靺鞨陶器分期初探」(『北方文物』1994年第2期)。
42. 鄭永振「渤海墓葬研究」(『黑龍江文物叢刊』1984年第2期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
43. 劉曉東「渤海墓葬的類型与演變」(『北方文物』1996年第2期)。
44. 劉曉東「渤海記年再考訂」(『歷史研究』1996年第4期)。
45. 劉曉東「渤海“振国”，“震国”名源考察」(『北方文物』2007年第11期)。
46. 劉曉東「靺鞨文化研究」(2007年吉林大學碩士學位論文)。
47. 劉曉東「靺鞨文化遺存淺析」(『北方文物』2009年第4期)。
48. 劉曉東「東北地区の靺鞨文化」(『能登臣馬身と肅慎の遭遇—1350年紀年国際シンポジウム—肅慎の謎を探る(環日本海世界の古代史)』金沢学院大學美術文化学部文化財学科、2010年)。
49. 嚴長綠・朴龍淵「北大渤海墓葬研究」(『渤海史研究』2、延邊大學出版社、1991年)。
50. 嚴聖欽「渤海国是我国少数民族建立的一个地方政權」(『社会科学輯刊』1981年2期、『高句麗渤海研究論文集成』4、哈爾濱出版社、1997年)。
51. 馮恩學「黑水靺鞨的裝飾品及淵源」(『華夏考古』2011年第1期)。
52. 楊軍「渤海“土人”新解」(『渤海国民族構成与分布研究』吉林人民出版社、2007年)。
53. 綦中明「唐代渤海人名及其文化內涵」(『北方文物』2012年第2期)。

54. 閻万章「渤海“貞惠公主墓碑”的研究」(『考古学報』1956年第2期、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
55. 韓東育「東亜研究的問題点与新思考」(『社会科学戦線』2011年第3期)。
56. 魏存成「渤海王室貴族墓葬」(『中国考古学第三次年会論文集』1981年、『高句麗渤海研究集成』6、哈爾濱出版社、1997年)。
57. 魏存成「牡丹江上游敦化六頂山墓葬」(『渤海考古』文物出版社、2008年)。
58. 魏存成「契爾良基諾5号墓地」(『渤海考古』文物出版社、2008年)。
59. 譚英傑など「渤海墓葬中出土几种主要陶器類型的演变」(『黒龍江区域考古学』中国社会科学出版社、1991年)。

【日本語論文】(五十音順)

1. A.L. イヴリエフ、V.I. ボルディン、Yu.G. ニキーチン著;清水信行訳「渤海の青銅髪飾り」(『青山史学』25、2007年)。
2. E・I・ゲルマン「渤海の陶器と磁器」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
3. E・I・ゲルマン「ロシア沿海州中世遺跡出土の施釉陶器と磁器」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
4. V・I・ボルディン「沿海地方における渤海遺跡の編年問題に関して」(『北方ユーラシア学会会報』2、1993年12月)。
5. Yu.G. ニキーチン、チョンソクベ著、清水信行訳「2003～2004年スイフン河流域のチェルニャチノ5号墓地遺跡調査の成果」(『青山考古』23、2006年11月)。
6. 赤羽目匡由「封敖作『與渤海王大彝震書』について—その起草・発給年時と渤海後期の権力構成—」(『東洋学報』85(3)、東洋文庫、2003年12月)。
7. 赤羽目匡由「新羅末高麗初における東北境外の黒水・鉄勒・達姑の諸族—渤海・新羅との関係において—」(『朝鮮学報』197、2005年10月)。
8. 赤羽目匡由「八～九世紀における渤海の中央権力と地方社会—種族支配と自国認識—」(2009年度東京都立大学博士論文)。
9. 赤羽目匡由「唐代越喜靺鞨の住地とその移動」(『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011年)。
10. 赤羽目匡由「八世紀における渤海の高句麗継承意識を巡って」(『渤海王国の政治と社会』吉川弘文館、2011年)。
11. 東潮「高句麗における横穴式石室墳の出現と展開」(『高句麗考古学研究』吉川弘文館、1998年)。
12. 東潮「渤海墓制と領域」(『朝鮮学報』176・177、2000年10月)。
13. 足立拓朗「渤海前期の『靺鞨系土器』について」(『青山考古』17、2000年)。
14. 天野哲也「オホーツク文化期北海道島にもたらされた帯飾板の背景」(『北方史の新視座』、雄山閣、1994年)。
15. 天野哲也「『靺鞨』社会の特徴—コルサコフ墓地の帯飾板を中心に—」(『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、1995年)。
16. アレキサンダー・イヴリエフ「ロシアにおける渤海史研究」(『Journal of Northeast Asian History』(4-2)、2007年)。

17. 石井正敏「神亀四年、渤海の日本通交開始とその事情」(『日本渤海関係史研究』吉川弘文館、2001年。初出1975年)。
18. 石井正敏「渤海の地方社会—『類聚国史』渤海沿革記事の検討—」(『日本渤海関係史の研究』吉川弘文館、2001年、初出1996年)。
19. 石井正敏「渤海の西方社会との接触」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
20. 石井正敏「渤海と日本の交渉」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
21. 石井正敏「『続日本紀』養老四年条の『靺鞨国』—『靺鞨国』=渤海説の検討—」(『アジア遊学』3、1999年)。
22. 伊藤玄三「新羅・渤海の鍔帯金具について」(『法政史学』40、1988年3月)。
23. 石見清裕「蕃望について」(『唐の北方問題と国際秩序』汲古書院、1998年)。
24. 臼杵勲「靺鞨文化の年代と地域性」(『日本と世界の考古学—現代考古学の展開—』雄山閣、1994年)。
25. 臼杵勲「靺鞨・女真系帯金具について」(『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』東京堂出版、2000年)。
26. 臼杵勲「靺鞨社会の形成—後期鉄器時代」『鉄器時代の東北アジア』同成社、2004年)。
27. 臼杵勲「六頂山墳墓群」(『鉄器時代の東北アジア』同成社、2004年)。
28. 梅村喬「古代百姓観の展開」(『愛知県立大学文学部論集(一般教育編)』33、1983年)。
29. 延辺朝鮮族自治州博物館・和龍県文化館「和龍北大渤海墓群清理簡報」(『東北歴史与考古』1982年第1期)。
30. 王承礼著・古畑徹訳「唐代渤海『貞恵公主墓志』と『貞孝公主墓志』の比較研究」(『朝鮮学報』103、1982年)。
31. 王培新「中国における渤海都城と交通路の研究」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
32. 王勇「渤海商人李光玄について」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
33. 大隈晃弘「渤海の首領制」(『新潟史学』17、1984年)。
34. 大貫静夫「同仁文化系統の土器の編年」(『東北アジアの考古学』同成社、1998年)。
35. 加地伸行「『孝経正義』三卷」(『孝経』(全訳注)講談社、2007年)。
36. 金子修一「中国から見た渤海国」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
37. 亀井明德「渤海三彩陶試探」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
38. 河上洋「渤海の地方統治体制」(『東洋史研究』42-2、1983年)。
39. 菊池俊彦「書評 E・H・デレヴァーンコ著『黒龍江中流の靺鞨の遺跡』」(『史學雑誌』86(2)、1977年2月)。
40. 菊池俊彦「靺鞨の同仁文化」(『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会、1995年)。
41. 木山克彦「渤海土器の編年と地域差について」(『北方圏の考古学』I、2007年4月)。
42. 木山克彦「渤海土器の展開と周辺地域」(『考古学ジャーナル』605、2010年)。
43. 木山克彦「靺鞨・渤海・女真の考古学」(『アジア遊学(アイヌ史を問いなおす—生態・交流・文化継承—)』139、2011年3月)。
44. 木山克彦「ロシア沿海地方の渤海土器」(『海と考古学』第8号、2012年)。

45. 姜成山「渤海墳墓研究試論—虹鱒魚場墳墓群の検討を中心に—」(『国際学研究』創刊号、2011年)。
46. 姜成山「『類聚国史』渤海沿革記事の首領について」(『国際学研究』第3号、2013年)。
47. 姜成山「渤海率賓府の一地方社会について」(『社会文化史学』第56号、2013年)。
48. 喬梁「靺鞨陶器の地域区分・時期区分および相関する問題の研究」(『北東アジア交流史研究—古代と中世—』塙書房、2007年)。
49. 金宗赫著、裴元柱訳「青海土城とその周辺の渤海遺跡」(『高句麗・渤海と古代日本』雄山閣、1993年)。
50. 小嶋芳孝「高句麗・渤海との交流」(『日本海と北国文化』(『海と列島文化』第一巻)、小学館、1990年)。
51. 小嶋芳孝「中国東北地方の渤海土器について—大川遺跡出土の黒色壺を考える—」(『1993年度大川遺跡発掘調査概報—余市川改修業に伴う埋蔵文化財発掘調査の概要V—』、1994年)。
52. 小嶋芳孝「蝦夷とユーラシア大陸の交流」(『古代蝦夷の世界と交流(古代王権と交流1)』、名著出版、1996年)。
53. 小嶋芳孝「環日本海交流史から見た靺鞨・渤海との交流」(『史学雑誌』105(12)、1996年)。
54. 小嶋芳孝「渤海の芸術」(『月刊しにか(特集：渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
55. 小嶋芳孝「渤海の産業と物流」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
56. 小嶋芳孝「渤海考古学の現状と課題—渤海都城の変遷と水系を考える—」(『東アジアの古代文化』96、1998年)。
57. 小嶋芳孝「渤海の仏教遺跡」(『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年)。
58. 小嶋芳孝「渤海と日本列島の交流経路」(『歴史と地理』577、2004年)。
59. 小嶋芳孝「環日本海交流史の諸相」(『北東アジア交流史研究—古代と中世—』塙書房、2007年)。
60. 小嶋芳孝「渤海の遺跡」(『アジア遊学』107、2008年2月)。
61. 小嶋芳孝「六頂山墓群」(『アジア遊学』107、2008年)。
62. 小嶋芳孝「西古城」(『アジア遊学』107、2008年)。
63. 小嶋芳孝「八連城」(『アジア遊学』107、2008年)。
64. 小嶋芳孝「上京」(『アジア遊学』107、2008年)。
65. 小嶋芳孝「古代日本の境界領域と能登」(『古代日本の異文化交流』勉誠出版、2008年)。
66. 小嶋芳孝「渤海平地城の検討」(『扶桑：田村晃一先生喜寿記念論文集』、青山考古学会田村晃一先生喜寿記念論文集刊行会、2009年)。
67. 小嶋芳孝「渤海から見た北東北のシャーマニズムと仏教」(『古代末期の境界世界—城久遺跡群と石江遺跡群を中心として—』法政大学国際日本学研究所、2010年)。
68. 小嶋芳孝、Boldin V.、Ivliev A.など「ロシア沿海地方における渤海遺跡調査(2010年)」(『金沢学院大学紀要(文学・美術・社会学編)』9、2011年)。
69. 酒寄雅志「渤海中台省牒の基礎的研究」(『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、初出1985年)。
70. 酒寄雅志「渤海中台省牒の位署について」(『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、初出1985年)。

71. 酒寄雅志「東北アジアのなかの渤海と日本」(『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、初出1991)。
72. 酒寄雅志「日本と渤海・靺鞨との交流—日本・オホーツク海域圏と船—」(『渤海と古代の日本』校倉書房2001年、初出1997年)。
73. 酒寄雅志「渤海国文化点描」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
74. 酒寄雅志「渤海王権と新羅・黒水靺鞨・日本との関係」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
75. 酒寄雅志「渤海史研究と近代日本」(『渤海と古代の日本』校倉書房2001年、初出1999年)。
76. 酒寄雅志「『唐碑亭』、すなわち『鴻廬井の碑』をめぐって」(『渤海と古代の日本』校倉書房、2001年、初出1999年)。
77. 酒寄雅志「渤海の遣唐使」(『専修大学東アジア世界史研究センター年報』4、2010年3月)。
78. 桜井俊郎「渤海の有力姓氏と中央官制」(『歴史研究』33、1995年3月)。
79. 清水信行「チェルニャチノ5墓地遺跡」(『アジア遊学』107、2008年)。
80. 清水信行「クラスキノ土城の発見と調査」(『アジア遊学』107、2008年)。
81. 末松保和「日韓関係」(『岩波講座日本歴史(第四回配本)』1933年、『日本上代史管見』私家版、1963年所収)。
82. 鈴木靖民「日本律令制の成立・展開と対外関係」(『歴史学研究』1974年度大会別冊特集「世界史における民族と民主主義」)。
83. 鈴木靖民「渤海の首領に関する基礎的研究」(『古代対外関係史の研究』吉川弘文館、1985年、初出1979年)。
84. 鈴木靖民「渤海の首領制—渤海の社会と地方支配—」(『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、初出1985年)。
85. 鈴木靖民「渤海の国家構造」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
86. 鈴木靖民「渤海の遠距離交易と荷担者」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
87. 鈴木靖民「渤海国家の構造と特質—首領・生産・交易—」(『日本の古代国家形成と東アジア』吉川弘文館、2011年、初出1999年)。
88. 宋基豪著、清水信行訳「六頂山古墳群の性格と渤海建国集団」(『青山考古』24、2008年)。
89. 外山軍治「洪皓と松漠紀聞」(『愛泉女子短期大学紀要』12-13号、1978年3月)。
90. 瀧川政次郎「日・渤官制の比較」(『建国大学研究期報』1、1941年)。
91. 田島公「海外との交渉」(『古文書の語る日本史』二、筑摩書房、1991年)。
92. 田村晃一「北東アジア考古学における渤海の位置づけ」(『環日本海論叢』8、1995年)。
93. 田村晃一「渤海の遺跡が語るもの」(『月刊しにか(特集:渤海国—建国—三〇〇年・甦る「海東の盛国」—)』1998年9月)。
94. 田村晃一「渤海の土城・山城・寺院」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
95. 田村晃一「古代国家渤海と日本の交流に関する考古学的調査」1996年度～1998年度科学研究費補助金(海外学術調査)研究成果報告書、1999年3月)。

96. 田村晃一、山口正憲、四角隆二、張替清司、松葉崇「2001年度ロシア・クラスキノ土城発掘調査概要報告」『青山史学』20、2002年）。
97. 田村晃一「貞恵公主墓と貞孝公主墓の意味するもの（渤海の王陵・貴族墓とその被葬者（その1）」（『青山考古』27、2011年3月）。
98. 中澤寛将「土器生産とその組織化—渤海から女真への展開プロセス—」（『アジア遊学』107、2008年）。
99. 中澤寛将「渤海の食器様式と土器生産」（『古代』123、2010年3月）。
100. 中澤寛将「考古学からみた渤海の地域社会」（『情報の歴史学』、2011年）。
101. 中澤寛将「六頂山墳墓群」（『北東アジア中世考古学の研究—靺鞨・渤海・女真—』六一書房、2012年）。
102. 中村亜希子「渤海の瓦」（『古代』129・130、2012年9月）。
103. 中村裕一「渤海国咸和十一年中台省牒に就いて—古代東アジア国際文書の一形式—」（唐代史研究会編『隋唐帝国と東アジア世界』汲古書院、1979年8月）。
104. 新妻利久「国書と使節」（『渤海国史及び日本との国交史の研究』東京電機大学出版局、1969年）。
105. 西川宏「渤海考古学の成果と民族問題」（『山陰考古学の諸問題』1986年）。
106. 西嶋定生「6～8世紀の東アジア」（『岩波講座日本歴史』2、岩波書店、1962年）。
107. 河創国「朝鮮の渤海遺跡」（『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年）。
108. 濱田耕策「渤海史をめぐる朝鮮史学界の動向—共和国と韓国の『南北朝時代』論について—」（『朝鮮学報』86、1978年1月）。
109. 濱田耕策「唐朝における渤海と新羅の争長事件」（『古代東アジア史論集（下巻）』吉川弘文館1978年3月）。
110. 濱田耕策「留唐学僧戒融の日本帰国をめぐる渤海と新羅」（『日本古代の伝承と東アジア』吉川弘文館、1995年）。
111. 濱田耕策「渤海国王位の継承と『副王』」（『年報朝鮮學』7、1999年）。
112. 濱田耕策「渤海国の京府州郡縣の整備と首領の動向—新羅との比較を中心として—」（『白山学報』52、1999年3月）。
113. 濱田耕策「渤海国の遣日本使—その時期区分と特質—」（『慶北史学』23、2000年）。
114. 濱田耕策「日本における渤海認識の変遷」（『Journal of Northeast Asian History』(4-2)、2007年）。
115. 濱田耕策「日本の渤海史認識」（『渤海の歴史と文化』校倉書房、2009年）。
116. 日野開三郎「靺鞨七部の前身とその属種」（『日野開三郎東洋史学論集』15、三一書房、1991年）。
117. 藤沢一夫「火葬墳墓の流布」（『考古学講座』6、雄山閣、1970年）。
118. 古畑徹「渤海建国関係記事の再検討—中国側史料の基礎的研究—」（『朝鮮学報』113、1984年）。
119. 古畑徹「大門芸の亡命年時について—唐渤紛争に至る渤海の情勢—」（『集刊東洋学』51、1984年5月）。
120. 古畑徹「日渤交渉開始期の東アジアの情勢—渤海対日通交開始要因の再検討—」（『朝鮮史研究会論文集』23、1986年）。
121. 古畑徹「張九齡作『勅渤海王大武芸書』第1首の作成年時について—『大門芸の亡命年時について』補遺—」（『集刊東洋学』59、1988年5月）。

122. 古畑徹「張九齡作『勅渤海王大武芸書』と唐渤海紛争の終結—第二・三・四首の作成年時を中心として—」(『東北大学東洋史論集』3、1988年1月)。
123. 古畑徹「渤海・日本間航路の諸問題—渤海から日本への航路を中心に—」(『古代文化』46(8)、1994年)。
124. 古畑徹「渤海使の文化使節的側面の再検討—渤海後期の中華意識・対日意識と関連させて—」(『東北大学東洋史論集』6、1995年)。
125. 古畑徹「後期新羅・渤海の統合意識と境域観」(『朝鮮史研究会論文集』36、朝鮮史研究会、1998年)。
126. 古畑徹「『唐会要』の流伝に関する一考察」(『東洋史研究』57(1)、1998年)。
127. 古畑徹「『唐会要』の鞞鞞・渤海の項目について」(『朝鮮文化研究』8、2001年)。
128. 古畑徹「環日本海諸国の歴史認識の共有化を阻害する要因—渤海国認識をめぐる民族問題を中心として—」(『グローバリゼーションのもとでの異文化理解の可能性と条件:総合研究』金沢大学日本海域研究所、2002年)。
129. 古畑徹「戦後日本における渤海史の歴史枠組みに関する史学史的考察」(『東北大学東洋史論集』9、2003年)。
130. 古畑徹「渤海の首領研究の方法をめぐって—解明のための予備的考察—」(『日本と渤海の古代史』山川出版社、2003年)。
131. 古畑徹「渤海と日本」(『古代を考える 日本と朝鮮』吉川弘文館、2005年)。
132. 古畑徹「唐代『首領』語義考—中国正史の用例を中心に—」(『東洋史論集』11、2007年3月)。
133. 古畑徹「渤海王大欽茂の『国王』進爵と第六次渤海使—渤海使王新福による安史の乱情報の検討を中心に—」(『集刊東洋学』100、2008年)。
134. 古畑徹「日本の渤海史研究について」(『日本学』28、2008年)。
135. 古畑徹「歴史の争奪—中韓高句麗歴史論争を例に—」(『メトロポリタン史学』6、2010年)。
136. 朴時亨「渤海史研究のために」(『渤海文化』雄山閣、1979年)。
137. 堀井佳代子「対渤海外交における太政官牒の成立—中台省牒との相違から—」(『日本歴史』744、2010年5月)。
138. 馬一虹「渤海と唐の関係」(『アジア遊学渤海と古代東アジア』6、1998年)。
139. 馬淵貞利「朝鮮史における民族と国家」(『朝鮮史研究会論文集』25、1988年3月)。
140. 三上次男「渤海の瓦」(『高句麗と渤海』吉川弘文館、1990年、初出1947年)。
141. 三上次男「朝鮮との関係」(『平安時代(上)(図説日本文化史大系)』小学館、1958年)。
142. 森田悌「渤海の首領について」(『弘前大学国史研究』94、1993年)。
143. 森田悌「渤海首領考」(『延喜式研究』15、1998年)。
144. 森安孝夫「渤海から契丹へ—征服王朝の成立—」(『東アジア世界における日本古代史講座』7、学生社、1982年)。
145. 李成市「渤海史研究における国家と民族—『南北朝時代』論の検討を中心に—」(『朝鮮学報』25、1988年3月)。
146. 李成市「渤海の対日本外交への理路」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年)。
147. 李成市「穢族の生業と民族」(『古代東アジアの民族と国家』岩波書店、1998年)。
148. 李美子「渤海国の社会経済—史料の検討を中心として—」(『年報朝鮮学』7、1999年9月)。



- 149.李美子「渤海の遼東地域の領有問題をめぐって—拂涅・越喜・鉄利等靺鞨の故地と関連して—」(『史淵』140、2003年)。
- 150.李美子「渤海国史の基礎的研究」(2004年九州大学博士請求論文)。
- 151.和田清「渤海国地理考」(『東洋學報』36・4、1954年3月)。

【韓國語論文】(ハングル音順、日本語は筆者訳。)

1. E.V. 아스타첸코바, 정석배「발해주민의 표현 및 장식-응용미술 : 연해주 유적 발굴조사 자료를 통해」(『高句麗渤海研究』42,2012년 3월) .  
E.V.アスタシエンコヴァ著、鄭昔培訳「渤海住民の表現および装飾—応用美術 : 沿海州遺跡発掘調査資料を通じて—」(『高句麗渤海研究』42、2012年3月)。
2. 강성봉「발해수령과 고려 도령의 상관성검토」(『고구려발해연구』42、2012년 3월) .  
姜成奉「渤海首領と高麗都領の相關性検討」(『高句麗渤海研究』42、2012年3月)。
3. 권오중「靺鞨의 種族系統에 관한 試論」(『진단학보』49,1980년 6월) .  
權五重「靺鞨の種族系統に関する試論」(『震旦學報』49、1980年6月)。
4. 권은주「渤海 前期 北方民族 關係史」(2012년경북대학교 대학원 사학과박사학위논문) .  
權恩珠『渤海前期北方民族關係史』(2012年慶北大学校大学院博士学位論文)。
5. 김동우「발해 수령의 개념과 실상」(『동원학술논문집』7、2005년 12월) .  
金東宇「渤海首領の概念と実像」(『東垣學術論文集』7、2005年12月)。
6. 김동우『발해의 지방통치체제와 首領』(『한국사학보』1,1996년) .  
金東宇「渤海の地方統治体制と首領」(『韓國史學報』1、1996年)。
7. 김동우『渤海 地方 統治 體制 研究 : 渤海 受領을 中心으로』(2006년 고려대학교 대학원 사학과 박사학위논문) .  
金東宇『渤海地方統治制度研究—渤海受領を中心に—』(2006年高麗大学校大学院史学科博士学位論文)。
8. 金鐘福「8세기 발해와 말갈제부의 대당교섭에 대한 기초적검토—冊府元龜 朝貢·褒異條를 중심으로」(『역사문화연구』39,2011년) .  
金鐘福「8世紀渤海と靺鞨諸部の対唐交渉に対する基礎的検討—冊府元龜 朝貢·褒異條を中心に」(『歴史文化研究』39、2011年)。
9. 金鐘圓「발해의 首領에 대하여—地方統治制度和 관련하여—」(『발해사연구논선집』백산문화,1989년) .  
金鐘圓「渤海の首領について—地方統治制度と関連して—」(『渤海史研究論選集』白山文化、1989年)。
10. 김진광「石室墓造營을 통해 본渤海의 北方經營」(『高句麗渤海研究』30,2008년 3월) .  
金鎮光「石室墓造營を通じてみた渤海の北方經營」(『高句麗渤海研究』30、2008年3月)。
11. 김진광「홍준어장고분군의 사회적 지위 및 성격 : 고분의 유형과 분포상황을 중심으로」(『高句麗渤海研究』42、2012년 3월) .  
金鎮光「虹鱒魚場古墳群の社会的地位及び性格—古墳の類型と分布狀況を中心に—」(『高句麗渤海研究』第42輯、2012年3月)。
12. 金鎮光『발해문왕대의 지배체제연구』(2007년韓國學中央研究院韓國學大學院人類學專攻박사학위논문) .

- 金鎮光『渤海文王代の支配体制研究』(韓國学中央研究院韓國学大学院人類学專攻 2007年博士学位論文)。
13. 박규진 「발해석실분의 형식과 구조에 대한 연구」 (『고구려발해연구』 39, 2011년 3월) .  
朴紉鎭 「渤海石室墳の形式と構造に関する研究」(『高句麗渤海研究』 39輯、2011年3月)。
  14. 박윤무 「발해석실분에 관한 연구」 (『발해사연구』 2, 서울대학출판부, 1994년) .  
朴潤武 「渤海石室封土墓に関する考察」(『渤海史研究』 2、ソウル大学出版部、1994年)。
  15. 박진숙 「발해의 대일본외교연구」 (2001년 충남대학교 대학원 국사학과 박사논문) .  
朴眞淑 「渤海の対日本外交研究」(忠南大学校大学院国史学科、2001年博士論文)。
  16. 박진숙 「발해의 지방편성과 영역」 (『발해 5 경과 영역 변천』 동북아역사재단, 2007년) .  
朴眞淑 「渤海の地方編成と領域」(『渤海 5 京と領域変遷』 東北亜歴史財団、2007年)。
  17. 송기호 「발해의 『多人葬』에 대한 연구」 (『韓國史論』 11, 1984년) .  
宋基豪 「渤海の「多人葬」についての研究」(『韓國史論』 11、1984年)。
  18. 宋基豪 「渤海首領의 성격」 (『韓國古代中世의 支配體制와 農民』 知識産業社, 1997년) .  
宋基豪 「渤海首領の性格」(『韓國古代中世の支配体制と農民』 知識産業社、1997年)。
  19. 송기호 「용해구역 고분 발굴에서 드러난 발해국의 성격」 (『고구려발해연구』 38, 2010년 11월, 『발해 사회문화사 연구』 서울대학교출판문화원, 2011년 수록) .  
宋基豪 「龍海区域の古墳発掘であらわれた渤海国の性格」(『高句麗渤海研究』 38、2010年11月、『渤海社会文化史研究』ソウル大学出版文化院、2011年所収)。
  20. 宋基豪 「六頂山 古墳群과 건국집단」 (『汕耘史學』 8, 1998년 12월, 『발해 사회문화사 연구』 서울대학교출판문화원, 2011년 수록) .  
宋基豪 「六頂山古墳群と建国集団」(『汕耘史学』 8, 1998年12月、『渤海社会文化史研究』ソウル大学出版文化院、2011年)。
  21. 유리 니키티 「수이푼 강 연안 체르냐티노 5 발해 武將古墳」 『고조선·고구려·발해 발표 논문집』 고구려연구재단, 2005년) .  
Yu.G.ニキチン 「スイフン河流域のチェルニャチノ 5 渤海武將墓」 『古朝鮮高句麗渤海發表論文集』 高句麗研究財団、2005年)。
  22. 이남석 「발해묘제」 (『발해의 역사와 문화』 동북아역사재단, 2009년) .  
李南奭 「渤海墓制」(『渤海の歴史と文化』 東北亜歴史財団、2009年)。
  23. 鄭昔培、Yu.G.ニキチン 「체르냐찌노 5 발해고분군의 고분유형과 출토유물」 (『高句麗渤海研究』 26, 2007년 3월) .  
鄭昔培、Yu.G.ニキチン 「チェルニャチノ 5 渤海古墳群の古墳類型と出土遺物」(『高句麗研究』 26輯、2007年3月)。
  24. 정석배 「연해주 체르냐찌노 5 발해고분군」 (『발해 고고학의 최신성과』 서울대학교 박물관해동성국·발해」 특별전 기념 국제학술대회, 2003년) .  
鄭昔培 「沿海州チェルニャチノ 5 渤海古墳群」(『渤海考古学の最新成果』ソウル大学校博物館海東盛国‘渤海’特別展記念國際學術大会、2003年)。
  25. 정석배 「연해주 중세시대의 최신 연구성과」 (『2011 Asia Archaeology』 국립문화재연구소, 2011년) .  
鄭昔培 「沿海州中世時代の最新研究成果」 (『2011 Asia Archaeology』 国立文化財研究所、2011年) 。
  26. 한규철 「고구려시대의 말갈 연구」 (『부산사학』 14·15 합집, 1988년 12월) .  
韓圭哲 「高句麗時代の靺鞨研究」(『釜山史学』 14·15 合集、1988年12月)。